

THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE

昭和38年6月7日日本国有鉄道特別扱承認雑誌第1580号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・表紙第9巻第10号 昭和39年10月1日発行(毎月1回1日発行)

THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE

昭和38年6月7日日本国有鉄道特別扱承認雑誌第1580号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・表紙第9巻第10号 昭和39年10月1日発行(毎月1回1日発行)

裏窓

裏窓

10月号

定価 300円
IBM 1807

新刊発売中!!

800円 + 90

シヨツキング画集

共著
藤見 郁
T.MORISCITA



★アメリカのS・Mマニアを唸らせたジョン・ウィリーの華麗な縛り絵を筆頭に、ウィリーの模倣から入ってこの道一流の画家になったスタン・トンの名作、奇怪な道具を好んで使うジムの責め画、その他、マリオ、エネグにいたる眼をみはるばかりの作品が、総枚数二百二十九枚!アート紙オフセット印刷の豪華本

38年(二月号) 1100円	38年(二月号) 1100円	37年(十二月号) 1100円	37年(十二月号) 1100円
絵物語・姫法師伝文……文・島本 春雄 変化黒髪小僧……文・京 剣児 秋吉・黒い皮のスタジオ……文・秋吉 樹 グラビア・美の凝結……文・金井 行雄 海外SM画像……文・金井 行雄 島原の千守唄……文・金井 行雄 金色の胸毛……文・立原 道夫 郡氏の応接室……文・豊中 夢夫 代用品じゃつまらない……文・三鬼 俊 フォルリ城の花嫁……文・祖父 江新 おれの名はダニエル……文・白木 郁子 愛の戦慄と充実……文・水尾 究 体当たりマゾヒズム論(7)……文・かびや・かずひこ はも神士録(2)……文・かびや・かずひこ 新・森永利論……文・安東 泉 新・安岡章太郎論……文・小田桐 爽 女園お運の死……文・市原 砂夫 浪人夢想日記……文・加木 れい子 カブ一家の第二夫人……文・加木 れい子	絵物語・ハレウィンの歌……文・松平 莊司 赤鯉奇伝……文・中川 彩子 山田伸弘妖美画像……文・山田 伸弘 グラビア・美の回廊……文・毛 卓三 美の彷徨……文・北 好夫 美の孤立……文・金井 行雄 クリスマス・イヴに悪魔がくる……文・関町 妙男 赤い血のうずまき……文・関町 妙男 仮面のおとめ……文・白木 郁子 小さな赤い腰巻の記憶……文・外村 良 体当たりマゾヒズム論(6)……文・万里小路 寛 夜の感傷……文・祖父 江新 忍び屋……文・祖父 江新 決闘立花屋……文・花巻 京太郎 女性的情念の三十年……文・かびや・かずひこ 「叩き声」を解する……文・安東 泉 小説「連」のレスピアンズ……文・小田桐 爽 婦人機密将校ボーリン……文・泰西 出版資料 売られていく玩具たち……文・北園 遼一郎	絵物語・洞穴の姫……文・松平 莊司 片耳の悪魔……文・中川 彩子 耳の戦慄……文・曾我部 泰 妖説黒髪小僧……文・小日向 一夢 グラビア・大と女……文・毛 卓三 美の発端……文・北 好夫 美の展開……文・毛 卓三 美の落着……文・金井 行雄 かわい調教師……文・北園 遼一郎 投げ節お駒……文・花巻 京太郎 締めつける愛情……文・春川 光彦 東京午前零時……文・夢夫 豊中 日本刑罰史(終回)……文・名和 弓雄 はも・とその周辺(終回)……文・かびや・かずひこ 体当たりマゾヒズム論(5)……文・水尾 究 新・三島由紀夫論……文・安東 泉 お春さらわれ草紙……文・小田桐 爽 千代の青春……文・浦戸 宏 赤い城……文・三津井 弓雄 ある身の上相談から……文・神原 栄知 イライラする夜に……文・羽鳥 なつ子 風雲地獄街道(終回)……文・鈴宮 英樹	絵物語・かわいアンタの……文・松平 莊司 ぼけん……文・中川 彩子 異聞・牛裂きの刑……文・東 桂史 宝石の血……文・秋吉 樹 グラビア・美の鋭角……文・毛 卓三 美の冗舌……文・金井 行雄 美の傾斜……文・金井 行雄 美の断面……文・金井 行雄 海外SMフォト特選集……文・泰西 出版資料 おかれ雪路……文・丸亀 恵史 おかつとのおさげの間……文・関町 妙男 霧山の町……文・沖沙 一 妖美画像……文・多賀 満 大刑幻想……文・鳴滝 三郎 夜の感傷……文・村山 省 足……文・水尾 究 体当たりマゾヒズム論(4)……文・春川 光彦 さまあろ……文・山本 節夫 ある恋の物語……文・松井 和子 不安と絶望から幸福への道……文・阿麻 哲郎 畜獣デリムソン(終回)……文・かびや・かずひこ はも・とその周辺(9)……文・かびや・かずひこ 風雲地獄街道(6)……文・鈴宮 英樹

裏窓の 合本用ファイルをお 申し込みください!

◎本誌の新装判を簡単に合本できる、秘蔵用ファイルです。
 ◎堅牢優美な高級仕上げで、これさえあれば、お揃えになったバックナンバーが散逸する心配もなくなりますし、また、好みの頁を取り外して、ファイルすることもできます。
 ◎御希望の方は、頒価130円に送料20円を添えて、スグお申し込み下さい。
 ◎なお御注文の際は「裏窓用ファイル」と御指定ください。
 ◎裏窓の1年間(12冊)直接購読者にはファイル1個を無料で差し上げます。
 東京都中野区松が丘2丁目21番
 株式会社 あまとりあ社 営業部

★本誌の記事および挿絵写真を、無断で転載・上演、上映、放送することはお断りします。
 ★お買い上げの本誌に、落丁・乱丁等がありました場合は、お買いになった書店でおとり替え下さるか、または、本社宛にお送り下さればすぐおとり替え致します。
 ★直接購読を御希望の方は、6ヵ月分(1,800円)または、3ヵ月分(900円)を本誌営業部宛にお申し込み下さいますと、送料は本社の方で負担しまして店頭発売前に直接お送りします。
 ★外国からの直接御購読は、送料を1冊につき20円御負担下さい。

裏窓・十月号

(第九巻・第十号)

定価 300円・送料18円

印刷……昭和39年9月25日
 発行……昭和39年10月1日
 編集……飯田 豊一
 集行……飯田 豊一
 刷所……向上印刷株式会社
 ……伸光印刷株式会社
 発行所……株式会社あまとりあ社
 東京都中野区松が丘2丁目21番

3151
 (振替東京・55408) 電話 (386) 3152
 (あまとりあ社宛) 3153

東京都中野区松が丘2-21 (振替口座 東京55408) 株式会社 あまとりあ社

裏窓叢書ご案内

第一集 狂異地獄肌

飯田豊吉著 中島喜美絵

450円 送料80円

第二集 黒蛇呪縛

黒木 忍著 山田彬弘絵

400円 送料80円

第三集 地底の牢獄

藤見 郁著 鬼頭 暁絵

400円 送料80円

第四集 残酷裸女絵巻

万里小路崑著 豊田みのる絵

400円 送料80円

第五集 責め肌忍法

万里小路崑著 古正英生絵

400円 送料80円

第六集 地獄谷の女たち

塔婆十郎著 山田彬弘絵

450円 送料80円

第七集 大利根柔肌草紙

花巻京太郎著 鬼頭 暁絵

450円 送料80円

第八集 悪魔術の塔

九十九十郎著 中川彩子絵

450円 送料80円

お手頃な値段で
いっぱい！
あまとりあ社の
特選出版物！

■東京都中野区松が丘二丁目二一番
株式会社 あまとりあ社
振替・東京五五四〇八・



★ S M 芸術の粋をあつめた豪華版 ★

グラビア48ページに選りぬきのS写真・責め絵が満載

+++++ 内 容 +++++

■ 絵画集 ■

落合竜二凄艶画集
沖涉二特選傑作展
中川彩子・女奴隷の檻
中川彩子・吊り蔵
鬼頭暁時代妖美画集
羽仁京志傑作選

■ 写真集 ■

滝の女・石の部屋
密室・絶望の風景
金井行雄作品集・
さるぐつわ・縄目
凝固



▼ながいあいだお待ち致しました。洗練されたセンスと伝統を誇る裏窓が、そのスタッフの総力をあげて、ここに、S写真と責め絵を豊富に掲載したグラフを発行致します。
▼このような写真絵画集の発行は、数年前より愛読者のみなさまからご要望を頂いておりましたが、このたび、ようやく刊行に至った次第であります。
▼定価は、送料とも一部千円です。
▼書店では発売いたしません。
▼厳重に密封して、個人名でお送りいたします。安心しておまかせください。
▼お申しこみには、住所とお名前のほか、かならず年令を明記してください。▼二十五才未満の方には、お売り致しません。未成年者は、絶対にお申しこみにならないでください。

耽美芸術グラフ

第一集

定価

千円
送料とも

★二十五歳未満のかたはお申しこみにならないでください★

裏窓・十月号・目次

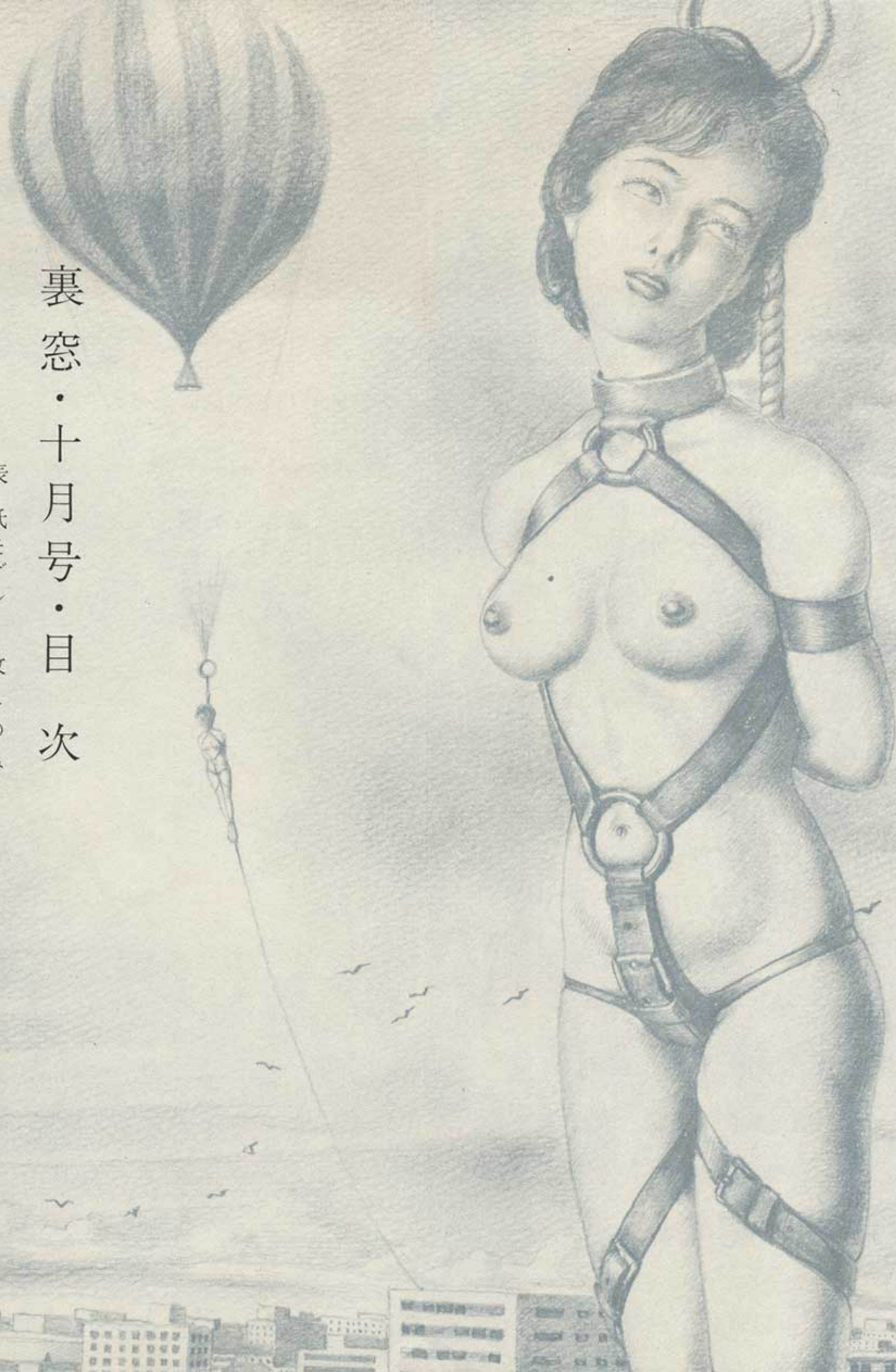
表紙モデル・牧このみ
目次カメラ・吉田久
とびらかット・中川彩子
とびらかット・落合竜二

「白日夢」におけるSM性……藤見郁
読者評論 現代の魔女裁判……邦枝克平 (40)

踊り子「ヨッコ」……光谷東穂 (90)

パノラマ島秘譚・5……北園透一朗 (160)

裏窓タウン (135)



乱世呪縄伝…潮一樹

体当たりマゾヒズム論・28…水尾究

煩惱縄…矢桐重八

アメリカ絵物語 **グエンドリン物語**…ジョン・ウイリー

耽美芸術グラフご案内

奢れる女神への祈り・7…森本愛造

絵物語 冷血…

文・祖父江新
絵・落合竜二

ゴルドンの記憶・19…阿麻哲郎

読者コーナー

● **グラビア・オフセットページ** ●

江淵晃夫画集・わがままなお姫さま

誰かくる足音…吉田久

輝やける女性…北米・フェニクス商会

憂いのポーズ…猪島昌也

縄のたわむれ…吉田久

沖涉二・妖美画傑作展

耽美芸術グラフ・ご案内

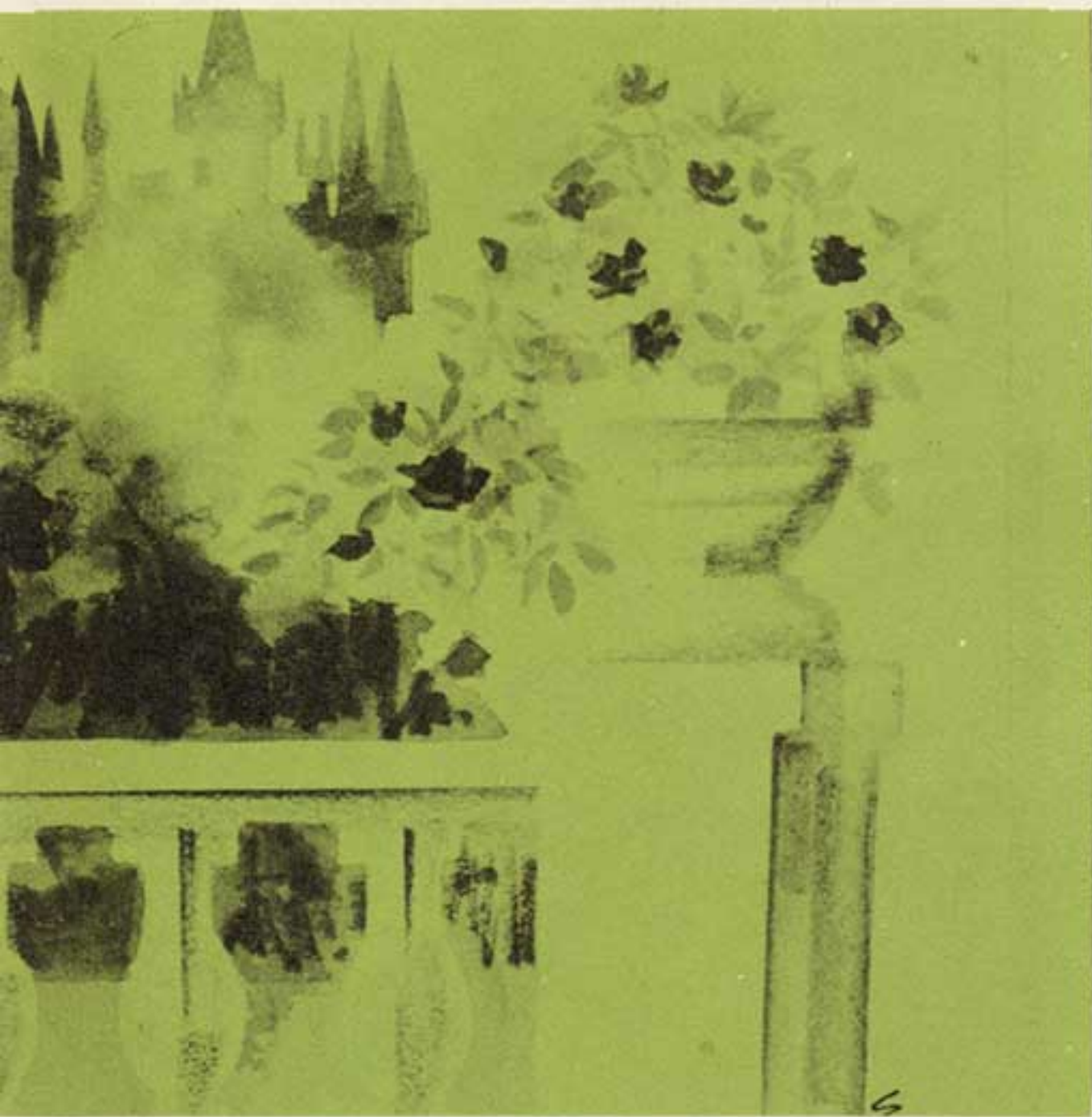
鞭を待つポーズ…落合竜二





江渕晃夫画集★わがままなお姫さま

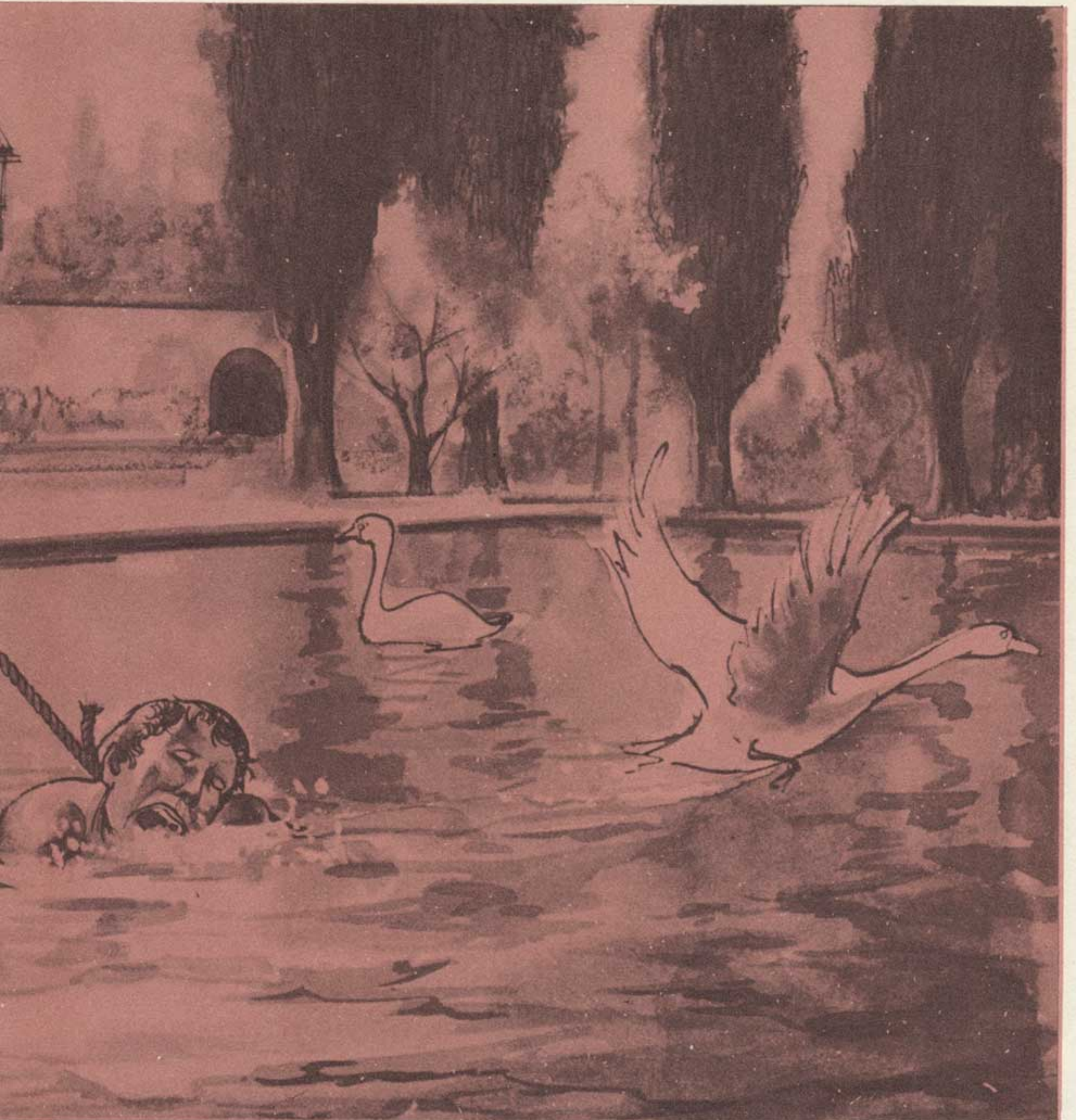
うごいちゃだめ!



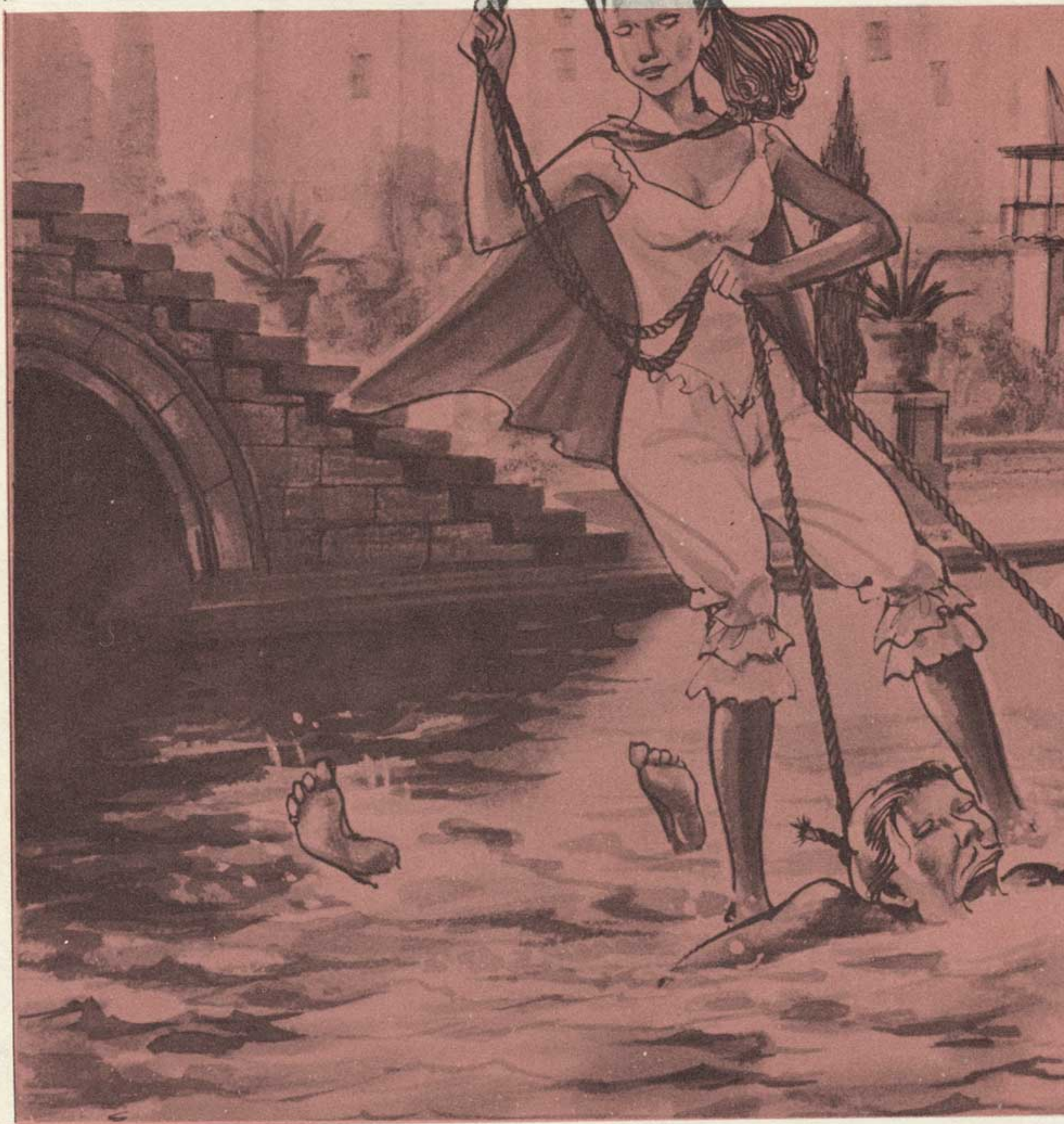
いいきもち







—水上スキー—



生きているおといれ



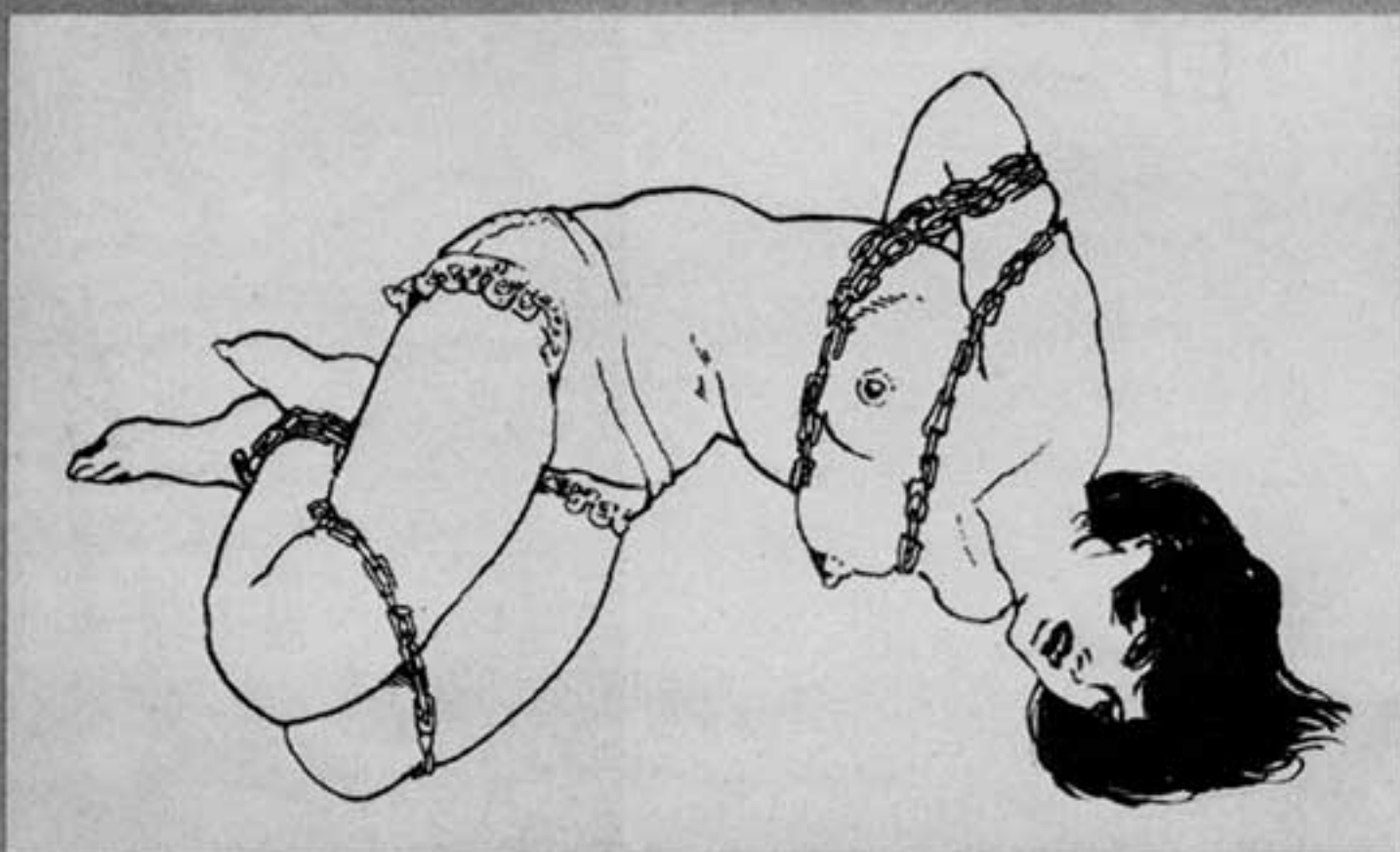
お仕置き



カメラ・吉田久
モデル・新宮美沙

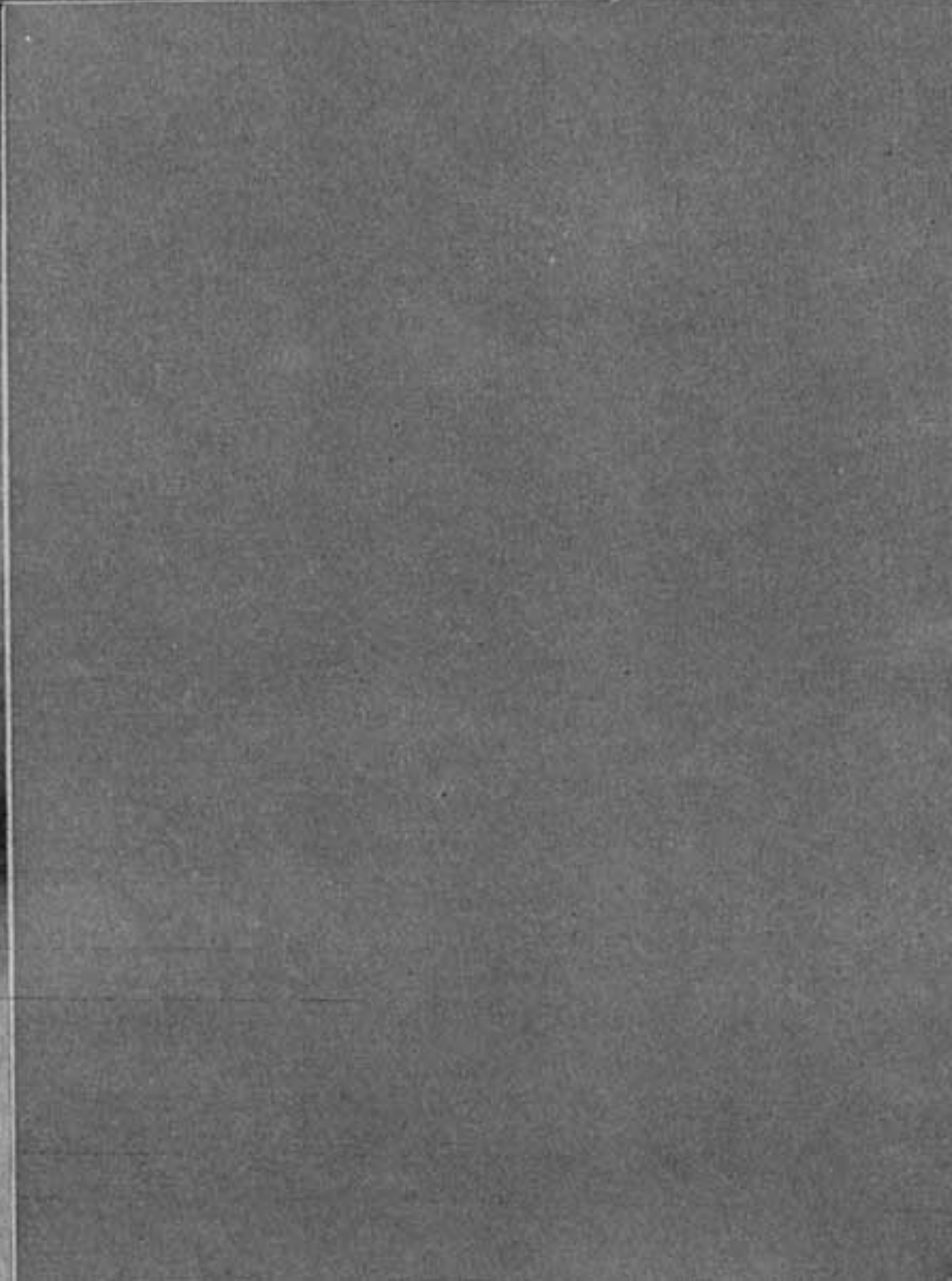
誰かくる……足音

















裏

窓



10 月 号

第 9 卷・第 10 号

おとなげない話



村松 壮一

黒人の高校生が三人、学校の門の開くのを待ってアパートの階段に立っていた。すると、白人の管理人が出てきて「水をまくからどけ」といった。黒人たちはすぐにはどかなかった。白人の管理人はホースを向けながら吐きすてるように言った。

「ついでに、その黒い色を洗い落としてやろう」

さてその一言で黒人高校生たちは怒った。ゴミ箱のフタを投げつけ、逃げる管理人を追った。騒ぎは大きくなり警官がかけつけた。その警部はたまたま非番であったが、かけつけるなり、いきなり黒人高校生のひとり射殺した。これが事件の口火となった。

去る七月十六日、ニューヨークの下町で起こった出来事である。

黒人は憤激し、翌日から激しいデモを行ない、数日間にわたって警官隊ともみあい、相方に多数の負傷者を出した。これが最初の前衛戦であった。

むき出にされた人種対立の悪感情が、夏の酷暑と共に爆発し、ニ

ューヨークはただならぬ事態に陥った。連日警官隊と黒人たちとは衝突した。七月二十五日には、ロチェスター黒人居住地区で、四、五百人の黒人が警官と衝突、投石したり、車を転覆させたりで、五十人以上の負傷者を出した。ロチェスターのホームー市長は、同日、非常事態を宣言した。

アメリカの恥部と言われる「黒人問題」は南部だけの問題ではなく、リンカンの伝統を引く北部の工業先進地域でも、根強く底流をなしていたことを暴露した。

いや、むしろ、比較的進歩的な北部でこそかえってうわべだけがきれいにとりつくろわれて、内実は人種差別の觀念が深く静かに潜航していただけ、いったん火がつくと、黒人の反発は手のつけられぬほど激しいものとなる。

民主主義の総本山と目され、自由陣営の旗頭であるアメリカでこれである。アメリカびいきのインテリたちが、落胆するのも無理は

ない。

こういう最中にゴールドウォーターの出現である。アメリカの評判をさらに悪くした。

アメリカ人はもともと低俗で野蛮で、知性度の低い国民だ、寄合世帯の雑種国で、成り上がり者的出かせぎ根生の国柄なのだ、これがその証拠だ——と考える人もいる。

資本主義的罪惡を一身に背負った、強大な帝国主義国家だ、ときめつける人もいる。

アメリカを軽蔑し、ヨーロッパを崇拜するのがインテリの風潮である。そして実は底にヨーロッパへの劣等感をいだきながら、万邦無比の神国とはいわないまでも、背伸びをした大国意識と、また押しつけがましい祖国愛を説くのが指導層の風潮である。

日本には幸なことに、黒人問題はない。南阿の強力なアパルトヘイト政策を非難し、アメリカの人種問題を自由陣営のために遺憾なことと考える。日本の良識は健在だ、やっぱり日本が一番いい国だ、と思う風潮もある。

だが果たして、日本に黒人問題はないのか、四十年前、関東大震災に際しての朝鮮人虐殺事件を思い起こしてみるといい。今だに根強く残る部落民問題を考えてみるといい。住所が山谷だ、あるいは釜ヶ崎だ、というだけで採用を取り消された就職少年が居ることを考えてみるといい。

アメリカの黒人問題は、決してよそことではないのである。

こういう差別観は、同じ日本人同士の間でも存在する。血統出身地、出身校によって差別され、名門の出であるかないかによって差別する。実質的なアパルトヘイト政策が行なわれているのである。

る。そしてうわべだけは、平等、自由、民主の耳ざわりのいい修飾語で飾られ、実質的な内情とのアンバランスのひずみは、誠にグロテスクなものとなっている。

日本人はテンション民族だと言われる。ユーモアの余裕がなく、いつも頭に血が上っていて、すぐ緊張するからだ。緊張なしに物が言えない国民性がある。そのくせ表面は礼節正しい民族というわけアンバランスな緊張が内攻する。内攻したものが時々気違いじみて爆発する。

七月二十八日、蔵前国技館で行なわれたプロボクシングの世界選手権試合での醜態もその一つだ。
全くバカげた野蛮さ、というのほかはない。

ことの起こりは十二回、それまで優勢とみえた小坂選手がエロルデ選手の激しいフック攻撃にあい、カウント八のダウン、立ち上がったものの、再びエロルデ選手の猛攻に大きくよろめいた。小坂はフラフラの姿勢でなおファイトの構えをみせたが、中にはいったレフェリーが押しとどめ、エロルデ選手の手を高く上げた。

その後、一瞬、喧騒と怒号の修羅場と化した。ザブトンの雨である。激昂したファンがリングにかけ上がる。あとはテレビでも報道されたとおりの光景が展開された。

これが礼節正しい、おとなしい日本人の一面か、ひざまずいて「アイアムソーリー」を繰り返すエロルデ選手にバリ雑言とザブトンの雨。礼節もクソもあったものではない、日ごろ内攻していたものを爆発させる格好な機会とばかり獣性を丸出しにした。

ひとりだけではおとなしい日本人も、衆をたのむと狂暴になる。退場するまでエロルデ選手は何回も観衆になぐられた。日ごろおと

なしくて、ヒョロヒョロしていて、良識じみた通りのいいことを言っている者に限って、こういうときは熱狂する。真正面からひとりで立ち向かうことはしないが、群集の一員としてなら、どんなことでもする。こんなバカな卑怯なことがあるのか。

もちろん、それには理由があった。フィリピン人のレフェリー、パデリア氏が、エロルデのTKO勝ちを「早く宣しすぎた」というのが理由である。だが、レフェリーの判定が本当に早すぎたのか、それとも小坂を危険から救ったのか、このところがむずかしい。一昨年の世界ウェルター級選手権試合で、キューバのベニー・パレットがTKOされて意識不明になったのも同じ十二回である。パレットは意識不明のまま十日後に死んだ。レフェリーのゴールドステイン氏は、早く試合を中止させるべきだったと、非難を浴びた。

世界フェザー級チャンピオン、デビー・ムーアは、キューバのシユガー・ラモスにKOされ四日後に死んだ。昨年のことである。

アメリカでは過去十九年間に、二百十六人のボクサーが死に、日本でも五人が死んだという。ボクサーの死をいかにして防ぐか、というのが大きな社会問題になっている。中には、ボクシングそのものを廃止すべきだとの強硬意見さえ出ている、その矢先でのことである。

レフェリー、パデリア氏が、そのところを考えて早目に判定を下したか、それとも自国選手を勝たすべく早々に判定を下したか、それはしかし疑問である。と言いながら、それでもあれはあれでよかったではないか、事故が防げたのではなかったか。

群集はだが、狂暴である。血を欲するものである。事故が起これかしと望みさえする。それならそれで、徹底的に我を打ち忘れ、最後まで狂乱怒とうのように荒れるとよい。そこまではできない群集

は機を見るに敏なものである。酔っぱらいが酔っぱらい方の度合いに計算を働かせているように、群集も結構ソロバンをはじいているものである。

やがて騒ぎも次第に収まり、ひとり散りふたり散り、だれもが最後にはコソコソと帰ってしまう。責任を人に押しつけて、自分は礼節正しい善良な市民に立ちもどるのである。

一步ゆずり、群集に正当な怒りの理由があったとしよう。しかしそれはあくまでパデリアの判定の仕方に対してであって、エロルデには関係のないことだ。それが何ということであろう。

試合中エロルデにヤジがとんだ。「おいほれ」「早くくたばれ」までは、あるいは悪意のないゴアイキョウであるのかもしれないが「半クロ」はいただけない。エロルデを「半クロ」とヤジたつ男が、今度は白人からヤジられた場合、きつと怒るに違いない。

人種問題が、思わぬところで頭を出した観がある。

こういうことを、一面から言えば、おとなが居ない、ということである。話がビジネスライクに、ルールとして通じないのである。或る人がエロ写真を持っていたとする。ただそれだけで、目の色を変えて、その人の人格がどうのこうのと大仰に騒ぐ、といったことが良識の名で行なわれる。これではおとなにはなれない。

おとなは、ボクシング試合でヤジをとばしても「半クロ」なぞとは言わない。試合が不満であったとしても関係のないエロルデを、群集というかくれミノのかげで、なぐったりはしない。SやMのファンはおとなでないとなれないものである。それは鉄則である。己を知る者でないとなれない。それも鉄則である。

ところが、なんと、周囲には子どもが多いことか、善良な市民という名の卑劣きわまる子どもが多いことか、善良な市民と

その子どもたちが、寄ってたかって、しちむずかしい顔をしながら、反動的な法律を考えたりするのである。少なくとも、そういうものを考える、考え方の基本を成している。なぜもつとおとなになれないか、そこがところがくやしい。

国際オリンピック委員会（IOC）会長、ブランデーは、オリンピックに対し、大変独自の考え方を持っているという。国歌、国旗の廃止論がそれである。

「ぜひとも廃止すべきだ。第一に、個人間であるべき競技に無用なナショナリズムがはいりすぎている。第二に、観衆は、米ソの国歌ばかりきかされて退屈する」

というのが持論だそう。大変大胆、かつ飛躍した考え方、というべきであろうが、この中には、傾聴に価する大きなテーマが含まれているように思える。

現状では、まだ一般化しない、一つの理想主義かもしれない。しかしあえてこの理想主義の灯を高く掲げたい。

SやMも、せんじつめると、人間思考のあらゆる可能性の限界をとことんまでつきつめて考えてゆく、一つの理想主義だからである。それは個人間に、いかなる差別も持ち込まない精神である。個人を個人のまま、その状態に応じて認めるという主義である。それはおとなの精神でないと貫き通すことはできない。

理想主義を説明するのに、もう一つ、身近な例をひいて考えてみることにしよう。

「先生―実は前科五犯」という新聞記事から「愛知県半田署は、去る七月八日自宅で習字を教えている小学校二年の教え子にいたずら

した愛知県知多郡武豊町、元武豊小教諭森田明（三十五）を逮捕、調べていたが、その後の調べで、同小学校に採用される前に窃盗など五件の前科があったことがわかり、父兄の間でずさんな採用に非難の声があがっている。

―同署の話では去る二十八年夏、東京都内の会社へ盗みにはいり、現金一万円を盗み東京・中野簡裁で懲役一年の刑を受けたのをはじめ、三十一年二月、小倉市内の友人の勤め先の学校からオーバーを着を盗み、小倉簡裁で懲役三年六月の実刑を言いわたされ、小倉刑務所に二年三月服役、仮出所するなど、五件の前科」があったという。

こんな前科者を、なぜ小学校教師に採用したか、身元調査がズサンだ、という非難が高まっている、ということだそうである。

教師という職業を、昔流に、特別な聖職と考えている人には、これから先に述べる理想主義的合理精神の立場が、理解してもらえないかも知からない。

あえてここでは、教師としてそれは任意多数の職業の中の一つ、という前提に立って考えてみたい。いったい、職業は職業にすぎないのであって、他の付加する何ものがあるというのであろうか。職業には聖職もなく卑職もない。職に貴賤の区別なし、当たり前のことではないか。ということとは、別に教師という職業を、いやしめることでもおとしめることでもない。職業に打ちこむということは、それでそれぞれりっぱである。むしろ教師も、他の職業人と変わらぬ職業人として、己の職に打ち込む、これが教師という職業人の道であり、聖職の聖なぞという、まやかしの飾りなど、捨て去るべきが至当であろう。

ところが一方、前科者は職業人になる資格がないのか、という問

題が派生する。前科者として働く権利があり、職に就く自由があることくらい、これは常識である。

森田明は、前科五犯とは言いながら、それぞれ服役済みで、採用当時は青天白日の身の上であつたはずだ。つくないは服役することであつたのだ。出所後も、まだ罪人としての重いクサリを、引きずって歩かねばならないのか、という問いには、明らかにノウであるはずだ。でなかったら、服役何年というのが意味をなさない。出所してからは自分に最も適した職を選び、新しく更生しようとすることを、だれもはばむことはできない。

森田明は、福岡第二師範の出身である。そして出所後、愛知県教職員採用試験に合格、武豊小学校に就職した。これはこれで手続きに落度はない。

なぜこのことが、あとになってこれほど問題にされねばならないか。それには二つの理由がある。

一つは、教師とは、特別な神聖な職業であるということ。

一つは、前科者は普通のマトモな人間でないということ。

後者の理由に対しては、これは前記のとおり、前科者として働く権利が、職に就く自由を何びともはばむことはできない、という真向からの正論で向かいたい。

前者の教師は聖職だ、という抜きがたい偏見に対しては、正論で向かつて容易に納得のいくことではなさそうに思える。それほど問題はややこしい。

だが、教師とて人なり、教師とて任意な職業の一つなり、という立場に立つとき、この職業に、他の職業とは特別に垣根をこしらえて、前科者などもつてのほか、というのは、大変な人権の侵害ではないか。

教師にその人が適格かどうかの判断を下すのは、全く違った観点からなさるべきで、前科があるかないか、判断の一つとはなり得ても、それが、このような騒がれ方をするのは、どこかまちがっているのではなからうか。現状にそぐわない、理想論というなかれ、だれかが理想主義の灯を掲げねばならない。

七月二十七日、今年度第二回東京都議会定例会は「東京都青少年健全育成条例」を投票で採決、賛成八十（自民、公明）反対三十三（社会、共産）で公明会修正案通り可決、条例制定が本決まりとなつた。

この法律が「水不足問題」等で完全に信用を失墜し、しかも相次ぐ汚職で悪名高い東京都、ならびに東京都議会の手によって成立施行の段取りに立ち至つたことは、特記さるべきである。しかも審議会の答申に基づき、いちやく都議の報酬、知事、副知事的大幅な給料の引上げを可決、悪名にいつそうの上塗りをした。与党の池田首相でさえ「東京都に都政なし」と、強い不満を示したような。

水不足は言うに及ばず、住宅建設ののろさ、ゴミ処理の能率の悪さ、オリンピック道路のしわよせでそれ以外の道路のひどさ、都庁の汚職の広がり方。

本当に青少年の健全育成を心がけるなら、これまでの数々の不名誉と不能率の責任からわれわれには資格なしと、都知事も都議会もいさぎよく身をひくか、それでなくとも、せめてもの後世に暗い陰を残す法律の可決だけは取りやめるべきであつた。

ところがところがある。毒食わば皿まで、と居直つたかのようにな、抜く手も見せずに強行したのが、「報酬引上げ」である。都知事の月給が二十三万円から三十万になった。副知事は十五万円から

二十万円に、議長は十八万円から二十四万円議員は十一万円から十六万円とそれぞれ一撃にベースアップ。かくて都知事は国務大臣なみ、議員は大阪、神奈川と並んで全国最高、都知事は三十%、議員は四十五%のアップ。わずかのベースアップも、ストだゼネストだと闘争に闘争で戦わねば守れない労働者の目に、これが何と映るかとだろう。すこやかに健全なおとなになろうと成長を心ざす青少年の目に何とこれが映るだろう。

門上元検事の家庭で起こった惨劇が話題を呼んだ。門上さんと言え、日本における最初の女検事として、当時ジャーナリズムをにぎわした時の人だった。夫は大学教授、妻は検事、まずは申し分のない家庭である。

今回の惨劇は同家にとっては大変な悲劇であった。そして各方面から多くの同情が寄せられた。

しかしチマタでは、もっともっとすさまじい、惨劇や悲劇が繰り返されているのだ。そしてそういう家庭は、世間から村八分的な扱いを受け、二度と再起できないようになってしまう。

門上さん、あなたの悲劇は人ごととは思えない、と女性評論家が書き多くの女性が思った。それはそれでいい。昔流に、親の責任だ、あなたが悪かったんだと責めるよりはずっといい。

しかし、これは人ごとではない、と身近に感じた母親や評論家は、つまり門上という一流の良家で起こった悲劇だから、そう感じたのである。

これが市井の八つあん、熊さんの家庭で起ったことなら、身近に感じるどころか、新聞記事にもならない。

許せないことが一つある。

事件が起こってから少年がつかまり、事件の全ぼうがすっかり判明するまで、頑迷にも両親は、

「これはよその者の犯行で、息子は罪をかぶせられている」

と信じ続け言明し続けてきたことだ。

「よそのうちの子供ならやりかねないが、うちの子供だけはやらない」

というこのエゴイストチックな親の頑迷さは、他の無関係な少年に対しての最大の侮辱とはならないだろうか。

「あの子と遊ぶな」

「友だちがいけなかった」

とかいう良家の母親は、

「こういう本は読んではいけない」主義の信奉者だ。

「自分の子どもも、もしかすると一面では、他の子どもに対しての悪友であるのかもしれない」

「自分の子どもだって、少しもよその子どもと変わらないのだ、八つあんや熊さんの子どもと同じなのだ」

という謙虚さ、物事をリアルに見つめる訓練があつてよいものではないか。

良家の子女とか、不良家の子女といった区別は、ドダイ初めからあろうはずがない。おとなの世界だってそうだ。正常人とか変態とかの区別は、最初からありはしない。また区別をすべきではないのである。

羞恥ほとばしる美香

北園透一朗
中川彩子・絵

1

木箱のなかに盛られた砂は、無心な小山をつくって、沈黙していた。

いくらか湿りけをおびていたが、その小山の頂点は、こまかい光りを反射してかがやいていた。それだけを眺めれば、幼児たちが、砂遊びに使う、無邪気な遊び道具だった。

白いめす犬は、しかし、はげしい羞恥とためらいを全身に示して、その砂箱から顔をそむけ、あとずさりした。

「おや、どうしたの。えんりよしないで、するのよ！」

シコが、めす犬の首輪をひっぱった。

しかし、めす犬の四ツ足は、黒いじゅうたんにすがりつくような力で、反抗した。

首輪をひっぱっている鎖が、ぴいんと鳴って張り、ふるえた。哀れっぽい表情を浮かべているが、めす犬は強情だった。

シコの醜いくちびるが、陰険な微笑をもらった。

「いいわ。それでは、そのままでいなさい。

私たちは、のんびりここに坐って待つわ」

「おねがいです！」めす犬は、たまりかねて口をきいた。「こんな所ではいやです。おねがいです、いかせてください！」

血を吐くような哀願だった。

めす犬はあえぎ、腹は異様にふくれあがっ

ていた。

「だめよ」

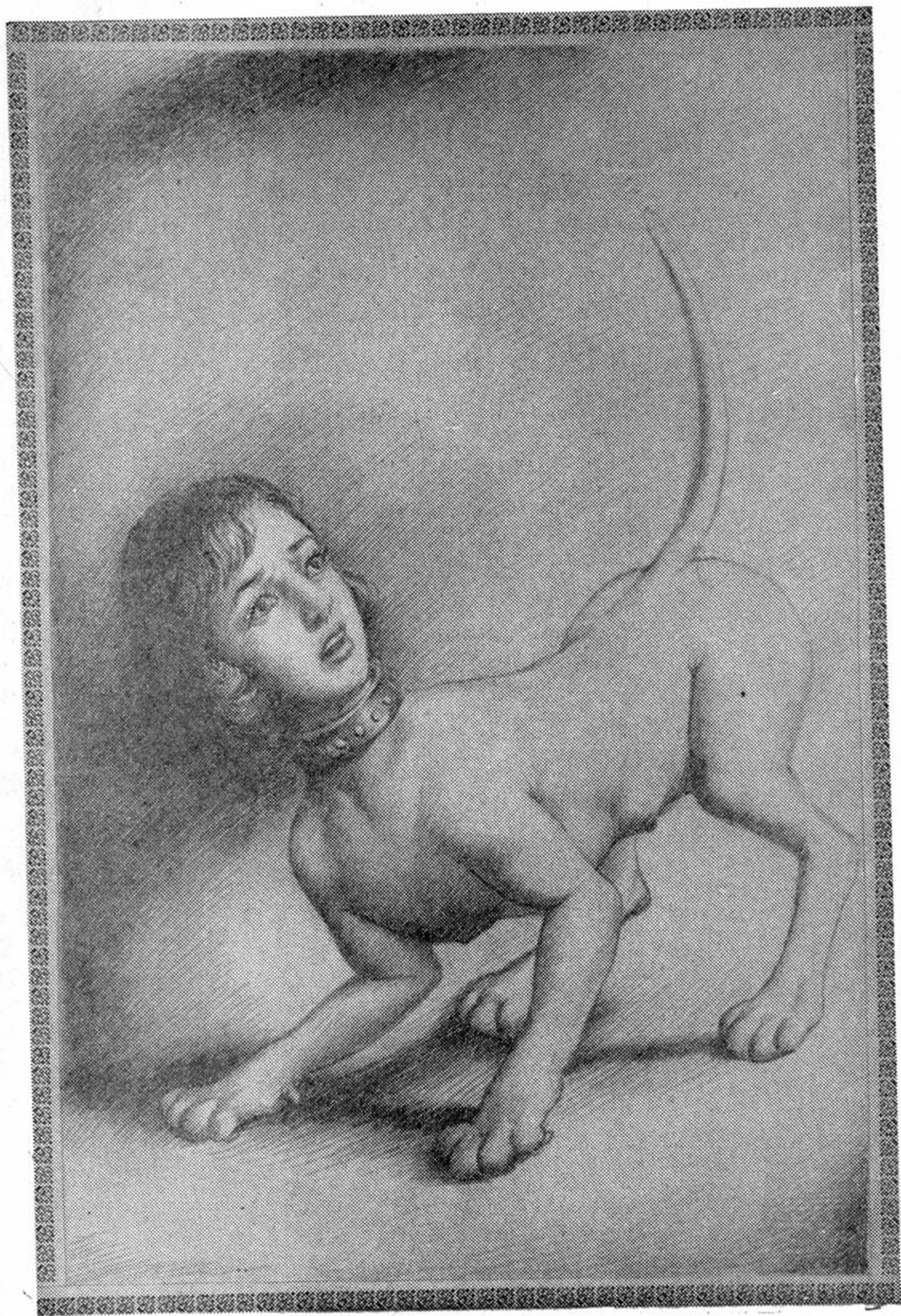
低い、びしりとした声でシコはいった。「ここですませなさい。したくなければ、しなくてもいいのよ。私たちは、なにも、してはいけないとは言っていないんですからね」

「……」

くやしい。めす犬は、のどの奥から、むせび泣きだした。

だが、泣くという行為も、しだいに、せいたくなものになっていった、めす犬の赤い舌の奥のほうが硬直しはじめた。

三十秒、四十秒と、時間がたつにつれて、泣いている余裕すらなくなってきた。



めす犬は、息を吐きだすにも、腹の力をぬいて吐きだした。息を吸うときは、いくらか力をこめられる。

みじめな姿だった。しかし、そのみじめさを自覚し、羞恥する意識は、刻々と麻痺していく。

どんなに神経をほかへ散らしても、身内の緊迫度は、確実にたかまっていくのだ。

「あらあら、あんなにもおしりを宙に浮かせているわ。まるでサーカスの犬ね」

と、指さしてA子がいった。

「あんなに大きく口をあけて、だらしなくハアハア舌をだしている格好なんて、どうみても犬だわ」

と、E子がいった。

「目になみだをうかべて……かわいそうに」

と、同情の声音はすこしもなく、C子がいった。

「がまんしてふるえていないで、さっさとお砂を掘って、してしまえばいいのに」

D子が、待ちきれないような、いらいらした声でいった。

四人の美しい女奴隷たちは、砂箱を中心に、それぞれ自由な、奔放なポーズでねそべって、めす犬の「最後の瞬間」を待ちうけているのだった。

期待と好奇にあふれた視線が、美しい一匹の表情と姿態へ、まばたきもせず、そそがれている。まるで、ステージの上の華麗なショウを見物する観客たちのように……。

シコは、めす犬の腰部をおおっていた、うすい小さな布きれをはぎとった。そして、ほそいするどい金属製のムチで、まるく盛りあげられているやわらかな部分を、ぴしりッとした。

「ああッ！」

この苛酷な督促に、白い全身は、電撃をうけたように、けいれんした。

可憐な四ツ足は、無我夢中のいきおいで、砂箱めがけて突進した。

手足の鎖が、このドラマの伴奏音楽のように鳴った。

めす犬の視界から、五人の同性たちの姿がとび散った。意識は、ただ一点に集中され、なにも見えなかった。

砂箱のなかの砂を、手枷のついた両手で掘った。ちいさな砂山がくずれ散った。

十本の指が、砂にまみれた。めす犬は、赤い舌をふるわすながら、砂の上にのしかかった。

あわてて、シコがさげんだ。

「四つん這いのままでするのよ。だめだめ、

片足をあげるのよ！」

黄色い声をあげながら、ムチをふるった。

ムチに脅されて、めす犬は本能的に左足をあげた。こらえにこらえていた音が、ほとんど同時にほとばしりてた。

待ちかねていた五人のひとみが、いっせいに輝やいた。首をのぼし、そろそろと近くまで這い寄ってきて、一点をのぞきこんだ。

めす犬は目をとじ、口をあけっぱなしだった。あらい呼吸だった。音は、その呼吸に合わせてほとばしっていた。

長いまつ毛がふるえ、数秒間は、羞恥よりも、こころよい解放感に酔っていた。

猛烈ないきおいで、音はつづいた。

量の半分は、砂にたたきつけられ、あとの半分は、木箱の外へあふれた。

そのしぶきのはげしさに、五人の女は、あわててとびのいた。

砂は、液体を吸って、黒くぬれた。ちいさな泡が、淡い色に光って重なった。

音は、つづいている。たまりにたまっていたのだ。とめようとしても、とまるものではない。なおもつづく。うすい湯気がたちのぼった。

五人の観客の口から、

「ひゃあ、ひゃあ！」

というような、けたたましい喚声があがっていた。感嘆の声である。ゆかを手でたたいているのは、D子だった。

音はしだいに低くなり、しぶきも力を弱めて、数滴のしずくとなって、とまった。

おわったのだ。新鮮な臭気が、黒い部屋のなかに充満した。めす犬は片足をおろした。

「ぐう、う、う……」

という、うめき声が、めす犬ののどからもれた。

おわった瞬間から、羞恥と屈辱感が、これまでの数倍のはげしさで、急激によみがえったのだ。

めす犬は、髪をふるわせ、背中をまるめて泣きだした。のどからしほりであるような泣き声だった。まるくうずくまった肩と背中と腰が羞恥にくねり、白い波のようにゆれた。

「う、う、う……」

左右の手の指で黒いじゅうたんをしつかりとつかみ、めす犬はいつまでも顔をあげなかった。

2

「カーペットを、ずいぶん汚してしまったわね」

シコが、近眼鏡を光らせていった。

この部屋のゆかに敷きつめられた黒いじゅうたんの、かなり広範囲な部分が、めす犬の放射した液体を吸って、ぬれていた。

あの元気のいいしぶきを、わずか五十センチ四方の木箱に収容できるはずはなかった。

「この黒いカーペットは、ベルシャ製の高級品なのよ。このままにしておくことはできないわ」

シコは、ムチを鳴らしていった。同時に、五人の女は、目と目でなにごとか合図をしあった。

A子が、用意してあった雑巾を、美香の顔の前に投げた。

「その雑巾で、ふきなさい。あとしまつをしなさい」

傲然と、シコがいった。

「……………」

美香は、うずくまったまま、泣いていた。「かわかないうちに、よくふきとっておくのよ」

シコのムチが、まるいしりに鳴った。めす犬は、ぎくんと肩をふるわし、顔をおこす。

「おふきなさい。自分で汚したんでしょ？」

うす笑いをうかべながら、A子がいった。

「はやくおふきなさいよ。くさいわ」

E子が、嘲笑とともにいった。

美香の顔は、屈辱のなみだで、ぐっしょりとぬれていた。だが、ここでいつまでもためらっていると、彼女たちは、すぐに意地悪いアイデアを考えつくだろう。

美香は、右手をのばすと、目の前に投げられた雑巾をとった。

このとき、すかさず、シコのムチが、美香の肩さきに打ちおろされた。

「あなたは、めす犬よ。めす犬が、そんなに器用に手を使えると思っているの？」

「……………」

美香は、無言のまま、うらみのこもった目で、シコをみあげた。

「まだ、あなたはわからないのね。犬はね、そういうものは、口にくわえるのよ。口にくわえて、そしてふくのよ。やさしいことよ。」

さあ、やって、ごらんください」

ほそい金属製のムチが、ふたたび、美香の白いしりをはじいた。こんどは、かなりのはげしさだった。

びくん、と腰をふるわせ、美香は首をのばすと、あわてて雑巾を口にくわえた。白いしりに、うす赤いムチあとが走った。

「さあ、おふきなさい。おそうじしなさい。ぐずぐずしてないで、早く」

めす犬は、雑巾を口にくわえたまま、力な

くのろのろと這いだした。そして、ぬれたゆかをふきはじめた。

さからうことはできないのだ。めす犬の運命に服従するより、ほかはない。

うすい水たまりになつてゐる部分もある。

雑巾は、たちまちその液体を吸いこんでぬれた。

美香は、本能的に顔をしかめた。鼻孔に臭気がまみれ、ぐッ、ぐッ、とのどがむせび泣いた。

しかし、中止することはできない。シコのムチが、背後から残忍な目で監視しているのだ。美香は、必死になつて雑巾をくわえたまま、顔を前後左右にうごかした。

雑巾は無心に液体を吸いあげ、臭気が齒にしみこんできた。

「まあ、なによ、その顔は。自分のものを自分で始末するのに、なにもそんな顔をすることはないでしょう」

B子が、あざけた。

「どんなにおいがする?……あなたは美しいから、きつとそれも、いいにおいでしょうねえ?」

鼻をひくひくさせながら、C子が真顔でいった。

「美人だって、なんたって、同じようなところ

ろを通つて、同じような出口から出るんだから、やっぱり同じにおいだわよ、ねえ」

D子はそんなことをいうと、大きな口をあけ、下品な声で笑つた。

めす犬の顔は、なみだと尿がまじりあつた液体で、むざんにぬれ光つた。

「も、もう、ゆるして……」

哀願したとたんに、めす犬の口から、雑巾が落ちた。その雑巾の上に、美香のなみだはとめどもなくしたたつた。

五人の女たちは、声をそろえ、腹をかかえて哄笑した。

A子は、ぬれた雑巾をつまみあげ、うつ伏して泣いてゐる美香のあたまの上にのせた。

そこで五人は、また笑いころげた。

彼女たちの心には、勝利の快感があつた。

それは、ひさしく味わつたことのない優越感だつた。

3

「ウフフフ……女ども、なかなか、やるな」

Qは微笑をもらし、つぶやいた。

協力一致した五人の女が、ひとりのめす犬をいじめている「黒い部屋」の天井裏の小部屋に、Qはひそんでいた。

Qの足に踏まえられた一区劃は、女たちが

騒いでゐる室内から仰ぐと、天井に取りついている、ふつうの換気装置の窓にしかみえない。

しかし、この四角いかたちで区切られた窓には、マジック・ミラーとレンズを使った巧妙な仕掛けがあつて、天井裏の小部屋から、「黒い部屋」の情景は、らくに見おろせた。

Qは、六人の女たちが演ずるショウを、はじめから終わりまで、見物してゐたのだ。文字通り「高見」の見物であつた。

——女どもだけでやらせるのも、また、格別なものだな。

Qの口もとから、微笑が消えない。

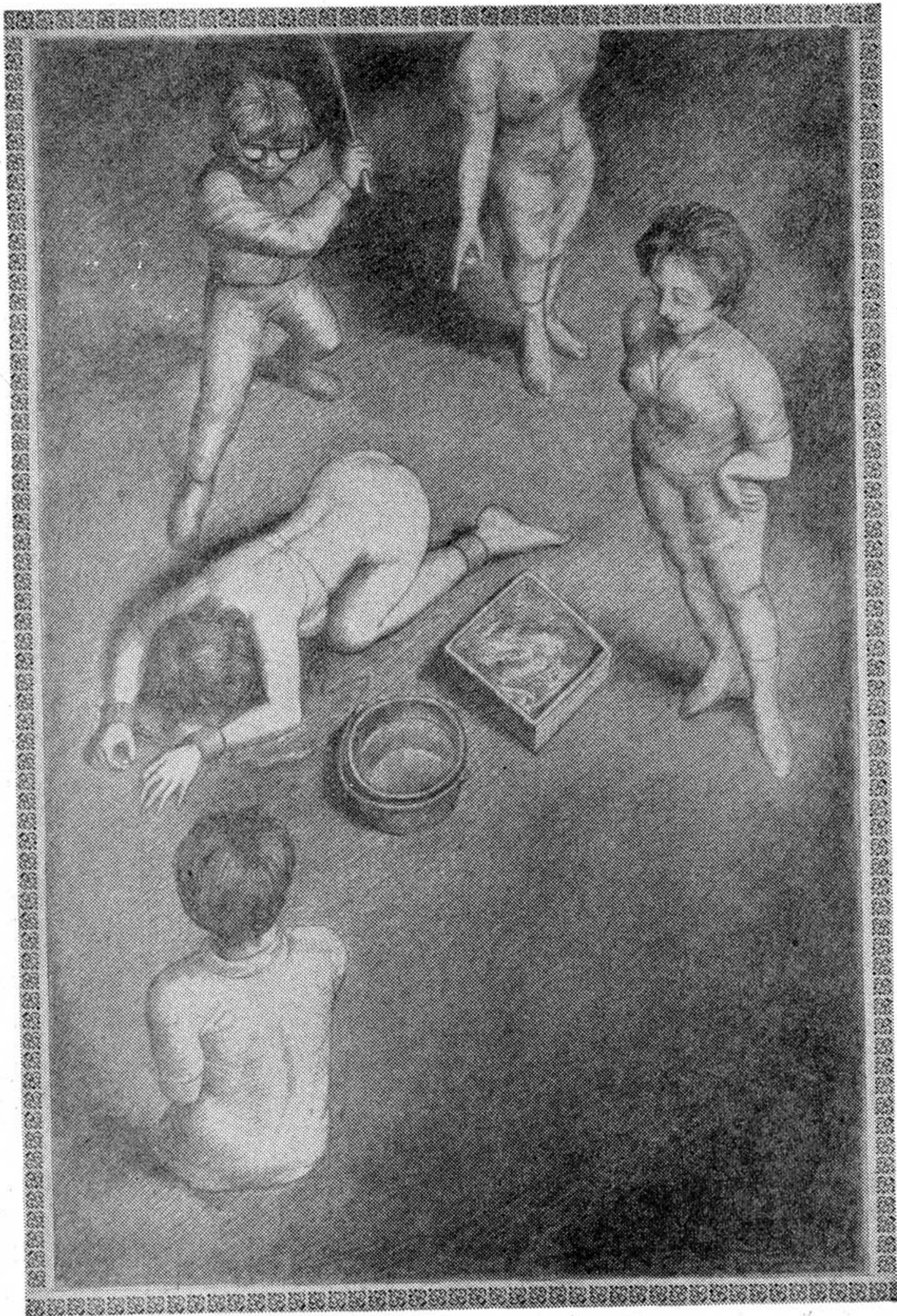
きょう一日、パノラマ島を留守にするといつたのは、Qの策略であつた。

美香を、ことさらに「優遇」して、シコに嫉妬させれば、シコはかならず自分の留守に美香をいじめるにちがいない。

そう計算したQの、いたずらっけの多い策謀であつた。

Qは、シコに見送られて、そしらぬ顔で、「夢の城」から出ると、ボートに乗ってパノラマ島の周辺を一周した。

一時間ほどのち、ふたたびボートを波止場につけて、また「夢の城」へ、こっそりともどつていたのである。



そして、自分をまったく第三者の立場に置いて、窺視の愉悅に浸っていたのであった。

シコの性格を知りぬいているQの策略は、みごとに成功して、なんともなまぐさい、陰險なショウを見物できたわけである。

むろん、シコも四人の美しい女奴隷も、自分たちの頭上に、Qの好奇にみちた視線がそそがれていようとは、夢にも思っていない。

4

「まあまあ、あなたのからだも、すいぶん汚れてしまったわね。いくらめす犬でも、それじゃかわいそうね」

美香の首輪の鎖をひっぱって立たせながらシコがいった。美香の素肌には、ぬれた黒い砂が、斑点になってまみれていた。

「一階の温湯プールへいって、そのからだを洗ってあげるわ。それがすんだら、ベッドへ寝かせてあげますからね」

シコは腕時計をみた。午後四時になっていた。

——社長が帰ってくるまでには、あと六時間もあるわ。このお嬢さんのからだは、それまでに、ちゃんとベッドに寝かせておけばいい。当人には嚴重に口どめしてあるし、きょうのことは、社長には絶対にわからない。

シコは、そう計算した。

きょうのことを社長に告げ口したら、きょうの数倍もおそろしい報復をしてやる、とあらかじめ美香を脅迫しておいた。だから、美香の口から、きょうのいたずらがもれる心配は、まず、ないとシコは考えている。

Qのほんとうのおそろしさを、シコにしてさえも、まだわかっていないのだ。

「あなたがたは、お部屋のあとかたづけをしておいてね。私は、このかわいいめす犬さんを洗いにいくから」

シコは、四人の女奴隷にいった。

「わかってるわよ。一階のプールで、またこっそりといじめるんでしょう」

A子が、笑いながらいった。

近視のほそい目が、だまっただまま、笑いかえした。

「さあ、おいで」

シコは、はずみをつけて、首輪の鎖をひっぱった。同時に、右手に持っているムチで、美香のしりを、こんどは軽くたたいた。

「おねがいです」

四つん這いのまま、美香はあえいだ。

「なアに？」

「さっきぬいだものを、はかせて」

羞恥に、美香の首すじは赤くなった。

「フフフ……」と、シコは笑って「どうせ、一階のプールへいったらぬぐのよ。わざわざはくことないわ」

突っぱなすように、いった。

「いやです、いやです。こんな格好で廊下をあるくのはいやです、恥ずかしい！」

美香は、犬がチンチンをするように身を起こし、顔を左右にふりながら泣きさげんだ。

「そんなに大げさに泣くことはないわ。どんな格好をしてあるいても、だれに見られるわけでもないのに」

シコは冷笑した。

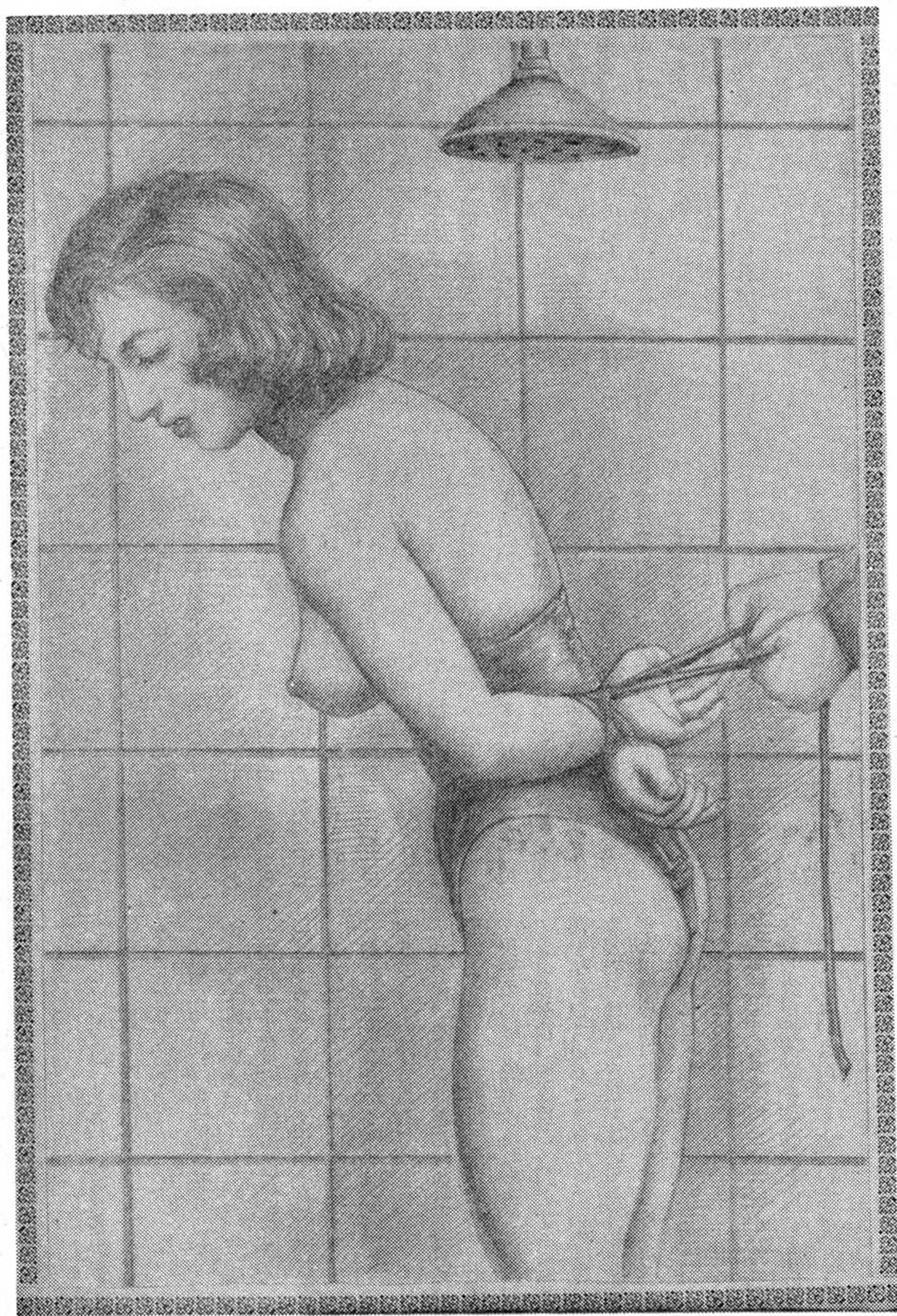
「だれに見られなくても、私はいやです。あなたがたとはちがいます。私は高宮家の娘です！」

首をしめつけている鉄枷や鎖にひるまず、美香は胸を張った。愛らしいふたつの乳房がこのとき、ぷるんとふるえた。

あなたがたとはちがいます——という一語が、シコの神経を、カミソリのように傷つけた。

手にしている金属製のするどいムチで、たしかに品のいい、美しく盛りあがっているその乳房を、かたちの変わるまで突きなぶってやりたい衝動に、シコはかられた。

しかし、シコはその怒りを自分の胸のなか



でねじ伏せた。

「フフフ……。恥ずかしがっているうちが、花なのよ。あなたに、まだ人間の感情が残っている証拠よ」

「おねがいです、はかせて」

「うるさいわねえ。おだまり。だまらないうと箝口具をはめるわよ」

「もう、ゆるして。美香を、これ以上いじめないで」

美香は、両手を合わせ、身をもんで哀願をつづける。

「しようがない。やっぱり、箝口具だわ」

シコは、ジャンパーのポケットから、れいの舌ばさみ箝口具を取り出した。そして、その奇怪な道具を、美香の顔の前で、ぶらんぶらんさせた。

「ゆるしてッ」

美香は、身をのけぞらした。シコは、のしかかるようにして、美香の口に、その箝口具をはめた。

「おねがいです、もう、しゃべりません」

美香は手をあげて抵抗しかけたが、金属ムチで、はげしくしりを五度ばかりたたかれると、悲鳴をあげて、あばれるのをやめた。

「さあ、口をあけて」

「……………」

「また、おしりをたたかれないのかい」

美香は、目をとじ、口をあけた。

「舌をおだし。ながくだしてね」

「う、う、わ、わ、わ……」

舌の上下に、ほそい皮のベルトがくいこんだ。美香は沈黙した。

「フフフ……。やっと、おとなしくなったわね。それでいいのよ。さあ、そのくさいからだを、洗いにいきましようね。あなたは、しずかにしていればいいのよ。なんにも心配はいらないの。私のいうとおりにしていればいいのよ」

シコは、金属ムチで、軽く美香のしりをたたきながら、黒い部屋をあとにした。

美香は、よちよちあるきで廊下にでた。美香の両足首は、鉄枷をはめられたままでありその鉄枷のあいだには、長さ二十センチばかりの鎖がつながっている。ふつうの歩幅ではあるけないのだ。

しかし、たとえ鎖が無くとも、美香の歩行は、下半身に一片もまもっていない恥ずかしさのために、不自由なあるきかたしかでできないであろう。

美香は、まるいしりを左右にふりながら、廊下をあるいた。昇降機のドアの前までくると、シコが首輪の鎖をひいて、美香の足を停

止させた。

「さあ、のりなさい」

あかるいクリーム色にぬられた昇降機は、ボタンを押すと、軽いうなり声をあげて、すうッとおりていく。

一階についた。昇降機をおりると、廊下を左にすすんでいく。

温湯プールは、一階の北側にあった。

「こっちよ。さあ、ぐずぐずしないで」

ドアをあけると、脱衣室であった。

美香の肌にまといついているのは、いまはブラジャーだけである。

ついに、それをはぎとられた。魂のない人形のように、無抵抗だった。

美香の心は、完全にうちのめされていた。

シコの手は、脱衣室の一隅にある小さな戸棚をひらいていた。そこには、蛇のようにくねった、ほそい皮紐がはいっている。皮でできた、精巧な搾衣がしまっているのだ。

美香をここへつれてきたのは、単に、からだを洗うためではなかった。ほそい皮紐で美香の両腕をうしろ手に縛りあげ、その上に、なめし皮の搾衣をきせて、このプールのなかに浸そうという計画だったのである……。

さんねんで くやしくて 怒りたくなる話

私の「パノラマ島秘譚」は、残念ながら、この五回目で、本誌上から消えさせていた

その理由は、自分の書きたいことを、このごろ、書かせてくれなくなったからである。これでは、私の創作意欲は減退する。仕方のないことだ。

私は、いわゆるサド小説は、まぎれもなく女性讃美の小説だと思っている。女体讃美といってもいい。女性が憎いから、女性をいじめる物語を書いているわけでは、けっしてない。これは、私の作品を読んでくださる読者のかただって、同じことだ（と思う）。

女性が好きで好きでたまらないから、私はこういう小説を書くのだ。きらいなものを、こんなにも執拗に、熱っぽく書くバカもいない。尊敬し、恋慕してやまない女性に対する愛情のひとつの表現が、私の「パノラマ島」なのだ。

しかし、世の中の、うすっぺらな脳ミソし

かもたない連中は、女をいじめる小説を書く、と、やれ、むごたらしいとか、女性を蔑視しているとか、そんなくだらないことをいって弾圧しようとしている。

私が「パノラマ島秘譚」の第二回目を発表したあとだ。編集部から、こんなことをいつてきた。

「そのスジからの達しにより、今後『パノラマ島』に登場する人物は、全裸にしないでもらいたい。とにかく原稿紙のなかに『裸』という文字を使わないでもらいたい。『裸』という字だけではなく『乳房』という字もいけない。『太腿』なんて字もいけない。男と女が接近する描写は、なるべくかんたんに、そしてみじかく——なにしろ『パノラマ島』は全編これ責めの連続だから……」など、など、である。

これでは、とうてい書けやしない。むろんこの注文は、編集部の意志ではなく、だれかが、圧力をかけているにちがいない。

この言論表現の自由を保証されている民主主義の時代に、そんなことはウソだろうと思うが、実際にそうなのだから仕方がない。

編集部が立場にしても、読者のよろこぶものをたくさん掲載できれば、雑誌だってよくに売れるだろうから「パノラマ島」をやめ

たくない気持ちは、編集部がいちばん強いと思う。

しかし「パノラマ島」のなかに、なるべく男性（すなわち主人公のQ）を登場させないでくれ、女に手をふれさせるな、などと制限を多くされては、とうてい、書く気になれない。編集部では、こんなことをいう。

「私たちは絶対にこの雑誌を永続させます。この雑誌をあと十年、二十年と続けるための方針ですから、どうか協力してください」

その気持ちもわかるし、賢明な方針だとも思うが、作品を書いている私の気持ち、この制限ばかり多くては、どうもすすまない。そこで、今回を限りに、筆を折った次第である。

しかし、本当をいうと、私はけっして筆を折ったわけではない。「パノラマ島秘譚」はこれから絶対に書きつづける。そして、雑誌は目立つからいけないというのなら、単行本にしてだそうと思う。

もちろん、さし絵は中川彩子画伯におねがいして、豪華な一冊の本に完成したいと計画している。これは近い将来に実現させる。読者の本当の批判はそのときにききたい。

北園透一朗

SM映画でありながらSM主義の感覚とは

ちょっとちがったくやしい映画だった

しかし投げかけた波紋は大きい……

『白日夢』におけるSM性

藤 見 郁

この映画の冒頭に、いきなり、こんな文字が、ずらずらッと出てくる。

「白日夢」の映画化に寄せて 谷崎潤一郎

武智君が「白日夢」の上演許可を求めて来たのは、たしか今から十年くらい以前の事であった。最初はオペラ化するやうな話だったが、後にはミュージカルにしようかなどと、色々迷っている様子だった。

その結果が今度の映画化となったもので、そこへ辿り着くまでの武智君の創造の苦しみと言うか、芸術家精神の屈折が、私には手に取るやうに判る気がする。

私が此の作品を創作した頃は、検閲その他の政治的、社会的制約が強く、その為、思ふ存分に書く事が出来なかった面も多い。武智君のシナリオは、その点、今の私なら恐らくかう書いたであらうと思うくらい、完璧な出来栄である。

主演女優の路加奈子君にも会ったが、私のイメージそっくりの人で、さぞ美しい画面を見せてくれる事と思ふ。

この字幕が終わると、いよいよ武智鉄二脚色・監督のモンダイの映画「白日夢」がはじまる。

歯科医の治療椅子に腰かけ、口を、というよりは、顔全体を医師の意志にゆだねられてしまふ女というものは、なるほど、マゾヒスティックな眺めである。

むろん映画は、そこに焦点を合わせて強調する。

若い女（路加奈子）の唇の接写、医師（花川蝶十郎）の指がその唇をおしひらく描写、また、苦痛にゆがんだ女の口から、よだれがだらだら流れたすアップなど、多分にエロチシズムの効果が計算されている。

医師が、治療具の細い金属製の管から、水



を勢いよくほとばしらせて女の口腔内を洗滌する描写などは、これでもかこれでもかとばかりしつっこく繰り返され、どうしても観客になにかを暗示させる。

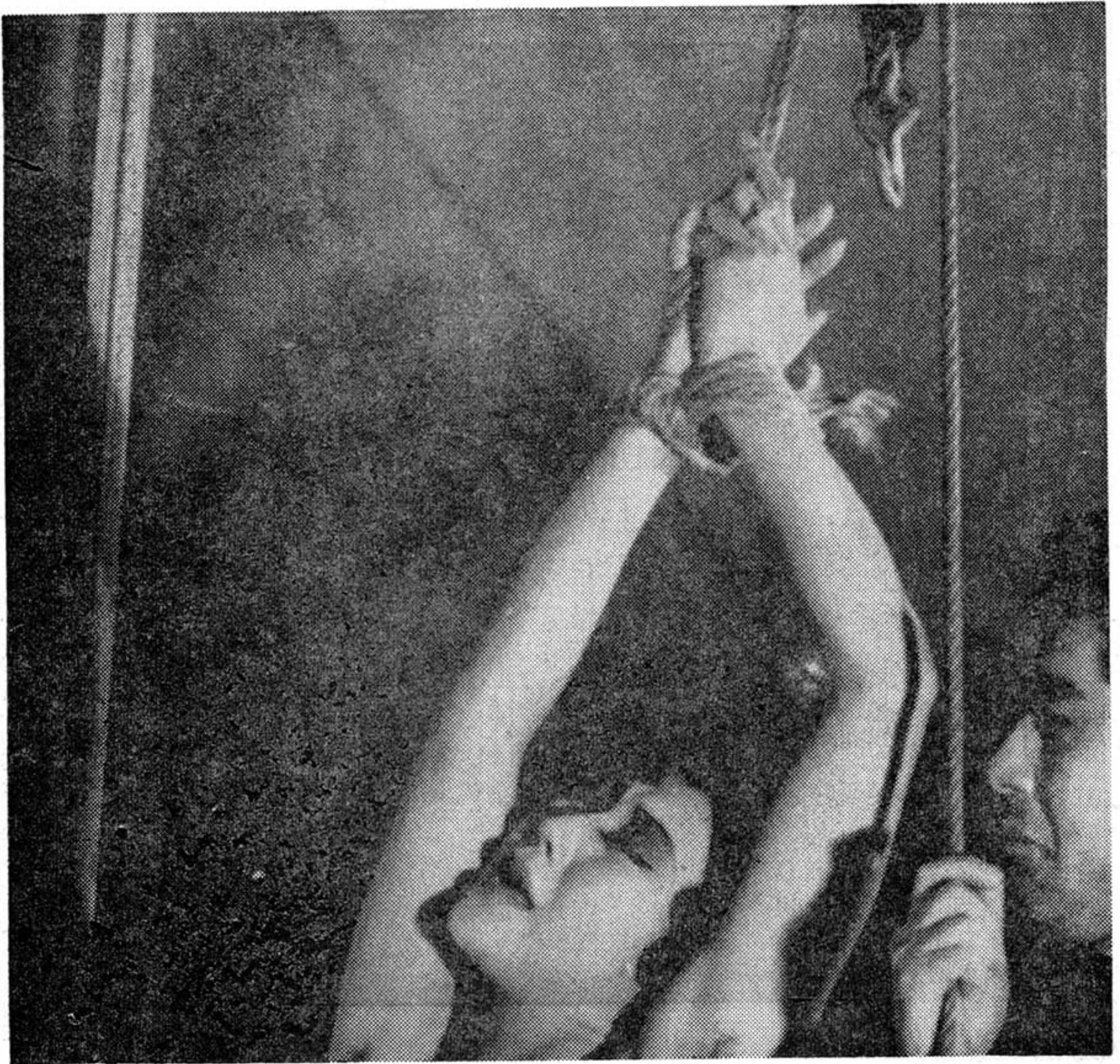
女はクロフォルムのしみこんだガーズを鼻の上にのせられ、意識を失ってしまふ。

この女の患者のとなり、やはり患者の青年（石浜朗）が腰かけて歯を抜かれる。青年は、待合室にいるときから、美しい女の患者のことが意識にあって、ちらちら盗み見ていたのだが、歯を抜かれたとたん、失心してしまふ。「白日夢」とは、つまりこの青年が、モウロウとした意識の最中にみた、幻覚というわけ。

さて、白日夢がはじまる。長ッたらしくてなにか意味がありそうで、そのくせたいして無さそうなナイトクラブの場面なんかが、およそ二十分ほどもつづいてようやくお目当ての、ホテルの一室における、医師と女の、アブ・シーンにたどりつく。

医師は女にむかって、こんなことをいう。

「さあ、今夜は何をして遊ぼうね。うん可愛い腕だ。この腕を縄でしばってみた



ら、どんなだろうね。どんなに深く縄が君のからだにくいこむことか」

などといいながら、縄を取り出すが、だい

ぶ使い古された縄で、これは演出上の計算かそれとも、そのへんに散らばっていた実用上の縄を使ったものが、この道の人間なら、注目したくなるような、手ずれた縄である。

「君の腕だけじゃない。この縄は、君の心臓も、子宮も、粘膜も……あらゆる器官をしめあげ、悶絶させる縄なのだよ。さあ、手首をおだし……」

子宮も粘膜もしめあげて悶絶させる、なんてセリフは、なかなか泣かせるけど、実際に医師が縛るのは、かんたんな前手縛りで、とても粘膜まではしめあがらない。

この前手縛りが、えんえんとつづいて、縛り責めシーンの時間的長さでは、古今東西を通じて、ナンバーワンにはちがいないが、ドラマとしては、きわめて単調である。

第一、この長い責めシーンのなかで、うしろ手縛りが一度もないということは、致命的ともいえる。

前手縛りなら刺激が弱く、うしろ手縛りは刺激がつよい、だから「うるさい方面」への対応策として前手縛りばかりの演技をつけさせた、というのなら、それは、弁解にすぎな

い。あとにでてくる「電流責め」にくらべたら、うしろ手縛りの刺激性なんか、軽いものである。

考察するに、つまるところ、武智先生には「縄」および「うしろ手」のデリケートな魅力を感じる神経が、ほとんど無い、ということではなからうか。

しかし、断わっておくが「縛り」の感受性はなくとも、武智先生には「責め」の感覚はたしかにありなされる。

ここで「責め」と「縛り」の違いを、ことこまかく書きつらねる意志はないが、デリケートな差異ながらも、この両者のあいだにははっきりと引かれているということを、心か



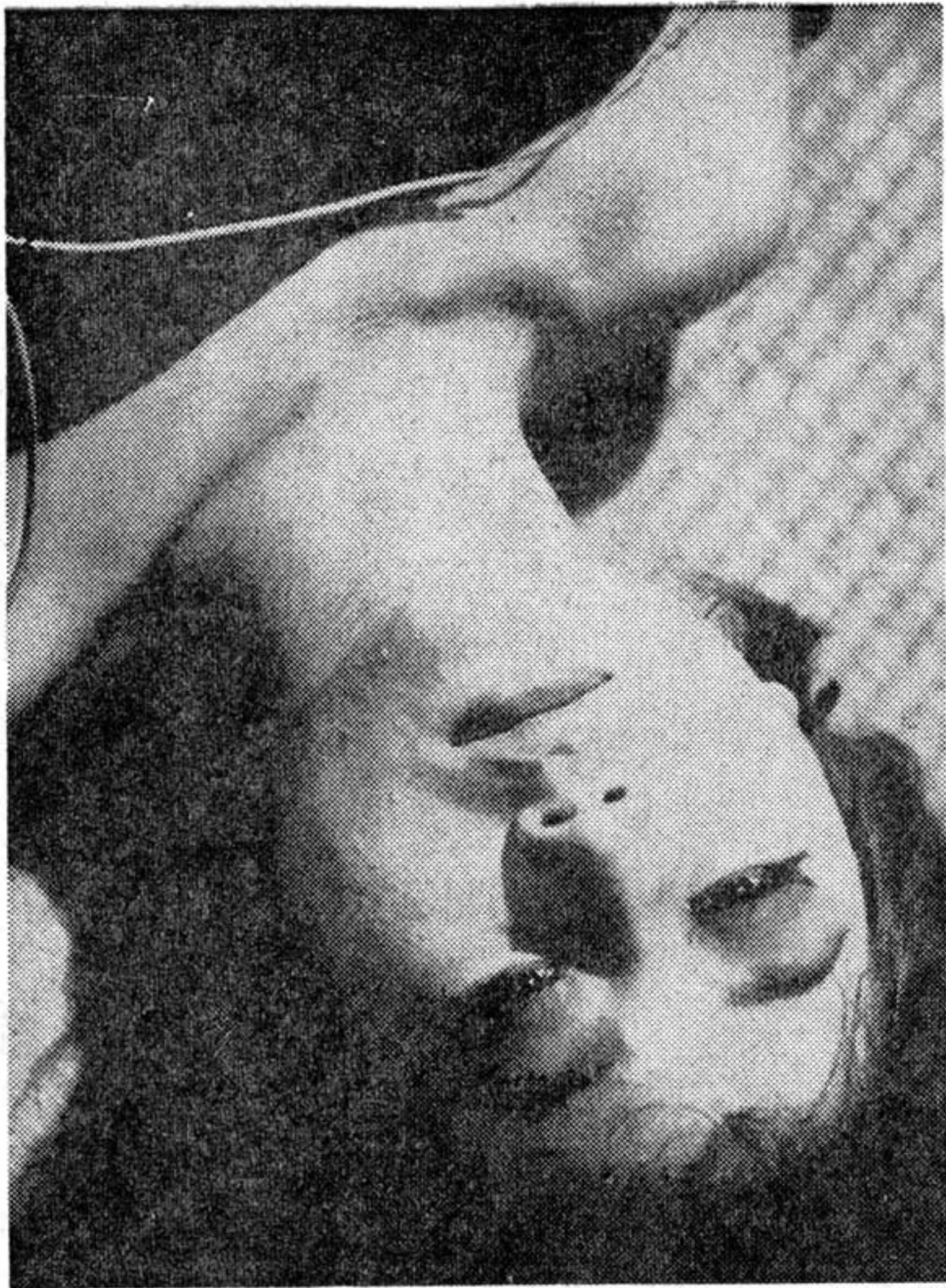
ら武智先生に訴えたい。(じつは去年の夏の
新橋演舞場における「青山播磨」のときにも
武智先生には、あらっほい「責め」はあつて
も、優美でデリケートな「縛り」は無い、と
痛切に感じた)

それはともかく、医師と女が、いわば馴れ
合いの情痴として責めごっこをやっているの
を、追跡してきた青年が、ガラス戸の外から

眺める。

青年の目には、室内の光景が、ものすごく
ショッキングにみえるわけである。局外者す
なわち第三者の目からみた、医師と女の、馴
れ合いの遊戯ではない、真剣で残酷なたたか
いが描写される。

女がいやがるのを、医師がむりやりに縄で
縛ろうとしている光景。女は必死に抵抗する



が、ついに縛られ、天井の梁から吊るされて
しまう。(同じ場面が二度うつるわけだが、
演出が混沌としているので、観客の頭のほう
もコントンとする)

青年は見ていてあせり、女を助けようとす
るが、ガラス戸にさえぎられて、室内にはい
れない。

医師は、梁に両手首を吊るした女の、黒い
スリッパや、ブラジャーの紐を、手術用のメ
スで切り落とす。女の苦悶の顔のアップ。い
や、苦悶ではなく、恍惚の表情なのかもしれ
ない。

ブラジャーを切られて、乳房があらわれ、
乳首がちらつとのぞくところは、なかなかい
い。

このあと、女を縛ったまま座卓の上に、あ
おむけに倒したり、縄を引っぱって苦しめた
りする。

路加奈子は、表情をせいっぱい変化させ
身をのけぞらせ「ア、ア、ア……」という、
うめき声、あえぎ声、泣き声、あるいは恍惚
陶酔の声を連続させて大熱演である。

つぎに、電流責めをやる。

「さあ、今度は電流遊びをしようね。弱い電
気を君のからだの中へ通す。そうして次第に
強くしていく。君が刺激と快楽の中で、気

をやるまで続けようね」

などと、きわどいセリフをいいながら、医師は電気スタンドのコードをひきぬき、変圧器をさしこむ。

スタンドのコードをひきちぎり、メスでコードの先のゴムを切りとって、針金を露出させる。そして、女の左右の腕にその針金を巻きつけて、変圧器に電線をさしこむ。女は上半身裸である。

苦悶がはじまる。身をくねらせ、のけぞらせて「アッ、アッ、アッ」という悲鳴をあげてのけぞる女。その表情がなんともなんとも大写しになって、絶叫悩乱がつづく。

このときに、ただ「アッ、アッ、アッ」だけではなく、もっとはっきりしたセリフをいれたらどうか、とも思うが、それを挿入すると、完全にアノときの女性の状態になってしまうので、直接視覚と聴覚に訴える映画としては、とうてい無理なことであろう。

シナリオには、しかし、こんなふうに書かれている。

——歓喜の絶頂に至る千枝子。
変圧器。



医師の顔。

千枝子の顔。

千枝子、ついに射精して、失心する。

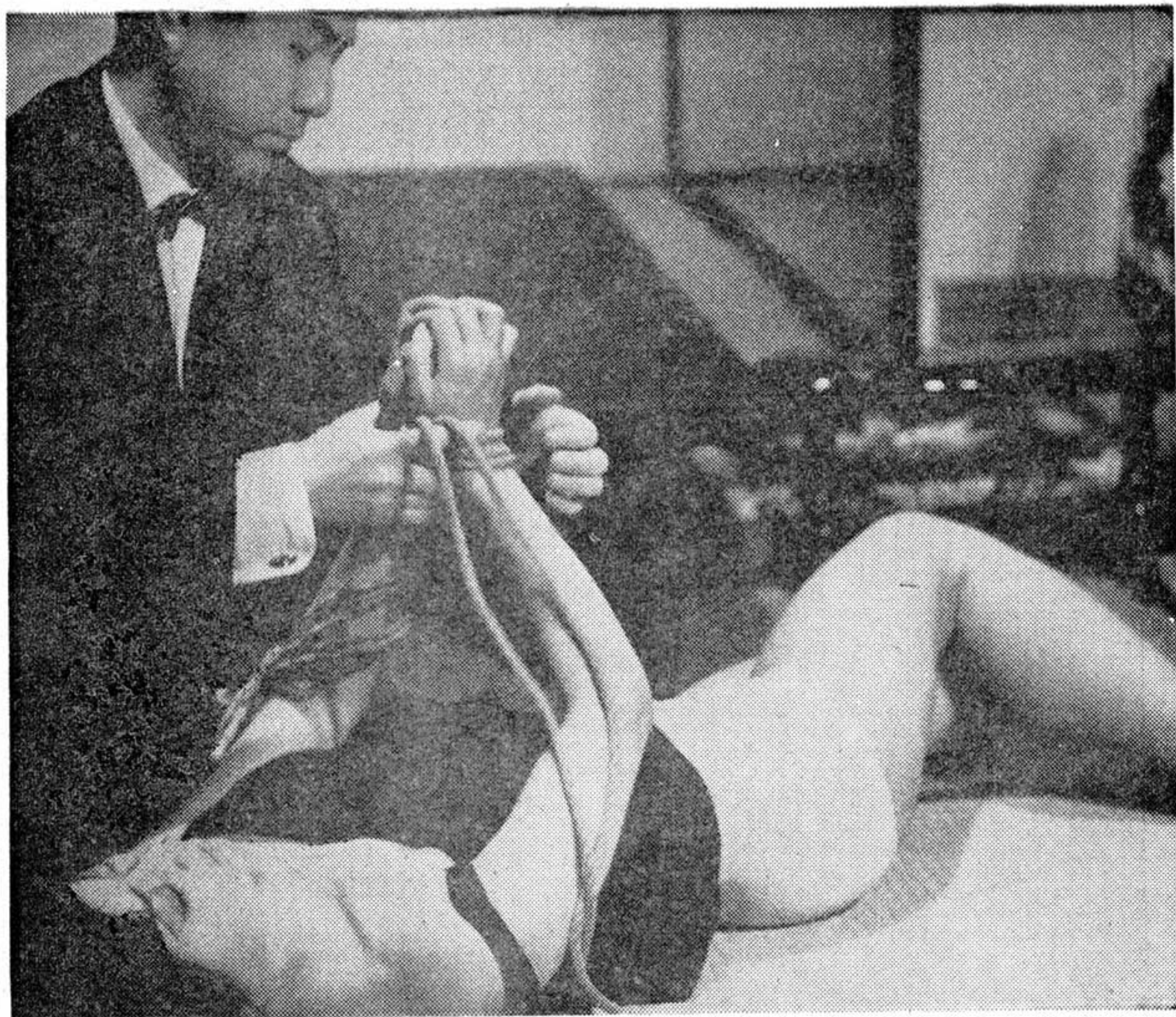
この、女が「射精して失心する」場面は、

おもに路加奈子の表情の変化で表現されるわけである。

つまり、この映画におけるSMシーンは、なんの遠慮も気がねもなく、きわめて明快に直接エロチシズムとつながっているのだ。

医師は、失心した女をベッドの上にねかせて、意味ありげな微笑をうかべながら、上着





をぬぐ。なんのために上着をぬぐのか、たい
ていの観客にはわかるような顔でぬぐ。

場面は移って、夜の街路のシーンとなる。

まっ黒な道で、このシーンだけが突如とし
て、カラーになる。青年のうしろ姿がうつ
ている。むこうのほうに女の姿があつて、だ
んだん手前へ歩いてくる。

女は素肌の上に、スーツを着ている。どん
どん近づいてきて、女と青年は向かい合つて
立つ。

青年は、しずかに女に手をさしのべる。女
も両手をさしのべる。二人の指さきが触れ合
ったとき、女の白い胸から、まっ赤な血が流
れはじめる。ふくよかな女の胸から溢れる鮮
血。つまり、このシーンだけにカラーを使つ
たのは、この血の色をだしたかったのだと判
明する。

武智先生は、たしかに「縛り」よりも、白
い肌から流れる「血」のほうがお好きなよう
である。去年の「青山播磨」のときにも、い
ちじるしくそれを感じたが、今回の映画で、
それを確認した。

この街頭のシーンで、なんのために女の胸
からいきなり血が流れるのか、そのへんの理
由はわからない。なにしろ「白日夢」である
から、万象は非論理的に飛躍する。こういう



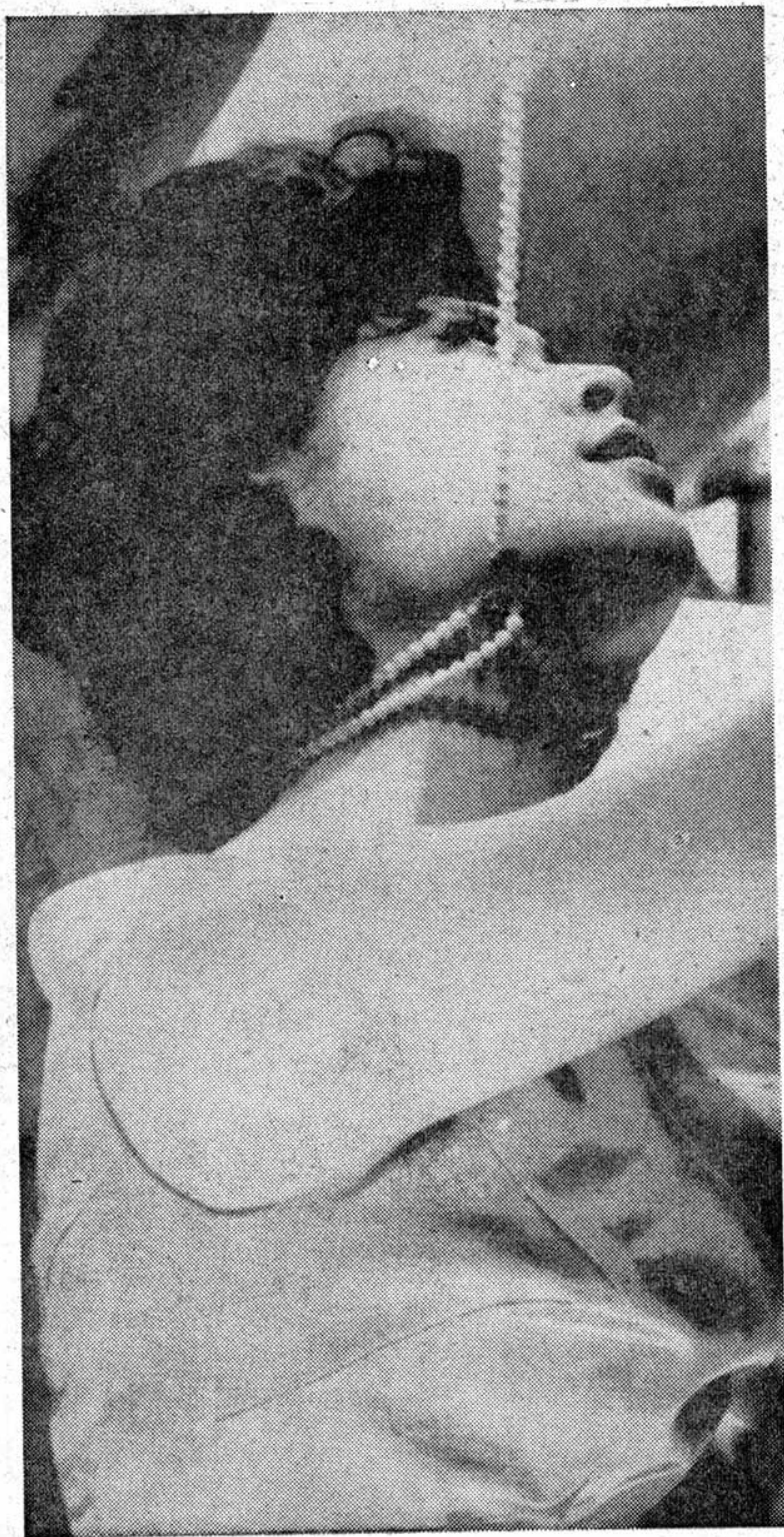
演出から、なにか複雑な、悠遠な哲学を汲みとろうと努力することは、私ごととき平板な頭脳では、どうやら無駄らしい。

さて、つぎは、これもいきなり、デパートの（日本橋の三越らしい）屋上になる。

猿がうつる。同時に、長い真珠の首飾りをした女（むろんヒロイン）が、コンクリート製の遊戯台の穴のなかへ猿みたいにもぐってしまつて、なかなか出てこない。

青年がその真珠のネックレスの一端をにぎって引っぱり「出てこい、出てこい」と呼ぶが、女は四つん這いになつて抵抗する。このへんもS的效果をねらっていることは、だいたいわかる。最後に、本物の猿が、人間の声で「アハハハ」と哄笑して、この場面はおしまい。このシーンにも、なにか人間と今日の歪んだ社会の現象を暗示した鋭い風刺が、きつと表現されているのだろうが、無知モウマイな観客にはなにがなんだか、さっぱりわからない。

つぎに、真夜中のデパートという場



面に変わる。

だれもない楽器売り場で、路加奈子嬢が「深夜のデパート」という歌をうたうが、このシーンも、おそろしく冗長で、一生けんめい見ていると腋の下にあぶら汗がにじみでてくる。

ここにまた医師が出てきて、女を追いかける。ワンピースを裂いてぬがせ、スリッパ一枚にしてしまう。

女は、停止しているエスカレーターを駆けおりて逃げようとするが、あと二、三段でおりきるとき、医師が上でスイッチをいれる。エスカレーターは回転をはじめ。

夢中で無限軌道をかけおりる女。ハイヒールのかかとがはさまってぬげる。女は、はだして駆けおりるが、エスカレーターの回転が早くて、なかなか下までおりきれない。

ついには、エスカレーターの上に腹這いになってあえぐ。それを上から、ひややかに見おろしている医師。このシーンがまた、しつこく、えんえんとつづく。とにかく長い。

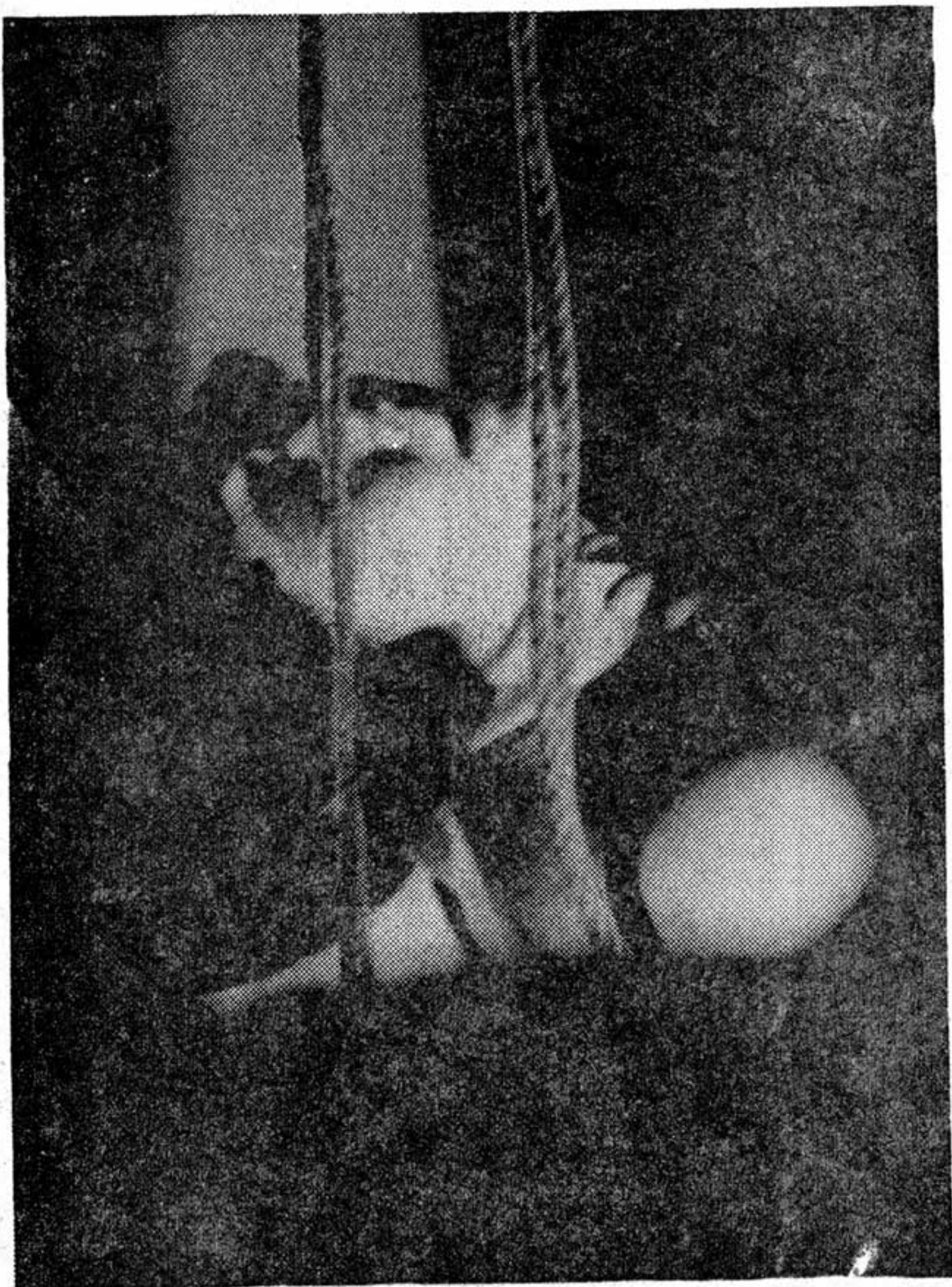
エスカレーターをのぼったりおりたりする女の描写なんて、どんな角度から撮ったってたかが知れているのに、それをえんえんと、悪くいえば、だらだらと繰り返し撮りつづけるのである。

路加奈子嬢は文字どおり体当たりの大熱演で、肌もあらわ、髪をふりみだして、あのギザギザした金属製のエスカレーターの上で、苦悶の演技を数分間も連続する。さぞかし、スリ傷や切り傷がたくさんできただろうと思う。



この場面なんかが、つまり、武智流サディズムの見せ場なのだろうと想像する。

エスカレーターの上で冷笑するサディストと、回転する金属板のまんなかにはさまってのたちまわるマゾヒストの対照は、やはりSMの関係であり、それ以外の何物でもないであろう。



しかし、本誌「裏窓」数万の読者のうちおよそ九十パーセントまでは、この武智流SMとは、いささか、おもむきを異にする感覚の持ち主だろうと想像する。

たくさんお金をかけた一編の長編劇映画のなかで、これだけ大胆なSMイズムを披露しながら、かんじんのキメ手、カンドコロに欠けたということは、ひとこととは思えず、残念で残念でたまらない。

ホンモノのSM主義者のカンドコロと、SMにはとりわけ縁のない、いわゆる一般大衆観客（というのも妙だが）の心をとらえるカンドコロとは、そう違いのあるものではないのだ。なにしろ、同じ六感器官を持つ人間なのだから。

だから、このSM映画（と呼ばして頂ければ）を、いっそうピリッと、ワサビのきいたものにするには、クライマックスにおけるSMシーンのカンドコロを、もう一步

確実に演出しなければいけないのである。

断わっておくが、そのピリッとした演出というのは、けっして裸女がマタをひらいたり男がのしかかったり、へんな声をあげたり、つまり当局が忌避する性質のものでは、絶対ない。

ベッドシーンに関係なく、肌の露出に関係なく、煽情的な声やセリフに関係なく、それらとは無縁のところで、真のSM感覚は十分に描写でき得るのである。

同じシーンの描写を、どんなに長くつづけても、カンドコロさえ命中していれば、けっして冗慢な印象を、観客にあたえることはないのだ。

さて、映画は終局近く、いよいよ路加奈子嬢の全裸シーンとなる。

数年前、新東宝まだ存命のころ、前田通子という女優が、裾をまくれ、まくらぬの事件でクビになったけど、裾まくりどころのさわざぎではない。こっちはさっさと脱いでデパートじゅうを全裸であるき、または馳けまわり階段をころげまわり、コンクリートのゆかに素肌をこすりつけて、のたうちまわるのである。まことにいさぎよく、勇敢なお嬢さんである。

さて、デパートのシーンも終わり、青年は



女を殺してしまう。ここでまた血が流れる。
青年は、自分が殺した女の上に折り重なって泣き伏すが、このとき、ようやく白日夢からさめる。そして、もとの歯科医の治療室になるのである。

女は、さきに治療を終えて、医師の家の玄関を出ていく。女が去った治療台の下に、白



いハンカチが落ちている。

それをみた青年は「あの女の人のものでしょう、ほくがとどけます」といって、歯科医をとびだしていく。

街頭では、その女が自家用車を走らせようとしている。青年は近づいていて、ハンカチを渡す。

女は「ありがとう、お乗りになりました」と誘い、青年はこのこと乗りこむ。

車は、街なかを軽快にすべりだし、ザ・エンドという次第で、終わると正直、ホッとして、生理的解放感が味わえる。

まことに、長い「白日夢」なのであった。

この映画を、より純粹(?)に、より高邁に観賞したいという方のために武智先生の演出意図なる文章を引用さ

せて頂くと――

『性の問題などと簡単に言うけれど、これには、フロイト以後の深層心理学の業績の蓄積と、より大きい未探究の部分とがある。これにメスを入れることは、現代芸術家に課せられた最大の責務の一つだと思う。』

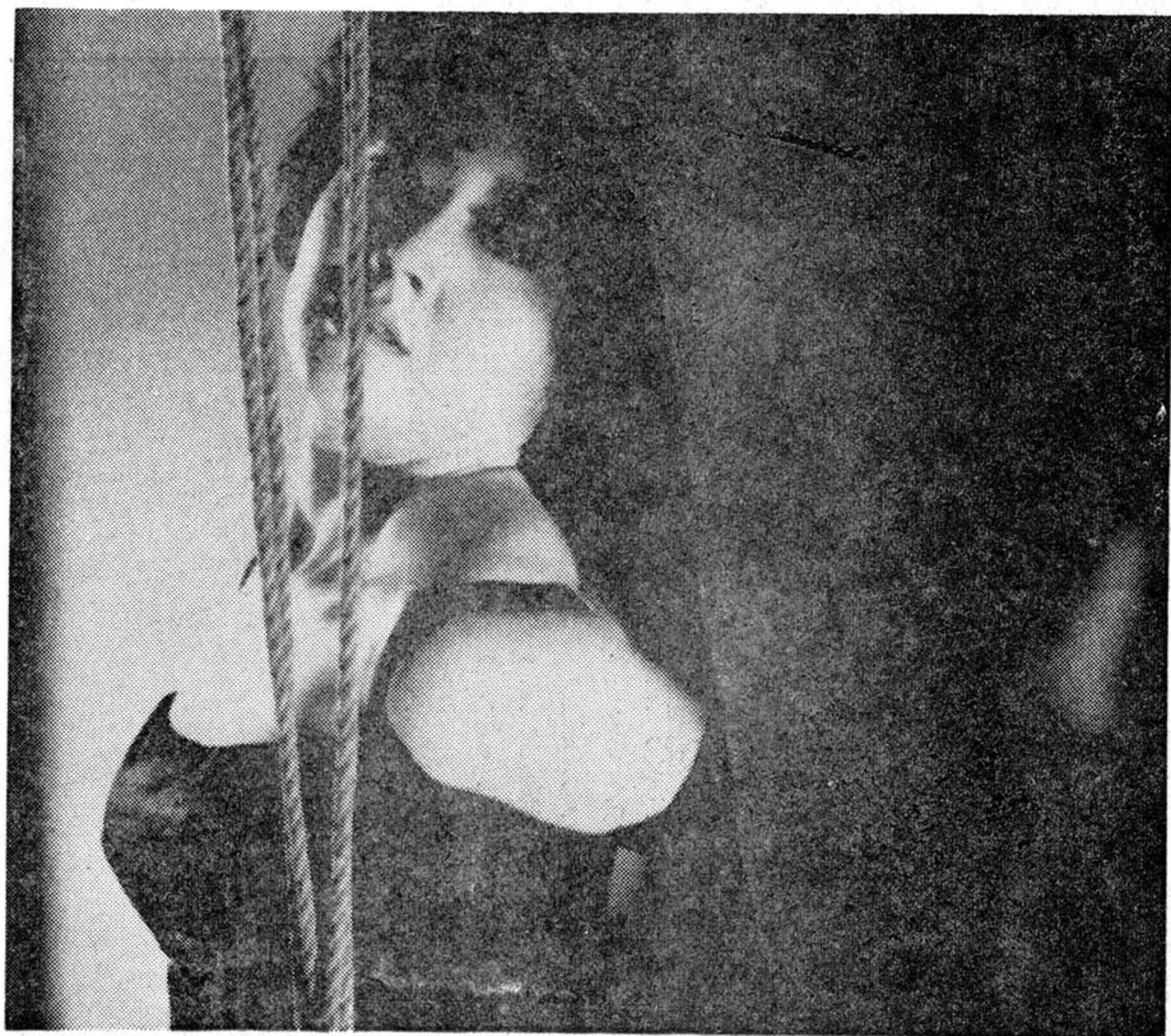
しかし、この「白日夢」では、単純に性の問題のみをあつかうものではない。裸身の女性性は人間性を象徴し、悪魔的な医師は社会制度の悪をあらわす。青年と裸女との純粹な愛情の交流は、常に医師によって妨げられるがそれは圧殺されて行く人間の悲歌でもある。

人気のないナイトクラブの並列した卓や、巨大な建物は、社会の人間への圧迫を視覚化する。そうして、白昼の銀座の殺人さえ、道行く人の関心をかわないのである。

私は前衛映画を作るつもりではない。しかし、私が舞台前衛芸術でなく果して来た歴史は、この映画にも必然的に反映するとおもふ。その新手法を私は仮に「実存状況」と呼びたい』

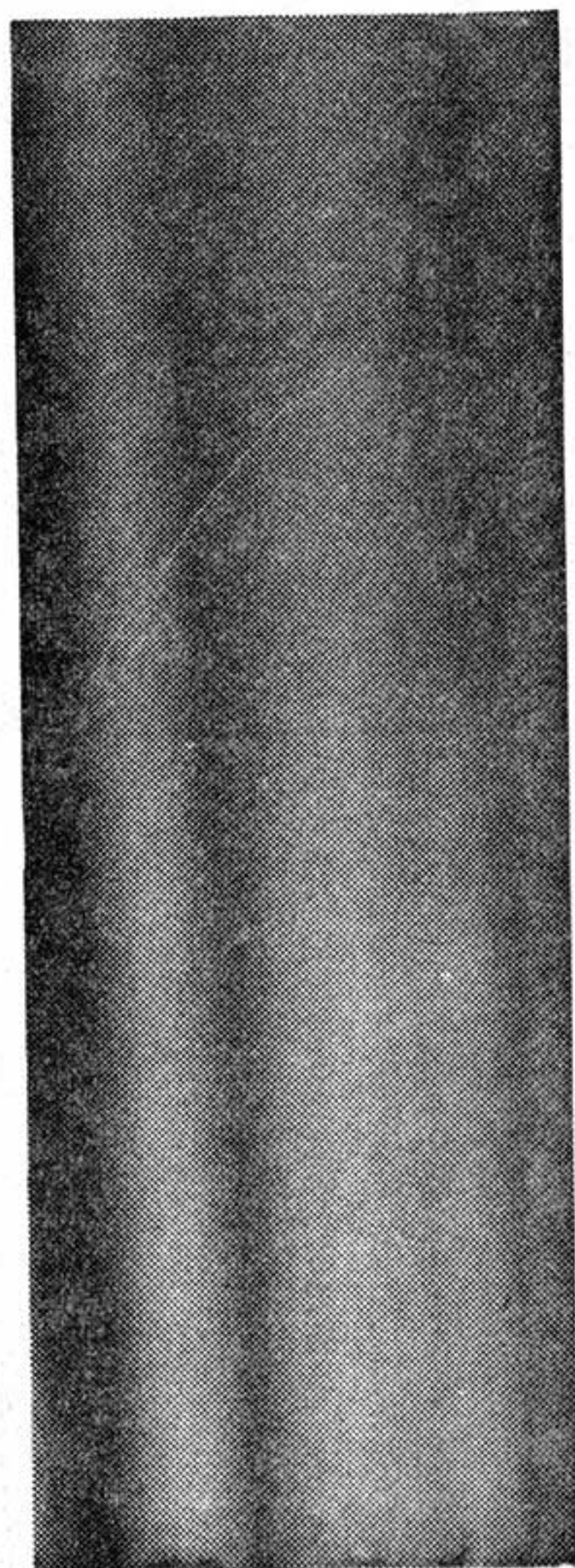
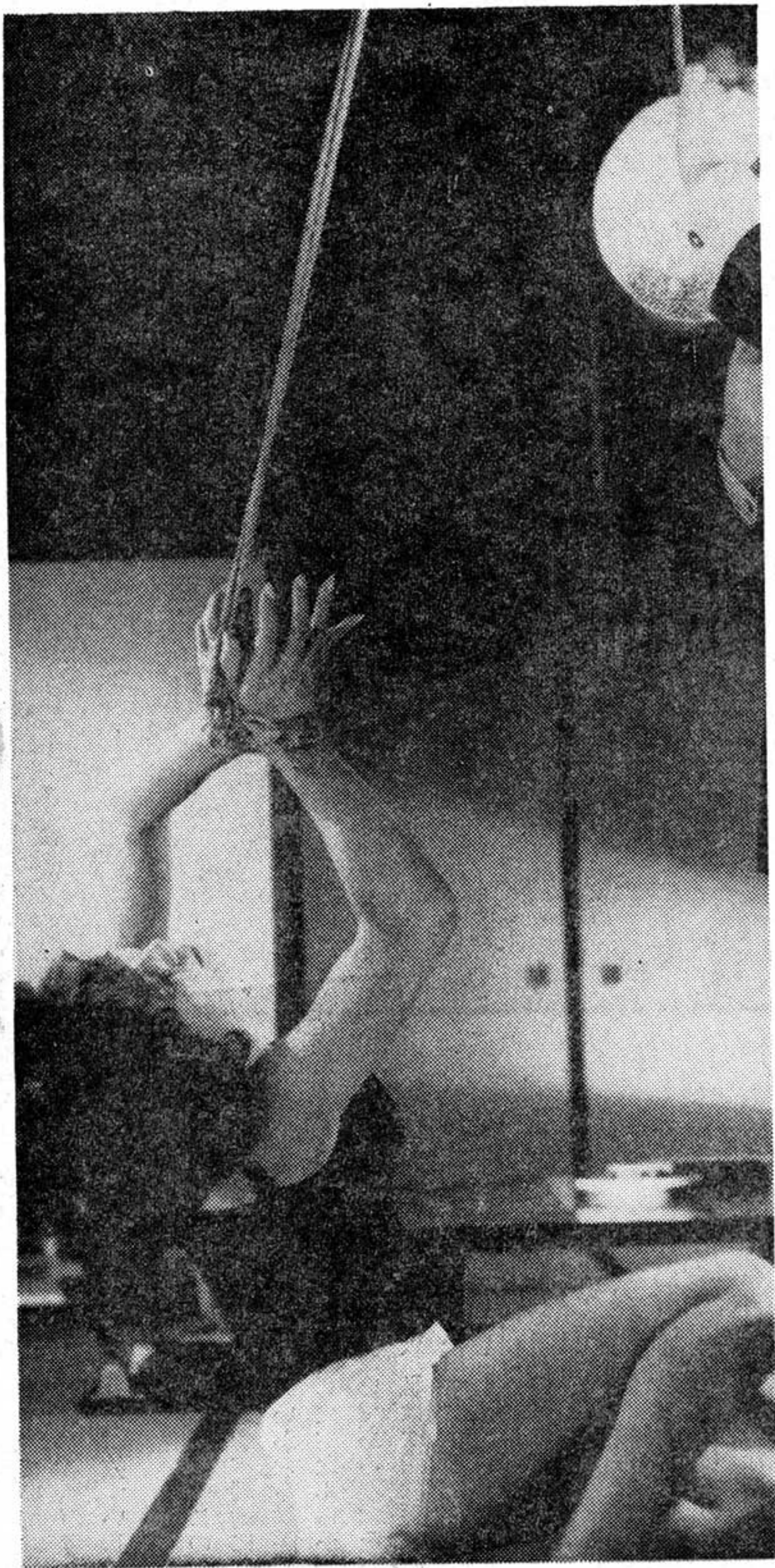
という次第である。

前衛映画であろうと実存状況であろうと、この「白日夢」が人間のSM感覚に迎合していることはまちがいないし、それはそれで、きわめて現代的な、立派な仕事だと思う。



とにかく、一億円の金をかけて作った映画
(松竹「香華」)よりも、一千五百万円かけ
ただけの映画のほうが、二倍の興行成績をあ
げたという事実は、それだけの観客動員をし
たという結果であり、やはり一種の驚異に価
いするのである。

「週刊大衆」の七月二十三日号は「渦中の人





の特別手記」という特集をやっていて、武智氏は「『白日夢』の反響に対する私の考え」という一文を書いておられる。抜粋して、引用させて頂く。

「——『白日夢』の数字的成果は、この作品に対する大衆の支持と評価とを、端的に打ち出して示してくれている。いかなる批評家もこの数字の持つ意味に対して、なんらかの意思表示をなさざるを得ないであろう。それをあえてしないところに、私は映画批評家の精神の怯懦と怠慢とを見出す。

歌舞伎のときも同じ体験をなめたが、元老とか一流とかいわれる批評家ほど、芸術家精神がミイラ化してしまっている。

これには全く例外がない。彼らはここ数年来の、世界映画における画期的な世界観や、哲学内容の著しい変化を見落としている。少なくともそれらを自己の体験のなかで受けとめ、血肉化して評論する機能を喪失しているのだ。こういう不能者の批評家の面は、たまにテレビなどで見ても、虫ずが走るほど汚らしいものである。

彼らの懶惰な精神が、彼らの顔の上に美化の年輪をきざまないからである。

このような不潔な連中が、民衆の意向にそむき、保守反動の輩と手を組み、既成勢力の



上に立って、映画哲学の向上と映画芸術の前進とを妨げようとしている。

しかし、『白日夢』は、今の調子で行けばおそらく千五百万人の観客をひきつけることだろう。これは日本の成人人口（『白日夢』は成人映画に指定された）の三分の一である。日本人の三分の一が、『白日夢』の哲学に反対し、芸術性を無視するためにわざわざ映画館へ足をこぶだろうか。そんなバカな考えは想像することさえ許されない。

なにが『白日夢』を、日本人の三分の一に支持させたのだろう。

その答えは、若い、みずみずしい批評精神の持ち主が、やがて出してくれることとおもう。ただ一つたしかなことは、『白日夢』のなかには、現代人をひきつけ、共鳴させるなにかがある、ということである。

それはエロな姿態や風俗というような現象的な問題ではない。この作品が映画芸術の本

質について、よかれあしかれ、解答を示しているが、あるいはその実存哲学が真に実存的であるがゆえか、そのいずれかであるとおもう。（中略）いま、興行成績は順調にのび、封切り館だけで十億円の興行収入をあげた。この映画の上映が終わる時には、三十億の国内収入をあげることは、過去のデータにべらして、ほぼ確実である。（中略）

ひどい迫害もあった。たとえば週刊B誌が『白日夢』について、私が谷崎先生のご勘気を受けたかの如き印象をあたえる記事を書いて載せた。それがひどい中傷にもとずく「ネツ造記事」であることは、その週刊誌の発売日と同じ日に、私が次回映画作品として谷崎先生の『過酸化マンガン水の夢』を撮ることを発表したの、たちまち世間に暴露してしまった。

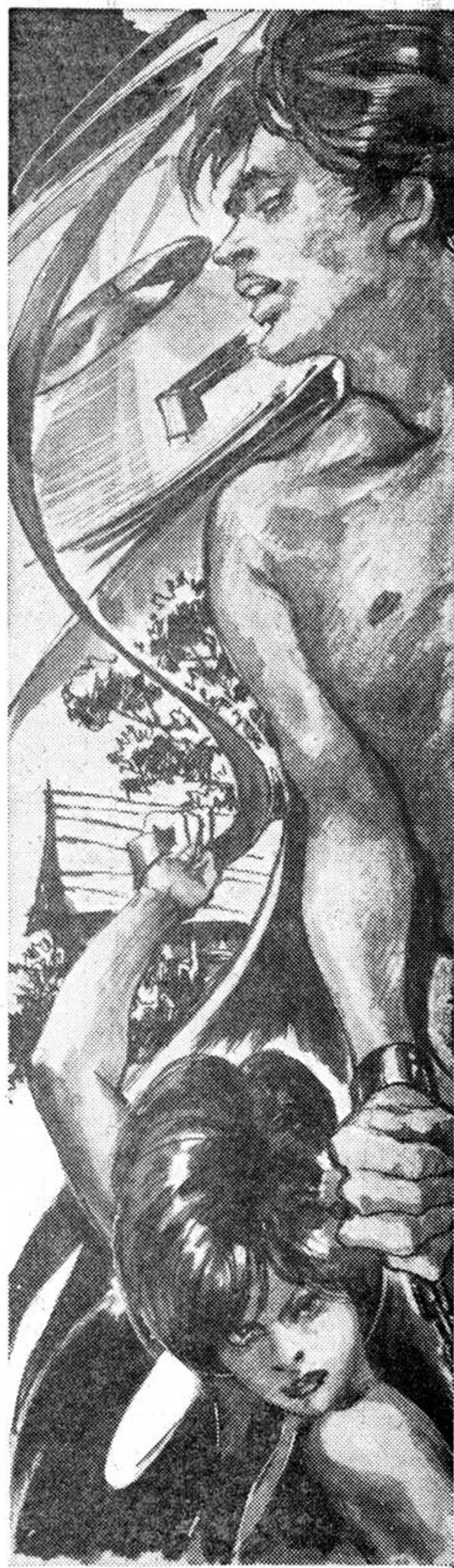
しかし、だからといって、そのような悪意ある中傷を見すこしにするべきではない。私

はなぜB誌がこんなネツ造記事をあえてのせたかを考えてみた。B誌を出しているE社は私の前の妻である西村みゆきが勤めていた社である。E社の編集長であるKは、そのことで私を非常にうらんでいる。しかし、恋のうらみをこういうウソの記事をつくることで晴らしてよいものだろうか。そんなことも考えてみた。

しかし、馬脚は間もなく、意外な方面からばれてきた。A新聞社が『白日夢』に関してある特ダネを掲載した。それはA社が某政党と手を結んで憲兵政治や国家検閲制を復活しようとしていることを、明白にうら書きするものであった。

A社とE社とは人的に深いつながりがある。私に恋のうらみを持つKは、その道具に利用されて、あの記事ネツ造をあえてしたのだった。A社とE社と政党とがどんなことをもくろんでいるか、それは今発表の限りではない。しかし、私のにぎっている真相を発表するとあるいは内閣が倒れるかも知れないくらい重大な問題である。

とにかく、千五百万人という大きい観客数は、セックスの問題が日本でも今や社会通念化したことを示している。」（以下略）
というような次第である。



■ 奢れる女神への祈り・7

シトロンの花咲く頃

森本愛造
山田彬弘絵

四十一才になるという木曾修一氏は、一九六〇年十月に最初に手紙を送って来た人物である。彼は在京三十九年、現在は名古屋近郊に住んでいるが、現在に至るまでに彼の辿った半生の記録は波瀾万丈、さながら戦国の英

雄の興隆の歴史を読む思いがする。

一人の人間の過して来たこの闘いの歴史はそれなりに有に一冊の書物ともなるべき貴重な、また興味しんしんとしたものであるが、私はわざと、その歴史についてはここでは触

れない。私はその後、しばしば彼に会った。彼はよく書き、かつ話した。

多くの場合過去を語る人は、その思い出を受する余りに、また、すでにそのなすところを終ったが故に、新しい思い出となる体験を

語らないものである。或いは、語るものがない、といった方が正しいのであろうか。

だが、木曾修一氏においては、全くそのようなことがなかった。

彼は前半生を語るナポレオン・ボナパルトのごとくに野心的であったし、十分に活力をたくわえており、すべての近づくものを食いちらし、その養分としていったのである。

彼の最初の「倒錯」との出会い、一九五九年であった。それは、近代の交響曲のように淋しく、近づいて来る頂点の暗示を断片だに示さない。最初の手紙に、彼はこう書く。

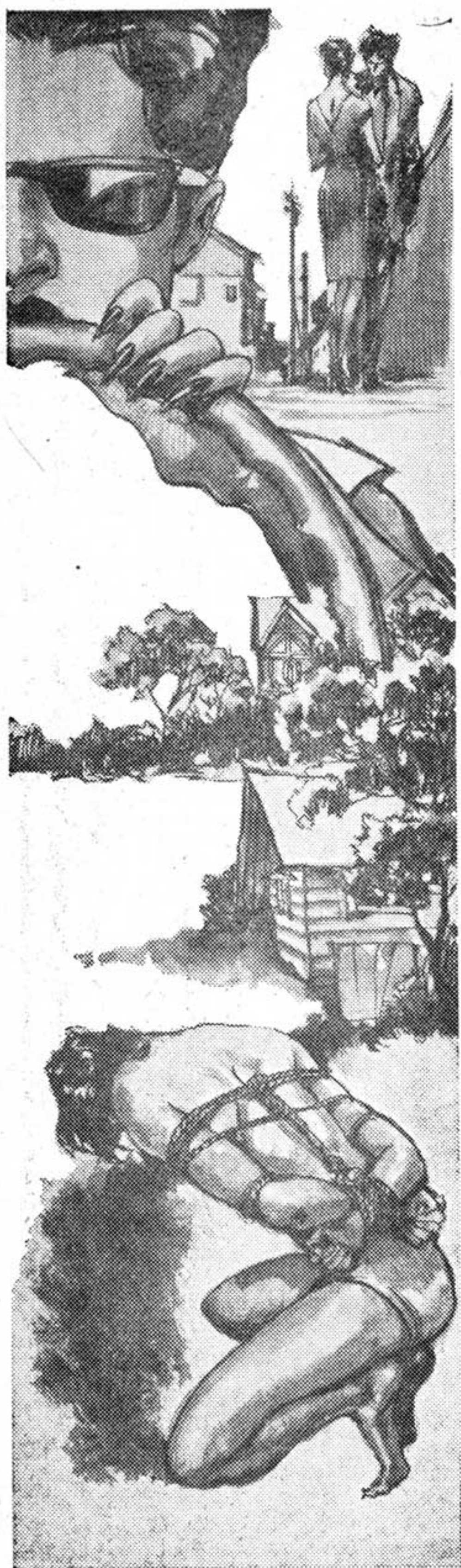
▲金に困っていた当時のぼくは、一方では普通以上に責任が重かった。ぼくには妻も子も

なかったが、養ってゆかねばならない老母と姉の遺児が居た。そのぼくには、仕事があった。貨幣と名付けられる物はぼくの家にはまず毎日のようになかった。家も、自分の家ではなかった。わずか四千円の、その家賃すら、ちゃんちゃんと支払うのには大変な努力を必要とした。

そんな有様の中で、全く金策のあてのない日、ぼくは朝早く、暗いうちに起きて日暮里に向かうのだった。千住にある血液銀行で血を売るためである。

血を売るということは、ぼく自身、そこに行ってみるまでは、非常に高額な代償があり、そして、一度売れば二度と行かないですむぐらいの報酬と苦痛があるのだと思ってい

た。買う方にしてみれば、大変な決心をしてやって来るそういう人たちにふさわしい態度をもって応対するものだと思っていた。しかし、現実には全く違っていた。そこに集って来る人達は全部金に飢えていたし、銀行側は決して血に飢えていなかった。自然、買い手は横柄になり、売り手を選ぶようになる。買い手は、売り手を並ばせ、待たせることに慣れていた。六時に銀行に到着した人達はまだ閉まっている病院（血液銀行のことを人々はそう呼ぶのである。バンクという人もある）の前に並ぶ。黙々と、それが冬の寒い朝並んでいる姿を、暗い街灯の明りが透らしているのはさながら、帝政末期のロシアの小説に出てくる、貧しい人々が食物を得ようとして並ん



ている行列のように見えた。

門は八時半になってやっと開く。順番札を配るためである。その札は、人々にとっては今は一日の収入を保証する金券である。一度散らばった行列は、九時半になるとまた番号順に形づくられる。そして、比重（血液の比重が一、〇五二以下であると採血しても商品にならないのである）を検査する係員の前に並ぶ。手首の所に太い針が刺し込まれて、約10CCの血が注射管の中に吸い込まれる。係員は検査液の中に、血の一二滴をたらす。或る者の血はすうーっと沈んでゆく。これは比重が規定以上あるという事である。だが往々血が液上に浮いてしまつて沈んでいかない者もある。その者の血は売り物にならないのである。しばしば、この係の前で、言い争いが起こる。「採れ」と売り手が言うと、買い手は「いや軽いから駄目だ」というのである。こうした争いは、普通の常識から言うとは逆である。

中には、検査用の針の刺激からてんかんを起すものがある。係員は、転倒してもがいている患者に手当てをするわけでもなく、むしろ、「採血前にわかつてよかったよ」と看護婦をかえりみて言う。てんかん患者の血は比重のない者の血と同様に売り物にはならない

のである。

一度、採血可能となるとまた行列である。今度は採血の順番を一人でも早くとうとする。ここで午前中に済んで現金を手に入れるのが十分早いかおそいかで、その日にゆける競輪や競馬のレースが減るかもしれないからだ。彼等の大部分は、そういうかけ事で金をふやそうとする。午前中をこうして血液銀行でつぶすために、彼等は就職はおろか、日雇いにゆくことさえ出来ないのである。

そうして、貴兄には想像もつかないと思うが、このようなかん難辛苦の末に手に入る現金は、何と四五〇円、頑張つて400CCの血液を一度に採られても八〇〇円から九〇〇円なのだ。もちろん、だれ一人おつりなど持っていないから、金は全部きっかり百円や五〇円玉で渡される。

少し長すぎたかもしれない。しかし、一般にせい沢といわれる倒錯傾向が、木曾氏にいては、貧困の環境の中に発見され、育まれていったことを示すためには、こうした冗長な引用も、また止むを得ないのである。

或る日、彼は順番を待っている間に耳寄りな話をきく。どこからともなく高級車で現われる中年の女性が、男一人半日二〇〇〇円で

雇つてゆく、というのである。ほら吹きが多

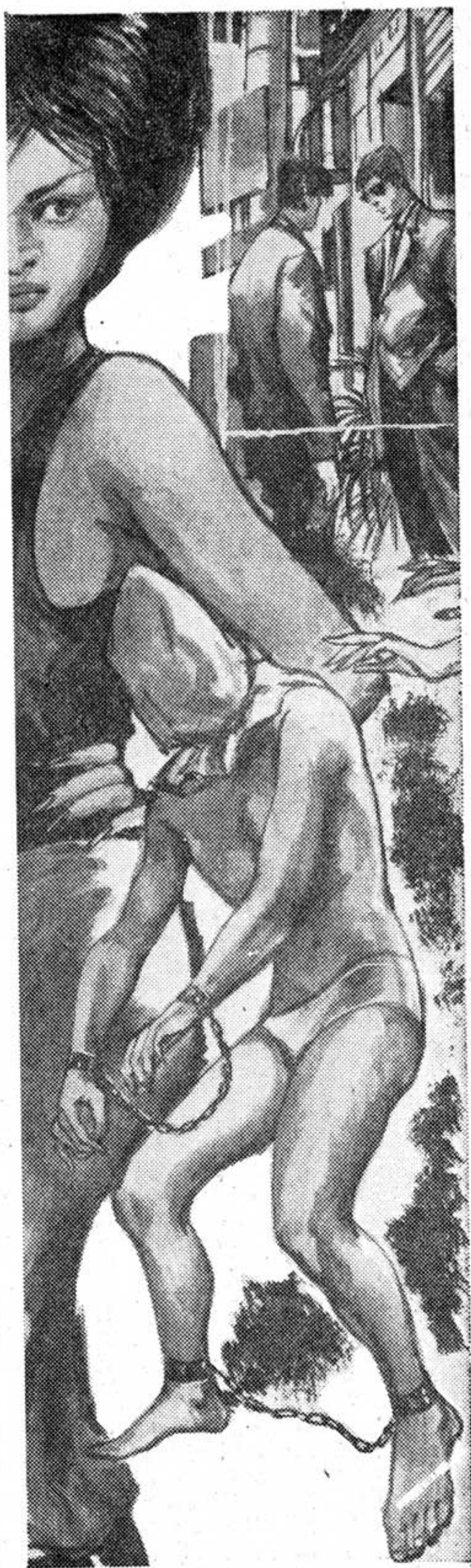
いこういう所の人種の話の中で、これは彼にとって大いにまゆつばものではあったが、特にその女性の所をたずねてゆくわけでなし、ただ、たまたまそこに来る時にゆき会いさえすればよいのであるから、きき流していた。

ところが、或る日、その女性に雇われたところがある、という男に会った。会ったといっても、順番待ちの行列で、偶然その男が彼のうしろに並んだというだけなのだったが。

その男はN大中退と自称していたが、あてにはならなかった。彼は、二週間位前、その女性に雇われた。

「少しつらいけど」という言葉に彼は「庭石運びか何かだろう」と思ったそうである。だが、そうではなかった。女は小一時間車を走らせた。着いたのは東京の西北部にある近郊都市の一角だった。その女は彼の手を引張つて、かなりの構えの家に入つてゆき、その庭にある一軒の物置き小屋のような建物につれ込んだ。

女は交替して、四十すぎの余り美しくない女性とかわつた。彼女は男物のズボンをはいており、決して美しいとはいえない女性だった。彼はそこで、いくつかのポーズを要求された。もちろん裸であった。彼が取らされた



ポーズの大部分はナワや紐による縛りの写真のためのポーズであった。

ひとしきりそれがすむと、最初の女性が戻って来て、カメラを扱っていた女性に加わった。若いこの女性は、裸にされている彼の前に立ち、着換えて来たまっ赤な細身のスラックスの両脚をふみ開いたり、壁にかけてあった短かい鞭を振り上げたり、片方のハイヒールのサンダルを上げて彼の脇腹を蹴ったり、あまのじゃくのように踏みつぶされた形の彼の背中に片方の脚をのせたり、そのほかいろいろのポーズをしてみせ、それらは全部カメラに収められたのであった。その他、彼の説明によると、もっと直接的なポーズも要

求されたというのだが、その詳細はよくわからない、というのである。

木曾修一氏は、それを黙ってきいているうちに、何となくその場面を心の中に描くことによって、性的な快美感に似たものが身体を走るのを覚えたという。

それから、彼は小耳にはさんだニュースをたよりに古本屋の店頭に立ち、いくつかの雑誌を読みあさる。彼の前には「未知ではあったが、入り込んでゆきやすい」世界が開かれていったのである。大部分の記事や読物は女を縛り、女を打ち、女を辱かしめるという内容だったが、中にまざっているわずかな数の反対の内容のもの、つまり女が男を虐げ、い

じめ、はすかしめる種類のものが彼にアツピールした。

ほのぐらい、陰うつな序章に始まったこの交響詩的な物語りは、ようやくその主題を示したのである。次ぎにつづくゆるやかな瞑想的な展開をみせようとしている。通常は華やかにそして豪華に鳴りひびく金管の音色は、ここではさえない。それらは、ひたすらにゆるやかな沈んだ旋律を追うばかりである。しかし、わたしたちは、その緩徐調の中に、来たるべき絶頂を思うことが出来る。

▲だんだんと、ぼくの頭の中は整理されていた。古典的な銅版画、二十世紀初頃のお



いのする本の挿絵、写真、それに新しく雑誌のために画いたいろいろの絵、すべて残酷さ、苛烈さ、何とも言いようのないむごたらしさ。それと、ひと口では説明のつかないいろいろなはずかしめ、そういうものは全部男が女に対してするもの、女が男に対してするもの、それと男対男、女対女の四種類にわかれていた。この区分は、のちにぼくの性癖を簡単に分類するのに大いに役立った。

ぼくはそういう知識をたくわえながらも、やはり月に一度や二度は血を売っていた。もちろん女に使う金はおろか、本を買う余裕さえなかった。ただ、一種の僥倖を待ち望むように、その女性にゆき会うことを望んだのだ。しかし、その女性には会うことは出来

ず、再びその男と会うことさえなかった。夜は独り寝の床で、性欲はもえ、そして沸いた。しかし、僕にはそこいらの飲み屋の女を相手にするほどの気持ちもなかった。落ちぶれていることを、肉体でまで確認することはなかったのである。

古本屋の店先での立ち読みはつづいた。そうしてついに、——ついにという感じはまさにびったりである——発見した。

その雑誌の投書欄に男性モデルを求めるという女名前の投書が出ていたのだ。ぼくは早速、封書で申込みの手紙を出した。返事は一週間目に来た。マゾの男性からであった。

いささか失望して封を切って読むうちにぼくの心は、再び期待に輝やきはじめるのだっ

た。彼は二人のドミナ（彼はそう書いた）の奴隷として週に一回奉仕しているのだが、最近その内の一人が、もっと男をほしい、と言いつ出したというのである。ぼくは早速返信を書いた。宛名は局止めだったが、もう不安感ではなかった。やはり五日目に返事が来た。いろいろと条件はあったが、その返事はまず満足すべきものだった。中でも、同封されたドミナの一人からの手紙が妖しくぼくの官能をうずかせた。指定の日は土曜の午後二時。僕は指定通りの雑誌を持って指定された街角に立った。いらいらして待つうちに二十分も過ぎてから、眼鏡をかけた三十五、六の男が近づいて来た。彼はぼくを認めるとただ黙ってそこから二百メートルほどはなれた駐車場

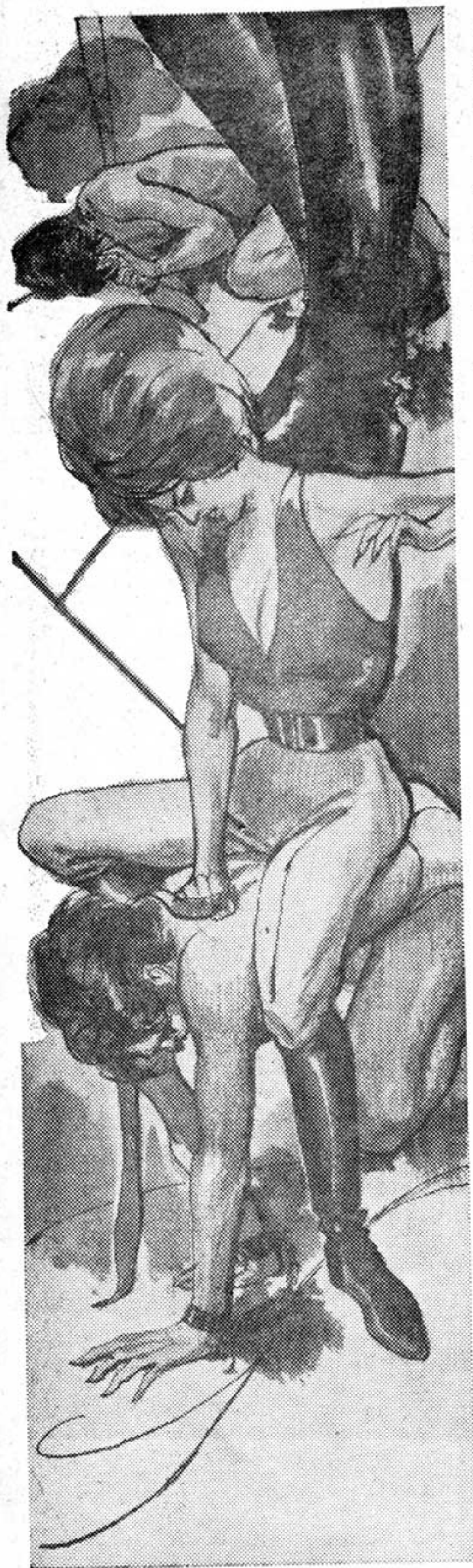
につれていった。黒ぬりのセドリックが、そこにあった。車内にはだれもいなかった。そこから、彼は自分でハンドルを握ると、急いで西の方へとスタートした。約一時間、おもしろしい沈黙がつづいた。車は一軒の大きな旅館の前でとまり僕は中へ案内された。大きな十二畳ほどの部屋と二間つづきになったぜいたくな場所だった。むろん、そこにも誰もいなかった。男はぼくをうながして衣類を取らせた。彼の表情の中にはあきらかに警戒の色がみられた。

僕は裸になり、次ぎの間で待った。約十分、声がかかり、だれかが入って来た。覗こうとすると彼はそれを止めた。
やがてもう一人。ひそひそと声をする。そ

のうちに、僕達の部屋の戸をコツコツと叩く音がした。「新しく来たのから先よ」ぼくの尻を彼がぐいと押した。こわごわ戸を開けて室内に入ると、その瞬間にぱっと袋のようなものを頭からかぶせられた。もう一人の手が乱暴にぼくの手に手錠をかけ、足にも手錠をかけてしまった。金属のくいこむ痛さが、はじめてぼくの肉体に感じられた。

その痛みに僕ははつきりと拘束というものの力を知らされたのである。彼女達は群がるようにおそいかかった。袋の中からは外部が判らなかったが、その中の一人は殆んど裸で素足であった。そうしてもう一人はあらい布地のスラックスをはいていることが肌に触れる感じで判った。その女はひざ下までの靴を

はいていることも判った。ぼくの頭の中で、彼女達の表情は、次々とぼくに加えられる触や苦しさを痛さをたどってゆくことで手に取るようにわかった。彼女たちは次々に野卑な言葉で僕をののしり、そのたびに巾の広い革帯が打ちおろされるのだった。その中に先ほどの男も加えられた。彼女たちは交互にぼくとその男とを苛めた。一人について約五分位だったろうか。無論、ぼくはある興奮を感じていた。予想に反して、適度に加えられる痛みや、脇腹を蹴り上げる女の靴は興奮を加えるのだった。本に書いてあったことの大部分は嘘だったが、中にはこういう風に僕自身の感覚から証明出来たものもある。
そのうちに、一人が言い出した。「こいつ



の好きなのを吞ませようか」と。もう一人の男はどこへかひきずられていった。女の中の一人はぼくのそばに残っていた。「もう見てもいいわ」その調子は、女同志で話しているときとは全然ちがう、もっと女性的なものだった。しかし、女が寄って来てぼくの頭の袋をはずしてくれるとき、僕の背中にはつきりとそこに居るのがスラックスをはいた方の女だときとったのである。ぼくははじめ、こんな遊びをする女は世間並みの顔はしていな一と思っていた。だが、ぼくの視界に入ってきた女は、すこし陰のある顔ではあったが、まだ若く、すらりとのびた上背、長く形のよい脚、丁寧に結び上げた大きな髪形をしている、まずまず上等な方の女だった。もしぼくが、道でこんな女に会ったとすれば、ぼくはきつと声をかけるのもためらうであろう。そんなタイプの澄ました女だった▼

引用が長すぎた嫌いがある。少しはしょってしまわねばなるまい。彼、木曾修一氏は、自分の前にドミナと自称する女を見た。胸一杯をはだけた、肩の露わに見えるブラウスを着、うすい黄色の花模様の織り意匠の細いスラックスに、ひざしたまでの上等な、明かるい茶色の長靴をはき、オート・コアフェール

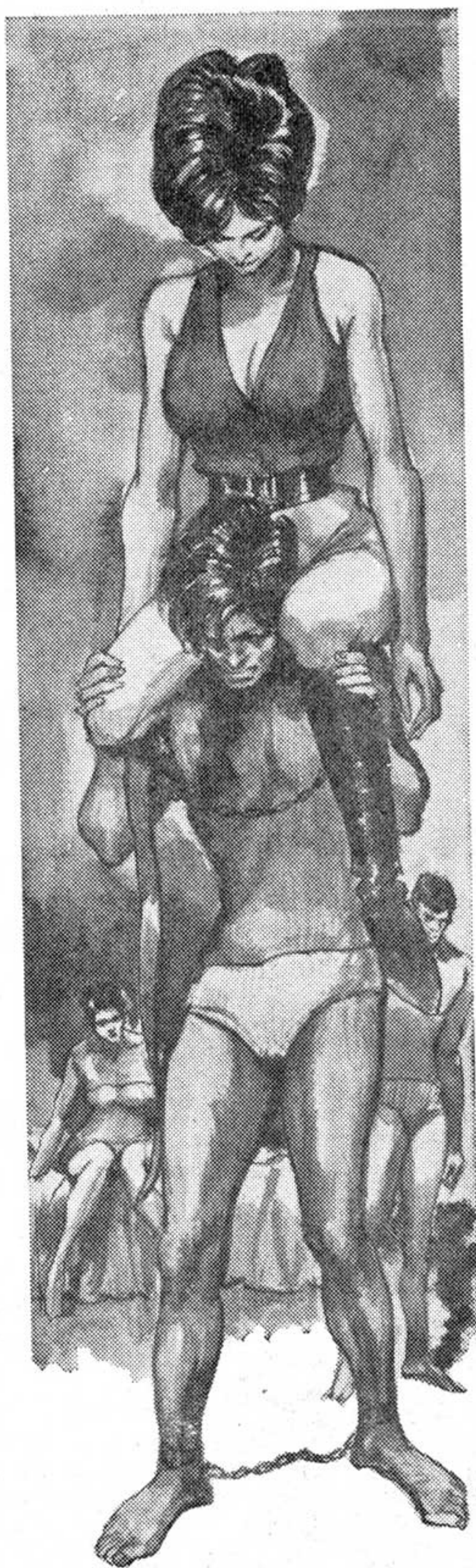
といわれる流行の髪を美しく結び上げた「美女」がそこにいたのだった。見かけが女性的なタイプなのに比較して、その女は木曾氏に對して無情で勇ましかった。ついに彼は声を上げはじめた。歓びの故にはない。苦痛の積層のためである。女はつと立ち上がり、ラジオのスイッチを入れた。

▲かなりの音量で鳴りはじめたそのラジオがウインナ・ワルツをやっていると気づいたのはすこし経ってからだった。その間中、彼女はぼくにまたがり、腹をけり、鞭を加えた。時々はその可愛い手の指が、ぼくのからだのそこちちをまさぐった。そのころ、もう一人の女と男が出て来た。彼等が入っていたのは浴室であつた。彼等はすでにつかれはてているようだった。二人はべたりと室のすみと並んで腰を下ろしてこちらを眺めていた。その前で、ぼくにまたがった女は彼等を見視したように振舞うのであつた。ぼくが頂点に近ずいたとき、僕の耳には何故か、ウインナ・ワルツのゆるやかな旋律がとび込んできた。彼女の腰、足の加える重さや圧迫、ときどき加える鞭の痛み、それがまさしくテンポに合い、旋律になつていた。その時の曲こそ、長い間ぼくが特別の愛好を感じるように

なつた忘れることの出来ない『シトロンの花咲く頃』だったのだ▼

かつて、リヒアルト・シュトラウスが行ない、ベートーベンが採用したように、ここに他のジャンルの作品が、主題を補強するために加はして来る。『シトロンの花咲く頃』はヨハン・シュトラウスの作品の中でも第一級のものではない。それはいつも聞き流されてしまふ種類の音楽である。ところが、彼においてはこの音楽は異常な体験と共に強く印象づけられてしまふのである。彼はその日、ほかの一人の男と共に責め苛まれた。それでも、彼等三人は彼を適任とは思わなかったらしい。彼等は彼の前で堂々と耽りながら彼にはその楽しみをわけてはくれなかった。興奮し切っている彼に、スラックスの女性は冷然とこう命じたのであつた。

▲女は言った。まるで飼犬にいうような口調だった。「お前も可愛そうね。じゃあ——」もう一人の男を呼んだ。彼は近づいて来てぼくの前にかがみこんだ。女は僕を坐らせ肩に跨った。ちょうどその婦人用の長靴の冷やかな感触が僕のわき腹から背中にかけてからみついた。首すじには温かい彼女の体温がのしかかっていた。彼女は乗りなれた馬を歩かせ



る時のように僕のわき腹を軽く蹴った。ほくは姿勢が坐ったままなのでゆっくりと立ち上った。すると、男は僕を愛撫しはじめたのである。裸の女がひからびた声でケケケと笑った。ほくに跨った女も明かるく笑った。そして、リズムカルにわき腹にその軟かい革の長靴をあてつつけるのだった。長いワルツはまだつついていた。ほんとうに間もなく、ほくは絶頂に達した。それは人前もかまわず、という形容そっくりにその辺りを汚した。女騎手は再び高らかに笑った。あとに残ったのは不快な淋しさだけであった▼

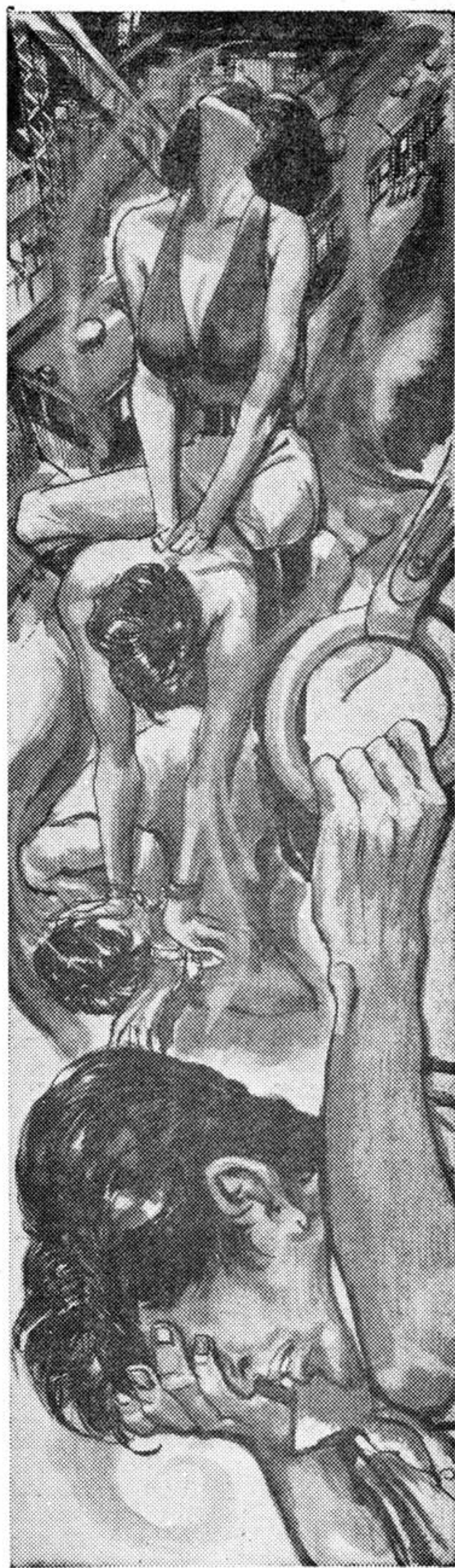
この手前勝手な三人は、彼に再び連絡する

までは近づいてはならないと言い渡した。木曾氏は再び孤独に帰ってゆかなければならなかった。彼等は男もふくめて横暴であったしまた彼を見下ろしていた。それが何より彼に不快な印象を与えていた。

だが、このとき彼自身も気づかぬうちに最終楽章の重大な主題は、かぼそく、しかし着実に現われていたのである。彼の売血による収入はだんだんと少なくなっていくた。それは彼の血液の比重の低下の故でなく、彼の他の収入の増加によってである。彼はこのころ金主となるべき友人にめぐり合っていた。彼はようやくにして普通の仕事することが出来かけていたのである。彼の財政上の立ち直り

の部分には必要あるまい。私達は先を急ごう。彼はすでに経済的に甚だしく窮乏してはいない。この点をよく頭に入れておいていただきたい。

▲しばらくの間、僕はサドとかマゾというものと絶縁していた。時間的にも余裕がなかったし、性的な一切について考える気持ちの余裕がなかった。処理は自慰ですませていた。或る日、ほくは電車に乗っていた。渋谷から横浜の手前の菊名にゆくためだった。何気なくきいていると、車内放送がラジオをやっていた。急行だったので駅と駅の間が長いから退屈しのぎにと思って車掌がサーブिसしたの



だったろう。(筆者註、これはラジオではなく、レコードだったのでではないかと思う。筆者もよく渋谷横浜間急行に乗ったので記憶がある)聴いている中に、ぼくは急激に性的興奮を感じていた。曲が、『シトロンの花咲く頃』だったのである▼

彼は慄然とした。彼は思い出した。あの三人のわがままなグループのことを。スラックスをはいた女の靴の打撃を。嫌らしい同性による半強制的な愛撫を。そうしてまた、あのひからびて野卑な裸女の笑いを。彼は極度の興奮に困り果てた。彼は途中下車せざるを得なかった。曲は、それでも彼の耳の中で鳴りつづけ、いつ終わるとも知れなかった。彼の

記録はいま猛然と、圧倒的な、洪水のような音量で高らかにその主題を鳴りひびかせるのである。

▲もう、それはヨハン・シュトラウスという作曲者をも、三人の許しがたいグループもぼくの頭から拭い去っていた。そこに流れる主題はぼくにとって女であり、性の支配者だった。旋律は終わると思うとくり返されていた。僕は極度の緊張の中に居た。じっと坐っている堅いベンチですら、うごかないベンチですら、こころよい震動をぼくの肉体に伝えるのではないかと思われた▼
彼は、まもなく、プレイヤーとラジオをつなぎ、レコードを買い求める。そのレコード

はすでにレコードではなく、女であった。その女は常に交錯した夢を提供した。それは忠実であった。彼はいつでも、いかなる時でも、同じ魅力を満えた美女と共に在った。それは万能の美女であった。彼の肉体的なすべては、この美女によって、十分に報われるのであった。彼は女友達を持ったとき、『シトロンの花咲く頃』の助けなくしては満足に至れなかった。

これは、明きらかに音楽フェチシズム、とも呼ぶべき珍しい一例である。ここでは、フェチシズムの対象物たる特定の楽曲は、女性というものの重要な一部分となっている。▲ぼくは最近になって考えるのだ▼
と木曾修一氏は断定を拒みながら書く。

△この曲が地上から抹殺されてしまわない限り、僕は純粋な女性を愛することが出来ないのではないかと。いや、この曲が地上から失われたとするならば、ほとくの肉体生活も、また精神生活の大部分も無きに等しいといえるかも知れない。僕は考え、煩悶した。この呪縛から逃がれるために。だが、この呪縛はころよい、あまりにもころよい。捨てようとする努力そのもののほうが、かえって私自身を再びあの陰湿な過去へつれ戻すのではないかとさえ思えるのだ▽

媚薬に呼び起こされた魂をもって、王妃たらんとするイソルデを愛するトリスタンの如くに、彼の記録の最終章は苦痛にみちている

が、私達は、それが甘美な終焉をもって終わることと予見することが出来る。彼は性的と呼び肉的という。

だが、その世界は肉とも性とも別個の、しかしきわめて、それらと親しい種類のものがある。

もし私たちが、彼の家の窓辺を通りかかったとき、ゆるやかで典雅なワルツ、『シトロンの花咲く頃』がきこえたなら、それは彼の愛の時間だと思おう。彼はその時、まれなる美女と枕を共にしているのだから。時間と経験との、ろ化によって△すでに不快な印象、あの男と野卑に笑った裸女の印象は消えてしまった。

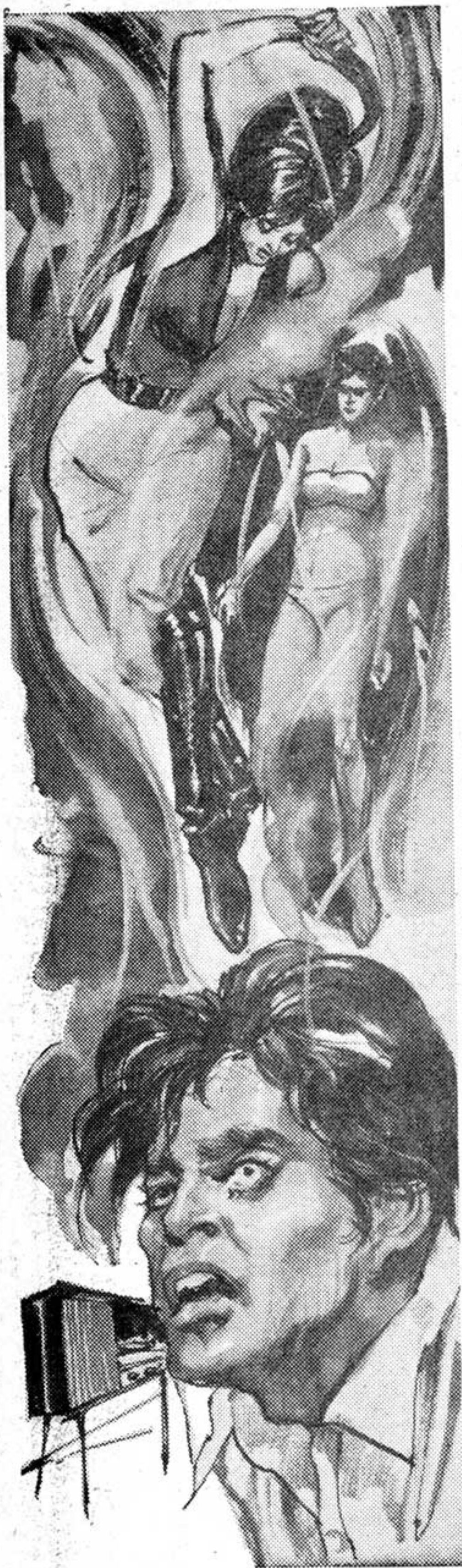
いまほくにのこっているのは、あの首すじ

の温かい重みとスラックスの肌ざわりと、皮革のなめらかで、それでいて残酷な感触とである▽と、彼が書いている以上、私達は覗き込むことをやめよう。

いずれ、イソルデは立ち上がり、愛の死の唄を静かに歌いはじめるにちがいないからである。

それは、全世界を包み、全世界を得たものの唄である。

『トリスタンよ、その最後の息に、私を吸い込んでおくれ』と、その無形の美女は、それこそサシスチックな魅惑を湛えて歌うだろうからである。



ジョン・ウイリー作・画

フェニクス商会・特約

グエンドリン物語

この絵物語を、全部ホンヤクして掲載しようと思ったのですが、じつは、ホンヤクするほどの複雑なお話でもなく、第一、読んでいくうちに、ツジツマの合わないところも各所にできて、やはり絵だけを観賞するほうが、無難なようです。絵そのものは、いかにもアメリカカ物

らしいスタイルで、よく描けています。長編ものなので、今月号と来月号に分載いたします。

なお、この絵物語に沿って、下段からはじまる時代小説「煩惱繩」は、ぜんぜんべつのお話で、絵物語とは、なんの関係ありません。

OH, DEAR ME!
EVERYTHING I
TOUCH SEEMS TO
JUST EXPLODE! I
GUESS I JUST
WASN'T MADE TO
BE A MAID!



時代小説

煩惱繩

矢桐重八



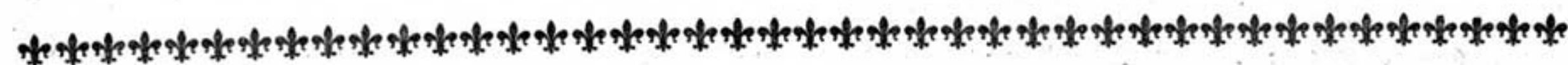
「も、申しわけございません、佐兵衛さま……」

雪江は、佐兵衛の前に両手をそろえた。すぎとおるほどに白い十本の指さきが、畳に突かれて美しくそりかえった。

「と申されますと、お嬢さま……?」
佐兵衛の目が、陰険に光った。赤黒い色にただれた、ぶあつい肉のまぶたの下に、その目は針のように細い。

THE RETURN OF

GWENDOLINE



「きょうはお約束の二十五日。ご承知でございましょうな。この佐兵衛、伊達や酔狂で金貸しをやっているんじゃない、ございませんよ」

きせるのなかに粉煙草をつめ、にがにがしい表情で、一服吸いこむ。

しかし、佐兵衛にとって、この一服は、決してにがいものではなかった。

「よくわかっております……」

雪江は、手をついたままだった。

せっぱつまった昨年の暮れに、おがむようにして借りた金が十両。

利子が利子を重ねて、その十両が、いつのまにか、百両近くまで増えていた。

大金である。二十二歳の娘の腕でおいそれと返せる金額ではなかった。

父親の久左衛門が浪人したのは、いまから五年前。もともとからだの弱かった久左衛門であった。紀州から江戸へ出てくる旅の途中で血を喀き、江戸へつくと同時に寝こんだ。それでも、当座のあいだは、いくばくかの蓄えがあった。浪人暮らしが三年、四年とつづくにつれて、薬代はおろか、その日の糧まで飢えるようになった。

「佐兵衛さま、おねがいがございます」

雪江は顔をあげ、つきつめた視線を、まっすぐに金貸しの目へ向けた。

「待てませんな。もうこれ以上、一日だっていや、一刻だって、待てやしません」

煙草のけむりといっしょに、佐兵衛はきわめて職業的なことばを吐きだした。

「いいえ」と、雪江がいった。「これ以上、待つて頂くことのご無理は、私もよく存じあげております」

雪江の語尾がふるえた。

佐兵衛は、この貧しい武家娘の顔の色が、異様なほど青さめているのに気づいた。

「ほほう……。と、おっしゃいますと?」

待つことの無理を知っている、と雪江はいった。ならば、つきに何を、この高利貸しに訴えようというのか。

「佐兵衛さま……」

といって、雪江は絶句した。両手を畳にのいたまま、がっくりと首を折ってうつむく。

「はい、なんでございます、雪江さま」

わざと、はずむような軽い口調で、佐兵衛はこたえた。ふッと、好奇心が湧く。

「あの……あの……」

「なんでございますか。はっきり、おっしゃってくださいまし」

したたか者の佐兵衛にも、正直のところ、雪江がつきにいいだすことばがわからない。

雪江の思いつめた心のうちを、まだ察することができないのだ。

「お借りしたお金をお返しいたそうと、私も父娘、苦勞いたしました。できるかぎりの手をつくしました。それでも……百両に近い大金でございます。どうしても、どう算段いたしまして……」

ふかく首をうなだれ、身を縮めるようにしている。肩のあたりに貧のやつれがめだつ。

「ふうん……」

佐兵衛は、味気ない顔になった。ききなれたセリフである。粉煙草をきせるにつめた。

相手が美しい娘だから、めずらしくもない愚痴も、きいてやっているのだ。

「それで?」

と、佐兵衛は鼻の穴から、けむりを吐く。

「あの……私を、百両でお求めくださるわけには、いきませんでしょうか?」

雪江の声はかたくなり、語尾は消えた。

「なんですって?」

佐兵衛は、自分の耳をうたぐった。

「もういちど、ねえ、お嬢さん、もういちどおっしゃってくださいまし」

雪江ののどから、むせび泣きのような声がもれはじめた。畳にうつ伏したまま。声をしのばせ、雪江は肩で泣いていた。





佐兵衛は、頭の回転のにぶい男ではない。
雪江のひことで、すべてを察した。

——そうか、久左衛門父娘、そこまで追いつめられていたのか。

よろこびが、しかし、すぐには伝わってこない。夢のような気がする。この一年のあいだ、心中ひそかに、期待はあった。

だが、雪江は、労咳病みの貧乏浪人の娘ながら、気位の高い性格である。ちよつとやそつとは、思いのままにならぬことを、佐兵衛は知らされていた。

——お嬢さんのお心次第で、五十両や百両ぐらい、どうでもいいんでございますよ。

と、これまでも二度三度、雪江の耳もとでささやき、そのたびに、手きびしい拒絶にあつてきたのだ。

半分は、あきらめかけていたやさき、いまの雪江のことばである。

「わ、わかりました。そ、そ、そのご決心はほ、ほんとうで、ございましょうねえ」

内面を表情にださない好色な高利貸しも、目を輝やかせて、思わずどもった。

無言のままうなずき、それまで蒼白だった雪江の顔が、こんどは火のようになった。

ねっとりした視線が、はやくもそのうなじへそがれた。

「そうですかい、そうですかい。そいつアよ
かった。いえなに、えへへ……」

こらえようにも、こらえきれずに顔をほこ
ろばせる佐兵衛である。

「でも、でも……私のようなものに、百両な
どという大金の値打ちが……ございますでし
ようか……」

消えいるような、細い声である。

「さ、さようでございますねえ。そいつはま
あ、しかし、なんとでも……」

ことばを狡猾に濁しながら、この武家育ち
の娘が、よくもそこまで決心したものと、
感心しながら、うれしがっている。まったく
いままでは、頑固な浪人父娘だったのだ。

追いつめられたなかにも、ほっとしたよう
なゆるみが、雪江の面上に浮かんだ、

——百両の借金を、私のからだで返すこと
ができる……。

という、せつない安堵であった。

——これで親孝行ができる。父上のお心か
ら、借金の苦しみを追い払うことができる。

そのよろこびと、どすくろい絶望感が、泥
のなかに降る雪のように混ざりあった。

——今宵ひと夜、死んだ気になればよいの
だ。心もからだも、死んだつもりになれば。

「うふふふ……。そのおつもりなら、もう、
ごゆっくりなされませ。夕飯など、ごちそう
いたしましょう。さあ、どうぞ、こちらへ」



暮れ六ツの鐘が、どこかの寺で鳴った。

金貸し佐兵衛の邸は、夜になった。

奥座敷の行燈に、火がはいった。

下男がひとり、下女がひとりだけ。そのほ

かには、女房も持たぬ佐兵衛であった。

盃をむりやりに持たされ、酒をつがれた。

目をつぶって、雪江はのんだ。

——死んだつもりになればよいのだ。

酒など、口にふくんだこともない。酒をの
んで酔うことがきたら、屈辱も羞恥も、まぎ
れるのではないか、と雪江は思った。

しずかな夜であった。遠くで犬が吠えてい
る。

佐兵衛の口数が、すくなくなった。だまっ
たまま、酒をのみ、膳の上のものを、箸では
さんでは口へ運んでいる。

雪江に酌をさせるといふようなこともしな
かった。ただ、ときおり、赤く濁った目で、
雪江のえりもとから胸のあたり、帯から腰の
まわりを、計るように眺めた。目でなめてい
ると感じるだった。そのたびにぞおッとし
て、雪江は総毛だった。

どうせなぶられるからだなのだ。いつその
こと、早く牙をむいてとびかかってくればよ
い、とさえ雪江は思った。この沈黙の時間が
次第にいらだたしくなってくる。



佐兵衛はあせらない。ここまできたら、もう絶対にあせらない。

「百両というお金はね、お嬢さん、たいへんな大金でございますよ」

いいながら、また、なめるようなやらしい視線を、雪江の全身に這わせる。

「存じております」

不安になった。自分のからだは百両に価しないともいうのだろうか。

「ですから、百両相当のことは、ちゃんと、させて頂きますよ。それも、お覚悟でござい

ましょうね……うふふふ」

あつくちびるが、酒にぬれて、ぬめりと光った。

利が利を生んで百両近い大金になったが、元金は十両である。高利貸しで万金にのぼる蓄財をなしとげた佐兵衛にとって、十両はさほどの金ではない。

「お嬢さん」

盃を右手に持ったまま、佐兵衛はいった。「そのこの床の間に、手文庫が置いてありますね。その手文庫のなかに、縄がはいっているんだ。それを取り出してくださいませんか」

「はい」

雪江は、何も知らずに立ちあがった。

(74ページにつづく)

GWENDOLINE! I SEE IT'S STILL
ABSOLUTELY NECESSARY FOR YOU
TO BE **GAGGED** TO KEEP YOU
SILENT!

MMPH!



好評発売中 裏窓叢書第七集 大利根柔肌草紙

OH, DEAR! I JUST KNOW
I'LL NEVER COME AGAIN!





ひとたばの縄が、たしかにその竜の金時絵の手文庫のなかにとぐろを巻いていた。覚悟していたものとはちがう、異様な予感に、雪江は戦慄した。縄なんかを、なぜ手文庫にいれ、床の間なんぞに飾っておくのか。しかもその縄には、入念な手ずれがあつて垢がうっすらとシミついていた。まさしく、とぐろを巻いた蛇のように、手文庫のなかにうずくまっていたのである。

佐兵衛の片頬が、微笑でふくらんだ。

「その縄を、お前さんのひざの前においてごらん」

雪江は、わけのわからないままに、そのとおりにした。

「ふふふ……。これからね。その縄で、お前さんを、縛ろうというのさ。そうだよ、縛るんだ、うしろ手にね……」

「……………」

雪江は、息をのんだ。佐兵衛のいうことばの意味が、よくわからない。

「お前は、お武家のお嬢さんだ。いざというとき、あばれられたら、わたしが困る。そこで、二本の腕を背中に縛りあげておいて、それからゆると百両のかわりを頂く……」

「そ、そのような……」

雪江は、あえいだ。

BUT I DON'T.... OOOOo!
CAREFUL!!... I DON'T WANT
TO GO TO AUNTIE'S!??



OH, THAT POOR
POOR MAID!!



「いやとは、いわせない。いまお嬢さまは、
何もかも納得づく、お覚悟の上だとおっしゃ
いましたね。さあ、うしろに手をおまわしな
さい。この縄で、ぎりぎり縛りあげて、そ
の美しいからだを、思うぞんぶん……」

COULDN'T WE JUST
STAY **HERE**.... NO,
I GUESS WE COULDN'T!



「おゆるしを、おゆるしを……」

いままで経験したことのない恐怖に、雪江は思わず反抗の構えをとり、後ずさりした。

「ふふふ、そんなこわい目をしてはいけませんよ、お嬢さん。きょうが返済の期限だ。証文だってちゃんとある。今夜じゅうに返して頂かなければ、わたしは明朝、奉行所へ訴えますよ。そうすると、お前さんのたいせつなお父上は、役人に縛られて奉行所へ引っ立てられていくんですよ」

「……………」

雪江の顔面は蒼白になり、両眼をとじるとがつくりと首を折ってうなだれた。

あきらめの姿勢であった。気位をすてることのできない美しい娘だけに、その観念の姿勢は痛々しかった。

佐兵衛は、盃を膳の上においた。そして、ようやく腰をあげた。その気配を敏感にさとして、雪江は、ぎくりと肩をふるわせた。

佐兵衛は、ゆっくりと畳を踏みしめて、雪江の背後にまわった。そして、両手をやわらかく、雪江の肩の上においた。

「さあ、その縄を取ってくださいませ」

おだやかなことばだが、それは命令にちがいなかった。

自分の手を縛るという、けがらわしい縄を自分で相手に手渡さなければならぬのだ。

屈辱が雪江を襲い、からだがふるえた。だが、雪江は命じられたとおりにした。そうするよりほかに、仕方がなかった。

「ふふふ、すなおな、よいお嬢さんだ」

佐兵衛は、わざと音をさせて、その縄たばを、雪江の耳もとでほくした。



DON'T YOU TELL ME WHAT I SHOULD OR SHOULDN'T DO!!



「さあ、両手を背中にまわすのだ。手首と手首を、帯の上でかさねるのだ」

佐兵衛は命令した。

おずおずと、白い左右の手が背中へまわされ、帯の上でとまった。

「もっと、きちんとかさねるのだ。わたしに手数をかけさせないようにするのだ」

「はい」

ききとれないほどの低い声でこたえ、雪江は腕をまわした。雪江の上半身は、しぜんに前かがみとなった。

「ふふふ、なんとまあ、かわいらしい手首なのだろう。たまらぬ」

そのふたつの手首をひとまとめにつかみ、縄をまわす。このときから、縄は生命をふきこまれて蛇のようにくねった。

「あッ、ああッ」

それは、いいようのない、おぞましい感触だった。佐兵衛の手は女のようにやわらかく湿っぽかった。そして、縄に力がこめられるにつれて、雪江の左右の腕は、またたく間に自由を失っていくのだ。

もうたったそれだけで、雪江の自由のほとんどはうばわれていた。

「あッ、痛ッ、痛うございますッ」

前かがみになって、うめいた。

「痛くとも、辛抱しなければいけないよ。こうやって縛っていくうちに、お前さんはいよいよ美しくなり、百両の値打ちになっていくのですからね、うふふふ……」

手首を完全に縛り終えた縄は、こんどは腕をしめつけ、胸にまわった。ぎりりとひきしめ、三重四重とかけまわしていく。



「裏窓」既刊号各号の売り切れがせまっております

いまのうちにどうぞ！

★本誌最終ページをご参照ください★

THAT?
E MAID!
LOOKING...

THE
RETURN
OF

GWENDOLINE

HER!... I MEAN HIM!
HE'S SO USELESS!.. PER-
HAPS YOU COULD SHOW
HIM THE ER.. ROPES!

GOLLY! I WISH THEY'D
WATCH WHERE THEY'RE
POINTING THESE
THINGS!

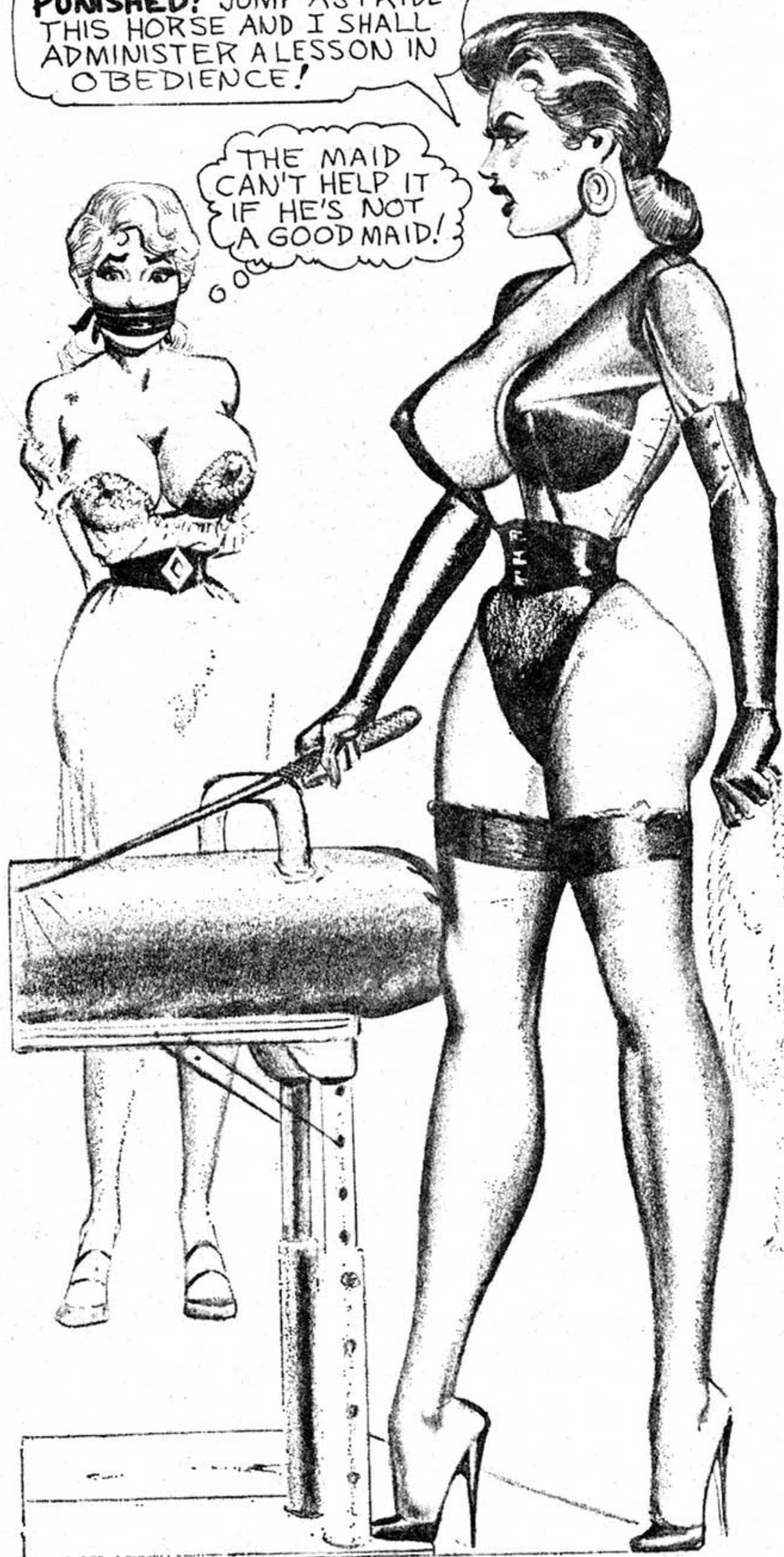


あきらめ、覚悟していたはずの雪江だが、縛られるという実感のいまわしさに、いつのまにか抵抗の姿勢になっていた。だが、すでにうしろ手に縛りあげられたからだである。胸にも五巻きほどの縄がくいこみ、息をするにも苦しかった。縄じりをふいに引かれ、雪江はひさを立ててのけぞった。着物の裾の合わせ目がひらいた。羞恥よりも、縛られていくおぞましさに肌があらわになることを忘れた。「あばれるのはおよしなさい、お嬢さん。ほら、裾がそんなにもひろがってしまった」「あれえッ!」気づいて、雪江は思わず羞恥の悲鳴をあげた。だが、いちどひらいた合わせ目は、もう二度と元通りにならない。左右の腕は、たかだかと背中へ縛りあげられているのだ。反射的に、また前のめりになって畳へ突っぶす雪江だった。縄にぎりぎりといましめられた手首が、痛いあえぎをみせている。畳に突っぶしたので、腰が上へ高くあがっている。そのまゝみは、たしかに若い女の肉づきだった。どんなに貧しい暮しのなかでも、若いからだは、貧しさをはねかえして成熟するのだ。佐兵衛の目が、その成熟をむさぼる。

GWENDOLINE! YOU **MUST BE PUNISHED!** JUMP ASTRIDE THIS HORSE AND I SHALL ADMINISTER A LESSON IN OBEDIENCE!

THE MAID CAN'T HELP IT IF HE'S NOT A GOOD MAID!

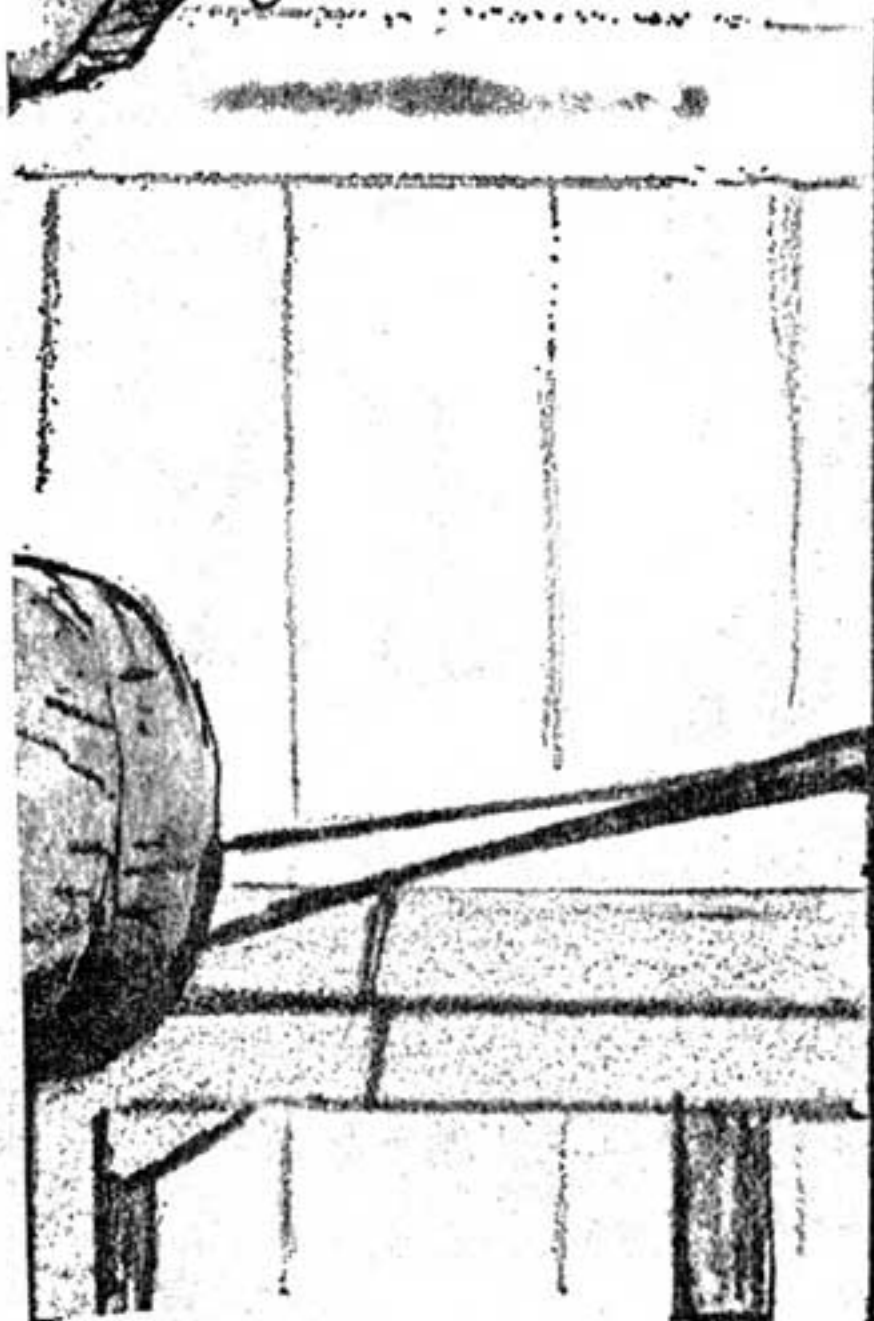
HOW ABOUT A MAN, MADAM? **HMM.. NOT BAD!** WHAT SEEMS TO BE YOUR TROUBLE, AUNTIE?



「ああッ、お、お、おゆるしを！」
「なんですって、ゆるしてくれですって？」
冗談じゃない。これからですよ。いまはまだ
ほんの序の口でございますよ、お嬢さま」



I WISH SHE'D
HURRY UP AND
DO WHAT'S
GOTTA BE
DONE!



I'D GLADLY
TEACH HIM ALL I
KNOW! I'VE HADA
LOT OF EXPERIENCE
IN MAIDING!
OOO! CAREFUL,..
THAT'S MY BEST
DRESS!

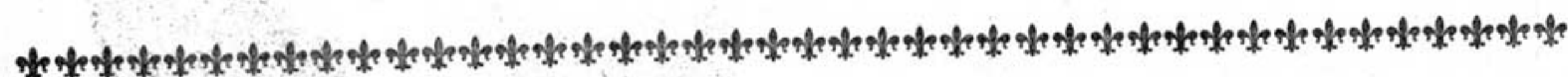


佐兵衛の手が、高くもりあがった雪江のし
りを、ぽんとたたいた。

「ううッ」

雪江は屈辱にうめき、肩としりをゆすつて
のたうちまわった。あばれると、胸と腕にか
かった縄が、じりじりとくいこむ。縄の力が
まるで佐兵衛の指の力のように感じられる。

HOLD STILL DEAR...
DON'T BE SO IMPATIENT!



「ふふふ。いまからそんなにものがくと、あとで疲れますよ。いま言ったとおり、これはまだまだ、ほんの手はじめなんだからね。どうかね、雪江さん、はじめての縄の味は……。その縄はな、わたしの愛用の縄なのだ。だから、たいせつに手文庫のなかへしまっておくのだ。その縄は、わたしの心を知っている。わたしのよろこびも悲しみも、ぜんぶ知っているのだ。わたしの煩惱のすべてを、わたし以上に知っている縄なのだ……」

そのうす汚れた縄が知っているのは、佐兵衛のよろこびだけではないはずである。

佐兵衛のために縛られ、泣き、うめき、のたうちまわった女たちの素肌のおいを、この縄は知っている。

この縄は、女の肌からにじみでるあぶら汗にまみれ、涙を吸い、女のあらゆる苦汁にぬれている。

金を積んで納得させ、縛りあげた女。借金のカタに縛りあげた女もいる。貸した金を棒引きにしてやるからといって縛りあげた女もいる。だが、今宵ほど佐兵衛の心を躍らせた女は、いまだかつていなかったろう。

貧にやつれをみせているとはいえ、無垢の武家娘。いままで拒みとおしてきた雪江。こころよい感動が、佐兵衛の心をふるわせる。

縄じりをつかんだ佐兵衛は、力まかせに引いて、雪江の胸を畳からひきはがす。

「その美しい顔を、そういつまで畳にこすりつけておくことはあるまい。雪江さん。まったく、美しい縛られっぷりだ。生娘のお色気が、お前さんのからだから、じゅくじゅくとにじみでて、わたしはまぶしいくらいだよ。そう肩をゆすったり、胸をあえがせると、その縄は、いよいよお前さんのやわらかいところをしめつけるよ。もう観念したほうがいいよ、うふふふ……」

「私を、こんな目にあわせて、どうしようというのです！」

雪江の目には、憎悪があった。ひとの弱みにつけこむ男の心が憎い！

「ふふふ、その目がまた、なんともいえぬくらい、美しい。これから私がお前さんをどうするか、教えてあげようか。楽しむ方法は、たくさんある。たくさんあって、数えきれない。お前さんは、いま着物をきています。着物の上に、そうやって縄がかかっている。そういう姿も美しいが、やっぱりわたしは、お前さんをはだかにしよう。はだかにして、その色の白い、やわらかそうな手足を、いろいろなかたちで縛りあげよう……」

雪江は、息をのんだ。自分の着ているものが、もうすべて佐兵衛のためにぬがされ、素肌をさらして縛られているような錯覚におちいった。

「ひ、ひきょうです！」

武家娘らしいことばを、雪江は吐いた。

「ほほう、わたしが卑怯かな。卑怯なのは、お前さんが親子のほうではないのかな。一月後にはかならず返すといってわたしから十両という大金を借りておき、もう一年以上にもなるのに、一文も返さない。わたしはなんのカタも取らず、いわばお前さんたち親子を信用したからこそ、お貸ししたのですよ。それをいまになって、卑怯などと呼ばれては、わたしの立つ瀬がありませんよ」

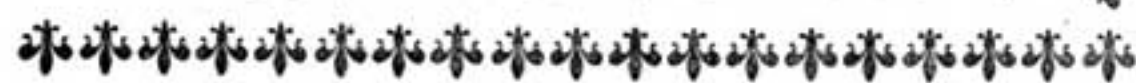
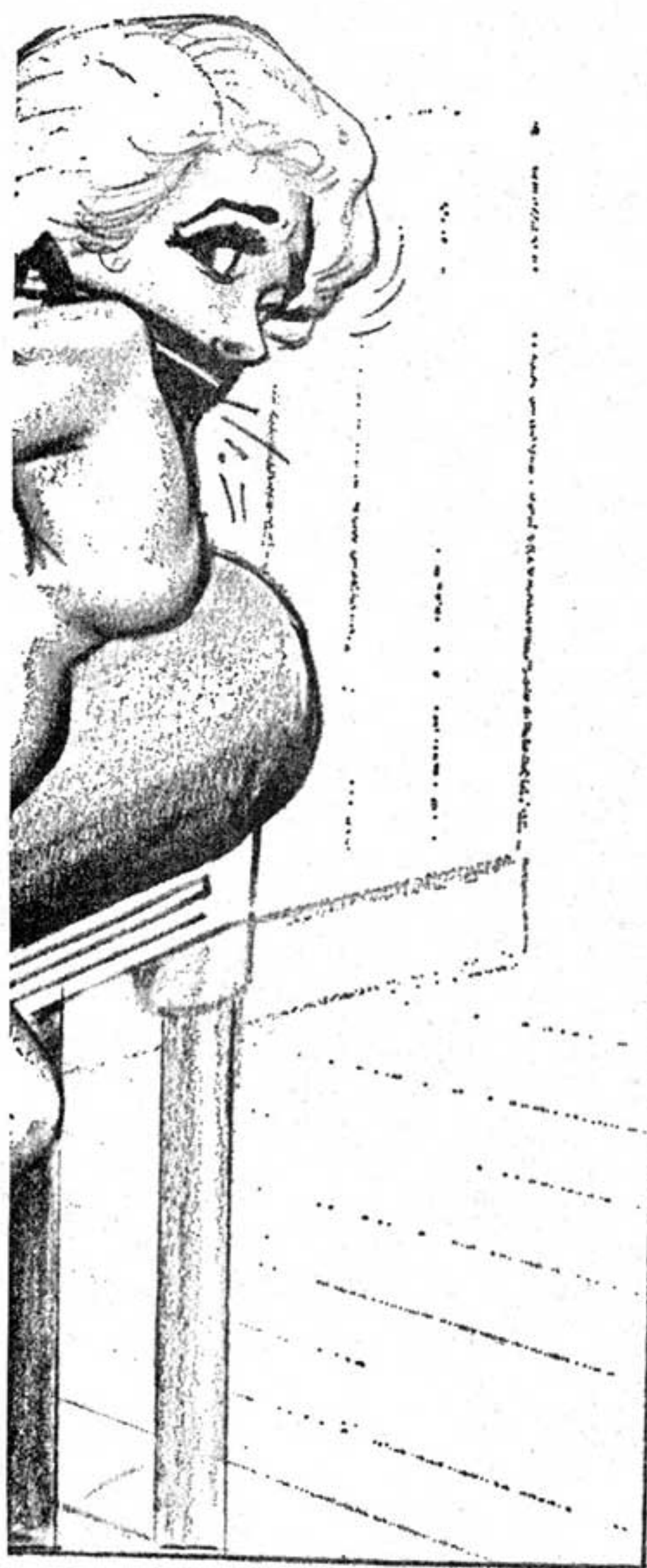
雪江は、くちびるを噛んだ。それをいわれと、返すことばがない。

「あんたは、決心して今夜はここへ来た。覚悟は、とうにしているはずでしょう？」

雪江の表情から憎悪がぬぐわれ、痛々しいほどの哀願の顔になった。

「わかっております。ですが、おねがいですが、どうか、どうか、ひどいことはなさらないで……」

「ふふふ。虫のいいことをおっしゃる。雪江さん。百両ですよ、百両。わたしはこれから、もうひとたび、秘蔵の縄を取りだし、お前の片足首を縛る。そして縄じりをあの鴨居に渡してひっぱる。おわかりかな？」



HMM! I SEE YOU'VE PUT
A LITTLE WEIGHT ON, DARLING!
YOU SHOULD CUT DOWN ON
THE SWEETS, GWENDOLINE!



おわかりかな、といわれても、雪江に佐兵衛の奸策がわかるはずはない。

「いいかね。お前さんのからだは、片足首を上にして、あの鴨居に吊られるのだ。そうすれば、お前さんの肌にわたしの手がふれなくとも、その着物の半分は、お前さんの肌からすべり落ちてしまう。いきなりはだかにするのは、かわいそうだ。だから、じわじわとぬがせてあげよう」

雪のように白い足が、逆さになって佐兵衛の目の前でもがくのだ。

右足だけが吊られれば、左足は畳の上に残るのだ。左右の足は、いやでも大きくひらかれるのだ。

「ひいーッ！」

雪江は、ようやくそれをさとり、のけぞって絶叫した。(つづく)

グエンドリン物語

十一月号へつづく

耽美芸術グラフ 第一集

定価
千円

送料とも

内 容

■ 写真集 ■

滝の女・石の部屋
密室・絶望の風景
金井行雄作品集・
さるぐつわ・縄目
凝固

■ 絵画集 ■

落合竜二凄艶画集
沖渉二特選傑作展
中川彩子・女奴隷の檻
中川彩子・吊り蔵
鬼頭暁時代妖美画集
羽仁京志傑作選

▼ながいあいだお待ち致しました。洗練されたセンスと伝統を誇る裏窓が、そのスタッフの総力をあげて、ここに、S写真と責め絵を豊富に掲載したグラフを発行致します。
▼このような写真絵画集の発行は、数年前より愛読者のみなさまからご要望を頂いておりましたが、このたび、ようやく刊行に至った次第であります。
▼書店では発売いたしません。
▼厳重に密封して、個人名でお送りいたします。安心しておまかせください。
▼お申しこみには、住所とお名前のほか、かならず年令を明記してください。▼二十五才未満の方には、お売り致しません。未成年者は、絶対にお申しこみにならないで下さい。
▼お申しこみは――

東京都中野区松が丘2の21

久保方 藤見 郁

耽美芸術グラフ第一集 についての 読者からのおたより



▼一部千円の雑誌というので、ちよっと考えたが、手にとって見たところ、まずまずの出来ばえであった。一番いいと思ったのは、従来の増刊号のように、無駄な、つまらない写真のページがないことである。厳選した感じがみえたことはよかった。私の好みとしては中川彩子画伯の「吊り蔵」が一番で、つぎは「女奴隷の檻」であった。ことに「吊り蔵」は、この種の責め絵のなかでは最高峰といえよう。ものすごい迫力で、コレクションとするに足る逸品である。中川作品のいい点は、縄のかけ方が本物で、すこしのウソも感じら

れないところにある。緊縛感は上の上である。「女奴隷の檻」も、迫力という点では十分だが、私は鎖や鉄枷はどうも好きでないのや、やはり「吊り蔵」を一番とする。写真では「滝の女」のモデルの豊かな乳房に、いこんだ縄の迫力が圧巻であった。モデルも全くの新人で、美人なのがよろしい。私の好みからいえば、いすにうしろ手に縛られた二ページの写真の縄の水も洩らさぬかけ方がよかった。第二集の発売を祈りたい。

(東京・SSS生)

▼さっそくお送り頂いてありがとうございます。全部グラビアで豪華な一冊、ひさしぶりに満足しました。一枚一枚の写真が、それぞれ趣向を凝らして、よいものでした。鬼頭暁時代妖美画集のなかで「坊主狂乱」は構図といい、小道具の使い方といい、結構なものでした。鬼頭氏の連作の中では、「悪事の相談」「尼の危機」などがおもしろい絵でした。ただし、尼の頭が、デコボコだったのはお

かしかった。「落合竜二集」では股間縄をかけたものがよく、女の表情とからだになんともいえぬ情感があつて、縛り絵としては最も上品で美しい作品集だと思いました。やはり、責め絵も芸術であり作家の思想が表現されると思います。

(東京 H・K)

▼金井行雄先生の作品をひさしぶりに見られたことは、じつにうれしきことでした。全裸うしろ手吊りの写真は、他に類をみません。凄絶な一枚の写真、これ一枚で私は千円を投じたことに後悔いたしません。金井行雄先生こそ、日本のS写真界の第一人者であることを推賞してやみません。願わくは金井行雄作品集を。(大阪・N)

即日申し込みました。東京はいざ知らず、関西においては、おそらく関西では私が「申しこみ者第一号」じゃないでしょうか。「グラフ・第一集」を見て第一に感じたことは、女性美はなんと言ってもヌードにとどめをさすということでした。荒々しい縄目にくびられる乳房や二の腕の弾力こそ、S芸術の真髄というべきでしょう。例によって、モデルが全部美人ぞろいなのもうれしい。フォト全般における唯一つの難点をいうなれば

(京都・祇園太郎)

金井行雄氏の作品の他は、洗練されすぎて(これは本誌フォトについてでもいいことです)といった憾がしてなりません。これらの美人モデルに、プラス金井氏作品の迫力が実現されることを、今後の第二集、第三集に期待することにししょう。こういった私の好みを充分に満たしてくれるのが中川彩子氏の絵で、「吊り蔵」の女性の容貌、緊縛度等、私の夢をおぎなつてあまりある、といった

来ることなら「グラフ・第二集」は絵を主体として写真はこの形式で掲載してほしいと思います。今回ご執筆の諸先生に、喜多玲子、山田彬弘先生を加えて「満願」というべきでしょう。

(横浜市 K・S生)

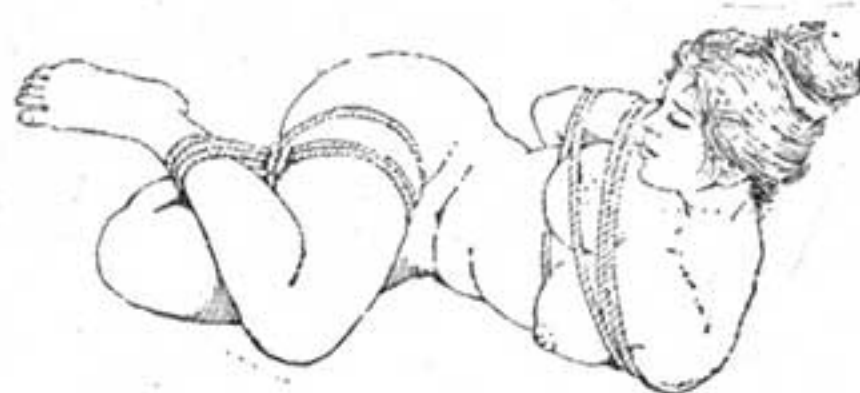
▼「耽美芸術グラフ・第一集」受け取りました。日頃から貴社ではS専門誌といったものがなく、なんとなく物足りなく思っていました。たが、つづいて「グラフ」が刊行されることを希望します。一部千円は、ちょっと高すぎるような気もしますが、「裏窓」の場合にしても、Sもの以外全部やぶき捨てることを思えば、まずまずといったところでしょう。「グラフ」鬼頭暁先生の絵の下に、附録のような形で写真が載っていますが、出

ですが、いっこうに実行されなくて業を煮やしていたところ、ようやく「グラフ・第一集」が刊行されてよろこばしい。われわれの楽しみは、なんといってもひそやかにところそこそこ満たされるものであつて、小生自体、自分で言うのも変ですが、務め先では「天使」というニックネームを頂戴しているくらいで、「グラフ」等で常にもやもやを発散して快適な生活を送っている。「第二集」の続刊を望む。

(東京 T・I生)

「裏窓」を毎月確実にお手に入れるために

直接購読会員募集



- ▼三カ月会員… 九〇〇円
- ▼六カ月会員… 一、八〇〇円
- ▼一カ年会員… 三、六〇〇円



■いずれも、店頭発売前に直接お送りいたします。送料は、当社で負担します。

■〇月号から三カ月分、とか、〇月号から六カ月分、というふうにはじめの号を、はっきりお書きください。

■住所氏名を正確に、はっきりとお書きください。

■直接購読会員には、写真の無料サービスを行います。

三カ月…三枚 六カ月…六枚
一カ年…十二枚（手札型）

東京都中野区松が丘2丁目21番

あまとりあ社

「裏窓」営業部

愛読者のみなさまへおねがい

私ども三誌では、この数年間の世情にかんがみ、かねてから編集面の自粛刷新を計ってまいりました。

元来、私どもの雑誌は、けっして単なる性雑誌ではなく、特殊な専門誌を自負して発行してきたのですが、青少年保護育成に関する論議が、とみに高まりつつある現今の情勢に対処すべく、いっそうの自主規制を、このたび申し合わせました。

愛読者の各位におかれましては、いろいろとご不満もございましたが、なにとぞ、事情おくみとりの上今後ともご愛読のほど、ここに、改めてお願い申し上げます。

「風俗奇譚」発行所・文献資料刊行会
「奇譚クラブ」発行所・天星社
「裏窓」発行所・あまとりあ社

裏窓叢書第六集

裏窓叢書第七集

裏窓叢書第八集

「ひい……」

すすり泣きのような声をあげた。力がだんだんぬけていく。後頭部が、がつくりとうしろへ垂れ、まるい顎が天井をむいてのけぞった。やや長めにのびている髪の毛が、背中へすべった。胸がそり、のどがのびて、くるしげにあえぎだす。

もだえはじめる美しい被疑者を、角井はうつすらと目をほそめ、右手の指さきで、鼻の下の口ひげをつまみながら眺めている。うす暗い小屋の中の妖しい拷問を、直接手をくさずにしたのしんでいるようにみえる。

「さあ、久美ちゃん。いい子だから、このへんでもう白状しておしまい。金のはいった、あの鞆をどこへかくしたのかね」……

地獄谷の女たち

塔婆十郎作 山田彬弘絵

定価四五〇円 送料八〇円

発売中

「へへへ、お豊、ずいぶんと手間とらせやがったな。可愛い乾分達をさんざん痛めつけてくれた札を、たっぷりかえしてやるぜ」

高手小手に縛りあげられ、口惜しげに唇をかんでいるお豊を心地よげに見下して言う。

「ひ、ひと思いに殺しておくれ！」

お豊は、きつと顔を上げて喰いつくように助五郎に言った。

「まあ、あわててことはあるめえ。おめえの妹、お光もこの家にいるんだ。どうだ。会いたかねえか」

「え？ お光が——」

お豊の顔は真っ青になる。「お、お光はなんのかかわりもないんだ。親分さん、お光だけは許してやっておくんなさい」……

大利根柔肌草紙

花巻京太郎作 鬼頭暁絵

定価四五〇円 送料八〇円

発売中

「おのおの方、今宵のサバトの獲物をご披露申そう」

と牡牛のようなほえ声が広間を圧した。同時にテーブルの前に待ちかまえていた黒人奴隷たちが進みよって、皿の掩蓋をさつと取りのけた。

さすがの悪魔どもも、目前の皿に盛られたものの意外さに息をのんだ。それは羊の丸焼きでも鹿のむし焼きでもなかった。生きた人間である。両膝をあごに着くほどに折りたたまれて自由をうばわれた素裸の若い女たちであった。

銀の皿に散り敷いた髪は赤や紫の花で飾られ、固くかまされた猿轡の上には、おびえ切った瞳がまたたいていた。……

悪魔術の塔

九十九十郎作 中川彩子絵

定価四五〇円 送料八〇円

九月五日発売

読

者

評

論

東京・邦枝克平

現代の魔女裁判



池田首相のとなえた「人づくり」の提言がまさかここまで急激に、しかも具体的な形で発展しようとは、うかつにも考えなかった。

大衆は愚まいなりと為政者が考えようと、隠された大衆の英知は、演壇から訓示を垂れるがごとき思い上がったこのような為政者の押し付けの全く一方的な態度には、本能的に反発をするものと信じていた。

「人づくり」とは、全くの暴言ではないか。まさか全知全能の神でもあるまいに、人づくりをしようなどと、考えること自体が、そして人はそのようなねらいのもとで、自由に作り変えることができるものだと思ふこと自体が、とんでもない錯誤であり、人間の尊厳に対する冒瀆ではないか。

天地創造して後、全能の神は人を創った。そして現在、池田首相は、さらに新しく、人

づくりを考えた。新しい神話の中の、新しい全能の神にでもなるつもりなのか、人間に対するこんな侮辱に、そうそういつまでも、おとなしく大衆はついていくものではない、そう信じてた。

いったい、どんな人間をつくろうというのか、そのねらいはともかくとして、思惑は支配者の意志や命令に忠実な、牧者のいうがままの、おとなしい優良種に性格変えしようというのではないか。

善良なる日本国民、という名の優良種族の生産である。本来なら、最初から、全部今の現状にマッチした注文の仕立服といきたいところを今は寸法やデザインが合わなくなった手持ちの服が沢山なので、これを寸法に合わせて早急に仕立直しをやらうとした。これが第一段階での人づくりである。

かなり時代がかって、古びた手持服だが、生地はしっかりして持ちがいい。しかし、作った時は戦前の義勇忠孝の時代だったので、仕立もデザインも当時の作りになっている。また戦後、物資欠乏の折りに作った、安物の服もある。生地はスフカ放出の軍隊毛布で、作りはラップズボンといった時代、この時代の服は戦前の古い服よりいたみはひどい、型はくずれるで、見られたザマではない。

こういう流行流行の、いろんな時代に、いろんな服を作ってきたが、ここでこういう手持ちの服を一応整理して、全部総仕立直しとやってみよう、そして、もちろんこれから作る服は、最初から、今の現状に最もマッチした仕立服になるように、計画生産をしていけばまちがいはない、ということからの出発であった。

ところが、いざやりかけてみると、どこいなかなかうまくはゆかなかった。戦前作った服は、それでもずい分今までに、諸々方々の仕立直しをやってきた。そしてそれがもう限界であった。存外生地がしっかりしているので、そうそう直しがきかないのである。丈夫でがっしりしていて、ハサミで裁断しようにも、自由自在に切れない上に、ミシンの針も通しにくい。それに、やっぱり生地には生

地に合った仕立てというものがあつて、昔の生地を当世風に仕立直しても、どこかに無理があつてパツとしない。

じゃ、これから新しくできる生地に一つ力を入れて、こちらのねらい通りな新しい型に仕立てようじゃないか、一応上は民主的平和国家の国民という仕立服、そしていつでも、愛サツと裏を返せば、戦争であれ何であれ、愛国心という名の戦闘服なり雨ガッパなり、すぐに直れるような便利な服を、最初からそれにマッチした生地づくりから力を入れて始めようじゃないか、というのが第二段階。

何といつても日本は人的資源に恵まれてゐる。勤勉で能率のよいおとなしい国民が、いわゆる民草ということばで表わすにふさわしい形で、ワンサといふ。これにまさる資源はない。人的資源の開発、体質改善こそが最も焦眉の急で、これを称して「人づくり」というのであつた。

説得しようとして人を説得しきれぬものではない。作り変えようとして人を人為的に作り変えうるものではない。ましてや、指導者のいうがまま、神国日本、万古不易の国体と、天壤無窮の皇運を信じ、身を鴻毛の軽きに大悟立命して、一死以て国に殉ずるの愛国心で義勇公に奉じた結果が、見るも無残な敗戦と

いう、あの惨たんたる結果を見た、その痛恨事の痛みを残した上で、その貴重な体験を骨身に徹して思い知らされた上で、いくら愚まいだど為政者にタカをくくられようと、もう大衆はそうそう彼らの思いのまま、従順に民草然として言うことなんか聞くものではないそう信じていた。

ところがところがある。「人づくり」の暴挙は、着々と進行し始めたのである。

人づくりに関連して始まったのが、「悪書問題」であつた。青少年の健全な育成、ということを旗印に、有力なマスコミの威力を駆使し、大々的な「悪書追放」のキャンペーンを張った。といつても、有力マスコミが、特に自他共に許す大新聞が、その筋の指金でこの種の愚かしい運動を行なつたとは思えない。あくまでも自発的な、有力マスコミとしての自覚と責任感から、この種の運動は行なわれたと信じて疑わない。

しかし、何といつても、このことの結果が何を引き出し、何を引き出しつつあるか、そしてそれがどういう形をとりつつあるか、そのことに対しての責任からのがれるわけにはいかないのである。

これは結果としてはローラーによる地ならしであつた。もうこのあたりで、と、潮どきを見はからつて、その筋、なる者が乗り出してきた。東京都において企図された「青少年健全育成条例」なるものがそれである。

それはもちろん、為政者のいう「人づくり政策」の最も重要な一環を担う条例を意味するが、そしてそのことは、国際資本間に伍して、ようやく台頭しだした日本資本が、その競走力を倍加するための足固めとして、より良質な人的資源の生産と再開発に、本気になつて取り組もうという本格的な姿勢でもあつた。人間問題は、もうここに至つては、人的資源とか一人当たり生産量、とかいった単位計算の仕方ではわかるように、これは既に人間問題を離れ、一個の生産機能に対する、原価計算と、産み出す利準のパーセンテージと、生産能力の評価に関する、重要な一要素に関する問題に還元される質のものとなるものであつた。

故障が少なく、最もスムーズに運転できる優良な生産能力を備えた人的資源、これこそ「人づくり」の最終的なねらいではないのか。つまり機械の整備であり、新しい能力をもった新型機械の再生産である。

だから、彼らがいうところの悪書とは、本

当は青少年を毒するというエロ本より、真に心底より彼らを人間としての自覚に立ってあるがままの真実を見きわめる批判力をもった人間として誕生させる、本当はそういう良書をこそ、言うのである。

サドがなぜ裁かれなければならなかったのか、つまりサドが、あまりにも良書でありすぎたがためであった。真実をつくことによつてのショックを与えすぎたがためであった。出る釘は打たれる、のたとえの通り、釘は一定以上には、出てはならないのである。釘の分際を忘れて、ノコノコはい出してきたがために、そしてはい出すことによって、他の釘に動揺を与えないように、釘は打たれねばならない。

サドが、もし真に良書でなく、単に悪書であつたなら、「サド裁判」なるものは、最初から行なわれることはなかったのである。

これはサドのみではない。彼らが真に悪書として放逐したいものは、そのほかに社会の主義を標榜する出版物がある。単に生産力としてしか評価されない、そしてその範囲のみ自由が許容される動物園の動物のような、そういう立場に置かれていることへの認識を自覚させる出版物、これが、ずばり、彼らが最も恐れる悪書である。

しかし、物事には順序があり、タイミングというものがある。別のことばでいえば、客観情勢である。敵は本能寺にあつても、そこは徳川家康のように、機は熟するを待て、鳴くまで待とうホトトギスである。深謀熟慮が必要である。これでないと天下に取れず人心は収斂でない。

本丸がねらいであるならば、まず外堀、それから内堀、そこまで埋めれば、もう大坂城とてタナゴコロのうち——「人づくり」から「青少年健全育政条例」と、敷かれた計画表に従つての設計図は、指針を本丸に向けて狂いがない。

よほどの変人かヘソ曲がりでもない限り、まずエロ話で腹を立てる人はいない。大抵、どんな人でも、女の話をもちかけると、いちおうはニヤニヤする。緊張した気分までほぐれる。これが人情である。

ところが、これがいったん、私的な立場を離れて、公的とやらしい立場に立ったとき、大抵の人は、よほどの変人かヘソ曲がりでもない限り、エロ話には顔をしかめ、気むずかしい顔をする。これもまた人情である。

そこで、その微妙な人情の機微を捕え、まず外堀はエロなり、ということから始めるのである。公的な立場から、という名分を振り

かざすと、これには公的に反対しにくい客観情勢というのが、人情として付随するというのが、まずはねらいである。また、公的という、一種の詐術的な言葉の暗示によつて、まあ、或る程度取り締まるのも、やむを得ないだろう、という、客観情勢も醸成される、その上、どういう事柄にも一種のマニヤがつきもので、しかもこのマニヤに、大義名分という保護関税的な安全保証がなされることで、良識マニヤという一種の変質者が勢を得、ほつておいても自ら進んで彼らの先払いや行く先々の道路清掃を進んで買つて出、大きな客観情勢というのを醸成するのに大役を果たすのである。

東京は今、今秋間近に控えたオリンピックの受入態勢に大童である。オリンピックによる国際親善、という名の、健全ムードの醸成の中で、「青少年健全育成条例」の制定を、一気に断行しようというのである。もはや昨年度からの「悪書騒動」で、外堀の地ならしは終えていたのである。敢然と内堀の埋立にホコ先は向けられた。

「有害図書、興行、広告等の知事による禁止」こんな条項が、公然と盛り込まれて公表さ

れるほどに、大衆はなめられねばならないのか。ここに至って、今に反発するだろう、今に反発するだろう、と信じつつ、待ちぼうけを食わされつつあった、本能的な大衆の英知が、ようやく遅まきながら、事の重大さにやっと身に迫った問題としての反応と抵抗を見せ始めたのである。

これは「悪書追放」の当の立役者で、真先にお先棒かつぎをした書籍小売店側でも遅まきながら気づいたことによってもわかる。

それは△週刊読書人▽二月十日付の一、二面にわたる大特集座談会で、小売店側を代表しての出席者のひとり、「小売全連理事・事務局長」の肩書を持つ出口一雄氏の発言からわかるのである。

出口氏は、発言の中で

「小売業者が立ち上がって、悪書の自主規制をやらなかつたらどうなっていたかということと考えれば、やはり断行してよかったと思いますね」

と、あくまで自主規制ながら、悪書追放の立場を是認し、いわゆる社会良識の代弁者的立場に居ながら同じ座談会の中で、

「言論出版の自由を守るため、この都条例の動きに対して、もっと出版業界あげての反対運動をすべきだと思うんです」

と発言していることが注目されるのである。

「小売業者、版元、取次、多少の利害関係の相違がありまして、相剋もありましたけれども、言論出版の自由を守るという一点においては、出版倫理協議会の構成四団体とも、一致しておるわけです。もっと熾烈な反対運動を展開すべきじゃないかと思う位です」

悪書追放運動を、真先に率先してやっている小売業者の発言としては、ずい分矛盾した言い方だと思われるが、これにはこれなりの筋が通されていることが、座談会の記事を通して読んでみると理解できる。

つまり、自主規制とは、あくまで最後まで自主規制なのであって、このことに関しては絶対に当局の干渉は許したくない、ということと、つまり法律による取締まりには絶対反対の立場を堅持する、ということに通じるのである。法律による取締まりや、当局による干渉を招きたくないがために、自主規制をやったのだ、というわけである。

だから、もし、今度の条例が制定されるということにでもなれば、今までの業者の、折角の自主規制もむだな結果となり、

「全国の書店は、単に当局側におどらされてムードづくりの一役を買ったことになり、そ

の努力と経済的犠牲は空しく、善意は全く裏切られたということになります」

つまり同じ座談会の出席者のひとり、「東大新聞研究所助教授」の稲葉三千男氏が、会の結論として締めくくった次のことは、

「それでは、悪書についての意見の不一致を越えて、出版・表現・言論の自由を守るという一点では、統一戦線が組まれるわけですね」ということで一致するのである。

「法の介入だけは絶対に許してはいけない」これが大衆の、一致した、本能的に身につけた知恵というものである。

ただ、ここで大きな問題が残るのである。

出口氏が述べ懷して言うように「単におどらされてムードづくりの一役を買った」

ということとは、その気づき方が少しおそいのではないか、それは最初から、既にわかっていたことではないのか、ということへのじれったさ、はがゆさである。何でこんなわからなかったことがわからなかったのか、またわからないうちなのか、ということへのもどかしさ、腹立たしさである。

「悪書征伐」とやらが喧伝されていた昨年十

一月九日付の《図書新聞》紙上に、評論家の荒正人氏が「悪書と善書」と題する一文で、この悪書問題の本質が本丸をねらう外堀埋めの布石を意味する以外の何ものでもないことを論じ、その結びとして次のように述べていた。

「ワイセツから、必要とあれば、何時でも、他の領域に拡大されるであろう。たとえば、反国家主義という名前をつけられよう。民主主義、自由主義、個人主義などの要求をふくむ本を、すべて反国家主義と名づけることもできよう。いきなり、そんな攻撃を始めても余りききめはないが、ワイセツ文書で、地固めをしておけば、拡大と強化の足掛りとなることは疑問の余地がない。悪書征伐は、その布石の一つとみなすことができるかもしれない」

荒氏が「その布石の一つとみなすことができるかもしれない」と案じていたことが、そのまま、現実の形をとり始めた。それが今回の、「都条例制定問題」である。

それは当時から案じられていたことであつた。しかし、それが現実には、こういう形で現れないと気づかない人もいた。気づいていても、あまりにも「悪書追放」の意義を善意にひとりがてんに納得しすぎていた。

それでこれが「都条例」という、為政者による公然とした政治的干渉の形で現われてくると、運動の当面の立役者であつた小売店側も、前記の出口さんのように、あわてなければならなくなった。

しかし、あわてる人はまだしもである。まだ「悪書追放」の意義に、執拗にこだわっている良識マニヤの小売店の親爺が沢山居る。そのひとりが朝日新聞三十八年度十月六日付の朝刊に「悪書追放に立上がつて」という一文を寄せた「甲府書籍雑誌商組合長・春光書店主」のような立場の人たちではなからうか。

荒正人氏は述べている。

「宮川武の『悪書追放に立上がつて』は奇妙な文章である。たとえば、敬語の使い方である。

- ① たまたま県庁の青少年対策本部の方がおいでになり
- ② 県庁からも係官数名がお見えになり
- ③ 県でそのピラを心配して印刷して下さいましたので
- ④ それで県庁の方に出席をお願いして、もう一度会合を開きました。

甲府商人といえ、根性のすわった点で、みんなから恐れられている。だが、春光堂さ

んには県庁の小役人にも対等で話ができない。熊王徳平の描いた甲府商人の姿は、どこにも見られない」

と、そもそもの思考法の最初からの出発のあり方を問題にしている。

これで見ると、ピラは県で印刷してくれたらしい。全く、県と小売店の慣れ合いではないか。最初からの共謀ではないか。

だが寒心に耐えないことは、「悪書は有害だ」という、牢固として抜きがたい一般の受け取り方だ。それは一般ばかりではなく、小売店側にしても、同じことが言える。政治家や検察側や教育家や、またPTA的思考法が糊化して、それが固くこびりついたままであるような、父兄たちが、本気になって「悪書の害悪」を信じていることだ。

良識マニヤと、被害妄想がここで固く手を結ぶのである。これは為政者にとっては、実に重宝な、天然の地ならしが、既にでき上がっていることを意味する。「悪書の害悪」意識を、法律による出版の取締まりを、との要望にまで、結びつける道は平坦で、それは誠に一瀉千里なのだ。出版の取締まりから、全体主義国家への移行は、ホンの一息だ。

民主主義の最大の原則は、他人の自由な考え方に、おせっかいをしないということでは

ないか。そしてそのことは、これが絶対に正しい、という考えはまず存在しない、という、誠に謙虚な反省と自戒が一つの知恵となつてそうさせたのではなかったのか。

この最大の原則を、最初に踏み破ろうとする者はだれであるか、このような民主主義の敵はだれであるか、それこそ良識マニヤという偏執的人種ではないか。彼らは、いつの時代にも蟠居していて、検力者のお先棒かつぎをやるのである。そして権力者にとって、最も従順で都合のよい、そういう人づくりに協力するのである。良識マニヤは、自分の考えを絶対視し、これを人に押しつけることが好きである。そして他人の自由な花園の中に、土足で踏み入る無神経さを身上とする。「善意」という名の通行手形で、ゴムヒモの行商人以上の悪質な押し売りをするのである。

戦時中、「ぜいたくは国民の敵だ」ということで、長いタモトを切るために、ハサミを持って街頭に立っていた国防婦人会員の姿を思い出す。

こういう良識狂、善意狂のマニヤに比べたら、まだしもサドやマゾ、あるいはホモのマニヤなぞつましくてかわいいものだ。これはこれ、あれはあれ、という物事のけじめや、分相応の身のほどを心得きっている意味では

はるかにおとなである。他人の自由、他人の世界を尊重すること、これほど徹底した民主主義者はいない。彼らは、善意や良識の盲信には陥らないが、ルールだけは信奉する。

出版物取締りの法律による規則化の先触れとなつた、「不良出版物追放運動」に寄せて、三八年十一月四日付の「週刊読書人」は「現代悪書論」という特集をやつた。その中でサドの紹介者として知られる沢沢龍彦氏が述べている。

「ちよつと話は違ふが、ついでに思い出したから書いておきたい。御存知ない方も多いかと思はれるが、神奈川県小学校に「ネ・サ・ヨ運動」というのがある。

「映画にネ、行つたらサ、先生にヨ、会つちやつてサ——」といったような「悪い言葉」を、矯正しようという運動である。友達同士が検察官みたいに目を光らせて「悪い言葉」を使った相手を教師に報告し、教師は彼に注意を与える。大きな紙人形をつくつて、これに「悪い言葉」を書きつらね、「もう絶対にこんな言葉は使いません」と一同誓いながらこの人形を焼き捨てる。

そんなことをしても、どうしても言葉使い

の改まらない「問題児」がいるのだそうである。そして、そういう子供は、教師たちの意見によれば、要するに「家庭の環境が悪い」のだそうである。

わたしは、新聞の地方版で、この馬鹿々々しい「ネ・サ・ヨ運動」の記事を読まされるたびに、むらむらと不快な気分がこみあげてきて、怒り心頭に発するのをおぼえる。

ぜんたい、「悪い言葉」とは何だ、「問題児」とは何だ！ 氣違沙汰も休み休みにしろ！ 魚屋の子供は魚屋の子供らしく、乱暴な威勢のいいオヤジの言葉を真似して使うだろうし、ブルジョアの「さあます」夫人の子供は、ブルジョアの子供らしく、虚栄心の強いおフロの言葉を真似て、変にこましゃくれ口のかき方をするだろうサ。この場合、魚屋のオヤジの言葉は「悪い言葉」で、ブルジョアの奥様の言葉は「良い言葉」とでも言うのだろうかネ。冗談じゃないヨ。笑わせちゃいけないヤ。どんな言葉だって、血の通つた生活人の言葉である以上、「悪い言葉」などというものは存在しないのだ。

同様に「悪書」と「良書」の区別も、本質的には存在しない。

存在するという幻想をいだいているのは、道德家ぶつた氣違いだけである。彼らは、自

分たちの思い上がった道徳家意識が、どれだけ人間を侮辱しているかということに、少しも気がついていない。

当たり前な日本語を使っている子供をつかまえて「家庭の環境が悪い」など、よくも言えたものである。それは健康な生活人に対する、由々しき侮辱である。

神奈川県の小学校の先生も「悪書追放」を叫ぶ婦人会や青年団の連中も、その意識構造は同じである」

さてそれでは、今や脚光を浴びた当面の「悪書」そのものは、いったい何なのか、何をさすものか、渋谷氏は「悪書も良書も本質的には存在しない」との立場をとるが、同じ紙面で評論家の三宅艶子氏は

「山に登ったこともない人が書いた登山の手引だの、食べられない料理の出来てしまう料理の本を私は悪書と思う」との立場から、次のように述べている。

「『悪書』とはどういう本のことだろう。悪書、悪い本、口の中で言っている。『良書推薦』『悪書追放』という言葉があるが、良書というとなんだか押しつけがましくて、いやな本のような気がする。悪書という方が、いい本のように思われるのは、私の天邪鬼であろうか。——中略——悪書として今槍玉に上

がっている小さな週刊誌や実話雑誌など、たしかに良書とは認められないが、その害毒などたかが知れている。追放などされない出版社で出している女性雑誌の中の方にかえってひどく不真面目で、人を惑わすものが載っている。

またこの頃の少年少女の雑誌に眼を向けるなら、その悪書振りに人は驚くだろう。どぎつい言葉、ショッキングな事件、なんの内容もない。あるとすればかつての戦争を面白そうに吹きこんでいることだ。

たまにその種のものを読むと、これこそ悪書！ と叫びたくなるが、これも考えて見れば一冊の悪書ではなく、今の一つの風潮なのだろう。

芸術作品は、一人が悪書と思っても、別の人が良書と感ずるかも知れない。思想の書はその思想に反対の人からは良い本が悪書と見えるだろう。

そう思って来れば、悪書など一つもなくなる。が、なんとまあ悪書の多いことだろうと店頭を見渡せば、良い本を探し出すことの方が困難だ」

同じように映画監督の羽仁進氏も次のように述べている。

「悪書といい良書といっても、それが読者の

中へ、どんな風に入っていく、どんな影響をどのくらいもちつづけるのか、それが問題である。読み方が違えば、当然同じ本でも、違って受け取られる。あらゆる悪書裁判が、奇妙にこっけいであり、同じ本をこうも別の角度からよむ人がいるのかと思わせるのもあたりまえだ」

「悪書」について、「日本評論社出版部長・東京学芸大学講師」の清水英夫氏は図書新聞の「五月通信」欄で次のように述べている。

「まず答申案にある『有害出版物の排除及び指定』の項を見てみよう。そこには、『著しく性的感情を刺激し、又はなほだしく粗暴性を助長するおそれがある等青少年に有害な出版物、興行、広告、玩具等について自主規制のみでは限度があると考えられるので、然るべき審議機関の議を経て有害な度合を認定せしめ、これに必要と思われる措置を考慮することがのぞましい』とある。

そこで第一に、『有害出版物』とは何か、ということが問題になる。これまでの各地の指定や悪書追放運動の実情をみても分るように戦記物や自衛隊物が槍玉に上ったためはないから、当局の考えている有害図書とは、

九〇%以上エロ本だと思ってい。

しかし、れっきとしたエロ本は刑法一七五
条で禁止されているのだから、条例で規制し
ようとしているエロ本は、刑法のワイセツ図
書に至らない好色本だということができる。
つまり、刑法のワクを広げようというのであ
る」

三十八年十一月六日付の毎日新聞の夕刊で
作家の武田泰淳氏は、良書の皮をかぶった
一見紳士風、淑女風の書物こそ悪書だときめ
つけながら、次のように述べている。

「海外の名著が翻訳される。原著は確かにす
ばらしい。だがその日本訳が、正確でもなく
愛情もこもっていないとしたら、それは悪書
となる。百科全書や辞典の出版には、たいへ
んな時間と経費、気苦労と努力がいる。でき
あがりも堂々としているのが多い。だが、い
かに風格は立派、装丁が堅ろうでも、どこか
に手ぬかりがあつて、孫びきやひきうつしに
過ぎない部分がありとすれば、これも悪書で
ある。はなもちならないエゴイズムから出発
して、ヒューマニズムをよそおった悪書もあ
るし、「ここらならウケるだろう」と大衆を
バカにしてでっち上げ、けっこう良書として
もてはやされる場合もある」
と、「悪書」の定義を下すことの困難さと、

そのことの無意味というか、バカバカしさを
指摘しているのである。

サド裁判に寄せて、文芸・美術評論家の栗
田勇氏は、昭和三十七年十月二十九日付の「早
稲田大学新聞」で述べている。

「すべての書籍は青少年少女向に家庭団らん
の場で読むように書かれてはいないし、部分を
つなぎあわせれば広辞典だって立派なワイセ
ツ文書だ」

さらにサド裁判の折り、昭和三十六年八月
十日の日付で、弁護人の大野正男、中村稔、
柳沼八郎、新井章の四氏が連署で述べた意見
陳述の中では、悪書の定義に關しての問題を
歴史上の事例から見てこう言っている。

「古くは、ダンテの『神曲』が焚書の刑をう
け、ボッカチオの『デカメロン』は禁書とな
った。ホーソシの『緋文字』、ホイットマン
の『草の葉』、マーク・トウエンの『トム・
ソーヤー』は発売禁止となった。トルストイ
の『クロイツェルソナタ』も一八九〇年米
郵政省で禁止されたがその際セオドル・ル
ーズベルトはトルストイを『性的かつ道徳的
変質者』と非難した。

フローベルの『ボヴァリイ夫人』、ボード
レールの『悪の華』はフランスにおいて発行
したことによって処罰をうけた。

それはすべて『猥褻』ないし『善良な性的
道義心に反する』との理由によるものであつ
た。

しかし今日において、何人がこの処分を肯
定するであろう。これらの発禁措置や処罰は
性的道義や秩序を守ったどころか、むしろ人
間の自由の歴史のおおしい汚点となったこ
とは今日何人の目にも明らかである。——わ
が国における『チャタレイ判決』、ヘンリー
・ミラーの『セクスアス』の略式命令も又この
例にもれなかったとわれわれは考える」

歴史上、いかに悪書の名において、多くの
名著が、時の権力側によって断罪されてきた
か、こう見てくると、いわゆる悪書という目
ざすものの認定が、困難かつ不可能なこと
であるか、その定義の仕方の被害妄想的な
まいさ加減が、事実においても、諸家の意見
に徴しても明らかかなこととなるのである。

一四九七年の謝肉祭の日、サヴォナローラ
はフィレンツェの広場で、異教の書物をこと
ごとく焼いた。一九三三年五月十日、ヒト
ラーはベルリンのオペラ座前広場で、いわゆ
る墮落芸術やユダヤ思想の本をことごとく焼
いた。そして現在、日本では、埼玉県で、そ

して福岡県で、政治家と婦人会と青年団が手を結び、「悪書」を集めてタイムツで焼き、そのことをカムペーンまがい大新聞が、麗々しくこれを推賞まがい報道した。奏の始皇帝の有名な焚書の時代が、この文明の民主主義の社会で、よみがえったのだ。

焚書という行為を間違い沙汰とするも、法律という権力で出版物を規則しようという思考法もまた同じムジナの間違い沙汰である。先の「サド裁判」における「弁護人意見陳述」でも、そのことに触れて述べている。

「人間の自然的行為を処罰する法規範は、時代的社会的に永続性をもつが、価値意識に支えられた法規範は、時代、社会と共に変転極まりない。これを何度か裁判所が試みたように抽象的に定義し、例えば「徒らに性欲を興奮又は刺戟せしめ且つ通常人の正常な性的羞恥心を害し善良な性的道義観念に反する」ことと定義してみても、所詮その内容は、時代の風俗、思想によって決定される」

と、そのことの野蛮さをついている。「意見陳述書」ではさらに語気を強め、かつての最高裁における「チャタレイ判決」を引用しながら、検閲官意識の本質を猛然とついで述べている。

「このような基準（条例）は、必然的に警察

などの行政機関を、そして時には裁判官をさえも思ひべき検閲官の心理へ駆りたてるのである。それは最高裁判決を世に一層有名にさせた次の一章が端的に示している。

「裁判所は良識をそなえた健全な人間の観念である社会通念の規範に従って、社会を道德的頽廢から守らなければならない。けだし法と裁判とは社会的現実を必ずしも常に肯定するものではなく、病弊墮落に対して批判的態度をもって臨み、臨床医的役割を演じなければならぬのである」

裁判所がこのように道德的に気負いたった見解の下に、文化的作品の価値判断にのぞむことをわれわれは最もおそれる。人類の文化や芸術は決してこのような見解によって保護されるものではなく、むしろ、不幸にも数多くの歴史的事実が示しているように、それは検閲官意識を正当化し、文化の保護ではなくて、迫害に力を貸したのである」

同じく「サド裁判」において、被告人であった渋沢龍彦氏が述べた陳述の中に、現在の「悪書問題」にからんで、傾聴に価する次の一節がある。

「昔、西洋の中世に魔女裁判というものがありました。当時のひとびとは魔女というものの実在を信じていて、何千人もの人間が魔女

という名のもとに焼き殺されました。そしてこの暴挙を精力的に行ったのは、当時封建国家の権力と手を結んでいたカトリックの坊主どもです。実際は魔女とは単に正統キリスト教以外の土俗宗教を奉じていた異端者の名にすぎません。現在では、魔女の実在を信じている人間はひとりもおりませんし、魔女信仰は一種の社会的なヒステリー現象、妄想だといふことがわかっております。

わたしは、猥褻（悪書エロ）もまた、二十世紀における、魔女妄想に似た一種の社会的なヒステリー現象、妄想だと考えます。権力につながる人間がこの妄想を社会全体におしひろめるのです。自分たちの腐敗や不正をあばき出す文学作品や思想の書物に、猥褻（悪書）という、本来どこにもありはしないものの名前を貼りつけて、自由な出版活動を社会から葬り去ろうとたくらみます」

というふうな、権力と自由という、宿命的な、しかもラジカルな命題に食い下がったことが、記憶にまだ残るのである。

「悪書」は公序良俗の敵であると、二口目には言われる。しかし、そもそも公序良俗なるものは何か。この本質は、実は時代時代の権力の核を中心に、それを保護し守るかのよう

に、その防波堤的役目を果たす衛星的風潮を

いうのではないか。別のことばでいえば、いわゆる取巻きの精神である。

取巻き精神は子どもの時から教育される。

一名、おもねり精神である。小学生にとって、教師は絶対である。絶対の権威を持つ教師を中心に、取巻きの子どもができる。

ある程度以上に成績がよくて、カンが働き家庭のスジも良く、かわいらしい子、そしてよく教師のいうことに忠実である子、

——光生、だれさんは、あんなことをしていました、こんなことを言っていました——

と、ご注進に及ぶような子、——こういう子でもって、自然と取巻きができる。放課後も課目以外に、そういうグループが教師を取り巻いて、勉強をしたり、いろんな話題に興じたり、あるいはピクニックに行く約束をしたりする。

取巻きの子供は、いわゆる学校ではまず優秀で品行方正な子供だ。公序良俗にすなおな子だ。そしておせっかい好きな子だ。

——君、そんなことしちやダメじゃないかな——などと、たしなめることが好きである。

このような子供は、本当の意味での友情というものとは無縁な子だ。やむにやまれぬ友情からの忠告ではなくて、エリート意識じみた思い上がり、教師という権威におもねる

こびへつらいの精神から、自分たちの仲間を見下しているにすぎないのである。この精神が、——あつ、先生に言いつけるからな——となり、——だれそれさんは——というご注進主義助長の風潮を生んでいくのである。

「悪書追放」に熱心な小売店のオヤジさんや婦人団体や、青年団の幹部は、こういうご注進主義的取巻き精神を、そのまま持って育ったおとなたちである。

天下をうれえ、世情を嘆く、ということはこんな女の子のするような、うじうじした精神とおよそ逆のものだ。また、本当の同胞愛、人間愛というものは、こういうテイサイだけの公序良俗精神なんかでは「わかってたまるか」というものである。

しかし、教師にとっては、その精神が何であれ、飼ひ慣らされた犬や羊のように、おとなしくてよくいうことをきき、何でもご注進ととんできてくれるような、取巻きの子供の存在が必要なのである。おおむねクラスの秩序は、こういう子供の存在で維持されるからだ。彼らは教師という権威を持つ者の側の代弁者であり、スパイでもある。

スパイ教育と、権威におもねる便乗意識とで教育された子どもは、いわゆる「悪いマンガ本」も読まなければ、「チャンバラ映画」

なども見ず、ガリ勉をし、「母の日」にはカーネーションの花を買ってきて母親にささげごく一部のグループをさそって誕生日のパーティを開いたりする。

全く何一つ波風立たず、結構づくめの公序良俗には違いない。そうして、こんな温室の中のママゴトめいたきれいなことばかりが世の中だと思いこんで、そのまま育っておとなになったのが、婦人団体の幹部になったり、教育委員になったりして「悪書追放」なぞとヒステリックに叫ぶのである。それは単に取巻き精神がそのまま育って、時の大きな権力におもねっているのにすぎないのである。従ってこういう公序良俗の手合いは、「流行に弱い。思想から風俗、習慣に至るまで、徹底したマナー族である。マナーに人間が振り回され、従属して、そのことに疑問を感じることはない幸福な種族である。

今は既に物故して故人となった文豪正宗白鳥がこんなことを言っていた。

「トルストイが家出して、田舎の停車場で病死した報道が日本に伝わったとき、人生に対する抽象的煩悶にたえず、救済を求めるための旅に上ったという表面的事実を、日本の文

壇人はそのままに信じて、甘ったれた感動をおこしたりしていたが、実際は妻君をこわがって逃げたのであった。世界の識者に信頼されていたトルストイが、山の神を恐れ世を恐れ、おどおど家をぬけ出て、孤往独まいの旅に出て、遂に野たれ死にした径路を日記で熟読すると、悲壮でもありこっけいでもあり、人生の真相、鏡にかけて見る如くである。ああ、我が敬愛するトルストイ翁！」

いわゆるトルストイは、「良書」に死んだのではなく「悪書」に死んだのである。そのことに敬愛を覚えると正宗白鳥は言っているが、おそらく偉人としてのトルストイ伝を良書に書くとなると、それは整形手術を施し、メーカーシップをした、こしらえもののトルストイになってしまうのである。それでは敬愛どころか何の感興もわからないのである。あえていえば、こういうものが「悪書」といえるのである。

旧制中学の時代、教科書以外の、特に小説類はいつさい持参してはならぬという校則があった。ひそかに、机の中に、文庫本の小説などひそませていると、大目玉を食って本は没収された。そんなものを読むのは、不良少女か不良少年なのであった。特に夏目漱石と森鷗外は許されたが、高山樗牛や泉鏡花にな

るともういけなかった。ましてやスタンダーやモーパッサンなんぞはもってのほかなのである。

軍国主義が濃厚なった戦争前、△風と共に去りぬ▽が爆発的に売れたのが印象に残る。しかし、すぐにそれは影を潜めた。つまり当時においては、敵国産の、しかも悪書であったからだ。では最大の良書は何であったか、△葉隠▽と△戦陣訓▽と△吾が闘争▽であった。当時中学四年生のころ、にもかかわらず△風と共に去りぬ▽を持っていたというかどで、往復ビンタを受けた上、一週間の停学を受けた。その摘発者は教師や配属将校ではなく、クラス委員であった。

今やまたまた△風と共に去りぬ▽がベストセラーになっているという。そして若い人たちの間で、アシユレがいいか、レットバトラーがいいかと、格好の話題を提供している。しかし、結局、断然としてバトラー株が強いそうだ。おもしろいものだ。いわゆるアシユレは良書的人間で、バトラーは悪書型のタイプだ。

バトラーは背が高く、頑丈で肩幅が広く筋骨たくましく、そして無作法で無遠慮で海賊のような目をして、だれからもきらわれ軽蔑された。彼が世間一般の習俗に従わず、思う

ままに生きたからである。

バトラーは紳士の守るべきその種のものを勇敢にけとばしてゆく。公序良俗という名のまやかしや無価値さ、無力さを、遠慮なくひっぱがしてゆく痛快さ、飼ひ慣らされて仲間を売り、権力側にご注進に及ぶ取巻き精神のいぎたなさを、コテンにやつつけるおもしろさである。これぞ正義の士である。レットバトラーの人気は、いつまでたっても決して衰えることはないであろう。

バトラーは、にせものに対しては無礼だが本物に対しては敬虔で礼儀正しい。きわめてデリケートな神経をもっている。本当の意味の紳士なのであるその紳士であるところに人氣があるのである。

エセ紳士エセ淑女ほどこいやなものはない。エセ紳士、淑女間のお作法を称して、法律でいうところの「公序良俗」なる言葉が産まれる。「なぜ公序良俗という觀念が不愉快な思ひ出につながるかといえ、それはやはり民主主義の否定と密接な関連があるからである」

と先ほどの清水英夫氏は述べている。

「安寧人秩序▽とか、△風俗▽壊乱とかのよう、官憲が自分の氣に入らぬ国民の行動を嚴重に取締ろうという姿勢が、まさにこの隠

語を生んだのであった。——今日、マスコミという無冠の帝王がいて言論はかなり強者となった。そこで官憲は——いちおう低姿勢である。しかし、ペコペコしっぱなしではやはりお上の威光にかかわるから、どこかで「弱きをくじ」かねばならない。かくて、風俗営業というのが、官憲の祭壇に捧げられるのである。——「公序良俗」は、悲しいことにやはり生きているのである」

それが今回の「条例問題」だ。

「自由は、それが義務づけられた瞬間、「自由」であることをやめる。四月二十四日、東京都青少年問題協議会がまとめた「青少年健全育成条例」に関する答申案は、まさに、この義務づけられた自由である。なぜなら、答申案の第四項は、「出版物の自主規則」として、次のように述べているからだ。

「青少年の健全育成をはかるため出版物、興業等の関係者は、相互に協力し緊密な連絡のもとに、この目的を達成するように努めなければならないと規定することがのぞましい」自主規制するように法が義務づけた場合、一体これは人自主V規制の名に価するであろうか。それはちょうど、資本家にすすめられて作られた労働組合のようなものである。

答申案はこのほか、ひきつづき第五項とし

て「優良出版物等の推奨」を規定しているがまさに「アメとムチ」を地で行く光景である」

清水氏はさらに続けて述べている。

「裁判批判や宗教冒瀆はおろか「結婚を神聖視せず、家庭を尊重しない」とか「道徳にそむくような男女関係を魅力的に取り扱ったり又は肯定するような表現をした」とかいう、凡そ芸術抹殺の取締りが行なわれる可能性は残っているのである。

「まさか」と思わないでいただきたい。たとえば、そのようなバカ気た規制を、よもや東京都とあろうものが行なわぬとしても、取締側や父母の会のセンスは、全く右の線に近いのである——勲章賛成、ワッペン反対の思想が青少年対策を貫いている」

今回の答申の目的は「青少年の不良化を防止し、健全育成を図るため」「悪書追放」に及んだのであるらしいが、これはちょうど人間を「保護器」に入れて、温室栽培で育てるようなものだ。見せず、聞かせず、知らさせず——こういう育て方をされた人間が、はたして一人前のおとなとなりうるであろうか。水とは蒸留水のことではない。雑多な不純

物を含みながら、しかも含むことで生々とした独自の風味を持つのが、本当に生きた水である。

何のために赤ん坊にハシカや小児マヒの予防注射をし、生ワクを飲ませたりするのか。免疫をつけ抵抗力を増させるためだ。免疫や抵抗力がなくて、何で健全といえるであろうか。

——かわいい子には旅をさせ——昔の親のほうがかしこかった。旅といっても今のバカンスムードの物見遊山的なものではない。旅とは、困難で苦しいものであった。親もとを離れ、自分で苦しみ、自分で判断し、自分で行動することであった。それは肉体鍛錬以上精神的鍛錬の場であった。それで、だれも頼りにせず、自分ひとりで自主的に行動することから産まれる、社会人としての自覚と自信を醸成する場でもあった。

旅には誘惑がつきものである。その誘惑の中でどう対処し、誘惑とどんなつきあいをし、どういうぐあいにおとなとしての知恵や才覚を身につけていくか、それも子を旅に出す親の期待する課題なのである。

今の親は、大学の入試にもつきつきりである。大学生も子ども並みである。親の付添いが必要れば、どこにも行けないヒヨワな大学

生をハンランさせるのである。

「チャンバラ」や「西部劇」のおもしろさを人工的に知らせられずに育った子は、かたわだ。セックスへの興味を、がんじがらめにサルグツワ、目隠しで封じられて育った青少年は、やはりかたわだ。それは人工的につくられた、愛玩犬のようにグロテスクだ。親の自己満足を果たすベツト用の子どもなのだ。

こんな残酷な話があるうか。大いに外に出し、はだして大地の上を駆け回らせ、自由に野の空気を呼吸させてやるとよい。

健康な子供とは、ヒザッ小僧にすり傷をつかった子だ。すり傷がその子の健康さを証明する。雑菌がはいっても、そんなことぐらい平気な子が健康なのだ。そのような健康さを与えてやることこそ健全教育だ。見せず、聞かせず、知らさせずで、何が健全と言えるだろう。

子は親の鏡という。青少年はまたその社会の鏡である。青少年の不良化は、一面その社会自体の不健康さを反映したものである。

鏡に映った自分の顔がみにくいとて、それをなげくにもあたるまい。本当にその顔を直したいなら、自分の顔を直すことだ。

東京都庁は、別称を東京伏魔殿という。そこには不正証紙事件なぞでたたかれても、ビ

クともしない、不死身の都知事という魔王がいる。あの複雑な選挙のカラクリは今もってわからない。そして伏魔殿は、また汚職の殿堂である。そういうところの都知事が、いっさいの権限をにぎって、これは良い本だ、これは悪い本だと、判定を下すのだという。こんなばかなことがあってよいものだろうか。ちようと戦時中の指導者で、鬼畜米英、撃ちてしまんの特攻精神を最大の道德だと教えていた戦犯者が、今では口をぬぐって民主主義や親米平和を最高の道德と高い所から国民に教えている奇怪さと同じだ。

今は手もとにないが、最近の朝日新聞紙上に、作家の遠藤周作氏が、施設児の極度に貧困な状況におかれている実情を、痛憤やるかたないといった調子で訴えていた。

親のない子はみじめである。自分の子供や仲間の子どもには一応優しく親切だが、関係のない親なし子や捨て子には、この社会は誠に冷酷無残なりである。食い盛りの子どもたちが、残飯あさりをするほど、いつも飢えた状態ではっておかれているのである。

自分の息子や娘には、通学用の自動車を買ってやるほどやさしいママが、美容のために売血学生という貧困学生が存在なぞは、全く

トンと無関心なのである。

列車の中で、ささやかなバクチをやって現行犯で通勤者がかまった。競輪・競馬に宝クジなら座元が国家権力なんだから、大っぴらだ。

青少年を健全にしたいと、本気になって考えるのなら、なぜまずこういうことから手をつけないのか。むしかえし言い尽くされてきたことなのに。

「日本文芸家協会」、および「児童文学者協会」でも、いちはやく東京都の企図には強硬な反対声明で反発した。

「もしこの規制がひとたびゆがめて運用されるとき、健全な出版物に大きな悪影響を及ぼすことはもちろん、憲法で保証されている言論・思想、出版の自由をおかすことになる。また『深夜外出の禁止』についても、勤労青少年の自主的な活動を抑制する不安をぬぐいきれないのである——すみやかにその制定の中止を要望するものである」

という「児童文学者協会」の五月二十日付の反対声明は、同時に日本文芸家協会の立場でもあり、広くわれわれ読書人、一般大衆とごくをこめての立場でもある。

輝やける女性





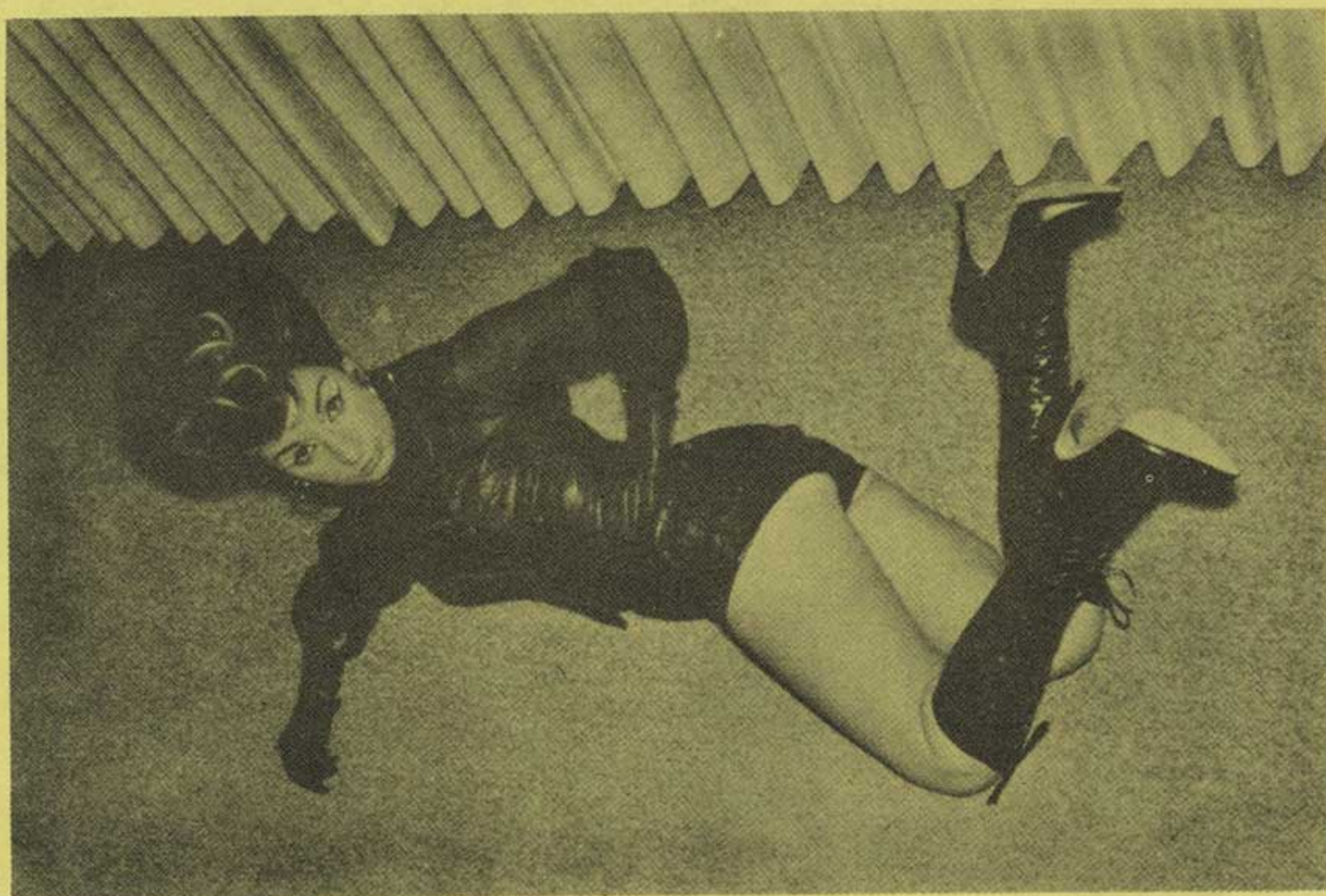








モデル……リンダ・デ・フェレロ





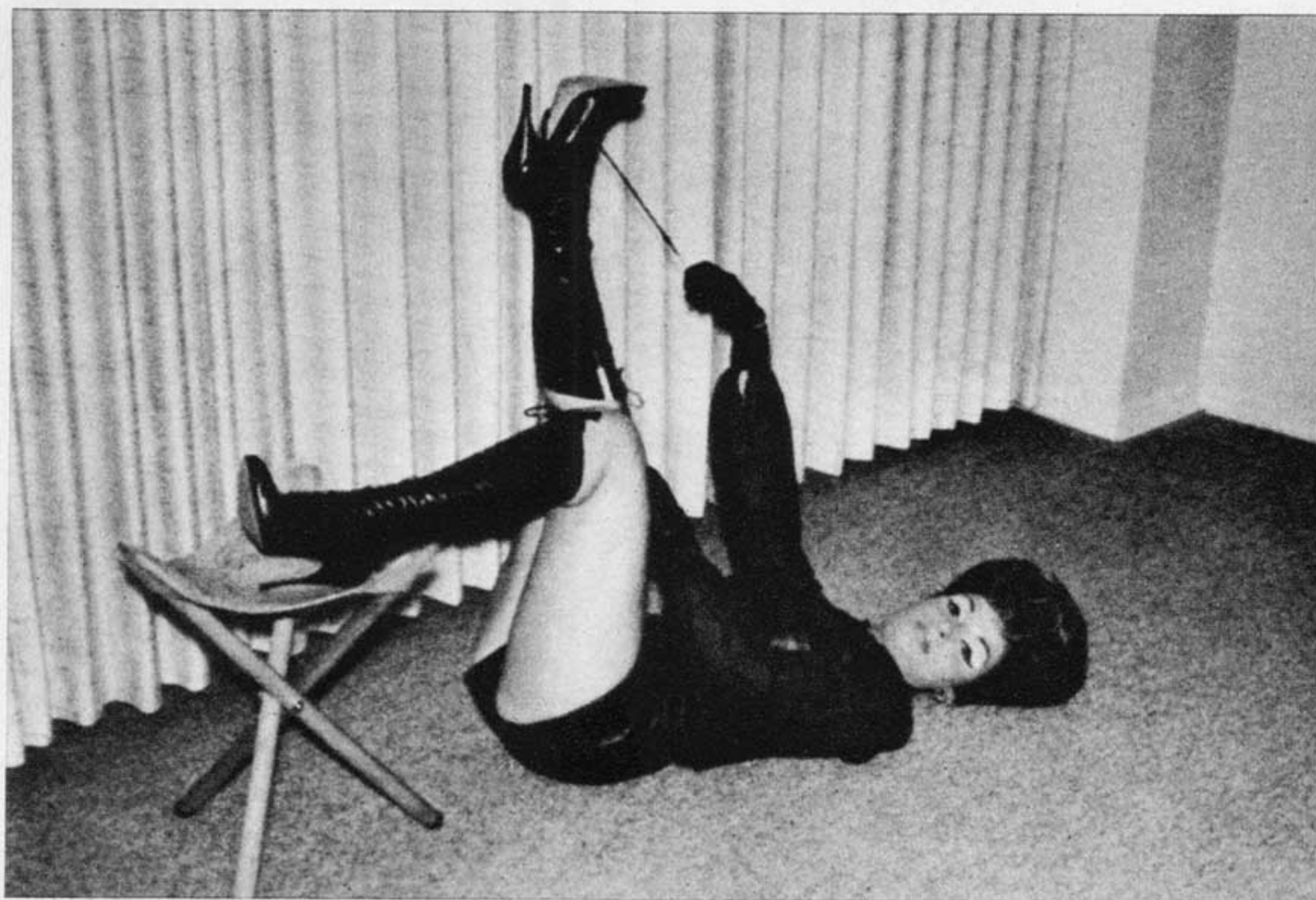
輝ける女性

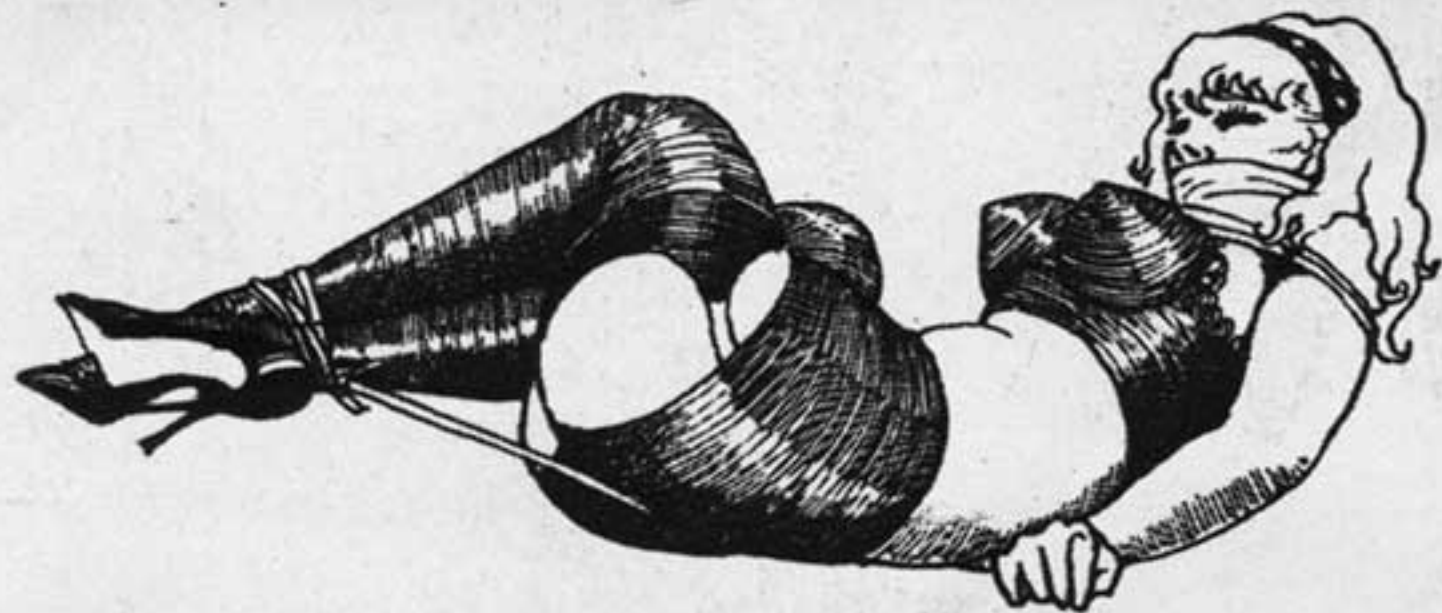


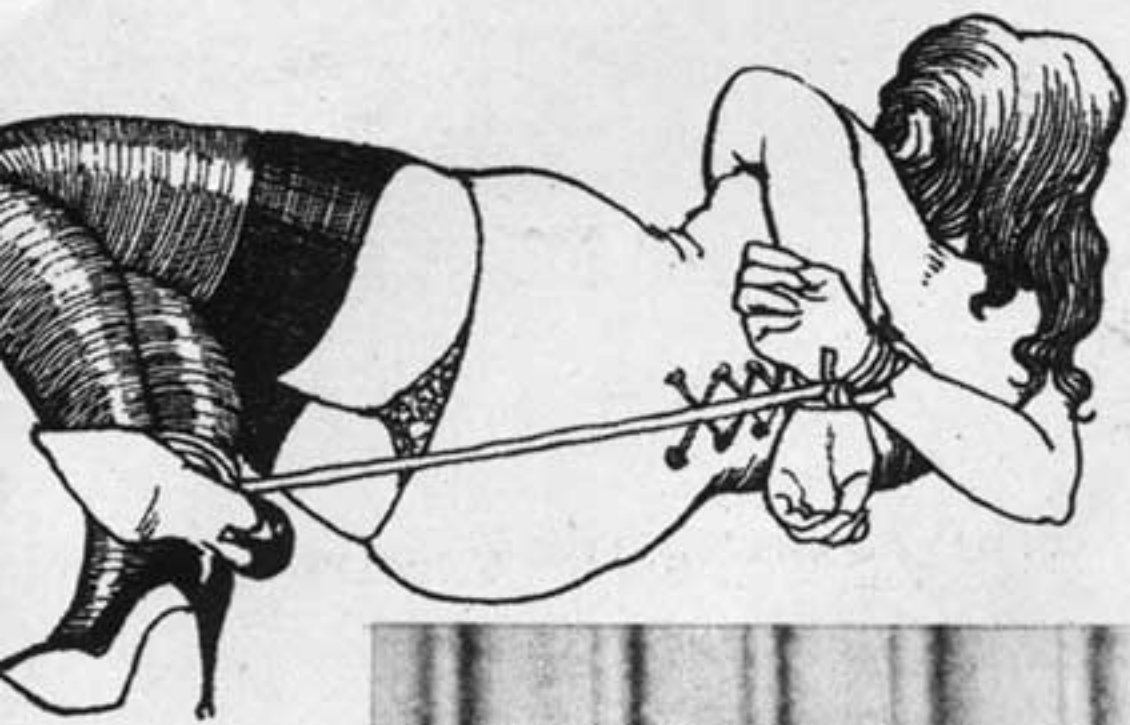
北米・フェニクス商会・特約

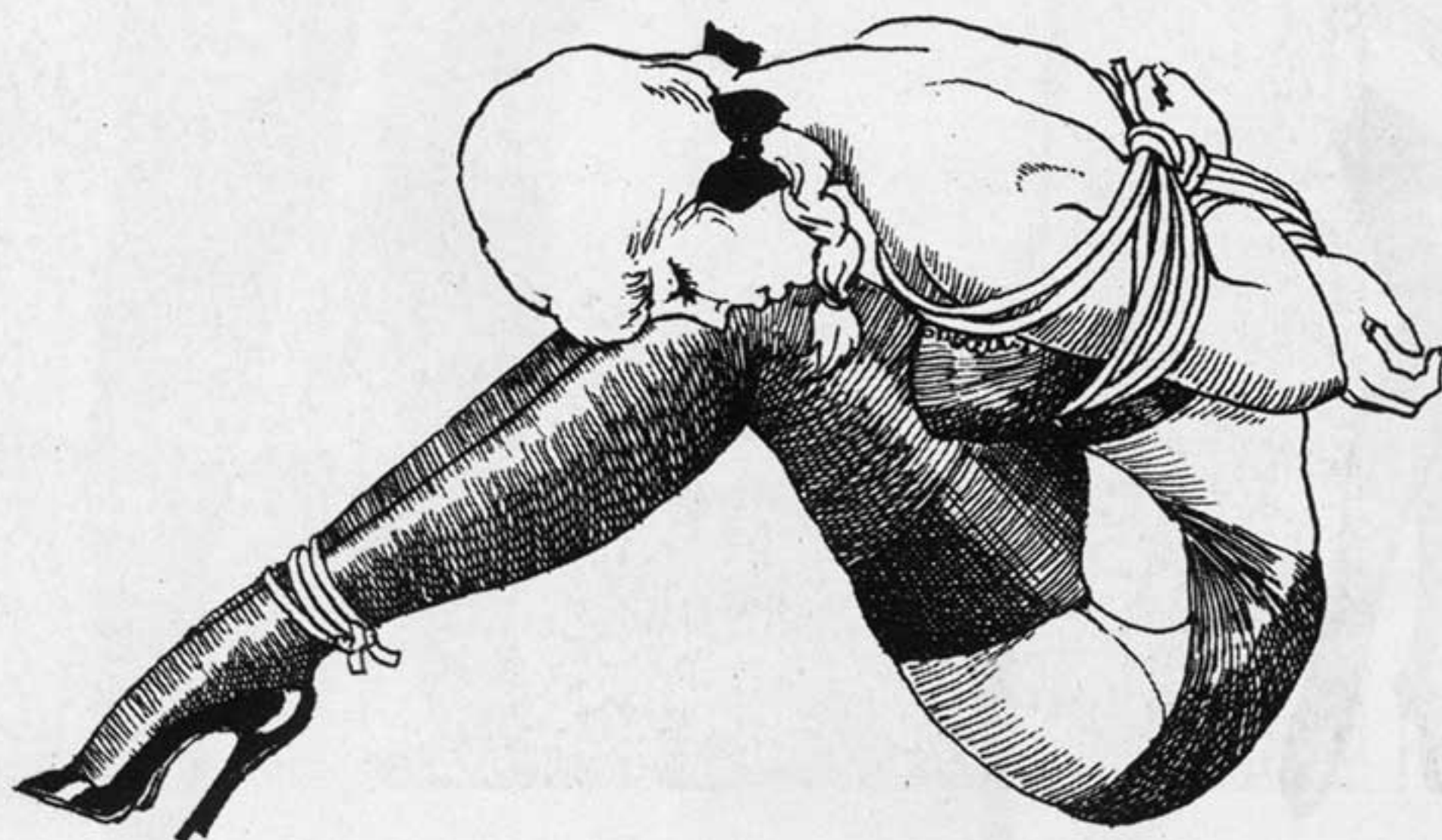


モデル.....リンダ・デ・フェレロ

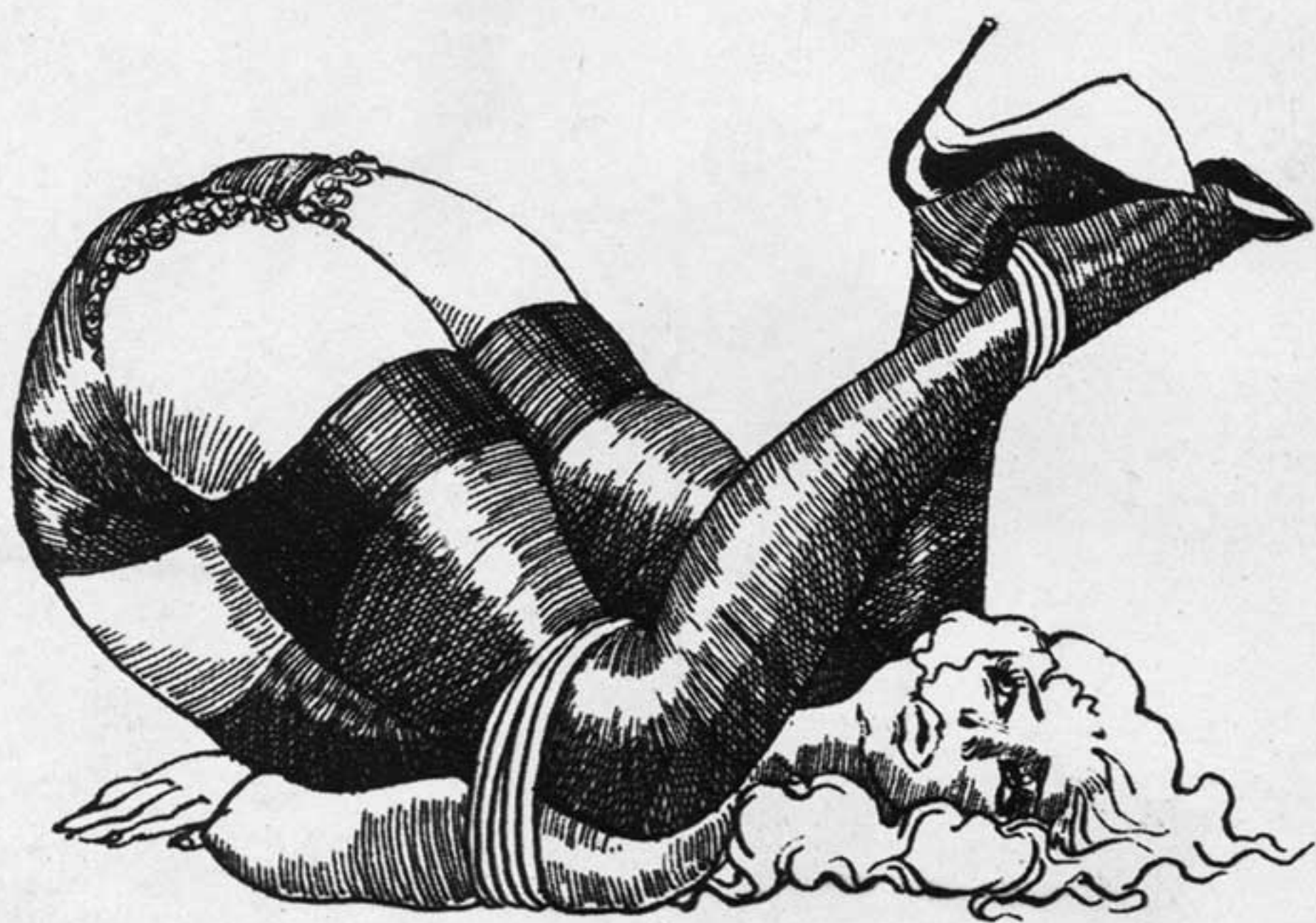






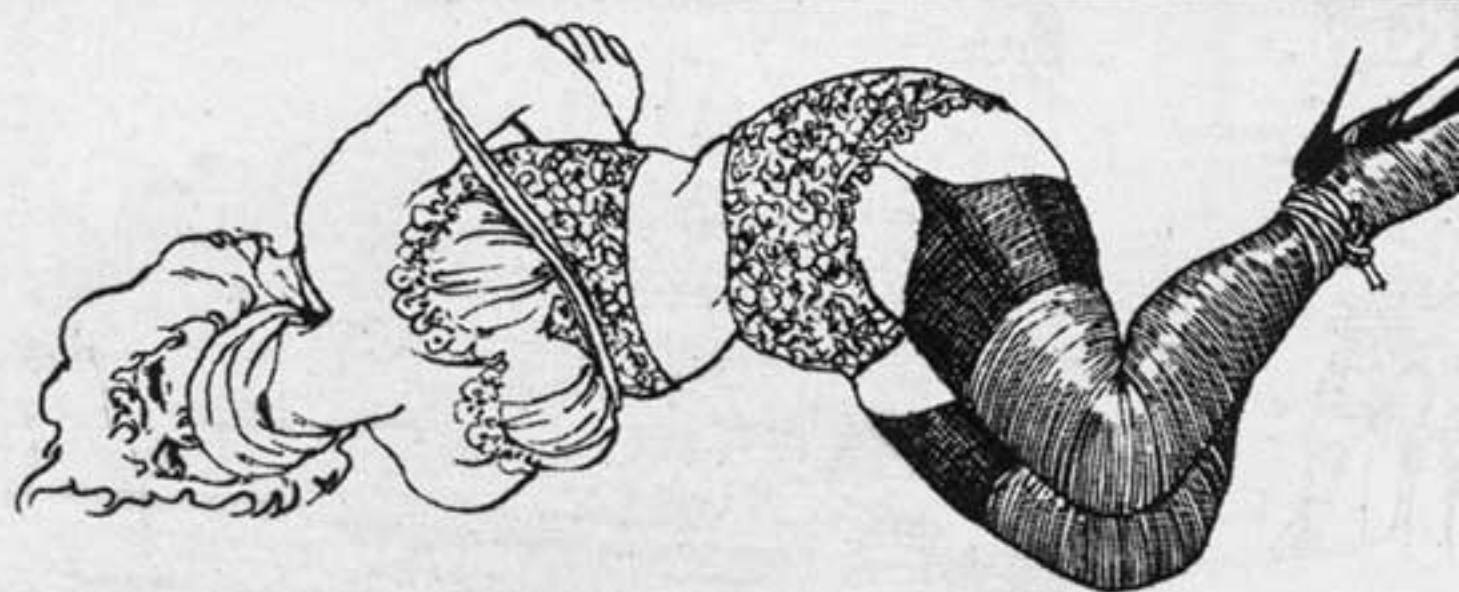
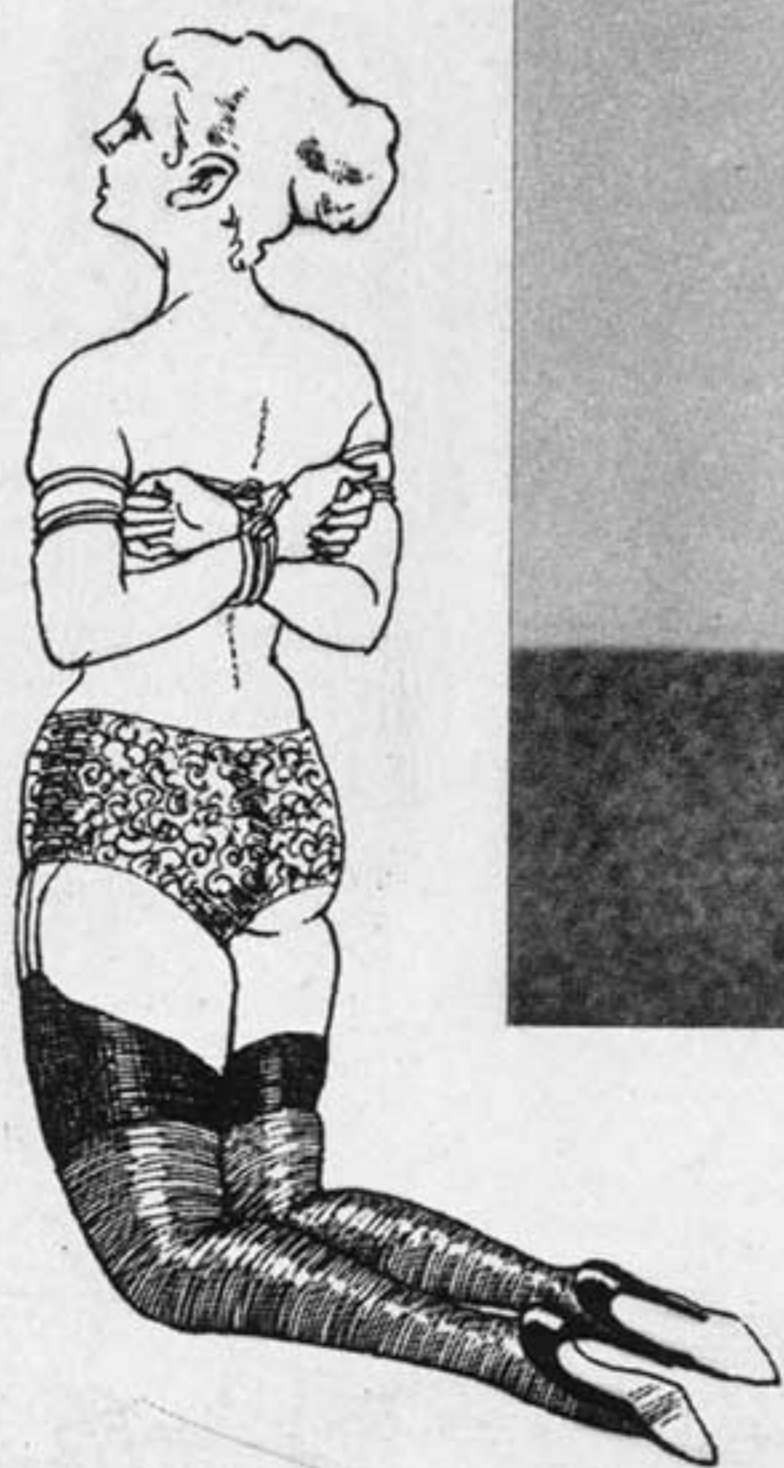


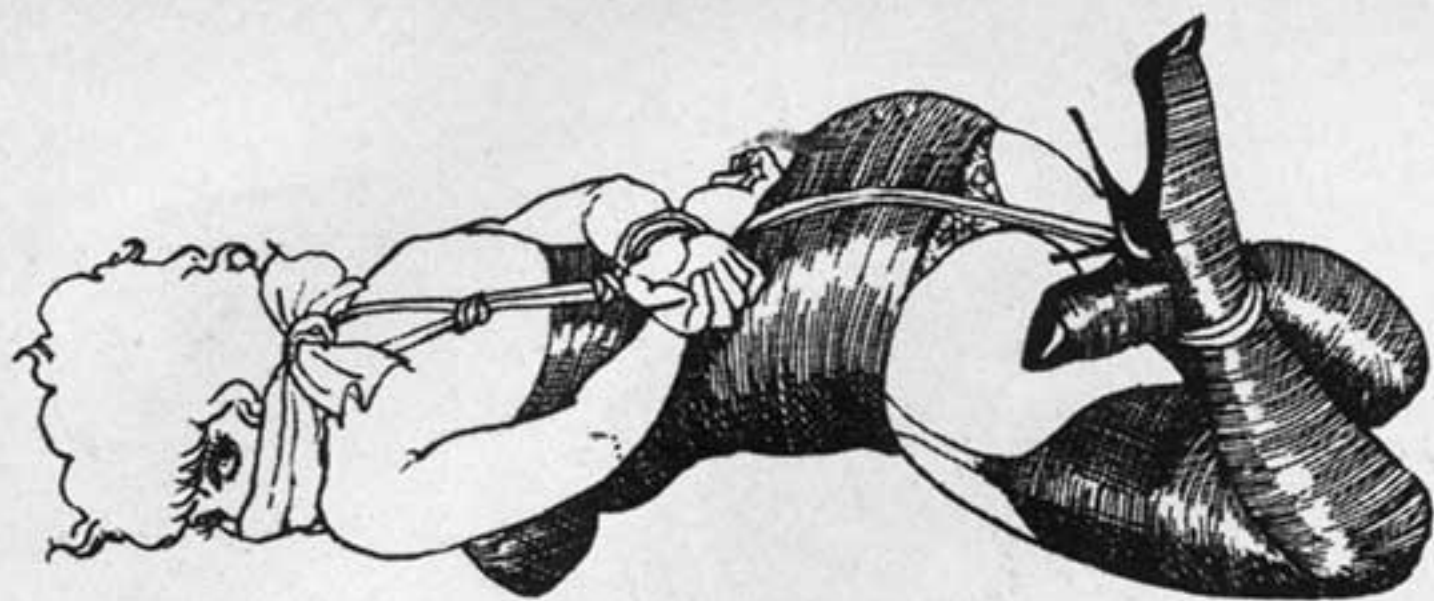




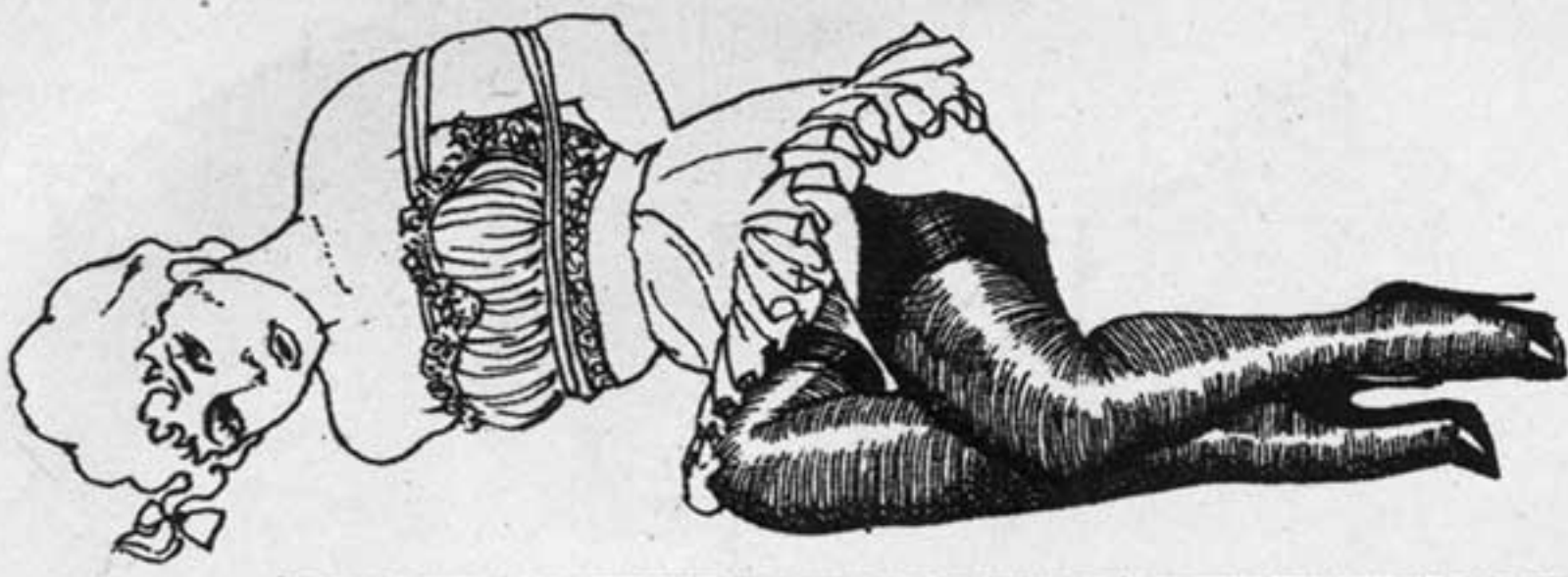


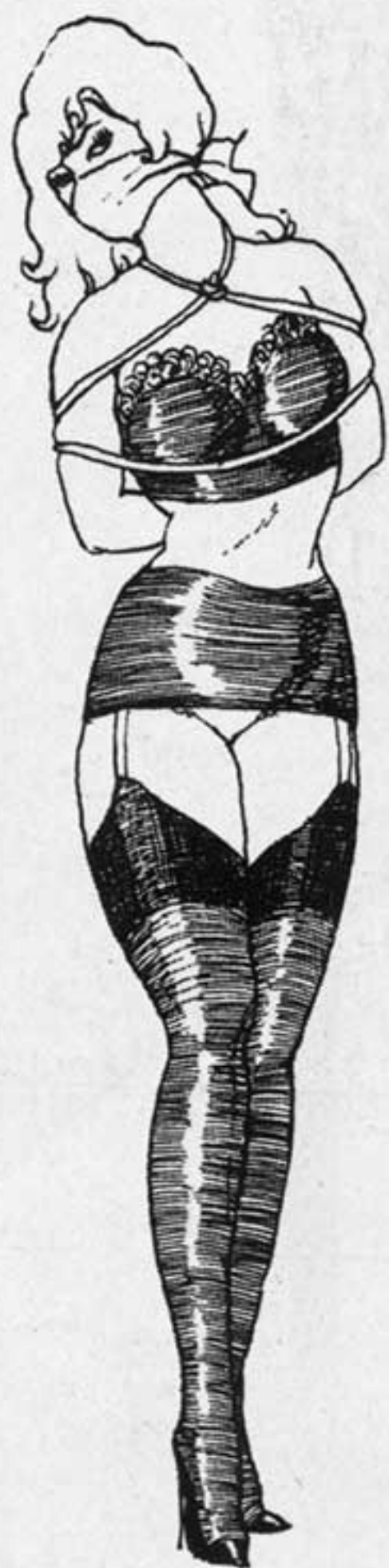


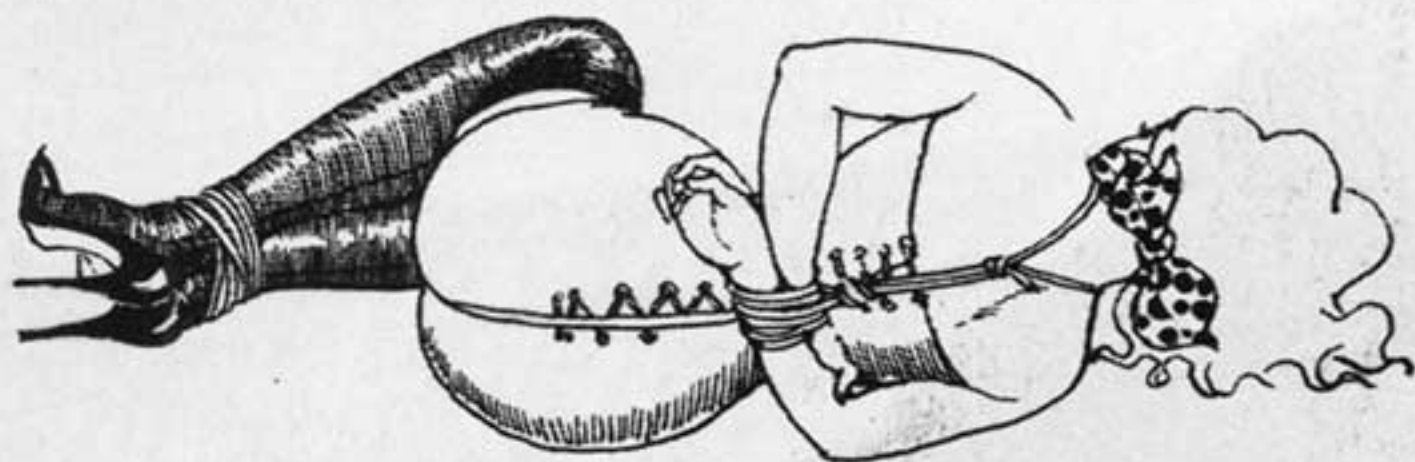












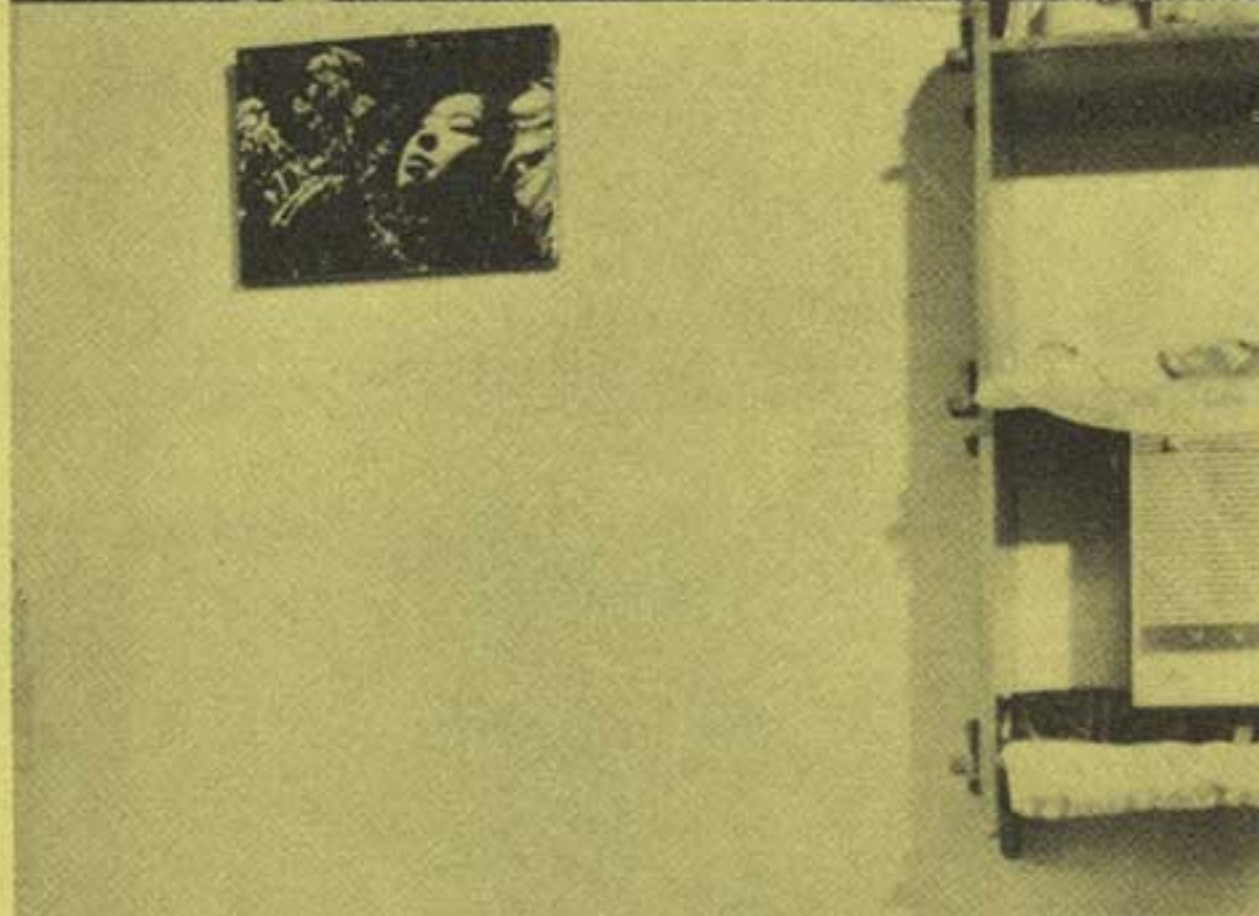
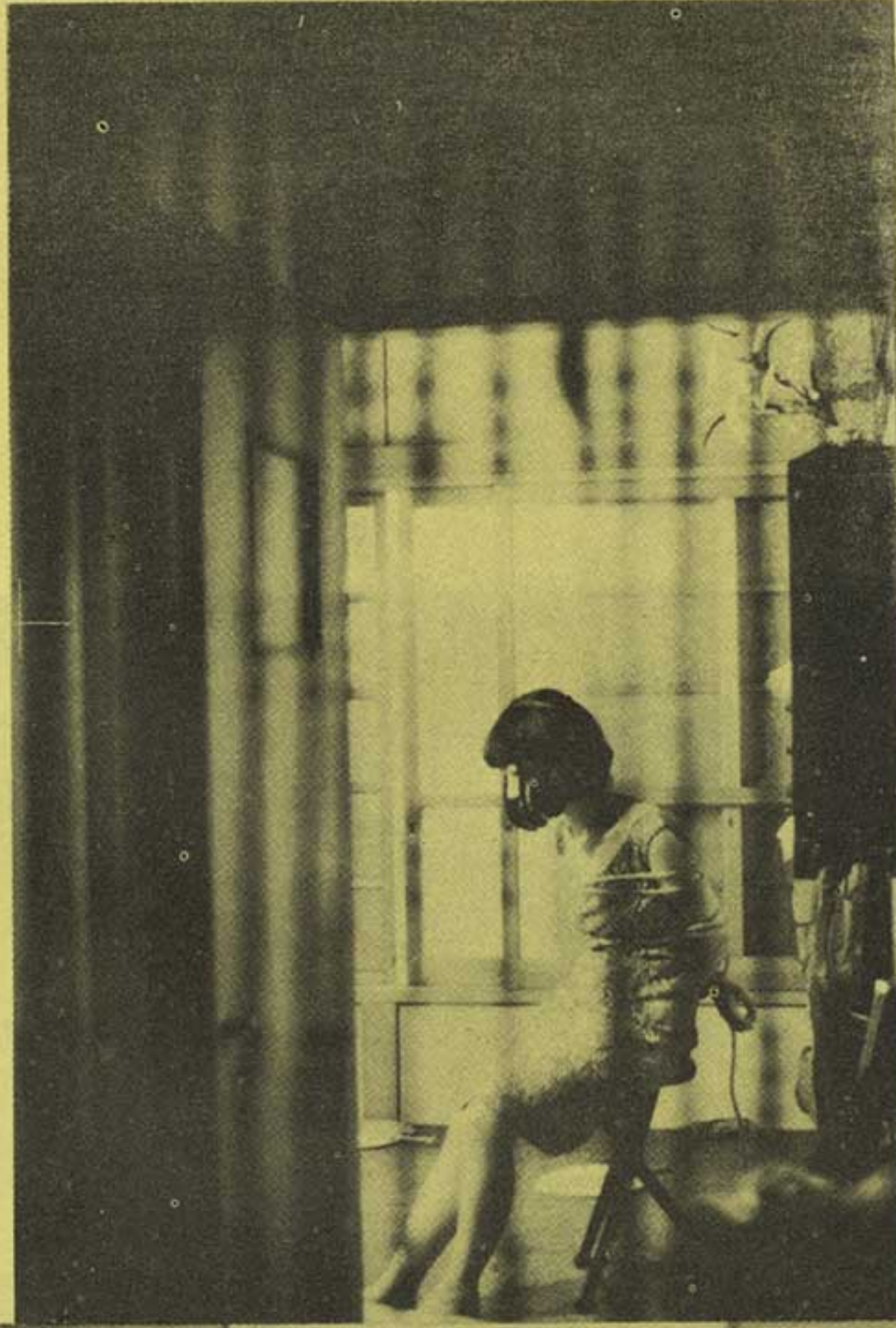


憂いのポーズ

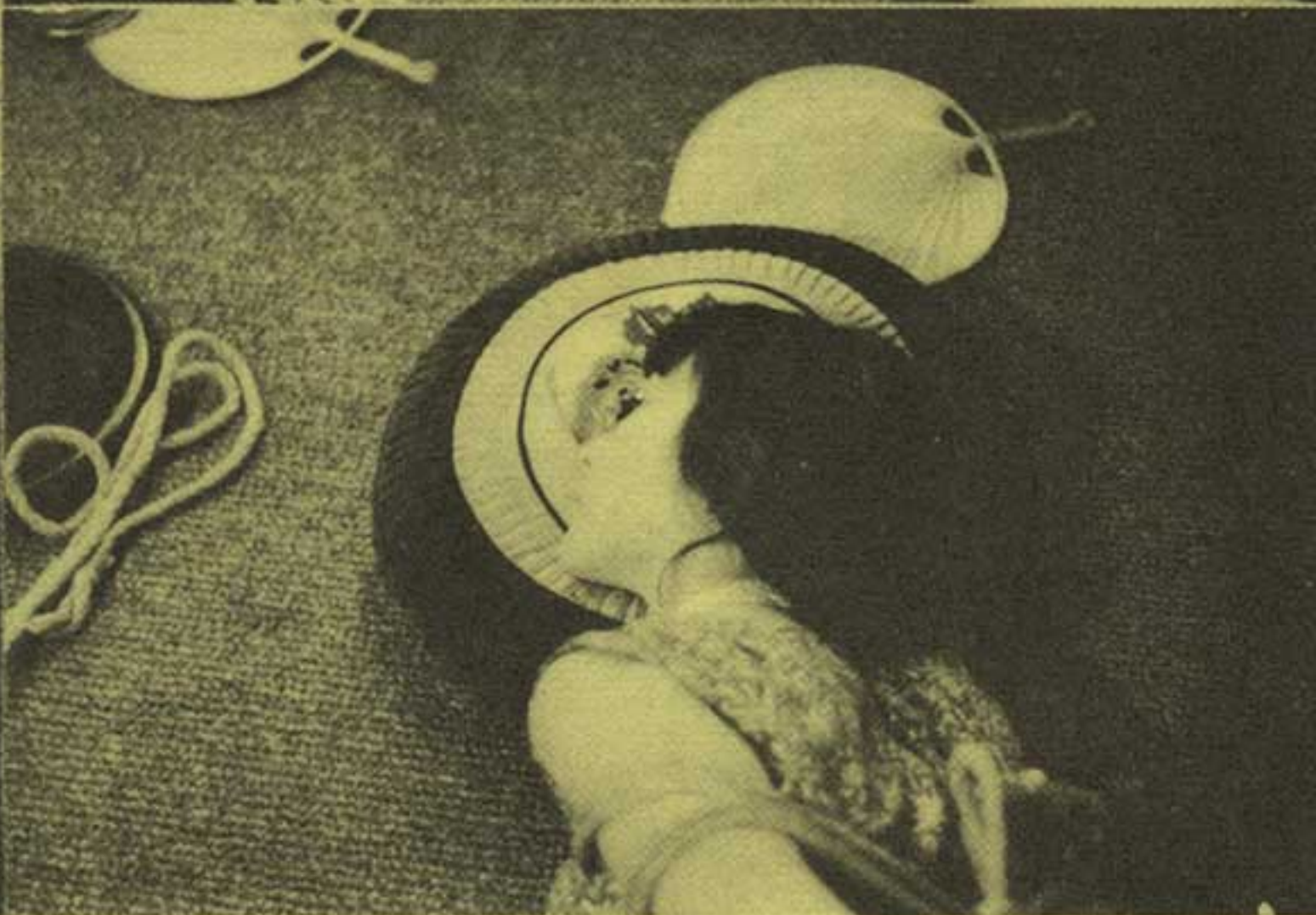
モデル・真木志津子

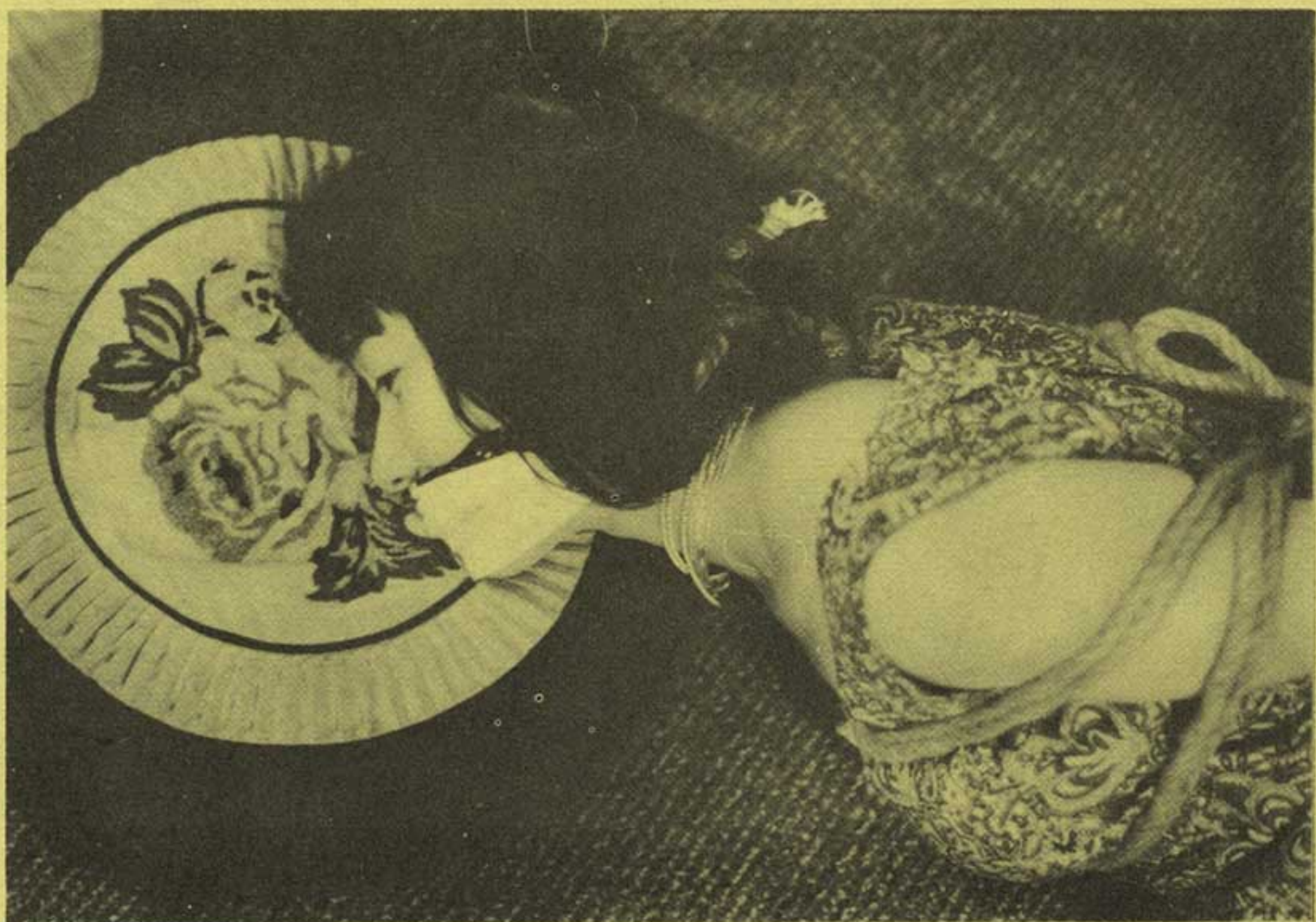
カメラ・猪島昌也

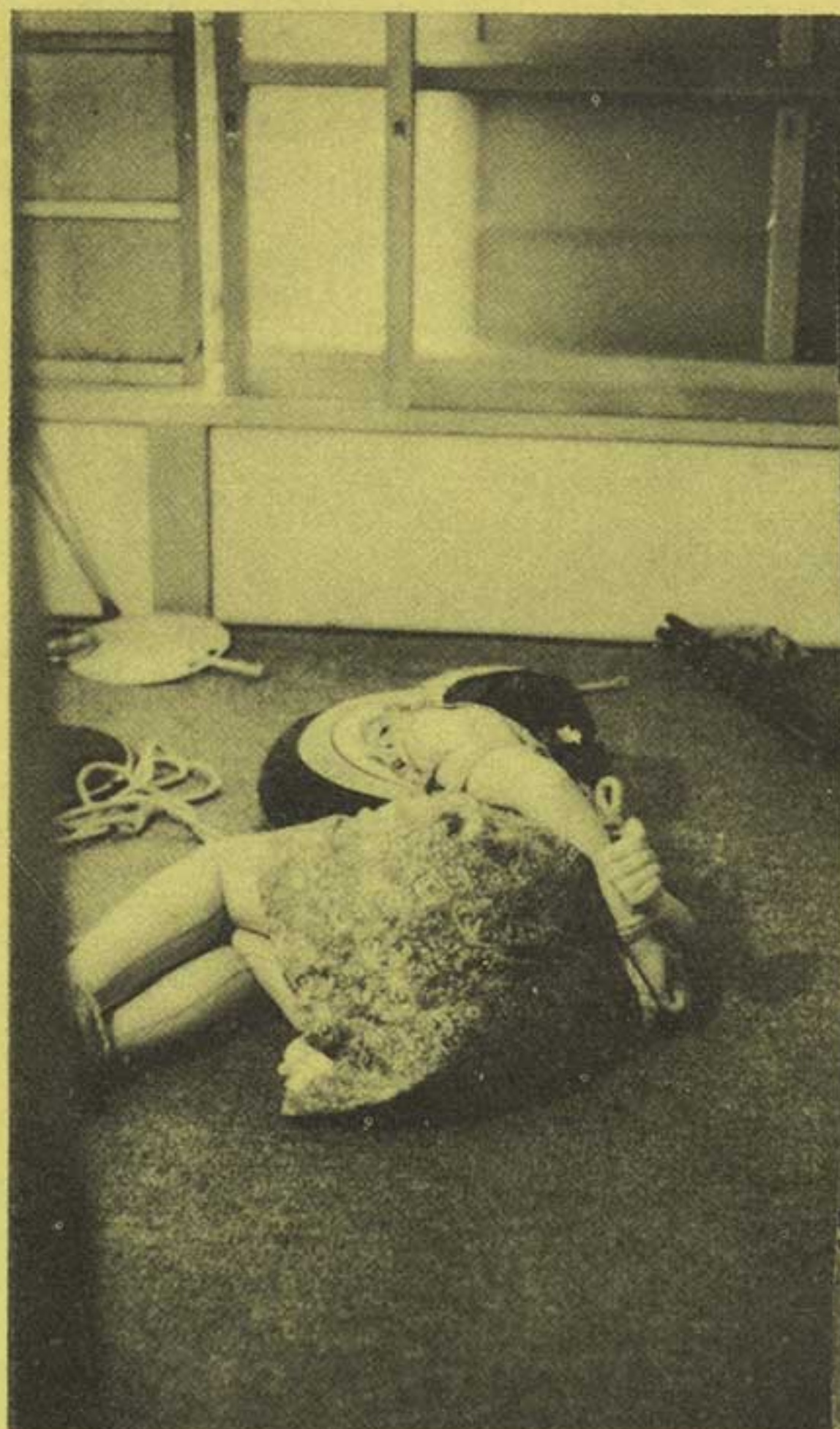
















裏窓タウン

「事件記者」の

SMシーン

NHKテレビの人気番組「事件記者」七月二十八日夜の放送は、「裏切り」と題して、麻薬の運び屋を中心とした、いつもの調子のサスペンス物。作はむろん島田一男。

麻薬の運び屋が、香港から東京へもどってくる。だが、三百グラムの麻薬を持ったまま、ボスのもとへもどらず、警視庁の記者クラブへ電話をかけて、ボスを裏切ろうと計画する。

ボス側はそれを知って、運び屋の若い情婦を襲い、誘拐して人質にするという、なんのことはないこれまでの「裏窓」で、さんざん使い古したストーリー。

運び屋は女の身を案じてボスの家へのりこむが、拳銃をつきつけられて捕まってしまう。

女は、はじめは白い手ぬぐいのさるぐつわにうしろ手（手首だけで縄はみえない）

男は、縄でぐるぐる巻きに縛られて、うしろ手（こっちはちゃんとうしろ手首の縄がみえる）。

運び屋は、運んできた麻薬を、

どこかへ隠匿してある。ボスは怒って男をしめあげ、

「麻薬をどこへかくした、白状しろ」と責めつける。弓折れみたいなムチで、一、二度たたくところもある。

男がどうしても白状しないので、こんどは、

「女のほうを痛めつけてやれ」

ということになって、女の恐怖の表情がアップになる。なかなかいい。

なにしろ、お上品で清潔で、モハンのなNHKテレビのことだから、女が直接責められる瞬間、画面は警視庁に移ってしまうが、

ドラマの大半は、男と女がうしろ手に縛られている一室（和室）で繰り返されるので、SMムードはかなり濃厚。

胸に縄が巻かれてないとはいえ、両手はしっかりと背後にまわされ

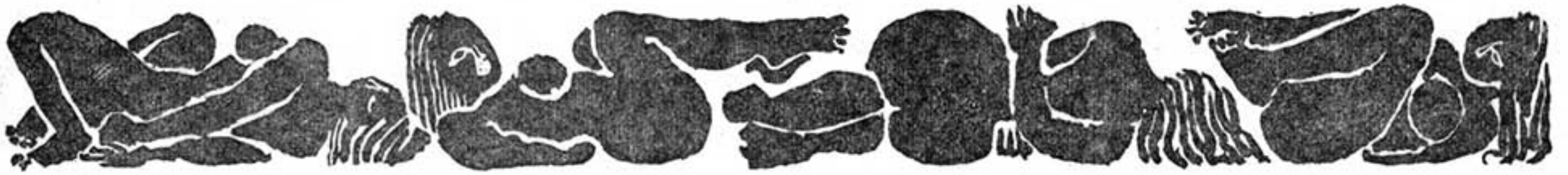
ているので、女のはいているヤボったいスカートも、しまいにはまくれあがって、ひざ小僧がのぞいたりする。

両腕が背中にまわされている関係で、胸のふくらみもくっきりとみえ、畳の上に横倒しになったりまた起きたり、顔じゅうにギラギラあぶら汗をながしたり、いろいろとこまかい芸をする。

ちょうどこの七月二十八日の朝各新聞は「東京都青少年条例」の可決を報じていた。

ついに可決された問題の条文に「性的感情を刺激したり、残虐性を助長するもの」を罰する箇所があるが、さしずめ、このNHKの人気番組なんかも、ちょっと解釈の範囲をひろげれば「残虐性の助長」にひっかかりそうである。

麻薬。運び屋。そのボスと手下たち。裏切り。婦女誘拐。監禁。縛り。責め。私刑——などというきわめて「悪書」的世界なのだがNHKが扱えば、なんの問題にもならないのだろう。いや、皮肉を



いつている場合ではない。S M F
アンにとっては、こういうサービ
スは、もちろん、たいへんにあり
がたいのである。

(藤)

ごりつぱな

責め小説

「週刊サンケイ」八月十日号に、
梶山季之氏の小説「消えた株券」
が掲載されている。

これは、産業ミステリと銘がう
たれている連載で、以前にもこの
欄で紹介されたことがある。

ところが、この「消えた株券」
のクライマックスシーンが、また
強烈なものである。

若い男女一組の産業スパイが、
証券会社に潜入し、からだをはっ
て秘密をさぐりだす。若い女がか
らだをはるのは、べつにめずらし
い話ではないが、この小説のクラ
イマックスでは、男がその肉体を
武器にして敵方のオールドミス
を誘惑し、そのものずばりの頂点に
おいて秘密を白状させるという、
これも一種の責めシーンとして読

めば読める描写。

登場人物の則子というのはヒロ
インの女スパイ。高橋というのは
その相棒の男スパイ。その高橋に
からみついているのが、敵側のオ
ールドミスである。

——白い蚊帳が吊ってあり、窓
は開け放してあった。則子は入
ら、寝てるのかしら？Vと思って
立ちどまった。

その一瞬、呻くような、啜り泣
くような声音が、彼女の鼓膜を打
った。ドキンノ となった。

瞳を凝らして、蚊帳の中を見詰
めていると、ようやくその中で揺
れ動く二つの影が、仄かに網膜に
浮き上って来た。則子は、血が逆
流しそうな、そのまま蚊帳の中に
飛び込んで電気を点けてやりたい
ような、憤りを覚えた。

目の前が暗くなったり、真っ赤
になったりした。しかし、体は動
かなかった。

はじめての体験である。

距離にしたら三米ぐらいであろ
うか。その三米の距離の位置で、

男女が蛇のように絡みあっている
のだ。そうして、一人は恋しい高
橋にまぎれもなかった。

相手の女は？V

則子には、先ずそのことが問題
だった。許せない、と彼女は手を
握りしめた。拳がブルブルと顫え
た。

不意に、蚊帳の中で、女の声か
した。

「ああ……もう、堪忍……」

それは切なく、胸の裏側を搔き
穿るような声音であった。訴える
ような、泣きじゃくるような、そ
の言葉の響き。

「ああ……堪忍して……」

二度目に、女がその言葉を繰り返
返したとき、高橋の声がした。

「だめ、だめノ あのことを云わ
なければ、だめだよ……」

「ほん、と、に……知らない」

「嘘をつきたまえ……」

「ああ……知らないの……」

「知ってる……」

「だめ、もう、だめよノ」

「ふふ……」

裏窓タウン

「ああ、止めないで！」

「じゃあ、白状したまえ！」

「お願い、続けて！」

「白状すれば、ね」

「ああ、気が狂いそうやわ。お願いよ、続けて……」

「ふふ……」

「云うわ。云うから止めないで」

「誰が、犯人だい？」

「佐々木よ……佐々木だわ」

「きみは事情を知っていて、知らないふりをしていたのか？」

「ええ、そうよ……ああ、堪忍」

「どんな手口で？」

「あと……あとから話すわ、もう駄目。ああ、抱いて、もっと強く！」

伊勢則子は、蚊帳の中に、高々とさし上げられた細い脚を、見分けることができた。その爪先は、痙攣するかのよう、細かく打ち震えている。

獣の唸り声に似た、奇怪な叫びが起き、やがて脚がぐったりと蒲団の上を這った。

則子は、自分がぐったり疲労し

たのを覚えて、思わずその場にしゃがみこんだ。彼女は異常に興奮していた。柔かい腿の内側が濡れているのが、自分でもわかった。

——というぐあいである。

責め小説にちがいない、といった理由がおわかり頂けたと思う。

会話の部分に、スウスウとか、ハアハアとかいう文字が書きこまれていないことが、ふしぎなくらいである。

これが、幾十万の発行部数を持ち、全国のいちばん目立つ駅の売店で売られ、街の書店ではいちばん目立つ位置にならべられ、いつでも、どこでも、だれにでも、五十円さえだせば売ってくれる、信用ある、りっぱな雑誌の連載小説である。

そういう雑誌に、こういう小説を掲載することがゆるされるのなら、わが裏窓編集部にたくさん保留されているすばらしい責め小説をどしどし発表して、全国のSMファンによるこんでもらいたい、という衝動にかられるのも、無理

からぬことであろう。

ところが、だめなのである。

財界、政界などのお偉方をバックにもたぬ平民的出版社が発行する雑誌に、このような小説を掲載した場合、たちまち指摘され、ダウンアツされること、火をみるよりもあきらかなのである。日本の自由主義なんて、そんなものなのである——などとひねくれるのは、この際おとなげない。

「消えた株券」なかなかおもしろかった。こんなクライマックスのある小説、もっとじゃんじゃん読ませてちょうだいな。(藤見郁)

「砂の上の植物群」のシナリオ

吉行淳之介の小説「砂の上の植物群」に登場してくるSMの描写は、私ども「ホンモノ」の感覚を享受し得るものの立場からみた場合、あきらかに観念的な、うすっぺらなSMイズムであった。猟奇趣味に文学の調味料をふりかけただけのしろものにすぎなかった。



(くわしくは本誌七月号掲載の安東泉「吉行淳之介論」を参照されたい)

しかし、こんど日活で映倫の勧告もものかわ、撮影にはいった同原作の映画化(監督・中平康)は観念的な文字の羅列によるSM描写とちがい、縛りシーンそのものズバリが画面に現われるのだから一応の期待は、してもよいのではなからうか。

しかも「白日夢」のような幻想シーンに登場するのではなく、あくまでも現実のなかの愛欲シーンであるから、中途はんばなごまかし方もできない。

本号が書店で発売されるころには、あるいは完成し、封切りされているかも知れないが、同映画のシナリオから、とくにSMシーンをひろいあげてみよう。

61 旅館B・一室

ガシッと乳房を掴んだ伊木の指。

伊木の荒々しい行為は、かえって京子の身体を生き生きさ

せ、皮膚を輝やかせる。不意に明子の声がきこえる。

明子の声「ひどい目に遭わせてほしいの」

ギクツとして、そのままの姿勢で空間を見廻す伊木。

明子の声「(もう一度)ひどい目に遭わせてほしいの」

62 片手を頭上に押し上げ腋の下を吸おうとする伊木に、必死になって抵抗する明子、ひきしめた肘が脇腹にめりこんでいる。

63 旅館B・一室

伊木、無意識に京子の両腕を頭上に押し上げようとし、京子は、明子と同じように、肘を脇腹に押し当てて拒む。

明子の必死さに較べて、そこにはどこか馴れ合いの感じがある。

京子の腕は次第に伊木の力に従い、やがて大きく頭上に上る。

左右の手首を掴み交叉する形に引き絞る伊木。京子の左右

の耳に腕の上膊の部分が密着し、両腕が搾木になって頭を挟みつける。

そのまま伊木の両手に力が加わると、京子の唇から呻き声が洩れる。

伊木の乾いた顔。

乱れた髪を咥えこむ女の唇。

腋の下に唇を近付けける伊木。

「縛って」

京子の唇が、小さな言葉を発する。

京子「縛って……腕をちょっとだけ」

伊木「(我に返ったような顔になって)やっぱり、その趣味があるのか」

京子、挟まれた首を動かし、歯ぎしりするように声を絞り出し

京子「ちがう……でも、縛って」

伊木の眼に、畳の上に脱ぎ捨てられた、浴衣の紐が二本うねうねと横たわっているのが見える。

手を伸ばし紐を引き寄せ、手

裏窓タウン

早く二本を結び合せる伊木。
ぐったりと曲った京子の二本
の腕が再び引き絞られ、紐が
からまる。

両腕は一層強力な搾木となり
頭部を両側から挟みつける。
呻き声をあげる京子。それは
苦病のためか歓びのためかよ
く分らない。だが、京子の身
体は明らかに歓びの表情を見
せて波打っている。

80

旅館B・一室
和服姿で立っている京子。

瞞めていた伊木、近寄り京子
の袖をめくる。

腕の痣。

ぐっと握りしめる伊木の指。

京子「あーっ」

低く呻いて、その腕を持ちあ
げ、唇を当てて吸う。

伊木の顔。

瞞めながら帯を解き始める京
子。

伊木の足許に落ちる何本もの
紐。

紐を掴む伊木の指。

束のまま、その紐を京子の足
首にからませ強く引く伊木。
床の上にうつ伏せに倒れる京
子の裸身。

京子「縛って」

身体をゆする。

睨みつけるような伊木。

京子「縛って頂戴」

握りしめていた紐を、京子の
身体の上に叩きつける伊木。
ワツとのしかかる。

87

腕を縛られた京子の歓びの表
情。
(O・L)

88

肘を脇腹にめり込ませて激し
く拒んでいる明子(O・L)

89

セーラー服で縛られている明
子
(O・L)

101

旅館B・一室

伊木に従って入る明子。

次の間の境の襖を、伊木の手
がスツと引く。

床のシーツに転っている京子
の、紐がからんだ裸身。

立ちすくむ明子。

アツとなる京子の顔。

姉妹の視線がカッチリ合う。

京子「明子なの？ 明子なのね」
立ちすくんだまま動けない明
子。

凍りついてしまったような瞳
が、しかし、紐のからみつい
た姉の裸身からはなれられな
い。

二人を見守る伊木。

不自由になっっている身体を動
かして、明子に背を向けよう
とする京子。

歩み寄り、京子のその試みを
阻むために、京子の身体に手
を触れる伊木。

京子「(虚ろに)明子が、どうして
ここにいるの？」

弱々しく首を振り、眼を閉じ
る。

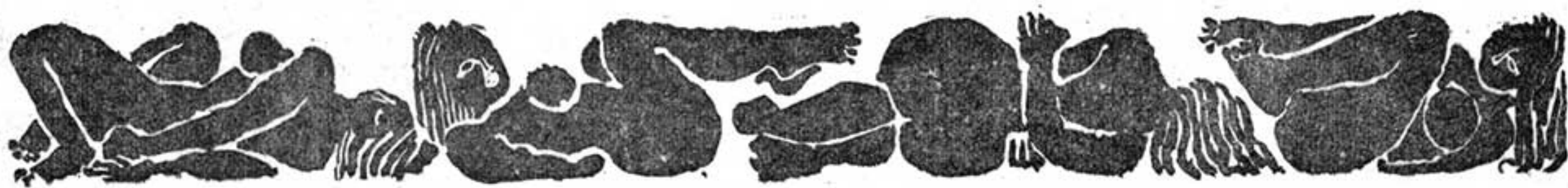
明子に眼を向ける伊木。

セーラー服の上から、太い荒
縄が、明子の全身を締めつけ
ている。

ハッと瞞める伊木。

明子の声「伊木さんひどいわ」

伊木「どうなったか教えてくれる
約束だったと僕を責めたじゃな



いか。京子の様子が変だから、知っているなら教えてくれ、と頼んだじゃないか」

目を開く京子。

明子の声「いくら、ひどい目に遭わせて欲しいって頼んだからって……」

京子、伊木の方へ視線を動かす。

京子「頼んだ？ 明子さんが伊木さんに頼んだなんて……」

明子「そうよ。あたし、こんなことは頼みはしなかったわ」

伊木「そうだと。これは京子が僕に頼んだことだ。唯、僕は君に、どうなったか教えているだけだ」

荒縄の下で、身動き一つしないで立っている明子。鋭く京子を睨めている。

(以上、池田一朗、加藤彰、中平

康の共同シナリオから)

直接的なSMシーンは、だいたいこんなものだが、女が「縛って頂戴」なんてうめくところの演出は、さぞかし、むずかしいことだ

ろう。

こういう情況設定のもとに、こういうセリフを吐く女なんで、おそらく現実の世界では皆無だと思われるからである。

原作のこの場面を読んだ本誌の読者の方から「なんとまあ、そらぞらしい、しらじらしい。噴飯もののセリフであることか」という感想文がきたが、シナリオで読んだ場合も、同感である。このセリフは、絶対に、生きたセリフではない。

ただ、実際に映画化した場合、どんな演出法がとられるか、という期待はある。それと圧巻は、セーラー服縛りの登場である。(豊)

トップレスと

ナルシシズム

東京新聞夕刊に「ふだん着のニューヨーク」という読み物記事が連載されている。七月二十二日はこの夏さわがれた、れいのトップレス水着についての話題で、アブ

的にみても、ちょっと目を惹く。

ご紹介すると――

「あなた、もうアレ買ったの？」
「うん、買ったことは買ったけどかくしてあるのよ。おかあさんが見たら卒倒するもの」

……BGの会話。

「君、まさかそんなもの着て人前に出るつもりじゃないだろうな」
「Aさんのブル・サイド・パーティーで、皆着ることに申し合わせたのよ。私だけ着なかったらけむたがられるわ」

……ある夫婦の会話。

話題の主は、いまアメリカ(英国でもそうだが)にセンサーションを巻き起こしているトップレス水着である。ロサンゼルス、デザイナー、ルディ・ガーンリックがファッション風刺のつもりで、おもしろ半分の一つだけ作ったものの。上半身なしの水着だが、意外に反響が大きく、方々から注文が殺到している。何のことはない、パンツにサスペンダーをつけた、小さな男の子の半ズボンのような

裏窓タウン

スタイル。パンツがハイウエストで、みぞおちのあたりまできているから、水着で隠す総面積はビキニより大きい。ただ、乳房を丸出しにする大胆さが物好きの女性連にアピールするものらしい。

男性は口をそろえて「セックス・アピールどころか、グロテスクだ」と攻撃する。実際幼児よろしくのパンツの上に、大きな乳房がダランとたれている図など見られたものではないが、流行となれば恥も外聞もなく……というところ公共の場所で胸を露出するとお巡りさんにつかまるから（すでにシカゴで若い女性が一人つかまった）パブリック・ビーチではお目にかかれないが、プライベート・ビーチや、自家用プールでは露出派が続出している。

なぜトップレス水着（水着ばかりでなく、トップレス・ドレスも出はじめた）がはやるのか？ 理由はいろいろある。

ファッション研究家によれば、まままでのファッションの傾向は、

セックスを強調した露出主義で、とにかく一般をアツといわせるために女性から覆いをはぎとろう、はぎとろうとしてきた。はぎとりに窮して登場したのがトップレス。しかし露出主義もこのへんが峠（これ以上はぎとったら、デザインも洋服屋も商売上がった）で、今後は女性のからだを隠す傾向に変わるだろう。

心理学者によれば、トップレスを着る女性は露出症か自己陶醉症（ナルシズム）患者。露出狂の方は自分の魅力に自信がなく、インフェリオリティー・コンプレックスに悩んでいる者。だから大胆な露出によって人目をひこうとする。

自己陶醉狂の方は、しんから自分を美しいと思い、裸をさらすことによって世の中に美の恩恵を与えるものと信じ込んでいる。露出狂よりまだ始末が悪い。

そんな小むずかしい理由はなしに、ファッションとあれば何でもかまわず飛びつこうという連中も

大勢いる。実際には着なくても、持っているというだけで自慢になるから買ったという女性もある。

トップレス・ファッションに真っ先に飛びついたのはハイソサエティーの婦人たちだが、この人たちの場合は、たいていのことはしつくしてあきあきしたから、何か新奇なことで気晴らししようというのが動機。トップレス・パーティーを催して、他の女性の貧弱な胸を笑ってやろう、という意地の悪いのもいる。

とにかく売れていることは確か。写真をとろうと思って数軒、婦人服店を回ったが、どこも売り切れでただいま注文中。ようやく一軒だけ、一枚残っていますという店があった。

、半身裸のアフリカの女を野蛮とあざけり、人前で赤ん坊に乳房をふくませる日本婦人にまゆをひそめるアメリカ婦人が、ファッションとあれば先を競って乳房をあらわに出したがる。あさましい限りだ。

二竜合落
集画艶凄







1

神はどこに存在するのだろうか。なぜ神はこのおそるべき、はじめからわかっている、こうした破局を、とどめようとはしないのであろうか。なぜ神は、神の奇蹟によって、愛が突然、あるいは次第に憎しみに変わってゆく、あのおそろしい奇蹟をとどめようとしないのであろうか。なぜ神は、人を、あらゆる夢を失ってゆく歎きから救おうとしないのであろうか。またなぜ神は、人の肉体の上に花を咲かせ、天につばきしたようににただちにわが身の上にふりかかる肉欲の苦しみから、人を救おうとしないのだろうか。

▲地 獄▼アンリ・バルビュス

マゾヒズムを肉欲と厳密に区別し、いわゆる一般的な意味でのエロチシズムとは、なんらのかかわりのないもの、とは、▲現代マゾヒズム文化時評▼の森下高茂氏が、かねがね強く主張されているところのものである。そしてまたこれはほく自身、同じくそれに強く共鳴するところのものである。

しかし、と、ほくは考える。ほくは現在十歳年下の妻とふたり、



■ 体当たりマゾヒズム論・28

ああ、限りなく求めるがゆえに
限りない苦悩をゆくぼくの心よ

水尾 究

江渕晃夫・絵



子どもがいない。というより、ぼくの特異な体質のため、それが望めない状況にある。

はつきりいつて三十八歳の今日、ぼくは童貞であるべく義務づけられている。従って二十八歳の妻は、処女妻である。ぼくと結婚をしたという運命のいたずらのため、離婚をするか、あるいは浮気をもしない限り、処女のままだ彼女は生涯を終えねばならない。

ともかく、異例の夫婦である。ぼくは、一般的な夫婦の営みから受ける肉欲の喜びより、観念的なMの世界に沈倫する喜びのほうを嘉とする。

しかし、木石の身ならず、観念だけで男盛りの肉体が収まるはずはない。Mという、それ自体は全く肉の世界とは関係のない事象に耽溺しても、その決着はやはり射精という、ごく普通の肉体の行事にまたねばならない。M的観念の世界を夢みながら、また、M的体験のあれこれを想起しながら、ひとり自慰にふける。射精の後、初めて、しばしの平静な時間が戻ってくる。

射精の瞬間、観念と肉とが渾然として融けあう。肉の喜びによって、本来肉とは関係のないMに、保証が与えられる。Mはよみがえり、生々とし、血と熱気が注入される。

それでもぼくは、Mを純粹に観念的な世界のものだと信じていることに疑いをいれない。それに或る種のほこりをさえ持っている。

しかし、常に渴きはあある。正常な肉欲に対しての渴きである。妻との間で、一度でもいいから、普通のコイツスが行なえたら、と思う。その渴きは徐々に心の中に蓄積され、次第にふくらんでゆきつつある。

渴きはあこがれに変わる。肉欲——エロチシズムに対してのあこがれである。

ところで前記の森下氏は、美しい夫人との間に、幾人かの子どもさんがいる。いられるということだ。正常な夫婦関係にいられることの証明である。当たり前なことかもしれない。そこでぼくは勝手な推理をする。

森下氏は正常な肉の世界の住人であるのと同時に、Mの世界の住人でもいられる。ということは、肉の世界を知れば知る、その率だけMという観念的な世界に対しての希求が激しくなるのではなからうか。意識だけの形而上的世界、その純粹さに、強く引かれるのではなからうか。その度合いをぼくは逆に肉の世界にあこがれる。肉欲の保証を得たいと思う。

出発は観念であっても、どこかで肉とぶつかりたい、そう思っている。肉と渾然一体になりたい、そう思っている。そうならなければならぬ、と思っている。

ぼくは、森下氏の自信と気概がうらやましい。マゾにあらざれば人にあらず、というほどの、森下氏の自負を頼もしいものと思う。

しかし、どこかでぼくは、肉の世界に脱帽している。妻に対しての、贖罪の意味がこめられているのかもしれないが、Mとしては矛盾撞着のきわみを露呈している。これは、ぼくの性生活が、M的観念の世界以外には、生きる寸分の余地もなく運命づけられている立場と、森下氏の、Mのみにて生きるにあらず、という、彼の余裕を残した実生活の基盤との相違が、皮肉にも森下氏をあくまで非エロチックな観念世界へ、ぼくをエロチックな肉的世界へ憧憬させる逆作用を及ぼしているように思える。

神はどこに存在するのだろうか。

2

森本佳子が、ぼくの目の前で笑っていた。てらいも恥じらいもなく笑っていた。一つの奇蹟が起こったのであった。来るはずがない彼女がやってきたのであった。しかも森本佳子のどんな些細な態度の中にも、だまされたことをいきどおる生娘の、内にこめた怒りと警戒の色はなかった。

最初何からきりだしていいかわからなかった。準備ができていなかったのも、ぼくは大いにあわてた。

「よくきて下さいましたね」

そうは言ったが、視線を合わすことができなかった。

「びっくりなさったでしょう」

しばらく間をおいてのち、そう言った。

「ええ、びっくりしましたわ」

森本佳子は、素直に恥じらいを見せながら答えた。でもそれには少しの悪びれた様子はなかった。

「実を言いますとね、少しくどい言い方ですけど——」

ぼくはつばを飲んだ。

「手紙を書いて後悔したんです。うそならうそのまま、剛を剛と信じさせたまま、そのままやはり押し通すか、——ともかく、タネあかしをする必要はなかったと思ったんです。おしまいならおしまいでも、タネ明かしをしてはならなかったんです」

「なぜですの」

端的に彼女は切り込んできた。はっきりした語調だった。

「なぜって——」

しばらくことばに詰まった。

「あなたは、ちゃんとして、すべてを知った上でここにいらして下さいましたね」

「ええ」

「だまされていたことに、腹は立ちませんでしたか」

「いいえ」

「どんな気持ちがありました」

「大変面白い人だと思いました。本当にそんなことがあるかと思いました。それで好奇心にかられてここへ来る気になったんです」

「そうですか」

急に肩から力が抜けた。あまりに、ぼくのほうだけ、一方的に力みすぎていたこっけいさを感じた。もっと気楽になさることね、と彼女の物腰が教えていた。

森本佳子が、すべてを知った上でやってきたについては、まず三つの理由が考えられた。一つはアルバイトのためである。彼女はとうぼくの立場を解釈したかしらないが、今までの有利な家庭教師というアルバイトの口を、このようなささいなことでおしまいにするいわれはない、ということであった。それより、コトは面白くなってきた、運び方によっては、格好な金ヅルになるかもしれない、という打算から来るものであった。

一つは純粹に好奇心のためである。

彼のいうことは本当だろうか。ほかに何の目的も野心もなく、ただひとりの女の子にバカにされ、いじめられたい、そのことのためだけに白痴を装う、そんなことがあるだろうか。しかし、現に彼は完璧に剛になりおおせた。わたしは彼を、心から知恵遅れの薄のろ

な青年と信じ、手荒らに扱って、時には打ちさえした。彼はあの時ふんがいたり、反抗したりはしなかった。芝居でできるものではない。だが、それは本当なんだろうか。

一つは森本佳子自身、女性ながらサジズムを自己の中に意識し、マゾヒストである男性に興味を持ったこと。

初めは意識しなかったが、次第に大の男を思いのままに扱うということの面白さを、説明のつきかねる快感を自覚していった。特に女の身としては考えも及ばなかった、人をなぐるということ、その爽快さ、痛快さ。またあろうことか、そういう扱いを受けてまで女性に仕えたいと熱望するマゾヒストが、今現に、こうして目の前に現われてきた。こいつは一つ、面白いことになってきたぞ、ということ——考えられる以上三つのうち、ぼくは第二の理由を探ることにした。娘らしい、冒険心と好奇心がこさせたのだと。

「マゾヒストに興味がおありですか」

ぼくが尋ねたとき、彼女は答えた。

「ええ。どうしてそうなるのか、興味がありますわ。わたくし、これで少々、心理学の勉強もしましたので、人の心の問題は十分に好奇心を起こさせます」

「どうでしょう」

ぼくは、あえぐようにひざを乗り出していった。

「一つ、実験してみませんか。そして、十分にマゾヒストの実態なるものを観察なさってみませんか。観察なさるためには、あなたがまず女王になる必要があります。サジストになる必要があります。」

あなたご自身の中の、サジズムが、どんな性質のもので、どんなふうに目覚めていくものであるか、それを知ること面白いことじやありませんか」



3

世の中では、大勢のやってる事が当然になって、一人だけでやる事が余

計のように思われるんだから。当然になろうと思ったら味方を大勢こしらえて、さも当然であるかの様で不当な事をやるに限る。

▲坑 夫▼ 夏目漱石

不当なことでも、味方が大勢になればそれは当然なことになる。

しかし、当然になってもあくまでそれは不当なのである。味方が大勢だから不当なのである。味方が大勢だと、その正当さの最初の純粹な動機や旗印は、大勢のために薄められ、ゆがめられてしまう。

大勢がやることは、大勢がやるためにそれは常に不当である。真理は、常に光榮ある孤立の側にある。

そんなことを考える。ほくは、マゾヒズムが、ごく少数のもの側にあり、という理由で、それを不当だとは思わない。それがごく少数のものに限られているがために、それをむしろ光榮に思う。

大勢は常に少数によって批判されるのである。マゾヒズムが、味方を大勢こしらえて、それが正当となったとき、墮落する。チマタに充滿する通俗的なエロチシズムの氾濫の中に埋没してしまう。

ほくは、マゾヒストとして、強く肉的世界に或る種のアコガれを持つものである。しかし、そのために、マゾヒズム自体を全部肉的世界へ売り渡してしまおうとは思わない。それは破れん恥な裏切り行為だと思う。光榮ある孤立の立場まで踏みはずすつもりは毛頭ない。

人間は意識的生物である。肉と靈とを対比させたとき、究極には靈の勝利で終わらねばならないものだと思えるものである。肉の充足を、究極において保証するものは、意識以外にはないのではないか。肉は手段であり、意識が目的であるとはほくは信じる。死とは、意識の死をいうのであって、肉の死をいうのではなからう。意識のない肉に、なんで歡喜があらう。快感があらう。

肉という、間接的な手段を待たずに、意識の充足を持ちうるのが

マゾヒズムである。むしろ積極的に肉を排除さえするのである。

その足場の孤立的状态を、ほくは少数者の側の光榮というのである。この光榮を、身の背後に負いながら、大勢の側の肉の世界に憧憬を持つのである。肉によって、意識に筋金を入れたためである。

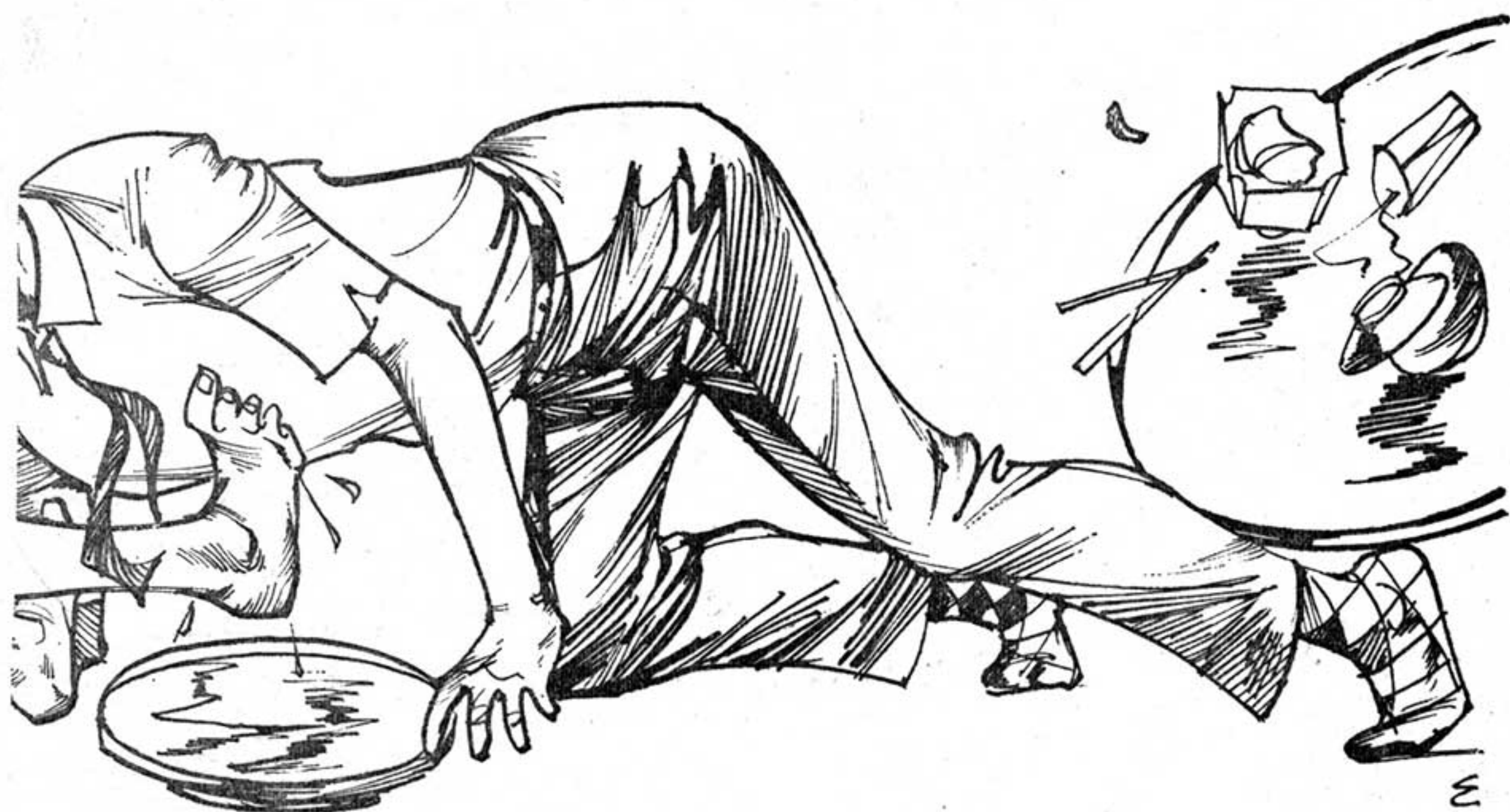
森本佳子は、一個の觀念上の女性である。ほくは彼女を通して、彼女を紹介することによって少数者の光榮ある夢を夢みるのである。夢を夢みながら、ほくは子細に森本佳子をながめ直してみる。そこには明らかに、一個の肉体を持った若い女性が、實在のものとしてほくの前にあった。この實在の女性の肉体がほくの觀念を高め、いっそう高められる渴きにうるおいを与えてくれるのであった。

喫茶店「アール」で森本佳子に会って、二日間を置き、再びほくたちが練馬駅のホームで会ったのは、気持ちよく晴れ上がった秋の日の午後だった。

彼女は最初ホームでほくの姿を認めると、秘密めいた忍びやかな笑いをもらしながら、自分のほうではソッポを向くように横顔を見せ、そこに突っ立ったまま、相手の近づくのを待った。

彼女はやせてヒョロリと背が長かった。ギスギスした、骨張った感じだった。長目の髪に油気がなく、黒っぽい地味なワンピースに学生らしい臭いを發散させた。

ほくは彼女が、美人だとは思わなかった。もともと、ポリュームのあるグラマー型より、やせ型の精かな、キビキビした、ボーイッシュな小悪魔のほうが好きであった。だが、同じやせ型とは言いつながら、森本佳子には、つまり、女としての水分に欠けていた。もし同性愛をやるというと、男役のほうに回るタイプの女であった。ほくがなぐさめに思ったのは、彼女のときすぎましたような、賢い



目付きであった。彼女の会話の歯切れのよさにあった。サラサラと書き流した、あの達筆で流ちょうな、文字にあった。ほくは利口な女が、大好きなのである。

4

「さて、どこに行きましょう」

ヤボな言い草だったが一応はこう言ってみるしかなかった。端的に、手っとり早く、ホテルか旅館を選びたいところであったが、それをいきなり言い出したのでは、彼女の自尊心が許さないだろうと思った。

「お昼は？」

「いただきましたけど——」

「もう何にも食べたくないですか」

「おいしいものなら」

「そうですか。それじゃ、豊島園にでも行って、魚料理でも食べましょうか」

ふたりは豊島園行きの電車に乗り込んだ。

ウィークデーの昼下がりのこととて、人影はまばらだった。遊園地正面の広場に、三々五々、子ども連れのグループが散らばって、入口横にある大食堂にも、客の姿はまばらだった。どことなくのんびりとしていた。上空に静かな爆音があった。

「どこだったかな、たしか湖畔亭とかいうのがあったようだったけど——」

ほくは広場の砂利を踏んで歩き出した。数歩遅れて佳子がついてきた。はた目には、仲むつまじげな、相愛のカップルに見えたであ



ろう。ふたりは何も言わず、それぞれの思惑でだまりこみながら、長く続く高い石塀添いに、小道を歩いていった。

湖畔亭では、時間はすれのため、ほかに客は居なかった。二、三度、玄関で大きな声を出すと、やっと仲居らしい女が出てきて、部屋へ通してくれた。短い渡廊下を渡った離れで、縁の外に小さな泉水があつて、落葉がたまっていた。味気ない気がした。

「ビールと、鯉のアライで食事を二人前」

仲居は大儀そうに、うなずいてから引きさがった。遠くで廊下を伝って、ケラケラ笑いあう女たちの声が聞こえてきた。

現実の姿とはこんなものであろうか。食事の場所をまちがったかという後悔より、急速に心の中に、味気なさが広がった。

森本佳子は、丸テーブルにはおツエついて、横ずわりにすわっていた。

「あなたは、本当に剛をバカだと思いこんでなぐったんですか。なんだかおかしいな、という気はしなかったんですか」

「ええ、すっかりだまされましたわ」

「なぐってスツとしましたか。何か、痛快な快感というもの——確かに、人をなぐるといふのは、愉快なことでしょう、そうに違いない、と思うんだけど——」

「別に、それほど愉快とも、痛快とも感じませんでした。あなたのおっしゃる意味はわかるんですけど」

「なぐるか、なぐられるか、というとき、どちらを選びます?」

「そりゃ、なぐられるよりはなぐるほうが、いいに決まっていますわ。でも、そんなおっしゃり方は、卑怯ですわ。当たり前のことですもの。快感とはほど違い」

森本佳子は笑った。

「ほくをなぐってみませんか。剛だと思って力いっぱい——」
ほくはテーブルを押しやるように、からだを乗り出した。

「無理ですわ。もうなぐれませんわ」

「だって、あの時、なぐったじゃありませんか。ずいぶん痛かったですよ」

「でも、あれは役目上からのことで、必要だったんですもの」

「今だって必要ですよ。ほくはなぐりたいんです」

「わがままというものですよ」

森本佳子は軽く話頭をそらした。

「まあ、じゃ、そのことはいいとして——」

言いかけたとき仲居が入ってきた。そして無言のまま、テーブルの上に料理を並べ始めた。大儀そうな手付きだった。

「お一つどうぞ」

仲居はビールのセンを抜き、義務的な抑揚のない口調で、コップにすすめるのであった。

仲居が去ったあとの、アワ立つビールのコップを二つ、テーブル上にながめながら、

「どう、ビールを飲んでみない」

森本佳子はすなおにうなずいて、コップの一つを一気に飲み干した。

「ずい分いい飲みっぷりだね」

「のどがかわいていたんですの。冷たくておいしかった。でももう沢山よ」

彼女の目もとに、いくらか赤味がさした。

「ビールを飲むと、すぐおしっこに出ちゃうからな」

何の脈絡もない言い方だった。

「トイレに流すより、ほくの口の中に流しこんでくれといったら、驚くかしら」

反応が待たれた。しかし彼女は色には出さなかった。

「驚かないわ。だけどそんなことは、やっぱりいやね」

「だって、何でもないことじゃないですか。直接でなくっても、コップにつぐだけでもいいんだよ」

声が大きくならないように、低目に力をこめて言った。そこはおとなとおとなの、暗黙の了解で成立することではないか、ほくはじれたい思いでいっぱいだった。

5

「やっぱりいやね、考えても恥ずかしいわ」

それが彼女の決論だった。ほくはもし、この女が、威猛高に目の前に立ちほだかって、さあ、飲め、と、あのグロテスクな性器を眼面いっぱい広げて、ちょうどクローズアップされた巨大な生身の貝のように、あぐりと口をあけた紫紅色の奥深い肉のヒダを突きつけたら、いささかためらったであろうと思う。森本佳子は、ピタリとほくの好みにあう女ではなかったから。

しかし、ほくはこのとき、すでに一つのあの妖しげな観念の世界に足を踏み入れていたのであった。言っているほくのことばが、ひとりの賢いインテリ女性の意識の内腔で、どんな反響を呼びかわしながら、次々に連鎖反応を起こし、無限に遠く小さくこだまを奥へ奥へと広げていくか、そのことに気を奪われていたのであった。

「なぐることと飲ませることと、どちらでもいいや？」

「どちらかといえば、なぐるほうがやさしいわね。でもそれも今は

無理」

汁碗のフタを取り、静かにそれをすすり、箸で大皿のコイの切身を、一つ二つ、彼女はつまむのだった。

「ビールで足を洗ってみない？」

唐突にほくは切り出した。二本目のビールびんに、まだ半分ほど中味が残っていた。

「ビールで髪を洗うと赤くなるでしょう。足をビールで洗うとよく眠れて、疲れがとれる、やってみませんか」

「ハハン、わかった」

彼女は箸をおいた。

「洗ったビールを飲みたいというんでしょう」

あっさりうなずくと、彼女は目もとに皮肉な笑いを浮かべ

「本当に飲みたいの、わたしの足を洗ったビールを」

「飲ませてくれるの？」

なぜとも知らず、カッと興奮の度が高まった。

「ビールちょうだい」

コイの切身を取りのけた大皿を畳に置き、森本佳子は横ずわりの足をツト伸ばした。ほくはびんをとってその上にそそいだ。底が平たく浅い皿である。こぼさないように、静かにそそいだ。彼女は、そこにたまるビールのしずくを、足の腹でピチャピチャたたきながら、冷たくていい気持ち、と目を細めていうのだった。

「いいわ、飲みたいんなら、飲んでもいいわ」

彼女が足をあげかけると、足の裏からしずくが垂れた。そっとそのまま、彼女は手を伸ばして、持参のハンドバッグの中からハンケチを取り出した。それを制して、ほくがハンケチを受けとった。

ハンケチを片手に、そっと上目づかいに、

「すってあげるね」

そういって、唇を当てた。森本佳子は、後手に畳に手をついたまま、両足を持ち上げていた。しずくをほくはハンケチのかわりに、唇と舌で吸いとった。足の裏の皮膚は固くて頑丈で、指にはタコがあった、そこをかむとジュッとビールのしずくがにじみ出る感じだった。その味に、アカとホコリと、アセのにおいがあった。

上目づかいに見上げると、彼女は無表情だった。しかし、注意を一点にこらすように、このさもしい動物のようなひとりの男の狂態に、熟視をこらしていることがよくわかった。

ほくは全く犬と同じに手を使わず、舌だけで大皿のビールのなめつくした。それをじっと見ている森本佳子の視線を、痛いほどぼくは全身で受けとめていた。

受けとめることで、じつくりと反すうするように、森本佳子の肉体を強く意識するのであった。彼女の、サジスチックな観念に、チラチラまたたきかけるように、肉の快感が、あるかなしかの感応で働きかけているはずであった。

「足の裏を吸われると、健康にいいってことは本当ですよ。それもあるけど、実際に気持ちがいいでしょう。どこが一番感じますか」
上目づかいに見上げながら、矢継早に質問をこころみてみた。
「指の腹がいいわね」

突然ほくは、激しい誘惑に駆られた。ずっと見通す足の線が、スカートの中にほんやりとかげりを見せて、その奥に続いていた。観念の収まり具合が妙にゆがんで、ほくの肉体に火をつけた。

ほくは勢よくはい進み、矢庭に首を突っこんだ。その瞬間、彼女はツト身をひいた。とたんに激しく、ほくのほおが鳴った。

冷血

文・新江祖父
絵・二竜合落



案内された部屋の扉を押したとき、するどい、ちょうど濡れ雑布を壁にたたさつけるような音が、呉竜元の耳につきささってきた。

不意をつかれたように彼が音の方に向けた視線の中に、肉屋の店頭に吊るされた豚の肉塊に似た、白い女の肌があり、女の後に二人の男が立っていた。

呉の方をふり返ったふとった方の男が、ちよっと目礼をかえしただけで、鞭を持った若い男は、まるで呉に見せつけようとするかのように、つづけさまに鞭をふりかぶった。

黒っぽい支那服の背が見事に切り裂かれていて、あらわになった背肉は、呉の胸を痛くするほどに白い。が、その肌を縦横に走る鞭あとは、みるみるその数を増していった、赤紫の残酷なコントラストを織りなす。

「フィッ、フィッ、フィッ」というような荒い息は、鞭をふるら男から発せられていて、

女の方はもう失心寸前のようにすで、太縄でむごいほど割り開かれた唇からは、悲鳴さえもれることがなかった。

ただ、鞭が肌にはじける瞬間、からだ中の筋肉がギュッと引き締まるのが見えるばかりだった。

「ようし、もうよかろう」

ふとった色白の男が片手を軽くあげて、鞭を制止した。

「よし、三時間休憩だ。おろしてやれ」

そう言っておいて、男はあらためて、それまで無視された存在の呉の方に笑顔を作ってみせた。それは呉が見た最初で最後の揚大佐の笑顔だった。

「呉さんですね。昨日銭さん（民間諜報部司令）から連絡がありましたよ」

揚大佐は自分から椅子に腰を降ろすと、呉を机の前にさし招いた。

「どうも私には民間諜報部のやっつてること、
と言っちゃ失礼ですが、錢さんから連絡のあ
ったたとえばあなたの失策なんか、わかりま
せんね。ま、私にはあなたを訓練するなど
いう値うちもありませんからね。ま、一週間
なり十日なり、私たち軍部のやり方を見て
いただいたらけっこうですよ。それで、あなた
の方で納得できたら、いつでも前線の方へ復
帰していただいていいと私は思いますよ」
揚大佐はちよつと迷惑そうな口ぶりでそう
言った。経神質とみえて、話しながら手にし
た雑布で机のあちこちをこすっている。

呉は大佐の皮肉めいた話ぶりを、じつと黙

ったまま聞いていた。

「どうぞくつろいでくださいよ」

言いすぎたと思ったのか、揚大佐はとりな
すように声をやわらげた。

「失敗は誰にもあることですからね。それに
しても西遊飯店を日本軍に接收されたのは痛
い」

そう言われるまでもなく、呉はおのれの失
敗の代償の大きすぎたことに茫然としていた
のだ。西遊飯店は呉の経営していた店でもあ
り、民間諜報部の強力なアジトでもあった。

三日前のこと、呉は上官の黄作倫に日本の
密偵の檻示を依頼されて留置してあったが、

その密偵が初老の女だったことからつい油断
があった。女の逃亡したのに気づいた時は、
荒々しい軍靴の音が近づいていた。呉は單身
かろうじて危機をのがれたのだった。

女の、うめき声がきこえたので、呉は思わ
ず部屋の隅をふりかえって見ると、先ほど鞭
打たれていた女、手首にからんだ縄を、大佐
の若い部下が解いているところだった。

支那服のさけめから大きくのぞいてみえる
太ももの筋肉までが、心なしかヒクヒクあえ
いでいるふうだった。

若い部下は横たわった女の背に馬乗りにな
ると、息も絶えだえの両腕を背にまわした。



幾本もの縄が追加され、男は女の両手首を後ろ手に縛ったあまりで、脂ののった二の腕から切ない息づかいにあえぐ豊満な胸乳へと荷造りでもするかのようにビシビシ締めあげていく。上半身が終わると下半身へ、呉には不必要と思えるほどの縄が、女のからだを縦横に締めていった。男の縄さばきは、呉の目に手なれた職人のように思えるのだった。

先ほどの揚大佐のようすからは、三時間後正確には二時間半あまりの後は、再び拷問が再開されるはずである。わずか二時間半ばかりのことに、あれほど嚴重に縛りあげる必要があるのだろうか。それでも、女はもう自分の力で立ちあがることさえできないだろうに……。

「軍部では、すくなくとも私の管轄内では、捕虜が逃亡するというようなことは、一度もありませんでしたよ」

呉の疑問を見ぬいたように、揚大佐は言った。

ギク、としたようにふり向く呉の前に、相変わらず無表情な、遠くを眺めているような大佐の目があった。その茫洋とした瞳は、人の心の動きを、はっきり捕らえられるのだろうか、呉は内心舌をまいた。

「クウッ」

また女の咽喉がなった。

みると、完全に荷造りされた女を、若い部下が足げにして一回転させたのだった。

固く握りしめた掌が見えなくなると、縄で締められたために突さ出た胸を上にして、女は死んだように仰臥して動かない。

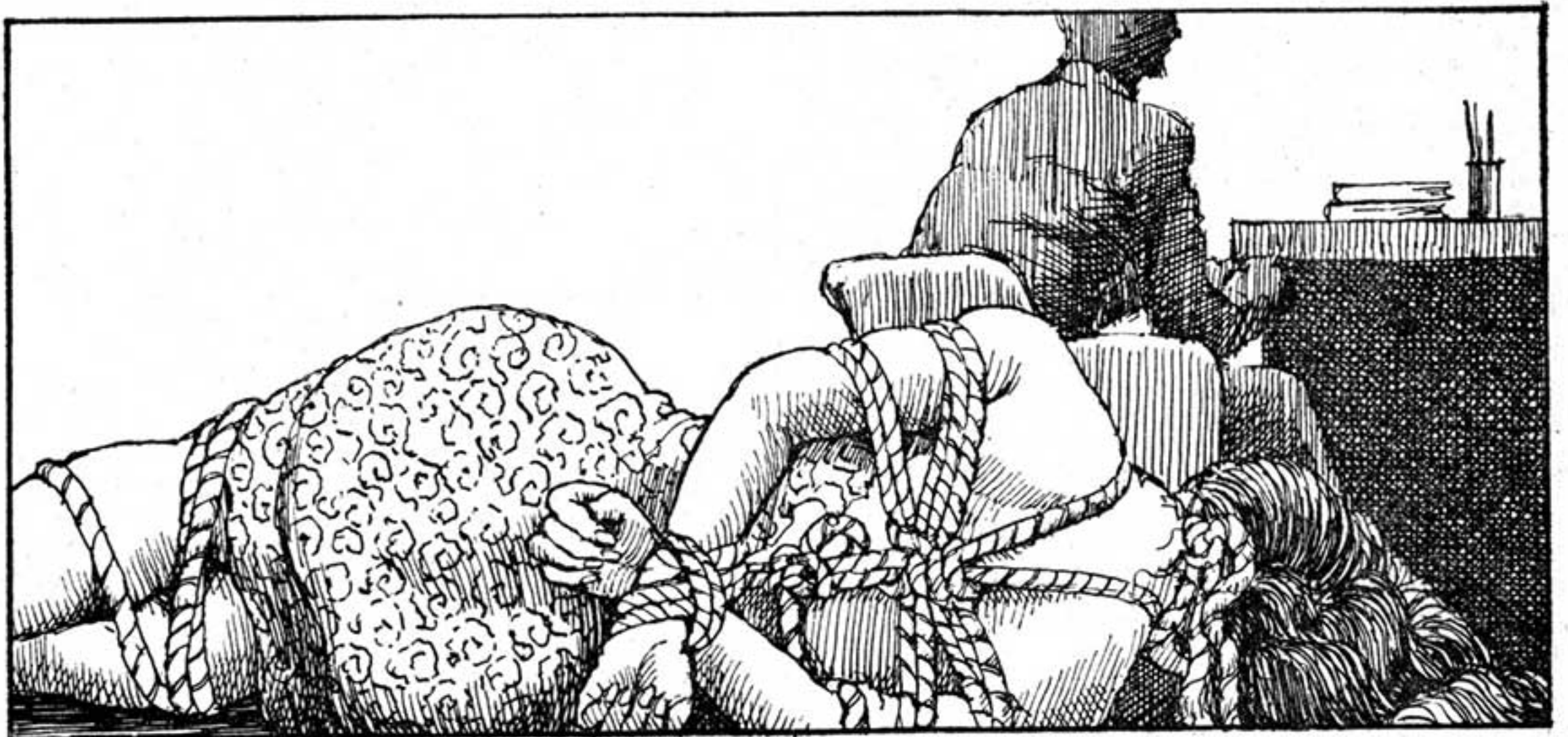
まだ若い。太縄で割り開かれた唇から肉のそげた顎は、豊満な肉体からみた感じとは意外なほどの、幼いものを残していた。

呉は、見てはならぬもののように、つと目をそ向けた。それまで若々しくみえた呉の額に、深い苦悩の年輪がきざみこまれるのを、大佐は見逃がさなかった。

「あなたが諜報部に身を技じた動機も錢さんからうかがいました……」

大佐がまた、静かに口をきった。

上海にいた頃の呉は、妻とひとり娘の恵華と平和を楽しむ親日派の好人物だった。手広く雑貨をいとなみ、むろん、日本軍の信任も厚かった。が、ある夜、南支から帰還してきた日本兵数人が、酔った勢いで恵華をからかいながら乱入してきた。奉公人のひとり、日本兵を突きとばしたことから事態は悪化して、兵たちは遂に発砲した。彼の妻と、恵華が折り重なって倒れるのを目にしながら、呉は灯火管制下の闇をつっ走っていた。



揚大佐の視線は相変わらず茫洋としていて、それでいながら、呉は自分の瞳を透して脳髓まで見られているような感じがした。

「あなたが日本政府を憎む気持はいまも変わりますまい。その点、私たちはなんの疑う余地も持っていないのですよ。しかし……、憎む、という気持はなんなのでしょ、うね、そう、そりややっぱりあなたは好人物、いや失礼、純粹と言えるのでしょ、うな。ずいぶんきつい言いかたですが、軍諜報部員としては失格です」

若い諜報部員は姿を消して、身動きもならぬ女がごろがっているばかりだった。

雑貨店の地下の物置きを改装した部屋は、まるで空気までが凝固したように殺伐としていて、そこに、机をはさんだふたりの男が対峙していた。

「日本軍はいま、重慶に迫っていますが、やがて敗退するでしょう。それよりも日本にとって手痛いことは対米情勢でしょうな。アメリカの参戦は目に見えていますし、いずれは我が軍の勝利で戦いは終わるでしょう」

大佐はそこで言葉を切って、チラッと女の方を見た。

「考えてごらんなさい。戦いが終わったあと、いったい私たちになにがあるというんです。

私たちはあくまで影の人間です。よしんば私たちの功績を認めてくれる者がいても、はたして人民大衆は私たちを歓迎してくれるでしょうか」

否、と呉は即座に心の中で叫んだ。それでも私はやるぞ。それが、愛国と言うものじゃないか、しかし……。

「戦時だけが私たちの花じゃありませんか。戦時だからこそ、私たちは政府から優遇されるし……」

大佐は女の方へ顎をしゃくってみせた。

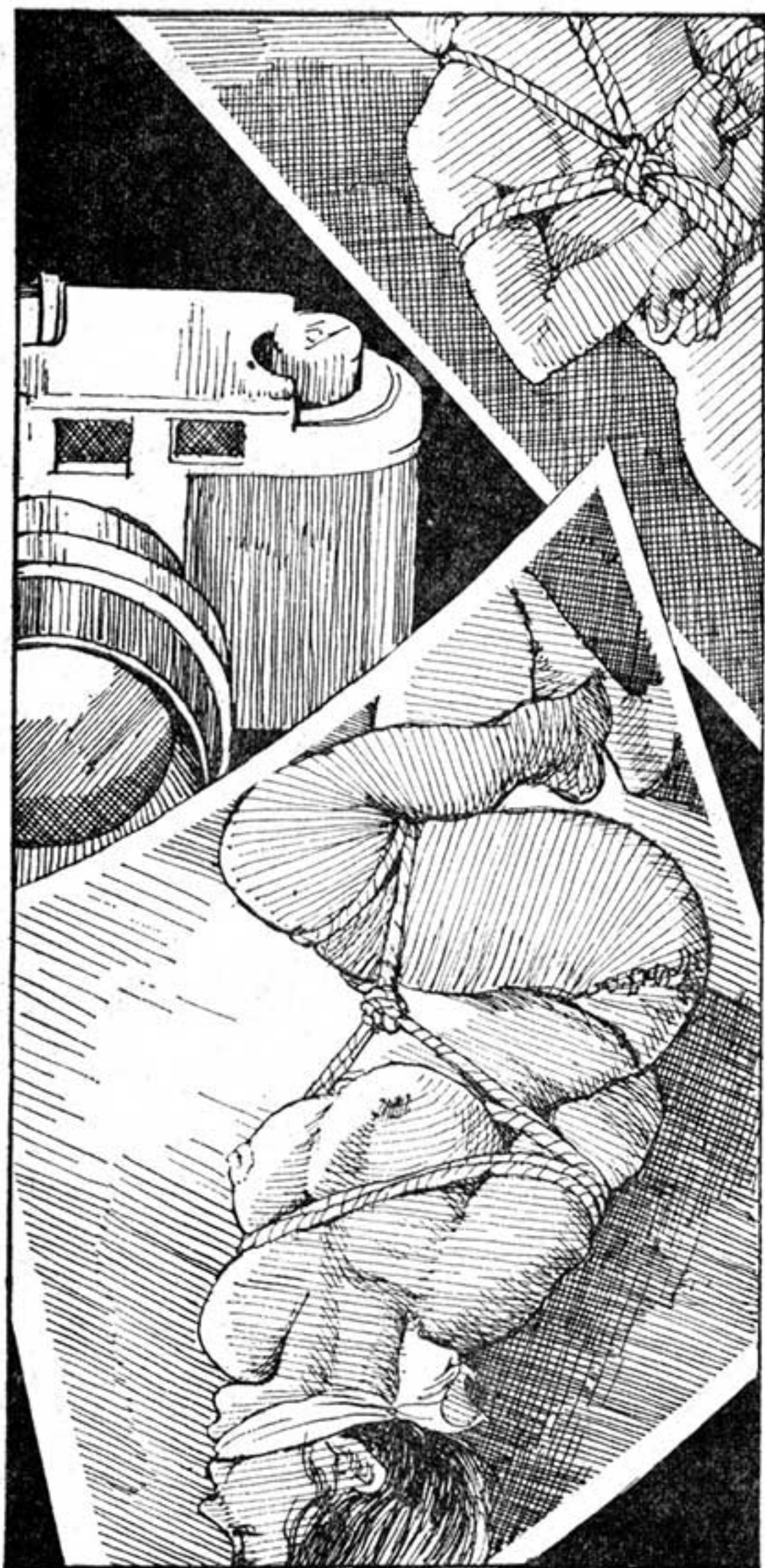
「女も自由になる。あなたもしばらくここにいたら、自分の職務に楽しみを見出すようになるでしょうからね」

大佐は右手を口にあてて、小さくあくびをかみこらした。

呉は、深く肩に首をうずめたまま、終始黙りこくっている。

「私ばかりがしゃべってしまったようだ。ところで、私はちょっと失礼します。さっき言った楽しみのひとつが待っているんでね」

揚大佐は、自分の特権を自慢したいらしく手をのばして机の隅から調書らしい綴りをとってひらいてみせた。一ページごとに顔写真があり、その大半のページは赤いバツテンが記されている。みんな消されたのである。





「王美清、まだ二十歳にはならんでしようがなかなかいける姑娘ですよ。明日から訊問を始める予定ですが、なんなら今夜、あなたのベッドにつないでおこうか」

冗談ではない証担に、大佐は真顔だった。それに、呉は初めて白い歯を見せてゆっくり顔を横にふった。

大佐は机の抽出しの奥から、大きなノートを取りだして机の上に置くと、椅子を鳴らし、立ちあがった。

「陳という男がカメラをやっていますね、よかったらごらん下さい。じゃ、あとのみです。一時間でもどりますから」

言い残して呉が入ってきた扉から大佐は姿を消した。

とり残された呉は、しばらく放心したように低い天井をにらんでいたが、やがて気のすまぬでいで机の上のノートを手にとった。

それは、やはり呉が予期したとおり、裸身の女の写真だった。おそらく、すべては日本側の間諜で、そのひとりひとは机の上にある調書の顔写真にもある女たちであろう。きびしい縄目が、女たちの四肢を非情に折り曲げからみ、食いいって、正視にたえない部分を露呈させているものばかりである。

大判のノートは上質の紙で出来ており、ひ

と目でアメリカ製のものであることがわかった。そして、それらの写真は、一枚一枚、コーナーでいいねいに整理されていて、いかにも大佐の几帳面さが偲ばれるものだった。

大佐は呉に、部下の趣味であるようなことを言ったが、呉は、おそらく大佐が命じて、部下に作らせたものだろうと思った。

写真に見入るおのれに嫌悪を感じながらも視線は吸い込まれるように、画面から離すことが出来なかった。

呉は、一ページ、また一ページと、愚かれたようにノートを繰っていった。

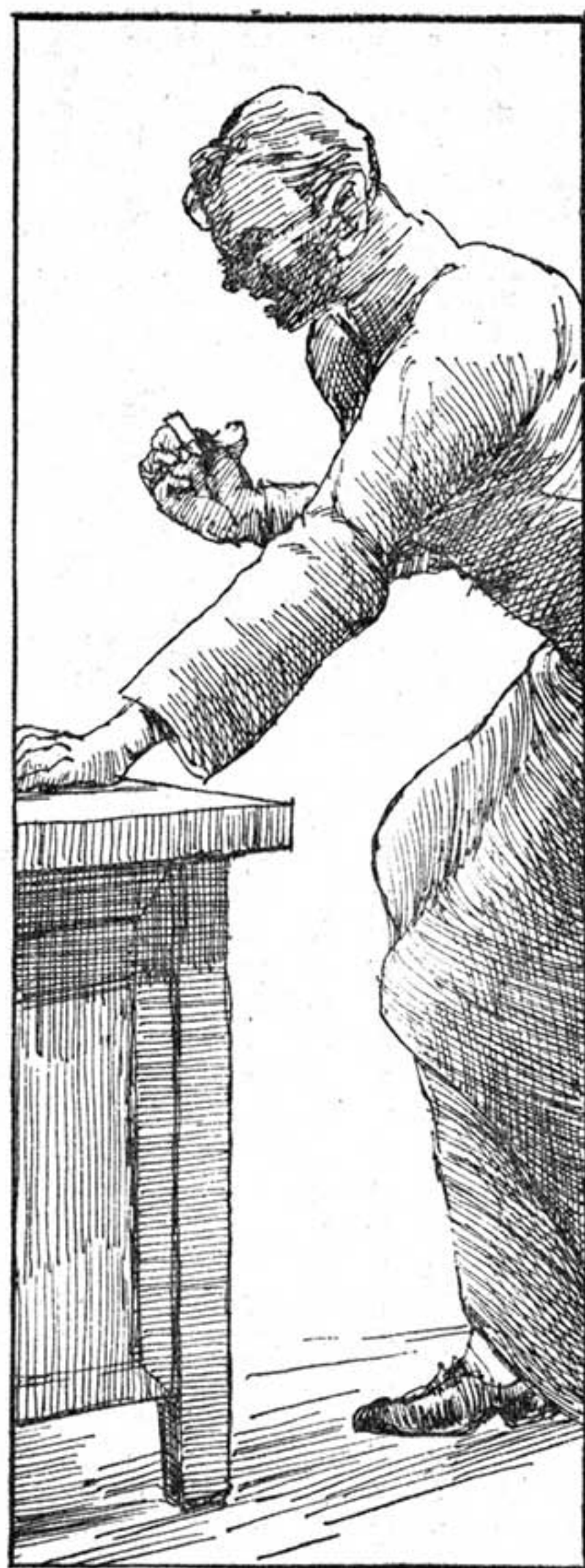
揚大佐は薄暗い廊下を猫のように静かに過ぎて、自室のドアをそっと開いた。

暗い。一箇所の採光すらない部屋は、それでも大佐の脂っこい体臭に澱んでいるようだった。

闇の中で、かすかに人の気配がする。大佐の指が電燈のスイッチをまさぐった。

目くらめく照明の中に、光を恐れる虫のよう、からだをちぢませた女が浮き上がって出た。固く握りしめた後ろ手のこぶしが、強い女の反抗を物語っていた。

女は半裸の姿で、揚大佐のベッドの脚に、その縄尻をつながれているのだった。



目だけが異様に輝いているのを大佐は見た。読心に長けた揚大佐も、この、呉の変貌には合点がいきかねた。

「大佐どの」

ガタンと音を立てて、呉は立ちあがった。「はなはだ勝手ではありますが、私をすぐに原隊へ復帰させていただきたいと思ひます」いぶかる目が、じっと呉の唇を見つめていた。

——相変わらず、なにこともなかったよう

の方に目をやった。

に茫洋とした顔で、揚大佐が呉のいる部屋に戻ったとき、呉はもとの椅子に深く身を沈めたままではいたが、大佐を見ると、待ちかねて

女は、疲れはてて、不自由な格好のまま、軽い寝意を立てていた。

いたように腰を浮かした。

呉は、たった一時間見ぬ間に、大きな仕事を成し遂げた人のように、目の下に憔悴を刻み、大佐には別人を見る思いがした。ただ、

大佐は職業的に、チラとところがついている女

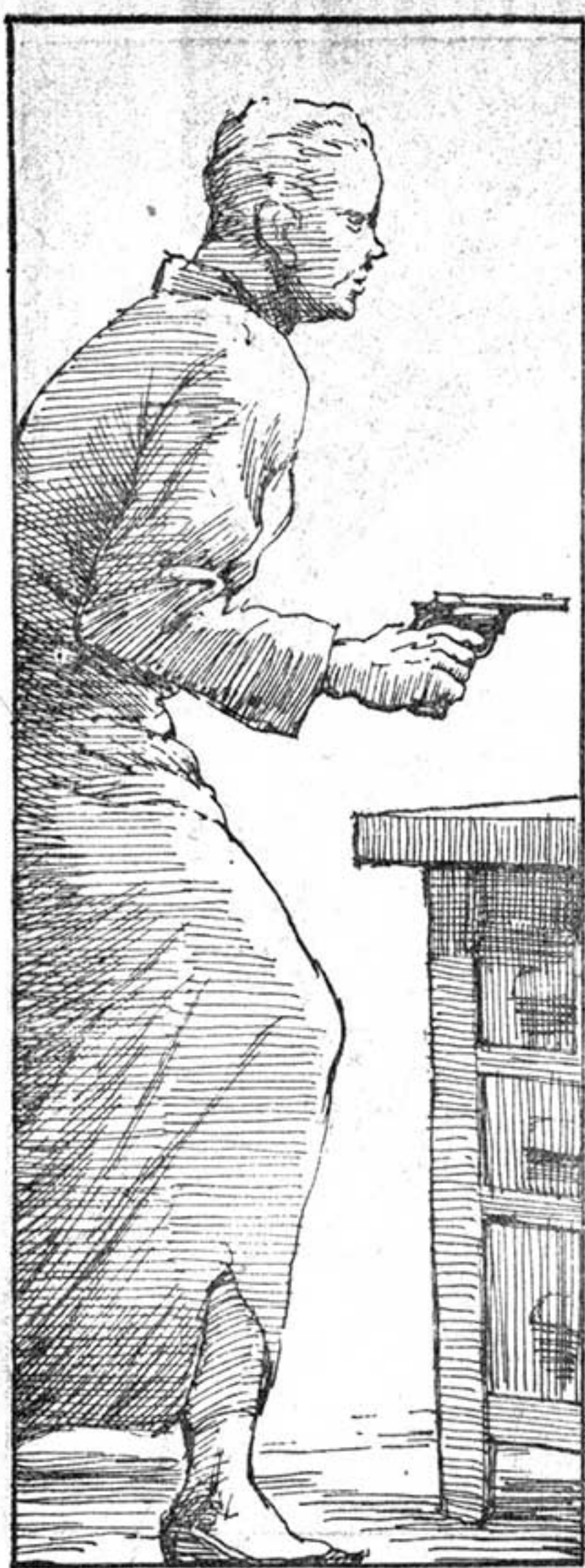
になった。

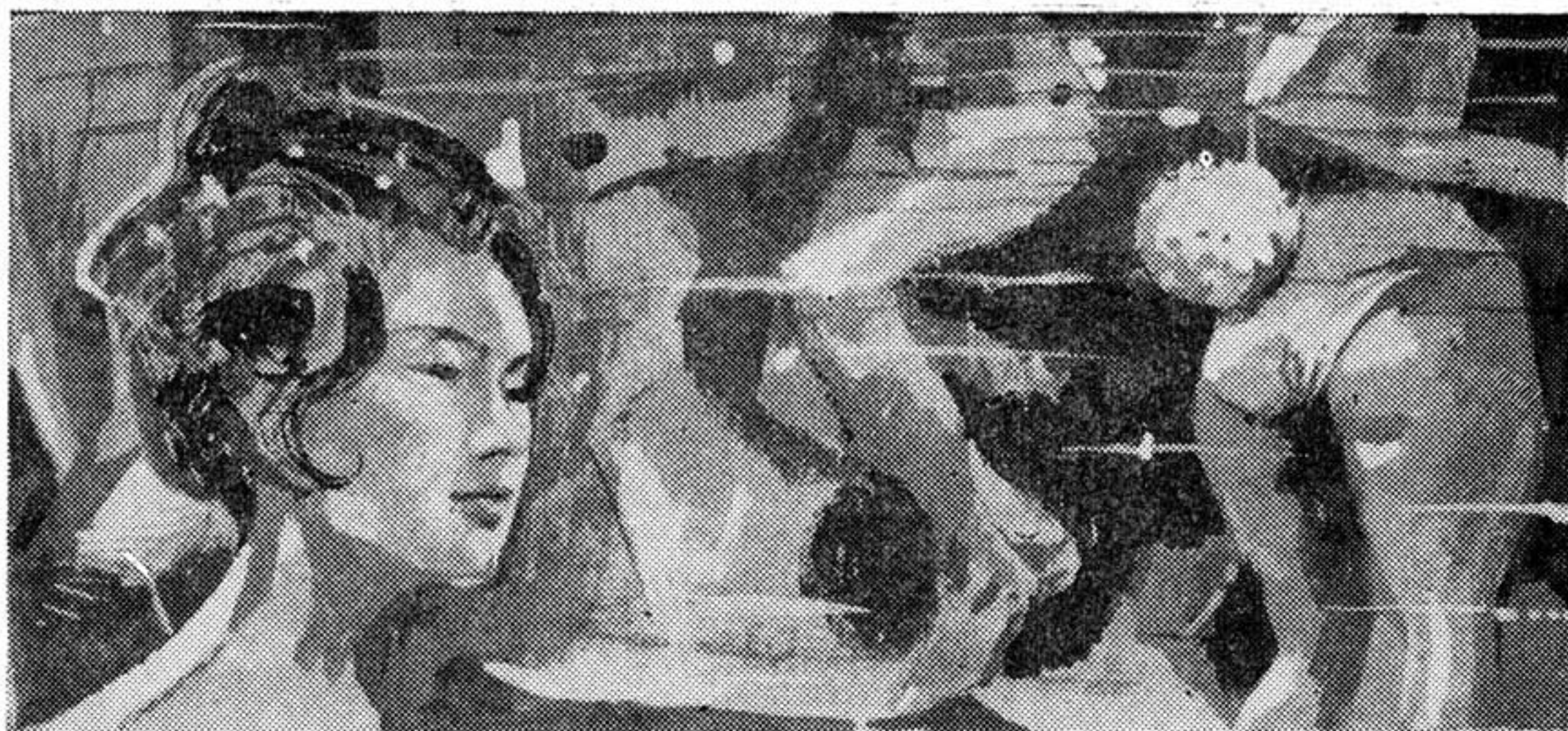
「大佐、私をすぐ復帰させてください」

呉は勢いこんで、両手を机についた。

揚大佐には呉の言葉は聞こえなかった。彼は、呉が飛びかかってきたように錯覚したのだ。二発、三発、銃声がして、呉は机においた両手を伸ばしてくずおれていった。

ククッと呻き声がした。しかし、それは銃声で眠りを覚まされた女が、苦痛がよみがえって呻いた声だった。





踊り子 “ヨッコ”

穂東 谷光
繪・巒吉 秋

“見えるアホーに見るアホー”

「ヨッコ。出番だよッ」

という声を聞きながら、妖子はそれが口癖になっている歌詞の一節をハミングしつつ、舞台裏を反対側へ駆け抜けた。舞台は今、最高潮である。この一座では最古参の副座長格である五月しづかが踊っていた。明暗おりまぜた華麗な色彩を点滅するライトの中の彼女の肢態には、もはや何も残っていない。モールの首飾りを長く垂らして△女の体▽を隠顕する。楽屋で見る姿と違ってライトの中の彼女の素肌は、三十半ば過ぎというのに疲れを感じさせない。

身のこなしが四肢の動きに自然な柔らかさを見せ、澆刺として、舞台がまるで狭いよう右に左にと、たくみに肢態を躍動させつつ動き回っている。

妖子は観衆に興味がある。この一座が巡る

のは市内の場末の劇場である。だから客の種類はいろいろであった。法被はっぴを着て日本手拭を首にまいた職人風や、くたびれた乗馬ズボンの土工達。派手なシャツのアンチャン連が寄り集まっている中に、渋い和服姿の白髪頭が混っている。瀟洒な背広を一分の隙もなしに着こなしている紳士もいた。それらの、まるで街中の人種の見本を、一堂に集めたような男の群れが熱心に舞台の上の△裸の体▽を、喰いつくような目で見詰めている。

この劇場は場末に相応しく建物も古い。客席の照明はほの暗く、ステージのはなやかさと対照的に陰湿いんしつであり、壁には露骨な裸女のポスターがベタベタと貼り付けてある。

客席は前方三分の一が板の間でその上に座ざが敷いてあり、通路を隔てて椅子席がある。汚れたござの上へ劇場で貸す汚れた座ぶとんを敷いてすわる。あれでは大事な服も汚れて

しまうだろう。

森妖子。本名は不明。通常、ヨッコ、ヨッコと呼ばれる一座の愛嬌者である。昭和十八年四国生れ、だという。彼女自身それをよく知らない。行商を続けていた彼女の父母は彼女が四才ごろ相次いで死亡、それからの生活については、自分がどうして生きて来たのか彼女自身知らない。七才の時に今の座長に見出され、可愛い容貌が気に入られて養女となった。旅から旅の生活でほとんど学校へ行かなかったが、回る先々の劇場や小屋の持主たちに愛された。

しづかねえさんの踊り——それは踊りなどといえるものではなかったが——は終りに近づいていた。妖子の位置から見ているとお客があれ程熱狂して求めているものが手に取るように見える。彼女はチラと客席を見た。さきほど「第一景」の時に姿がなくて少し彼女をがっかりさせたが、今見ると、いつの間に来たのか小父さんはいつもの場所を陣取って、熱心に舞台を見ている。その小父さんが待っているのは、次に出る自分であることを知っている。思わず頬が緩み微笑が浮び上って来る。

小父さんのいる場所は、舞台から見て右端にある花道のさらに右側のかぶりをつきであ

る。

そこは客席が舞台に向って狭くなっているため、ほんのわずかの隙しかなく、そして又余りよい席でもない。ただ横から覗くのに便利であったが、そういう時は踊り子は中央にいるので、その席からは遠い。しかし小父さんはそこがまるで、自分のもののように決めているようだ。座ぶとんを二枚、二つ折にして重ね、その上に小さな尻を乗せ、こじんまりとまとまった顔をかしげ、首を突出すようにしている。△今日はこういう方法で遊ぼうかな△と。彼女が△遊ぶ△というのは△見せる△ということである。

騒然とした場内へ新しい曲が流れ、光が七色の虹となって交叉する中へ、滑り出そうとする妖子のクリクリした尻を、ボンとたたいて、しづかねえさんは、

「大丈夫よ」という。大丈夫とは取締りがない、という意味である。安物ではあるが全身を華美な衣裳で包み、弾力のある四肢をはずませて妖子はステージ中央に走り出た。

「見せるアホーに……」と、彼女はまだ口の中で呟いていた。

妖子がこの劇場の片隅に、小父さんの姿を見たのはもう一年以上前である。彼女たちの

一座は、一つの場所に五日から十日間の契約で公演する。京阪神とその衛星都市が中心で西日本一帯を巡業する。

小父さんの事については彼女は何も知らない。しかし彼女が気づき始めてからの小父さんの熱心さは異常なほどであった。公演中は毎日やって来る。そしていつも昼間であった。この劇場を打上げて、近隣都市へ移動しても、そこが比較的便利な場所であると、必ず追うようにやって来る。ただ、この劇場以外では小父さん専用の特別席がない。けれど、目立たない位置で、いつも間近い場所を占拠して楽しむように見詰めている。最初彼女は、この小父さんが単なる熱烈なストリップファンだと思っていた。二度目の公演のときなど「変な人」と、思って眺めた事さえある。ふしぎなのは、この余り風采の上らない小父さんのどこかに、上品さが漂っている事であった。小父さんが自分を目的に、自分を見るために来ているらしいと彼女が気づいたのは、三度目にこの劇場へ来た時である。その前の巡業地で彼女を始め四人の者が、恐いオジサンから呼出され注意を受けていた。

だから初日は少し控目にしたものである。

ところが、そういう点にもっとも敏感な観客は、前の公演の彼女たちの素適な演技(?)

を見ているだけに期待も大きく、そして又、

その反動も大きかった。初日は多かった客足も二日目にはガタツと落ちた。客が少いと劇場はもとより、困るのは彼女たちである。直接生活に響いてくるのだ。何か善後策、自衛手段を講じなければならぬ。

三日目。妖子は跳ねて踊って、得意のアクロバットまでおりませ、肢態の妖艶な柔軟さを十二分に披露した上、客席に降りた。お客を身近に接することは別に目新しい事ではなかったが一座の若手花形である彼女が、そうする事はお客を熱狂させのに十分であった。

上半身は裸身であり、デルタを三角巾で覆い下半身は黒い網タイツ。真赤なハイヒールをはいていた。手にした桃色の薄絹で胸を覆い足の踏み場もないような前部席、ごさの上を万遍なくぬい歩いた。予定にない番外行為で、しばらくは座長以下をハラハラさせたものだが、お客が満足し騒然となるのを見ると演奏を低くし、照明を消し彼女の姿にスポットを当てた。彼女の動きは効果があった。第一、足の踏み場もないような場所である。股を大きく開いて足の位置を求め、時にはお客の肩に掛まらないと動けなかった。

彼女のデルタ目掛けて指を差出して来る勇敢な人もいる。ピシヤツとその手を強くとた

いて、

「あんた、助平ね！」

ドット客がわく。その間も彼女は適度なサービスを忘れない。煙草を吸付けて口紅のついたのを渡す。照れながら、しかしその男は皆の羨望を一身に受け、少し頬を染めながらも大事そうにそれをくわえる。また少年のような男がいた。学生なのか純情そうで清潔だった。

彼女はその頬を両手に挟むと唇をつけた。額に赤い二枚の花弁が付き、その色がひろがるように彼の顔面が紅潮する。そばの年配の紳士が思わずため息をもらす。こうして歩いていると彼女は男の感情がどの辺りにあるのかわかるようで興味があつた。

そして最後に小父さんの所へ行つた。サイドなのでそこから舞台に戻るつもりだった。

「御免なさいね」と、小父さんの横をすり抜けながら片足をあげた。意外に高い。中央ステージは前斜しているので多少低かったが、サイドは一杯の高さがある。とびつくように跳ねたとき、彼女は、片足に柔い接触を感じ振り向いたが、「アッ」と思わず、声に出していた。彼女の赤い靴の踵が小父さんの顔をかすめたのである。小父さんは、とっさに首を傾け避けたのだが、それでも頬骨の辺りに

赤い跡がついていた。

「済みません、御免なさい」

男の下卑た野次や動作には痛烈に反発、反撃するほど積極的な彼女だが、こんな場合、善良な素顔がうき出して来る。

小父さんはソツと頬をなでたが案外平気な顔であつた。

「いいんだ、いいんだ」

小父さんは笑っていた。

「でも……悪いわ」と、あやまりながら、ふといたずらっぽい考えを頭に浮べていた。場内の視線は集中していたし野次も飛ぶ。彼女はそれを無視して小父さんのそばに立った。もし、小父さんが手を出せばそれも許そうと思っていた。だが、小父さんは何もしない。黙って彼女を見上げている。その眼は熟していた。彼女はつとかがんで小父さんの耳元で言った。

「いいのよ」

一瞬、小父さんの頬に年甲斐もない血が昇つたように見えたが、しかし、少し唇を震わせただけで無言であつた。

「合間に何か御馳走して下さる？」

彼女はもう一度耳元で誘った。

「あんたになら……いいんだ。しかし、忙しいので終るまでいられない。本当は……」

小父さんは口ごもりながら小言で、

「キッスしたいのだが」

途端に彼女は暗然とした。やはり男は男なのだ……と。

「エッチノ 変な人。失礼ね」

もはや卑猥な野次に対処する時と同様に彼女の心は閉ざされていた。小父さんの頬を平手打ちしなかったのが、彼女の詫びの気持であった。しかしその日、第一回が終った休憩に、「はい、ヨッコちゃんに……」

と笑いながら受付の小母さんが持ち込んで来た大きな花束とケーキの箱を受け取った。

花束には紙片が二つ折にして挟んであり、
△変な男 Hより▽と、記してあったのである。

妖子の心の中に小父さんに対しての微妙な変化が現れ始めたのはそれからである。

小父さんは小柄な方であった。四十半ばと思えたが、本当はもう少し若いのかも知れない。

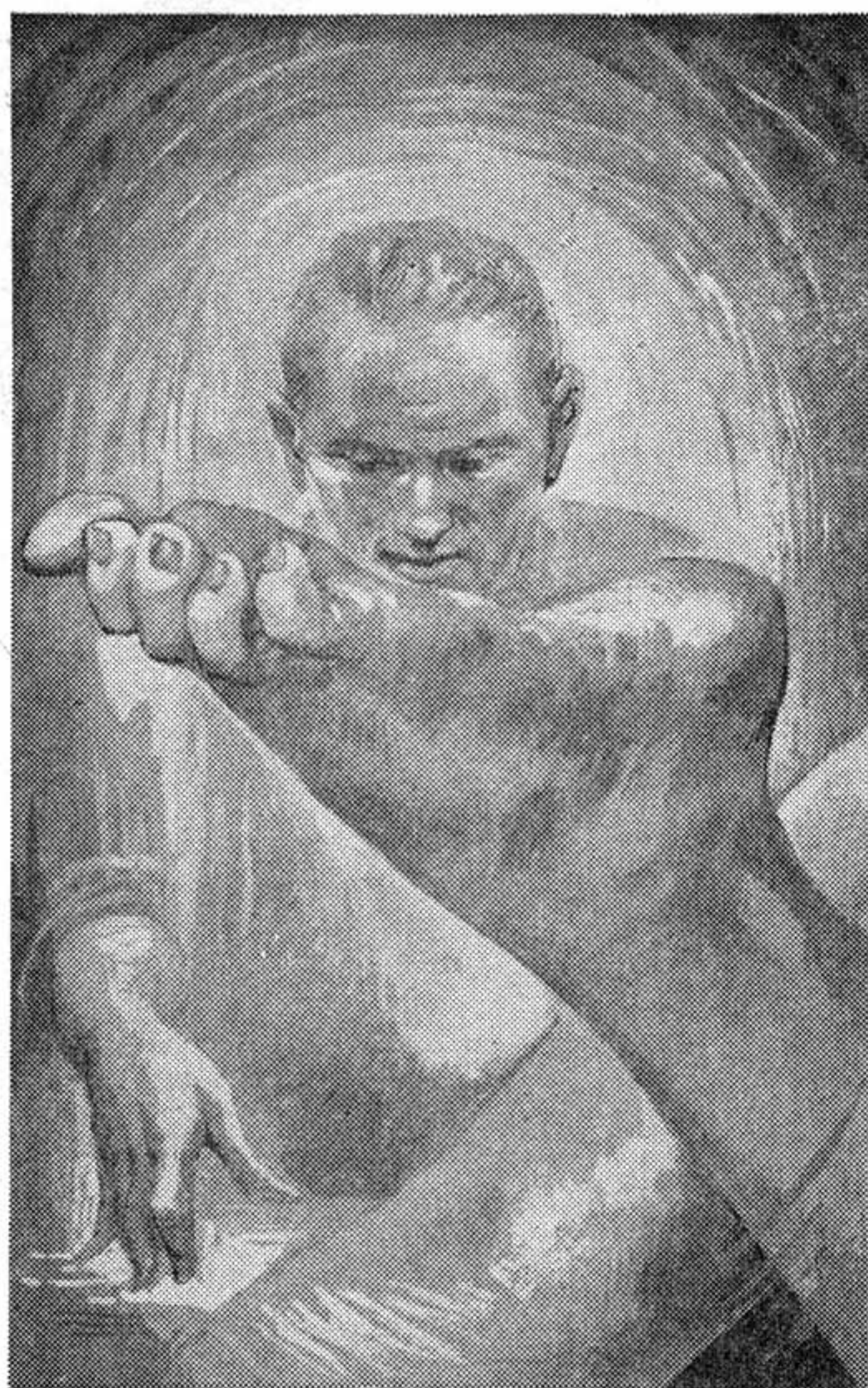
い。服装はいつも整っている。勤め人らしいがよくわからない。常連（彼女の出演中だけ）だが劇場の者も、お客の間でもなじみがないらしい。いつも一人で来て、ひっそりと静かに、彼の特別席に坐っている。場内世話係の小母さんは、小父さんが来ると特製の部厚い座ぶとんを渡すようになった。もちろんそれだけの事を小父さんがしているようであった。

妖子は舞台へ出るとまず小父さんの姿を探すようになっていた。小父さんはいつも少し遅れて来る。小父さんの姿がないと妖子は踊りながら、なんとなくさびしさを感じる。楽屋で出番を待っていると、下駄の音をさせてテケツの小母さんが顔を出し、

「ヨッコちゃん、お出だよッ」と、知らせてくれる事もある。すると彼女は張切るのである。どういうふうにあの小父さんを楽しませて上げようか……と、思っている。

こんな妖子の様子を座長もしづかねえさんも黙って見ている。

妖子は小父さんの姿を特別席に見出すと体の動きに弾みが出る。すべてのお客に対し万遍なく愛嬌を振りまく事も忘れてはいない。舞台を動き回りながらときどき小父さんに接近する。妖子の脚を、小父さんがなでよう



になった。抱くようにする時もある。たいていのお客は、その機会に恵まれても、いよいよとなると、気恥ずかしさが先立つのか、ためらいを見せる。そしてそばの男は自分ならというような顔をして見せるだけである。

小父さんはそのわずかな機会を大切に、有効に利用した。

ある時、彼女は花道の床で体をうごめかせていた。彼女の脚は自然な形で客席の方へたれていた。ライトは上半身の動きを捕え、お客の目も彼女の初々しさを示す剥き出しの乳房や、悩ましい翳を追っていた。かれらとは別に、小父さんはライトの蔭で妖子の脛をなでていた。

彼女は三角巾以外何もなく剥き出しの素肌だった。体をそらし、少し緩めたデルタの小布にお客のもらす溜息を聞きながら、自分の足をまさぐる小父さんの手を感じていた。異様に暖い手のひらであった。その時、小父さんは心を上ずらせながら唇をつけた。ハイヒールの足を手のひらに受け、靴の皮と共に彼女の足の甲やかかと、くるぶしのあたりを。この上なくいとおしいもののように。

そして突然、足から靴を抜がせて、全身の躍動でむれた足指を口の中に含んでいた。

ブルツと身震いし、そしてその戦慄に脅え

妖子は、自分が異常に昂奮しているのを感じた。曲が終りを示す一段と高く響いたとき、何事もなかったような自然のポーズで、身体を起し、抜け落ちた靴をはきながら、チラッと、小父さんの顔を見た。

舞台裏へきて、彼女はカーッととなって、熱い頬を両手にはさみ一瞬立ちすくんだ。

「小父さんが私の足の指を。あの人が——」
彼女の靴の中で足指はまだ濡れていた。

やがて彼女にとっても忘れられない一つの事件が起こった。

お客達は刺激を追ひ、さらに刺戟を追ひ求めるように、極端に凄まじいばかりの野次を飛ばす。開放が足りぬ、という。ここしばらくは取締りもなく平穏だった。妖子は相も変わらず、見せるアホーに……とハミングしつつこの文句が適節だと思う。それほど、踊り子とお客の間に「見える」と「見る」の需要と供給が適度に交錯している昨今であった。一座の中で三、四人はきわどい行為をする者もいる。

場内は暗い。その中で七彩のライトだけが舞台に光りの輪を投げ、時には意地悪く、時にはお客にこびるように、その麗姿を浮き出しにする。妖子もその仲間に入っていた。

彼女は、一座の中でもっとも柔軟な四肢をほこっている。昼のラスト近く、もうこれでしばしば小父さんとも逢えない、という思いが彼女を常になく大胆にした。曲技的姿態で十分に開陳して見せた。彼女の肉体は見る客のすべてからため息がもれた。

自分の持ち時間が少くなると自然に小父さんに近づいて行く。彼女は何気ない動作で抜き捨ててある衣粧の側へ寄り、身をかがめて覆い踊りながら、その薄紙をたくみに身体に挟んでいた。薄紙の中央は束ねられ、上と下とが扇型にひろがる。彼女が小父さんのために密かに考えた趣向である。小父さんの近くで横たわった時、彼女は扇を離していた。その姿をいっそうよく見ようとして、場内がざわめき出した時、彼女はゆっくりと体の方向をかえて、頭が客席に、足が舞台の方へ向いた。

薄紙は小父さんのすぐ前にあった。小父さんの手が伸びるのと、その上を彼女が扇で覆うのとほとんど同時。アンコールの拍手に応えつつ、小父さんの手が震えている、と彼女は思った。

その夜である。第一部のラスト近く開放展示した彼女は楽屋へ戻って青くなった。取調

べを受け、呼び出されて、

「お前はこの道では前科があるんだぞッ」と叱られた。

仕方がない、と彼女は思った。だいたい踊り子達は裸が売物であるだけに、自然にこんな事になれてしまう。ある子は「二、三度挙げられた方が名前が売れてよい」などとさえ呟いたりするが、妖子にはそんな不遜な意識はない。純情さも保っていたし無邪気でもあった。

一晚泊められただけで妖子は許された。その事を喜ぶより彼女を驚かせたのは、座長と並んでいる小父さんの姿を見たのである。彼女は前にある机の上に置かれた名簿を見詰めていた。

大型のそれには『森妖子後援会々長 ××××』とあり、もっと彼女を驚かせたのは、もう一枚の普通の名簿であった。それは彼女も知っている某市の会社名が入っていて、『専務取締役××××』とあった。

呆然としている妖子に小父さんは、初めて見せる笑顔で、

「昨日は有難う。大事にしてるよ」と耳元でささやいた。

「本当によかった。専務さんのおかげよ」

座長もしづかねえさんも喜んでいる。しか

し妖子は信じられなかった。あの人が……と。

夏になった。舞台に大盥^{だらひ}が置かれている。

使い古された風景であり、別段新しい趣向もない。しかし妖子はこの「行水」を提案した。めずらしく和服姿になった彼女は場内からお客を招く。客に洗わせ乍ら、脚をくの字に曲げ、日本髪化粧した顔を少し傾けて艶然と笑う。

あどけない可愛いさがあり客は盛んに拍手を送る。背を向けて立ち上がりピッタリと脚を合わせて全身をぬぐわせる。彼女に奉仕するお客は、彼女のしなやかな肌を間近に拝見できる。

舞台へ上ろうとするお客のない時は、彼女はお客を物色しながら、結局小父さんを連れて上がる。それが彼女の目的であり、小父さんへの好意であった。小父さんが舞台へ上がると、すでに打合わせ済みのライト係が、特に入念に注視する。彼女がお客に背を向けて立ち、小父さんは丁寧に彼女の全身をぬぐって行く。そして前へ回り、かがみ込んで彼女の脚をふく。その時、何気ない様子でライトが変化する。時には、一瞬消える事さえある。再び照らされた彼女の全身はお客に何の変異も見せず元の姿で立っている。

しかしそのわずかの隙に、彼女は片足を盥の縁に乗せ脚を曲げて、抱え込む。小父さんは瞬間の愉悅をむさぼり、彼女もまた、感覚が全身に走るのを意識する。

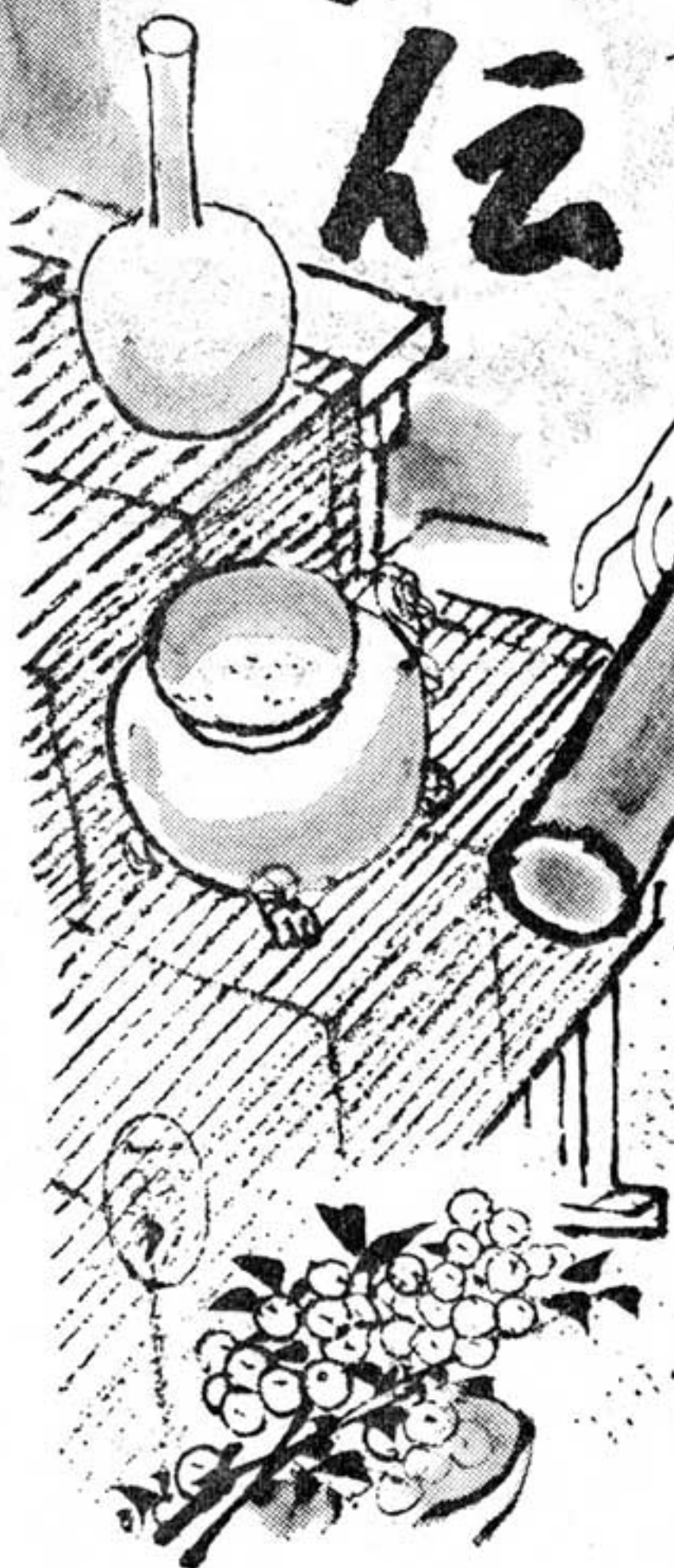
意外な好評で十日間続けた公演中、昼間の五日間は小父さんが妖子を独占した。初めは小父さんの心をみたすためだったはずのショウなのに、いつの間にか彼女は、それが自分にとって快いうずき、刺激にさえなってきた。ある事を自覚していた。だから打上げの日、小父さんから届けられた花束に挟まれていた紙片を見た時も、ウフフ、と笑っただけである。

▲この次ぎ欲しいのは×××××と、小父さんの達筆で記された液体の名を読みながら、いったい、どういう格好やポーズがいいのかしら。などとその時の様子を頭の中にえがいていた。

彼女は、そういう小父さんの姿を想うと楽しくなり、そして小父さんには、自分が必要な人間のように思え、自分もまた、夢の国の女王になったような気がしてくるのである。

乱世呪縄伝

らん
せい
じゆ
な
でん



潮
一樹
小日向
一夢
絵

掠奪の旗

戦乱が相次ぎ、群雄が割拠する乱世。

泉州堺から十日を歩いた隊商は、荒涼たる丘陵を越えて驚部領に踏み入った。

隊商の目的とする水加月玄信の城は残す所二日の旅程である。驚部と水加月の間には、常に紛争が起っていた。

言わば敵中を突破するのである。隊列の先に立つ、護衛隊長の疾風源三郎以下、緊張の色を漲ぎらせた。

隊列を止めて、源三郎は馬首をめぐらし、隊列の後方へ馬を走らせた。

そこには、豊かな肢体を旅装で包んだ美女が、荷車の上に横座りに揺られていた。源三郎の許婚となった鈴香である。

堺の豪商達の組織する傭兵隊の中にあって抜群の腕を持つ源三郎に、南蛮屋又兵衛の娘鈴香は恋い焦れた。

源三郎の腕と強靱な性格に惚れた又兵衛は、堺鉄砲を買い取った水加月玄信に仕官さすべく、鈴香と共に護衛隊長として出発させたのであった。

「鈴香、疲れたか。水加月領まで後三日だ」と、源三郎は優しく声を掛けた。鈴香は眼をあげて微笑した。

「大丈夫、車の上ですもの」

あまえた口調で鈴香が答える。源三郎は陽灼けした顔をほころばせ、視線を隊列にまわした。護衛の牢人者は七人である。

その時、荒涼たる丘陵の陰から、立ち昇る砂塵が見えた。

砂塵の中に旗差物と甲冑が揺れている。源三郎は表情を引き緊めて叫びを放った。

「気を付けろ、戦さの用意だ」
命令を飛ばせると、矢壺を背負ったふたりが、馬腹の下に潜りこんで弓をかまえる。

近づいて来る人馬は約三十騎、甲冑に蝙蝠を染め出した旗差物を立てた、騎馬武者の一団である。

その中に平服の武者が一騎いる。その手があがると、三十騎は半円を描いて源三郎達を包囲した。

黒系緘しの甲冑を着けた一騎が、進み出てわめき立てた。

「領主、驚部竜元様じゃ。宰領は誰れか」

「拙者でござる。泉州堺の商人南蛮屋又兵衛の配下、疾風源三郎と申す者。御領内を通過させて頂きたい」

「貴公等は、いずれへ行くのだ」

「筑紫へ布を運ぶ途中でござる」
油断なく源三郎は答えた。

荷の中身は布ではなく鉄砲である。調べら

れては危い。平服の武者が領主の驚部竜元である。陰險な骨張った相貌、鼻下から顎にかけて濃い髯が密生している。竜元の視線が隊列を横切り、鈴香の上にびたりと貼りついていった。

「領内通行の商人は、賦課金を払わねばならぬのだ」

面倒な事態は金で逃げると、源三郎は堺で教えられている。

「左様でござるか、お払い申そう、いかほどでござる」

「荷駄一頭につき黄金十枚。荷車十輛について百枚じゃ」

騎馬武者は、平然と答えた。

「無法な、払わぬと申さばどうされる」

「通行賦課金の代償として、荷を奪い取る」
武者は背後の領主に、ちらりと視線を走らせた。

源三郎は相手の意企が黄金百枚ではなくて荷を奪う事にあるのだと悟った。七人の牢人者達は、早くも危険を知って、刀の柄に手を掛けている。

馬上の竜元がにやりと笑って、右手をゆくりと振った。

「ぬかるな、突っ走るぞ」

源三郎が絶叫すると同時に、馬腹の下から放たれた矢が騎馬武者に命中した。

先制攻撃である。三十騎が半円を崩して襲いかかって来る。源三郎は太刀を抜き、馬首を後方へまわした。

三十騎の敵に対して、七人の部下では勝てぬ。

「荷を捨て斬り抜けろ。逃げるのだっ」

怒鳴った源三郎は、鈴香の方に駆け去ろうとする数騎の中に突入した。

ふたりを斬り倒した源三郎の耳に、鈴香の助けを求める悲鳴が聞えた。

「甚内、矢だ。矢を射ろっ」

顔を振り向けた時、源三郎は衝撃を背に受けてのけぞった。矢が右腋下に突き刺ったのである。右腕がしびれ、握っていた太刀が地面に転がり落ちた。

「源三郎どの、大丈夫かあっ」

走り寄った甚内が、鞍上から崩れそうな源三郎を支えようとした刹那、馬蹄の響きが殺倒し、断末魔の苦鳴を噴いて鞍にすがりついた。駆けぬけた一騎の槍が、背から胸を貫ぬいたのだ。

「に、にげろ——」

甚内が、土気色の唇を動かした。

鈴香はすでに捕えられたのか、悲鳴は消え

ていた。

残った部下は騎馬武者に追い立てられて、砂塵の中を逃げまどい、次々と槍の穂先に絶命していく。残酷な殺戮であった。

「死ねっ」

源三郎は耳元で陰惨な死の怒号を聞いた。兜の前庇の下から、殺気に燃えた眼が覗いていた。構えた太刀が振りおろされた。防ごうにも右手に武器はない。辛うじて鞘ごと抜いた脇差が相手の刀尖をかすった。

熱鉄が肉を灼く感触が肩に残った。視界が暗くなり、源三郎は薄れていく意識の中で、地面のせりあがって来るのを見た。落馬したのである。隊商はすでに全滅していた。

「ひけえ」

戦闘の場から離れた地点で、殺戮を眺めていた竜元の咽喉から命令が流れた。

掠奪した荷駄を引きながら、騎馬武者の一団は馬首を返して姿を小さくしていった。吹き渡る風が血の匂いをのせて流れた。と、そこから、わずかな距離の叢から、四つの眼が辺りをうかがっていたのである。

「次郎丸、奴等はいなくなったよ」

若い娘の声なのだ。草を分けてぬっと立ったのは、黒髪を惜し気もなく風に吹き散らせた女である。

短かい膝までの下袴を着け、粗末な布子を

まとって、野伏りの一味らしく短い山刀を腰に帯びている。濃い眉の下に、黒く光った鋭い双眸、陽に灼けた肌に野性の烈しさを漲ぎらせた美女である。しなやかなからだは、牝鹿を思わせる妖しい魅力をたたえていた。

「ひどい事をするね。左弓さん」

転っている屍に眼を向けて、口を開いたのは次郎丸と呼ばれた少年である。

左弓は無言で、屍に歩み寄った。太刀か甲冑かを、引き剥ぐ心算なのだ。

「どうせ牢人者だよ。ろくな刀は持っていないだろうが、集めておいで」

次郎丸に命じた左弓は、地面に落ちている見事な造りの太刀に気づいた。拾おうとする背へ、しゃがれた声がかかったのである。

「た、たのみがある——」

意識を甦えらせた源三郎であった。割られた肩から噴き出た血が、半面を染めて凄惨な姿である。恐れもせず、左弓は近寄ると、肩をかがめた。

「お前は、まだ生きていたのだね」

「こ、ころしてくれ。た、たのむ」

「傷を改めて、駄目なら、嫌でも殺してやるよ。待つといで」

左弓は、源三郎の襟をくつろげて傷を調べ

て言った。

「手当を早くすれば大丈夫だよ。傷はこれだけかい」

「矢、矢傷が背中にある」

源三郎を抱え起した左弓は、半分から折れた矢の刺っているのに眉をしかめた。鏃を早く抜かねばならぬ。

「次郎丸、刀はもういらぬよ。こっちへ来ておくれ」

「どうしたんだね。左弓さん」

次郎丸は、左弓の膝に頭をもたせかけている生き残りの男を見て、驚きの声をあげた。

「これは宰領だよ」

「無駄口はおよし。この男を叢に運ぶのさ。」

お前は、すぐ火を燃やしておくれ」

と、命じて左弓は次郎丸に手伝わせると源

三郎を先刻まで潜んでいた場所に横たえた。

叢の下は窪地になっており、隠れるには絶好である。

左弓は布子の襟をはだけると、双肌を脱いで着ている肌衣の両袖をちぎり取った。陽に灼けていない、豊かな肉づきの腕は眼に浸みるほどに白い。左弓は肌衣の袖を裂いてつなぎ合せた。

その間に次郎丸の火が燃え始めていた。

「火はそれでいいよ。今度は蓬を集めておい

で」

次郎丸が窪地を飛び出すと、左弓は山刀を抜いて火にかざしながら言った。

「鏃を取るよ。荒療治だが辛抱おし」

源三郎の上半身を伏させると、左弓はしっかりと押えつけて、血に濡れた衣服を切り開いた。

そして、矢の刺っている個所に灼いた刃をぐいと刺しこんだのである。

「う、うっ」

呻く源三郎にかまわず、尖先で肉をえぐると、かちりと鏃が触れた。

「ほら、抜けたよ。安心するがいい」

血にまみれた鏃を掌に転がした時には、苦痛のために源三郎は再び意識を濁らせていたのだ。

次郎丸の集めた蓬を唾液で揉み、青い葉汁が出ると、左弓は源三郎の肩と背の傷へたっぷりつけて、つなぎ合せた布でしっかりと縛った。蓬は止血の妙薬なのである。

「次郎丸、馬が欲しいね」

「馬ならこの人が乗っていた奴が近くにいますよ。連れてくらあ」

次郎丸が探しに行った後、左弓は源三郎の顔を凝視し続けていた。

精悍な男らしい容貌が、ふと野性の美女の

胸をときめかせたのであった。

悪魔の城塞

馬の臭気が鈴香の鼻腔に浸みこみ、深い絶望感を掻き立てた。身をふたつに折られて、鈴香は鞍の上にのせられている。

荷車から引きずり下ろされ、両腕を捻りあげられるや、次の瞬間には縄が手首を噛み胸を締めつけていた。

その前に鈴香は、源三郎がのけぞる姿を視界の一端に捉えていた。死を覚悟して、舌を噛もうとするよりも早く、武者の手が顎を碎けるばかりに握み、歯を割って布片を押しこめた。頬も歪む峻烈な猿轡であった。

無傷のままに鈴香を捕える事は、驚部竜元の狂いのひとつであつたらしい。

やがて、騎馬武者の一团は竜元の城砦に着いた。

城は、奇怪な容相をした岩の多い丘陵の上に建てられていた。

天守はなく、城砦の四隅に櫓がそそり立っている。城砦に通ずる丘の道は、屈折はゆるやかで、城からは総てが見渡せるように工夫がしてあつた。丘を昇って来る敵は、その途中で城兵から狙撃されておびただしい損害を出す事は当然である。天守の要害を巧みに利



用した城砦であつた。

屋根も壁も黒く、あたかも蝙蝠が翼を拡げた形を思わすので、人は蝙蝠城と呼んでいるのである。

城砦の内部は、外面とは反対に、通路は狭くさまざまな角で折れ曲っている。

万一侵入して来た敵の戦力を、誘いこんで叩き潰そうと言う築城の法であつた。

その通路を抜けると館の前に出る。

馬を下りた竜元が、背後を振り返った。

「坂部剛玄、女をおろせ」

抱え下ろされた鈴香は、眼がくらんで立てない。揺られ続けた馬の背で、血が逆流したようなのだ。

「殿、これを――」

坂部剛玄の差し出したのは縄尻である。

竜元はにやりと笑うと、手にした鞭をびゅつと鈴香の背に鳴らした。

「歩け、歩かぬか。動かぬと血を噴くまで打ちのめすぞ」

竜元の声は冷酷そのものであつた。

鞭の先端が白くなめらかなうなじをこづく。その動きが鈴香の胸に恐怖を拡げる。

両膝に全身の力をこめて、立ちあがろうとする。

「蝙蝠ノ櫓に行く。呼ぶまで来る用はない」

竜元は声を残して、鈴香を引き立てながら歩き出した。

辰己櫓がちょうど蝙蝠の翼に当る所から蝙蝠ノ櫓と呼ばれているのだ。

そこに竜元の悪魔の館が作られているのである。

鈴香は運命の惨酷さに打ちのめされた。堺の豪商の娘として、不自由なく掌で囲われるように育てられた身である。

しかも、恋の甘酒に酔い痴れて、源三郎との暮しを描いて来た胸をいまは恐怖が真黒に塗りつぶしていくのだ。

恋しい源三郎はこの世に亡いかも知れぬ。舌を噛み切って後を追いたい。思うだけで鈴香の足は動きを鈍らせる。

と、すかさず竜元が鞭を飛ばすのだ。布に包まれているとは言え、鞭は鋭い痛みを喰いこませる。小袖のはなやかな色彩にくるまった臀のふくらみのうごめきが、竜元の心をそそった。

「ふふふ、楽しみが増えたわ」

竜元は、陰湿な期待で胸をふくらませながら、哀れな囚人に呟いた。

曲折した通路が届いた所に、深閑と静まり返った蝙蝠ノ櫓がある。

竜元の配下は、命令なしでは近づけぬ秘密

が隠されているのだ。

「平鬼はおらぬか」

竜元は宙に向って叫んだ。反響するかのように、低く沈んだ声もどってきた。

「これに控えており申す」

いつの間に現われたのか、黒衣の影がひとつ、櫓の門の下に控えている。

骨張った異相は死人のように蒼く、双眸は白く光彩を喪って見えた。

陰惨な屍臭をまつわりつかせた忍び者である。

「櫓の警護に、抜かりはあるまいな」

「我等、腐乱佗の忍者がおる限りは、御安心なされ」

「よし、平鬼よ。例の蒸し風呂の用意をしてくれい」

と、奇妙な事を申付けると、開かれた門から、竜元は鈴香を暗い櫓の中に追い立てた。

入った所は十畳ほどの部屋があり、上部へ通ずる階段と、何をする部屋か、重々しい杉戸が黒ずんだ光を放っている。

がらんとした部屋の中央にふとい柱が立っていた。鈴香はその柱が何のためにあるのか肌で知らされたのであった。

竜元は鈴香の背を柱に押しつけて、縄尻を巻きつけると、猿轡をゆっくりとはずした。

紅い唇から、はみ出ている布きれを取り出す。唾液を吸った布の塊りである。

「案ずるな、殺しはせぬ。わしは美しい女子は大事にする方じゃ。そなたの名を申せ」

竜元は、鈴香を覗きこんで訊いた。

鈴香は、武家の生れではない。命を捨ててまで、己れを守るほど強くはなかった。

この豪族の意に従えば、命までは奪われまい。

鈴香はとっさに計算していた。

「は、はい。鈴香と申しまする」

「生れは泉州堺らしいの」

声音は妙に柔らかい。その癖指先はずるずると動いて、ぬめりとした咽喉から、襟もとの起伏を楽しんでいるのだ。

「南蛮屋又兵衛の娘にござりまする」

「疾風源三郎と申す宰領は、そなたの夫か」

「許婚でございます」

鈴香の答えを聞いた竜元の眼が、惨忍な光をかすめさせた。

かすれた妖しい笑い声を、部屋一杯に響かせる。

白くまろやかな肩がむきだされる。羞恥の小さな叫びをもらして鈴香は顔をそむけた。

「それは気の毒であったな。そなたの許婚も今ごろはひとりで冥府へ歩いておろう。どう

じゃな。相手は牢人者、小国とは申せ、わしは鷲部の領主じゃ。可愛がられるなら、女冥利に尽きると申すものよ」

竜元は、豊かな鈴香に視線を粘らせた。布の上から、肌身をすかし見るような表情である。

と、どこからともなく声が聞こえた。

「蒸し風呂の用意、でき申した」

竜元の顔に、微笑が這いのぼった。

「鈴香、風呂の仕度ができたようじゃ。旅の埃を落すがよい」

柱から解き放して、後手の縛めをほどくと竜元の真意を図りかねて、立ちすくんでいる鈴香の手首を握む。

「来るがよい」

ふたたび、突き上げてくる恐怖に鈴香の呼吸が凍った。

重たげな杉戸があげられたのである。そこから、細く暗い石畳を敷いた通路があり、引き立てられた鈴香は突き当たった頑丈な戸から内部へ押しこまれた。

熱気と湯気が鈴香を包んだ。

背後で、戸が軌んだ音と共に閉ざされた。

かんぬきを掛ける音が絶望的に重なる。鈴香は呆然として、奇怪な蒸し風呂を見まわした。

周囲の板壁は、湿気を吸って光っていた。床には簀子が敷き詰められ、その間からは熱した湯気がもうもうと舞い上っている。

一方の隅には水槽があり、水が満されてあった。熱気は、閉め切った狭い小さな室に立ちこもっている。

と、板壁にわずかな隙間があり、竜元の顔が覗くのが見えた。

「汗を全身に噴かせて、洗い流せ」

竜元の声が、わあんと響いた。

鈴香は愕然とした。

相手の意企が読めたのだ。

蒸し風呂の熱気に耐えかねて、鈴香が着衣をぬぐさまを、眺めようとする竜元なのである。

「ぬげ、早くぬがぬと、蒸し風呂はますます熱くなるぞ」

竜元の言葉が、耳に突き刺る。

鈴香は壁に背をよりかからせて、眼を閉じた。

熱い。汗が額から首筋に噴き出し、腋から垂れ落ちる。

着ている小袖がひどく重く感じられるのだ。せめてもと、鈴香は足袋をぬぎ脚絆をはずす。簀子の間から立ち昇る湯気は激しさを増している。

熱気は確実に高まりつつあった。

鈴香は瞼を押しあげた。

水槽の中には、水がたたえられているではないか。

あの水をかぶれば楽になる。水槽に掛け寄って、手を差し入れた鈴香の表情が歪んだ。

水ではなかったのだ。

湯気よりも熱い湯が、たたえられていたのである。

「あつい」

鈴香はそのまま崩れ落ちた。気の狂いそうな熱気である。

喰いこむような竜元の視線を感じながらも耐えかねて鈴香は襟をくつろげた。肌が噴き出た汗にぬらぬらと光っている。

帯だけはゆるめよう、少しは楽になる。鈴香は震える手で帯を解いた。

叫びをあげようにも、咽喉も唇も乾き切って動かぬ。からだ中の水分を絞り取られるのだ。死ぬかも知れぬと言う恐怖が、鈴香の胸をかすめたのはこの時であった。

もはや、耐えきれなかった。

鈴香はうつろな眼で、白い湯気を凝視して小袖を足もとに脱ぎ落した。

竜元は息を殺して、熱気に悶えている美女を見詰めている。

男の視線にさらされながら、羞恥におののく女が、熱さに耐えかねて、おのれから着衣を脱ぎ落とす光景。

汗でぐっしりと濡れた肌衣は、肌にくっつき、起伏をはっきりと描き出していた。

白い布を通して、ほてった肌の色が、なまめかしさを溢れさせて、裸身と異った妖しい美しさを漲ぎらせている。

荒く息を弾ませるたびに乳房が大きく揺れていた。指が、汗を吸って気味悪く重い肌衣を取っていく。

ねっとり凝脂を光らせた背を竜元に向けてうずくまった。

巻きつけた真紅の腰布が、豊満なふくらみに、はちきれんばかりであった。

黒ずんだ簀子の上にのめった鈴香を見て、

竜元は髯の密生した顔をゆるめた。

鈴香はもう動けぬのだ。

竜元は太刀をはずし、脇差を捨てて。

骨ぶとい体軀は筋肉の隆起を見せて、乱世を生き抜く豪族の強靱さを漲ぎらせていた。

竜元は、用意してある紅白のだんだらによりあげられた縄を掴むと、蒸し風呂の戸を開いた。

噴出する蒸気の量は減ってはいたが、熱気

は以然として濃く立ちこめていた。

竜元は簀子を踏み、鈴香に歩み寄って、流れている黒く艶やかな髪を握った。

引き起して、顔を覗きこむと、竜元は満足気に眼を細めた。

紅潮し、汗にまみれた鈴香の美しさは、また格別であった。

気力も失せたのか、ふたつのふくらみも隠そうとせぬのだ。

乳首が血をふくんだように赤いのは、風呂責めの故であろう。

「出して、出して下さりませ」

鈴香は、咽喉を震わせた。

「よし、いま出してやるわい」

と、竜元は期待にたがわぬ獲物に満足していた。

握っていた髪を離して、竜元は縄をゆっくりと捌いた。

柔らかなふたつの腕を掴んで、感触を楽しみながら、背へ折り曲げていく。

落花狼藉

意識を濁らせている女を、扱う事は雑作もない。

重ね合せた手首を縛ると、縄尻を引きあげて首縄を掛けて、乳房の周囲を巻き締める。

鈴香の腕が、肱を基点として、くの字に折れ曲った。

竜元は熱気に身をのぼせあがらせて、たらたらと汗を流しながら、鈴香を高手小手に縛めていく。

紅白の鮮やかな縄は長いのだ。たつぷりと余っている縄尻を、くびれた腹部に巻いた。

縄の喰いこむ触感に鈴香は正気に返った。

「ああ、やめてっ」

鈴香は悲鳴をほとばしらせた。

羞恥が全身を駆け上った。

思わず両肩を縮めた鈴香は、その動作がいたずらに縄を喰いこませるにすぎない事を思い知らされた。

ぶるっと張った腰部を包んでいる真紅の布に、鮮やかに染め分けられた縄がくびれこんでいるのは妖艶であった。

「いやでございます。縄をほどいて下さいまし」

「縛られた心持はどうだな、鈴香。立って歩いてみるがよい」

竜元は、背の縄目を掴むと、力のたえた鈴香を引きずり起した。

高々と括られた両腕の付根が痛い。

両手を楽にしようと少しでも下げれば首縄が締まる。

くらくらと頭の血が逆流するようである。鈴香は、よろめきながら、蒸し風呂の外へ足を運ぶ。

歩くと言う事が、これほど辛いとは思わなかった。柔らかな部分を縦に縛った縄が、異様な感触を拡げて鈴香の屈辱感を強めるのだ。

全身が火のように燃えている。

竜元は背後から、縛めに悶えて、くねくねとうごめく腰のまるみに視線を凝らせるのであった。

階段をのぼる時の鈴香は、灼けた息を吐き筋肉を痙攣させるのだった。

櫓の中層部は異様な場所であつた。

格子窓から流れ落ちた陽光が、鈴香の背筋を凍らせる光景を浮きあがらせている。

床には、眩しいほどの緋毛氈が敷きつめられ、夜に用いる数多くの短檠がずらりと並んでいた。

そして、奇怪な雰囲気を生みだす器具と装置が新しい生贄を求めるかのように、重々しく鈴香を圧迫する。

天井の太い梁には、幾つも滑車が備えられ、三方の土壁には、鎖をはめた鉄輪がはめこまれている。

縄束や鞭の類が揃えられ、磨かれた金具を

光らせた櫃が置かれてある。

その中には、竜元の興味をあおる、さまざまの道具が納められているのだった。

「驚く事はあるまい。ここにある総ての道具は、女子を可愛がるものばかりじゃ。そなたのように美しい女子をのう」

と、竜元は楽し気に眼を細めるのだった。

蝙蝠城にある蝙蝠翼ノ櫓は竜元の命令で誰れも近寄る事はできぬのだ。

守護しているのは腐乱佗と言う奇怪な忍者の団である。

彼等は、夜毎に領内のいずこかに出沒していた。

鷲部の里に住む人々に、神隠しという言葉が語られるようになったのは、腐乱佗の忍者達が竜元に抱えられてからであつた。

美しい年頃の娘が、いつの間にか姿を消すのである。そのほとんどの者が帰らなかつたが、幸運と言おうか、もどって来る娘もあつた。

だが、その者はいかなる恐怖を味わつたのか、必ず精神に異常を来たしていた。

その神隠しこそ、腐乱佗の忍者の所業だったのである。

彼等に掠られた娘達は、竜元の生贄に供せられたのであつた。

竜元は、天井の梁に付けられてある滑車から垂れ下っている縄を引き寄せると、すでに動きを失っている鈴香の、両足具を括り合せた。竜元が縄尻を力任せに引くと、鈴香は横転して緋毛氈の上をすべった。

「ああ——」

鈴香は悲鳴をあげた。

縄が、眼のくらむような触感を拡げるのだ。腰部がめくれ、さらけでる。

竜元は縄尻を引いて鈴香の両脚を吊りあげた。腰が宙に浮く所で、縄尻を壁の鉄輪に結びつけた。

鈴香は、半ば逆吊りとなつたのである。まろやかな腰部を、宙に突きあげた姿勢は、きわめて効果的であつた。

首縄は呼吸を絶やさぬほどに、じんわりと咽喉を締めつけていたし、伸びきつた両脚のために、縄は深々と喰いこむのである。

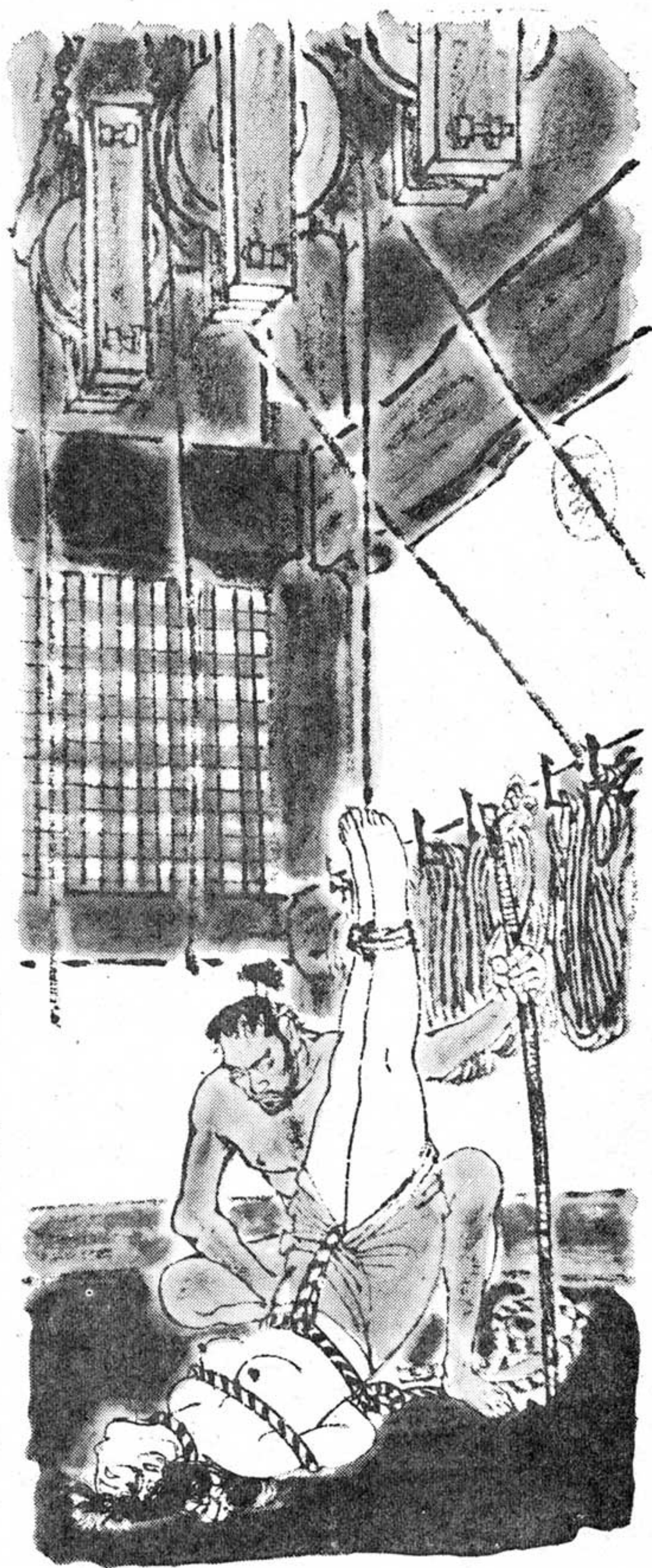
「い、いやっ、は、はなして！」

鈴香はめくらめくような羞恥にあえいだ。

肌は薄紅色に染まり、睫毛の切なく震えるさまが、竜元の背筋をぞくぞくさせるのだ。

竜元はかすれた笑い声を発すると、足をあげて、もどかしく足袋をぬいで、鈴香の髪をじんわりとふんだ。

「や、やめてっ——」



と、鈴香が烈しく首を振って悶えた。
竜元の足の指が、鈴香の豊かな髪をつまんだのだ。

弾力的な、ぐるぐるとした感触、竜元は指の間にはさんだ黒髪のひと束を思うさまねじった。

「ひい——っ」

悲鳴を噴いて鈴香がのけぞった。

その拍子に、首縄が締まり、縦縄が喰いこむ。鈴香は悶えをやめねばならぬ。

竜元は、苦痛に歪む鈴香の顔を見下ろす。
鈴香は眉を寄せて、唇を半ば開いて熱い息を吐き続ける。

屈辱と苦痛が交錯して、頭の中を駆けめぐ

る。
「ああっう、う、うっ」

きれぎれの苦鳴を、竜元は赤く血の浮いた
双眸で凝視するのだった。

これまで、腐乱佗の忍者が括った土民の娘
や、侍女をこの方法で責め苛いなんだ。しか

し、鈴香ほどに美しく、烈しい反応を現わした女はいなかった。期待にたがわぬ女であった。

格子をはめた窓から射しこむ光が、のたうつ裸身を非情に照らしだしていた。

夢中になっている竜元の背後から、蒼い炎を噴いた視線が、格子の外から注がれていた。

平鬼の眼であった。
知ってか知らずか、竜元は鈴香の身に残っ

ている一枚の布に視線を這わせていた。縛められて、宙吊りにされた鈴香に逃がれる方法はない。

羞恥のうめきと、哀願の声をあげて、身をくねらすのみであった。

しかも、それは竜元の血をたぎらせるにすぎないのだ。

「お許しを、お許し下さりませ」

「美しい身には不要なものじゃ。その美肌を隠しておくのは惜しいわい」

蒸し風呂で汗を吸った布は、湿って生あたたかい。

「あれっ」

鈴香の、絶え入るような声であった。

竜元が、吊っている縄を回転せしめた。

鈴香の身が反転してうつ向く。

白く豊かな双つの丘を、色彩の鮮やかな縄が割っている。

後手に組み合されている腕が、むっちりと凝脂ののった背で、苦痛を羞恥を硬直して耐えていた。

「お許しを、お願い申しまする」

緋毛氈に顔を埋めて、鈴香が呟く。

いつの間にか、竜元が鞭を握っていたのである。

細く強靱な篠竹の鞭であった。

鈴香の頭をまたぐと、竜元は打つべき個所を見詰める。

びしっ、と臀部に鞭が鳴った。

鈴香の上半身が、みごとにくねった。

その妖しい動きに、誘われるように、竜元は、鞭を振り下ろす。

「ひいっ、ひいっ」

打たれる度に鈴香は悲鳴をほとばしらせ、

白い陶器のような肌に、鞭跡を薄紅く浮べるのであった。

竜元は打つ間をひらいて、鈴香の感覚と恐怖を鈍らせないのである。

やがて、虚脱したように、なんの反応も示めさなくなった鈴香を、竜元は微笑を刷いて見下ろすのであった。

白蛇一族

野性の美女に助けられた疾風源三郎は、奇怪なる山乱波の集団の中にあつた。

切り立った断崖の下を流れる谷川のほとりに、幾つも木小屋を建てて、彼等は暮しを営んでいた。

白蛇を守護神として、総てを司るのは羅沙と呼ばれる老婆であり、一族の総てが俊敏な山乱波なのである。

源三郎を助け運んだ左弓は、羅沙婆の孫娘

であつた。

五日の間、源三郎は眠り続けた。眼覚めた時には、源三郎の身は回復していたが、さすがに傷はまだ痛むのであつた。

源三郎の寝かされている小屋は、左弓の住む場所である。

「これを喰べるがいい。精がつくよ」

意識を取り戻した源三郎に、左弓は炉に掛けた土鍋の中から粥を盛った。

塗りの剥げ落ちた木椀の中には、粟粥と猪の肉が湯気を立てている。

「すまぬ、世話をかけるな」

左弓に上半身を抱されて箸を取った時、ぬうと入って来たのが羅沙婆であつた。

白髪をそそけ立たせ、首には二匹の真白い蛇を巻きつかせた異相の老婆である。

羅沙婆は紅い眼で源三郎を眺めた。

「生き返ったようじゃの。他の者は入れてならぬ白蛇一族の掟じゃ。動けるようなら追いつ出すがよい」

「婆さま、まだ傷は治ってはおらぬ」

左弓の言葉に老婆は素気なく首を振った。

「ならぬ。白蛇様を神としてあがめぬ者を一族と共に暮らす訳にはいかぬのじゃ」

言い置いて、木小屋の外に出た羅沙婆に、たくましい裸身に毛皮の袖なしを着た若者が

近寄った。

「犬丸、用でもあるのかえ」

羅沙婆が若者に声を掛けた。

犬丸と呼ばれた男の顔は、尖って赤黒い。その顔を歪めて言った。

「左弓はどうしておる。傷を負うた牢人者がかつぎこんで世話ばかりやいておる。婆さまは、あの牢人者を追い立てぬのかい」

「心配せずとも婆にまかしておくのじゃ。白蛇一族の掟は守らねばならぬ。それよりも、お前は左弓を嫉いておるのじゃろ」

齒ぐきをむきだして羅沙婆が笑った。

犬丸と左弓は、夫婦になるべき間であつた。

白蛇一族の中で、もっとも優れた山乱波である犬丸と、羅沙婆の後継者たるべき左弓とは、結ばれねばならぬのであつた。

「婆さまには敵わぬわい」

犬丸は大きな掌で顔をつるりと撫でた。

言葉とは反対に、嫉妬を燃やした眼を、源三郎と左弓のいる小屋に投げる。

源三郎は猪を喰い終ると、箸を置いて左弓に言った。

「命を助けてもらい、礼の申しようもない。どうやら歩けるだろう。この小屋から出る」

左弓は表情を曇らせた。

野性のぶどうを思わせる瞳が、源三郎を見詰めた。

「駄目、まだどこへも行けはしない」

「だが、おぬしが困るだけだぞ」

「そうだ。ここから南の沢へ下りると、ほら穴がある。そこへ入っておいで。傷が治るまで食べ物私が運ぶ。それに、あそこから隠し湯も近い」

源三郎はうなずいた。

左弓に力を借りて、立ちあがる。

頭がふらついて、上半身は意のままに動かぬ。

左弓は隅から、太刀を持って来た。

「これはお前さまの太刀だよ」

「すまぬ」

太刀を杖にして、左弓に支えられながら、小屋を出た源三郎を白蛇一族が眺めている。老幼男女を取りまけて五十人位であろうか。その中から犬丸が現われて、左弓に近づく。

「ずいぶんと熱心だな。左弓」

犬丸に向いた左弓の顔が引き緊まった。

黒い双眸に鋭い光が浮んでいる。犬丸を無視しているのだ。

「お前の知らぬ事、捨ておくがいい」

と、左弓は斬りつけるように浴びせた。

「おい、俺は婆さまに、お前と夫婦になるよ

う決められた男だぞ。あまり白痴にしゃがると承知しねえぞ」

犬丸が気色ばんでわめいた。

白蛇一族の中で、もっとも美しい娘が左弓である。

犬丸がいなければと、左弓に眼を付ける若者も多いのだ。

犬丸の嫉妬を、左弓は鼻であしらって源三郎の身に腕をまわすのである。

「畜生、いまにみろ」

犬丸は、尖った赤黒い顔を歪めた。

それから、更に五日がたった。

白蛇一族の部落から、谷川の下流に沿ってくだると、小さなほら穴がある。

立って歩けるほどの高さで、住居としての居心持も歩くはない。

落葉を敷き詰めた上に横たわり、日に二度ほど近くにある岩風呂に入る。

傷に効果があって、源三郎はみるみるうちに生氣を取り戻していた。

部落から食物を運び、世話をやいてくれる左弓から、源三郎は鈴香を思った。

いまはどこにいるのか、生死すら判らぬ鈴香に暗然となる源三郎であった。

「お前さまは何を考えているのじゃ」

源三郎の前に、乾肉を並べながら、左弓が

言った。

「うむ、鷲部竜元と申す悪党の事だ。おぬしは奴の噂を知っているだろうな」

源三郎の言葉に左弓がさっと顔をあげた。

「嘘じゃ、お前さまは、一緒にいた女の事を考えているぞ——」

と、左弓は双眸に生々しい光をたたえた。

「鷲部竜元が掠った女は蝙蝠城から無事に帰った者はいないよ。腐乱佗の忍び者を使って領内から女をさらうのさ。里の者は神隠しだと言うが、私達は本当の事を知っている」

源三郎の脳裡を、不吉な想念がよぎった。

野獣を髣髴させる竜元の相貌に、鈴香が交錯する幻影が浮かんだ。

鈴香は、どのような運命の魔手に玩弄されているであろうか。

源三郎は、じっとしておれぬ衝撃を覚えて太刀を握んで立ちあがった。

「どこへ行くのじゃ」

「知れた事、鷲部竜元の城だ。邪魔をする奴をぶち斬って、鈴香を助け出す」

「無茶だよ。お前さまはまだ戦さはできぬ。

たとえ達者でいても、蝙蝠城には腐乱佗の忍び者がいる。あ奴等は死神同様の恐ろしい腕利きばかりだよ。ひとりでは無理だ——」

「くそ、無念——」



いまだ力の漲らぬ身に、齒を鳴らして、源三郎はずるずると座りこんだ。

その胸に左弓が顔をうずめていた。

熟れた果実のような甘い匂いが、源三郎の鼻腔を襲った。

栗色に灼けたなめらかな肌、黒く精悍な野性の眼が、ぎらぎら光って、源三郎を見詰めた。

紅もささぬのにケシのように赤い唇がぬめぬめと光って、源三郎の感情を、怒りから息苦しい熱気に変えていた。

「好き、お前さまが好き」

火のような息を吐きだして、左弓は源三郎の顔に唇を這わせた。

源三郎の手を掴むと、おのれの襟を割って胸へすべりこませた。左弓の肌はほてっていた。ゆたかな隆起を、源三郎に与えながら、左弓は舌を源三郎の齒の間にもぐりこませていた。

弾けるような触感が、陶粹を招き寄せる。脳裡に拡がっていた鈴香の面影が薄らぎ、総てを忘れ去るように、源三郎は荒い息を吐いた。

布子に隠されて陽に当らぬ部分の肌は、反対に眩しほどに白かった。まろやかな肉ずきの肩に、源三郎が齒を立てた。

左弓がのけぞりながら低くうめく。敷き詰められた落葉が暖かであった。

「お前さまのためなら左弓は死んでもいい」と、左弓は源三郎の耳朶にささやいた。

「その代り、先刻言った鈴香と言う娘は忘れておくれ」

ふたりに落葉の上でもつれあった。洞の中には熱っぽい呼吸が交錯して響いた。

野性の左弓が奔流のような恋情をほとばしらせ、源三郎を包みこもうとしていた。谷川のせせらぎが、静かな水音を立てる以外には深閑とした谷間の昼下りであった。

と、――

洞をうかがう人影が動いたのだ。

尖った赤黒い顔を、嫉妬と劣情に醜く歪めた男が、岩陰に身をひそめて、源三郎と左弓の行為をうかがっていた。

犬丸なのである。乾肉を持って部落を出た左弓を、ひそかに尾行して来た犬丸なのだ。

憎悪と嫉妬が、犬丸の全身を灼きつくそうとしていた。

隠し湯の危機

大きくまるい月が夜空に浮かんでいた。

山は蒼い光の中に没し、海底を思わせる静寂が沈んでいた。

肌に浸みこむ夜気をかすめて、左弓が谷川のせせらぎを走って来る。

谷間に、温泉の噴きでている岩風呂があるのだ。白蛇一族だけが知る隠し湯であった。

谷川の水が流れこんで、ちょうどよい温度となり、白蛇一族の沐浴の場所となっている。

平たい岩の間から噴きでた湯が、谷川から分れた水に合流して、天然の湯槽を形成していた。

左弓は、身に着けている総てを脱ぎ捨て、湯の面に映っている月を碎いた。

源三郎に肌を許した女の悦びが、左弓の心を燃え立たせていた。

湯の中にのびた四肢を、愛しむように眺める。

間もなく源三郎が湯を浴びに現われる筈なのだ。

と、はるかな尾根から、猿の遠吠えが夜気を震わせて聞こえてきた。満月を慕って吠えているのだろう。

左弓は、湯槽の上にある岩陰の茂みが妙にざわめいたのを知った。

猿かも判らぬと思った左弓は、飛沫をはね散らして湯の中に立って眼を注いだ。

相手は狼ではなかった。それよりも兇悪な野獣であった。犬丸の姿

が、茂みから、ぬっと立ち現れたのである。

犬丸は右手に彼の武器である檜の杖をたずさえたまま、左弓の衣類の脱ぎ落してある個所へ身を躍らせた。

双眸は異様な光茫に満ちて左弓の裸身を喰い入るように凝視している。

左弓は膝を折って湯に沈み、両手で胸を掩った。

「犬丸、お帰りっ」

左弓は、鋭く叱咤した。

「うるせえ、俺はお前の後を追って来たのだぞ。仕置をしてやるためにな」

「お黙り、私はお前の女房じゃないよ。手を出したら承知しないよっ」

「ほざくな。いまにその鼻っ柱をへし折ってひいひい悲鳴をあげさせてやるぞ」

犬丸は杖を放し、毛皮の袖無しを脱いで、裸になると湯槽に踏みこんできた。

禪の腰に縄束がぶら下っている。左弓は跳ねあがって湯槽を駆け出ようとする。

その刹那、犬丸の両手が左弓の足を掴んだのである。

ふたりはもつれあって湯の底に転った。

「は、はなせっ」
左弓が必死にもがく。犬丸が左弓の髪と顎を掴み湯の中に押えこむ。泡と飛沫を散らし

て左弓が暴れる。

犬丸の腕に爪を立てて皮膚を引き裂くのだ。湯が鼻腔と口から流れこみ呼吸が止まりそうである。

「く、くるしいっ」

さすがの左弓も悲鳴をあげた。

湯の中に横転した左弓を、これもずぶ濡れになった犬丸が組み伏せたのである。

「け、けだもの。は、はなせ」

犬丸の締めつけてくる両膝から、逃がれようとして左弓は岩にしがみついた。

深沈たる夜気を帯びた山肌は、左弓の叫びをはね返し、空にかかっている満月が争う男と女を見下ろしていた。

月光を浴びた左弓は蒼い色に染まって異様な美しさを漲ぎらせていた。

「俺はけだものだ。けだものがどんなに恐ろしいか、思い知らせてやるぞ」

左弓への盲愛は、いまや犬丸の心の中で異常な欲望へ変っていた。

岩を掴んだ左弓の手を、力任せにむしり取って背へ捻じ曲げた。大きな掌に掴み取った手首に、縄束の一端をぎりぎり巻いていった。

「ああっ、痛い。おはなしっ」
「うるせえ、阿魔め」

と、犬丸がわめいた。

白蛇一族の部落から遠くはないし、源三郎と言う牢人者の住む洞も離れてはおらぬ。

左弓の叫びが、夜気を震わせて届くかも知れない。

犬丸は、とっさに、禪を半分ほど引き裂いた。

さらに、それをふたつに割ると、ひとつを指でまるめると、左弓の唇を押しひらいた。湯に濡れた、汗臭い布の塊りを口に詰めたのだ。

「む、むうっ」

水滴が左弓の顎を伝わって落ちた。

顔を激しく振って、異臭を放つ布片を吐き出そうとする左弓の唇を、犬丸は残った方でぎゅっと締めあげて塞ぐ。

「く、ぐっ」

頬が頬がくびれて、左弓の顔が歪んだ。

べったりと後れ毛の貼りついたうなじに、猿轡の結びめが固い。左弓の眼が口措しさと憎悪を漲ぎらせて犬丸をにらんでいる。

野性の美女は手を縛られ猿轡を噛まされていながら、犬丸に対する抵抗をやめぬのだ。近づく犬丸を、しなやかな足で蹴ろうとする。

「面白い遊びだな、左弓」

と、犬丸は惨忍な嗤いを、尖った顔に漂わせた。

岩場に置き捨てた檜の杖を持って来ると、後手に廻されている左弓の両脇の間にこじ入れて括りつけた。

そして、まず右足首を掴むと後へ折り曲げて杖に固縛する。

左足も同じように動きをうしなうのだ。左弓は後手で檜の杖を抱き、両足を引っ括られた逆海老の形となった。

固く引き緊まった腰に、ふくらはぎが密着した。

体重をのせた胸が、岩に押しつぶされてひらべったく見えた。

「う、うう——」

左弓は、全身の血が沸るような口惜しさに呻いた。

口でも自由であつたら、ある限りの悪罵を投げつけてやりたい。

こんな男に、惨めな姿にされているのだ。猿轡の異臭が、耐えがたい屈辱を感じさせた。

犬丸は、左弓を平らな岩場に引きずりあげて、ねめまわすのだった。

「いい恰好だな、左弓。いつもの鼻っ柱はどこへ行った」

犬丸は、嬉し気に歯を剥いて哄笑した。

「お前はどんな事があつても俺の女房だ。白蛇様のお告げで婆さまが決めたのだぞ。白蛇一族の者は他国者とは夫婦にはなれぬのだ。お前は事もあるうに、どこの馬の骨とも判らぬ牢人者に身を抱かせおつて」

羞恥の情が左弓の心をかすめた。

源三郎との痴態を、この男に見られていたのだ。

嫉妬に狂った眼で覗いたであろう犬丸に、左弓は唾を吐きかけてやりたかった。

「俺の前で浮気な振舞いをした罰だ。たつぷりと仕置をして根性を叩き直してやる。お前は俺が何故に犬丸と呼ばれているか知っておろうな。ふふふ——」

と、犬丸は不気味に笑い声をこもらせた。

「俺の舌はな、犬のようにざらざらしておるのだ。それが犬丸と呼ばれるもとだ。おふくろの乳房を吸っていた頃から、犬丸とな。どうだな、左弓。お前の、すみずみまで俺の舌でなめまわしてやろうう」

「う、う、う——」

羞しさと嫌悪の情が、はじめて恐怖に変わった。

犬丸の母親が乳房を吸う子供の舌の異様さに呆れたと言う話は左弓も聞かされていたの

だ。

犬のように、ざらざらした舌でなめまわされるとは、思っただけでも気の狂いそうな事であった。

「逃げようにも、その姿ではどうにもなるまいの。左弓」

夜気の中で、犬丸の顔は、妖しい喜悦に醜く歪んでいる。

左弓は無駄とは知りながらも身をくねらせた。

しかし、足も手も檜の杖に括りつけられて微塵も動きはせぬ。

「ふふふ」

猿轡の上から覗いている左弓の眼が、恐怖と敵意をあおらせているのを見て、犬丸は笑った。まるい左弓の肩を掴み、ぐるりと反転させたのである。

「む、むうっ」

口中に詰めこまれた布片が叫びを殺した。仰臥させられた左弓の眉が苦痛に寄った。肩がぐきりと鳴り、檜の杖が上膊部と足首に喰いこみ、骨が軌むような痛みが襲ってきたのだ。

濡れた肌は蒼白くぬれぬれと光っていた。

のけぞった咽喉に、犬丸の顔が近寄る。異臭と熱い灼けた息が吐きつけられ、長い

犬丸の舌が、べろりと左弓のすべやかな咽喉をなめたのだ。

犬とまったく変らぬ感触だった。肌をこすられて鈍い痛みが拡がる。

「く、く、くうっ」

左弓は、呻き声を、喰いこんでいる猿轡に噴かせた。

犬丸はゆっくりと楽しみながら舌を動かしていく。

がっくりと氣力を喪ったのか、いつの間にか左弓の顔が動かなくなっていた。

瞼を閉じて、苦悶の表情をたたえた顔は、犬丸に息を吞ませるにふさわしい美しさだった。

山刀を帯びて、谷を駆け林をぬける野育ちの左弓は消えていた。

今まで精一杯に外へ構まえていた強さを打ち砕かれて、隠していた女をあばき出された艶めかしい敗北があるのみであった。

喜悅の声をほとばしらせている犬丸を、背後の岩上から冷たく凝視した者があった。

疾風源三郎であった。

犬丸は、氣配を感じて振り返った。

月光を浴びて立っている男が、源三郎だと知った犬丸は、噴怒に声も出なかった。

「犬丸と申したな。左弓から手を離さぬと斬

る」

源三郎は、腰の太刀を鞘走らせた。

冴えた鋼鉄の肌は、白い虹を宙に発していた。

犬丸の武器は櫓の杖だ。

左弓の手足を縛りつけている縄を解く間に岩から跳び立った源三郎に斬られるのは、当然である。

「左弓は俺のものじゃ。お前には渡さぬぞ」
わめいた犬丸は、後退して湯槽を出ると、せせらぎの音を響かせている谷川の闇に、姿を消した。

源三郎は左弓を助けるために、岩を下りて縛められた裸身へ歩を寄せていた。

忍鬼の影

その頃。

驚部竜元と常に国境を浸し合っていた水加月玄信との間に、和議が成立していた。

竜元が玄信に従属の意志を表現するため、玄信の妹である夕姫を妻に迎える、と言う噂は鈴香の耳にも入っていた。

その噂を聞いた時、鈴香は心中に雲のように漠然と拡がっていた竜元への復讐の念を、はつきりとひとつの目標に変えた。

許婚である疾風源三郎を失った鈴香は、竜

元に供された生贄であった。

夜毎に蝙蝠ノ櫓に連れこまれては愕乱の地獄に呻吟し、屈辱にまみれぬばならぬのであった。

竜元の欲望はあらゆる恥しめを鈴香に与えた。

心のすべてを凍らせ、生ける屍と化した鈴香の生き甲斐は、竜元の破滅と言う一点に凝固していた。

その日、竜元は早朝から鷹狩りに出た。
どんよりと重く曇った空の下に、陰惨な氣配を立ち昇らせている蝙蝠ノ櫓に鈴香はひそかに近づいていた。

やがて、鈴香の前に黒衣に身を包んだ影が浮いた。

櫓を守護する腐乱陀忍者の頭領である、平鬼なのだ。

「どこへ行く。今日は殿は不在だ」
死人のように蒼い異相が鈴香を見据える。

白く濁った双眸に、かすかな戦慄を覚えながら、鈴香は平鬼に身を寄せた。

「お前さまひとりなのですか」

「うむ、配下の者は鷹狩りの警護に参っております」

「お前さまに話があるのです。聞いてくれませんか」



鈴香は、媚をこめた視線を平鬼に送った。

無表情に見える平鬼の面上に、一沫の変化があった事を、鈴香は女の本能で素早く察していた。

平鬼は、黙って鈴香の先に立った。

例の暗い柱のある部屋に入ると、平鬼は振り返って言った。

「話とは、どのようなものだ」

「この城に、水加月玄信さまの妹御が来ると言う噂は知っておりますね」

「うむ、竜元はうまい事を考えたものよ。人質に使う心算じゃ」

腐乱佗忍者の頭領は、城主を呼び捨てだ。いきなり鈴香は袖をめくりあげて腕を平鬼に見せた。

白い肌には、縄目の跡が残っている。

「私は、毎夜このように責められています。

殿さまを悦ばせるために、私は地獄の苦しみにのたうっている事はお前さまも知っておいで。このように、自分を生贄として殿

さまに尽す身にとって、夕姫さまは邪魔——」

平鬼は一瞬瞳孔を動かしたが、薄い唇はくさびを打ちこんだように動かぬ。

「私が夕姫さまを憎むのは女の心です。殿さまに総てを捧げた私にも覚悟がありまする」
「どうせよと申すのだ」

冷やかに、平鬼の声が反問した。

「夕姫さまが、この蝙蝠城に着く前に、どこかへ掠って欲しいの。お前さまなら、雑作もない事でしょうに」

「我等は、蝙蝠城主に雇われておる。その頼みは引き受けかねるが――」

と、平鬼の死魚を思わせる双眸に、狡猾な光をかすめた。

「そなたの頼みを聞いたとして、礼は何をくれるのだ」

鈴香は、身を平鬼に、すっと寄せた。

ゆっくりと平鬼の顔を見詰める。

「私にできる事は、この肌でお礼をするだけです」

つと、平鬼の手が伸びた。

鈴香の小袖の襟をぐいと押し拡げて、ぬめりとした肩をむきだす。

氷のように冷たい唇であった。

鈴香は、嫌悪感に、ぞくりと背筋を震わせた。

「その身を任せるのだな」

うなずいた鈴香を、平鬼は凝視していたが何気ない頼みを聞くように、平然として答えたのである。

「承知した。この城は仕えるのも、少々飽いた頃だ。おもしろい。そなたの頼みを引き受けよう。だが、腐乱佗の忍び者は、約束を固く守る。そなたも申した言葉を忘れるな」

平鬼は、鈴香の肩を抱きすくめた。

冷やかな唇が、鈴香の咽喉を這う。

「五日の後に夕姫は鷲部領に入る。俺はひそかに警護する事を命じられている。それを利用して、夕姫を引っ掠おう。そなたを閉じこめた場所に案内してやる。そなたは、そこで約束を果たすのだ。よいな」

平鬼の言葉を聞きながら、鈴香は凄艶な微笑を刷いていた。

その夜――

蝙蝠ノ櫓の下から、ひとつの影が、城壁をすべり降りた。

平鬼であった。

竜元に命じられた。夕姫の警護に出発するのである。

蝙蝠ノ櫓で、鈴香が竜元に責められていた光景を、幾度も盗み見た平鬼は、胸中に邪惡な野望をくすぶらせていたのである。

裸身にむかれ、海老責めに括られて呻き続ける姿や、宙吊りにされて、足下に短檠を置かれ、真白い太腿を震わせる鈴香を、竜元と同じように、と言う欲望に取りつかれていたのである。

平鬼は、暗黒の底に没している林野を、風のように疾走し去った。

それから四日の間、平鬼は夕姫の行列から離れずに監視し続けていた。

二十人ほどの武者に守られた夕姫の輿を中

心にして、荷駄を運ぶ小者と、市女笠をかぶった侍女の列が従っていた。

五日目の夕刻、蝙蝠城に四里の距離を残すだけとなった夕姫の行列は、古びた寺院を持つ村落に入った。

そこには、出迎えのために竜元の配下である侍大将の坂部剛玄が数騎の武者を伴って待ち受けて、行列を靈光寺と呼ばれる古寺に案内した。

寺院の周囲には剛玄の手勢が剣槍を光らせて警護している。

平鬼は、彼等の動きを見届けて、護衛の数は多いが、忍びこむ隙はどこにでもある事を確かめると、夜の更けるのを待って、行動を開始した。

崩れた土塀を越えて、境内に忍びこんだ平鬼の視線が、四方にまわる。

庫裡の濡れ縁に、抜き身の槍を立てた武者がふたり、本堂の方には、護衛の武者が休息している。

それを見て平鬼は夕姫の宿舎が庫裡である事を察した。傾むいた墓石の間をくぐり、庫裡の屋根に這いのぼった平鬼は、黒い煙が浸みこむように、梁を伝わっていた。

天井板の割れ目から下を覗く。

いつもは和尚の居間になっているのか、手

入れの行き届いた部屋に、短髪が光を揺らめかせていた。

平鬼は眼を凝らした。

敷き伸べられた褥の上に、ひとりの美女が身を横たえていた。

夕姫であった。

優れた人形師が精魂をこめて作りあげた人形も及ぶまいと思われる美しさであった。

閉じられた瞼から、睫毛が柔らかな陰翳を落し、赤い花卉に似た唇が、静かに寝息を立てていた。

黒く艶やかに輝く髪が、白磁のような肌を冴えわたらせていた。

これほどの美女を竜元には惜しい、と平鬼は唇を歪めてわらった。

天井裏をすべり下りて、夕姫の枕元に立った平鬼は腐乱佗忍法の声封じと呼ばれる道具を、腰の忍び袋から掴み出したのだ。

木を削って作られた、一寸五分ほどの直径を持つ木鞠のような玉で、中央には穴がくり抜かれ、長い革ひもが通してあった。

平鬼は、五本の指で、夕姫の愛らしい顎の下をぐっと押えた。

一瞬、睡りから覚めた夕姫の驚愕の叫び声を押し戻すように、握っていた木玉が白い歯を割って押しこめられたのである。

あつと言う間もなく、平鬼は木玉に通してある革ひもを絞って、うなじで結び終っていた。

まるい木玉をくわえさせられた形である。白いなめらかな頬を、深い溝をえぐるようにして革ひもが喰いこんでいる。

夜具をはねのけて、絹の寝衣の上から、固い忍び縄をからめた。

まだ夕姫の気力が動転しているうちに、両腕は折り曲げられて縄を掛けられていた。

針金を束ねたような縄が、両手両足を容赦なく引っ括っていた。

夕姫を縛り終えた平鬼は、いきなり短髪を倒した。

油で散って、めらめらと炎が床を這うのを見定めて、平鬼は抵抗する力を失った夕姫をかつくと、侵入口からたちまち姿を消して行った。

炎に気付いて警護の武者が殺到する間隙を狙って、平鬼は夕姫を背負って闇の中に没していた。

隠し砦

山は乳白色の霧に包まれていた。

樹間を射すくめた陽光が、霧の幕を破ってさわやかな朝の到来を告げていた。

両脚を露で、しとどに濡らしながら山道を登っていた。夜どおし歩き続けても、鍛え抜いた忍者は平然たるものであった。

しかも、肩には意識を喪失しかけた女をかついでいるのだ。

この山獄の一角に、腐乱佗忍者のみが知る隠し砦がある。

いま、平鬼の歩いている下方で、霧の底から、せせらぎの音がはいのぼっていた。

白蛇一族の住む谷なのであった。

夕姫は苦痛に死ぬ思いであった。縛めの縄は時間を経過するにつれて胸へ喰いこみ、口中にくわえさせられている木の玉が呼吸すら自由に任せぬのだ。

どこへ運ばれ、どのような運命が待っているのか、夕姫には考える気力がなかった。やがて平鬼は杉林を抜けると、断崖の下に出た。

崖の高さは一丈余りもあろうか。その上は熊笹が密生している。崖は赤い壁のようになり、不思議な事に、その一部分に三尺ほどの巾で亀裂が走っている。

「どうやら隠し砦にたどり着けた」

呟いた平鬼は、肩から夕姫を下ろした。

よろよろとよろめく夕姫を、平鬼は縄目を掴んで冷酷に命じた。

「歩いてもらおうか」

ぐいとこずかれて、夕姫は亀裂の中へ足を踏みこんだ。

裸足に土の感触が冷たい。

平鬼は白い足が恐る恐る前へ進むのを、薄く不気味な微笑を刷いて眺めている。

亀裂は二十歩余りで、突然にくり抜かれたような平坦な場所へ出た。

昔、崖の一部が陥没した所を隠し砦に利用したのである。

広さは、三十畳ほどであろうか。小屋までも建てられて、石を刻み堀った貯水場までもある。

水は、降って来る雨水を貯めるのである。石の周囲には、びっしりと苔が生えている。

山乱波の白蛇一族すらも、容易には発見できぬ、天与の隠し砦であった。

夕姫は、湿気で白くかびをふいた小屋の床に、恐怖で蒼ざめて崩れている。

寝衣の襟が拡がと、着ている白絹と変らぬ肌が覗いていた。

声封じと言う奇妙な、防声具とも、箆口具ともつかぬ木玉をくわえさせられた唇から、ぬらぬらと唾液の垂れているのが、美女だけに妙に妖しく見えた。

平鬼は、顔を掩っていた黒布を取り、骨張った死人のように蒼い異相をむきだして、夕姫の方を向いた。

「声封じは辛かろうな。ここでどのように叫ぼうと誰れも来ぬ。外して進ぜよう」

平鬼は夕姫の肩を掴み、首を前に傾むけさせると、皮ひもを解いて木玉を引きだした。木玉は濡れて黒く光っている。平鬼は、にやりとして声封じをふところに納めた。

夕姫はおのれの浅ましい姿を見られる思いにかられて頬を赤らめた。その頬にも革ひも喰い入った跡が、くつきりと残っている。

「私をどうするのです」

平鬼は、夕姫の声を楽しむような表情を浮かべた。

「知らぬな、俺はただ頼まれただけの事」

「そなたに頼んだのは誰れなのです。私は水加月玄信の妹、驚部竜元さまの妻になる身を知っての所業ですか」

「左様、水加月勢には精銳をうたわれる騎馬武者百騎がおるそうな、俺はその百騎で守ったとしても、姫は盗み出す気であった。俺に頼んだ奴が、姫をどう扱うか知らぬがな」

「そなたは何者です」

さすがに、豪族の血をひいて気丈である。「腐乱佗の忍び者、頭領の平鬼と申す者」

くくつと平鬼の咽喉が鳴った。いつの間にか、死魚の眼に似た双眸が、異様な光を浮かせている。

平鬼は、手鉤のように強靱な指を、夕姫の肩に突き立てた。

「離して、痛い」

夕姫がのけぞった。

平鬼の手が寝衣の襟に指を掛けて、ずりと引き下ろす。

「いや、おやめっ。離して」

むきでた白くまろやかな肩から胸への肉づき。

汚れを知らぬ肌は、清純な美しさが漲ぎらせていた。

羞恥に顔をそむける夕姫。縛りあげられた身には抵抗も許されぬ。

喰いこむ忍び縄に盛りあがりを増した乳房に、平鬼の眼がそそぎかける。

「ああっ、いやっ——」

屍臭に似た匂いが、夕姫の鼻腔に刺った。

床の感触が、絶望的だった。

背に廻わされている腕が、全身の重量に耐えかねて悲鳴を発するかと思われた。

平鬼の唇が、ぴつりと夕姫の首に貼りついたのだ。なめくじの這うような嫌らしさに夕姫は悶えた。

白絹の寝衣の裾が割れて、薄紅色の腰布を
まといつかせた脚が宙を蹴った。

すべやかな膝頭のあたりまでさらけだされ
る。唇を離した平鬼が視線を粘りつかせた。

「やめて、やめて」

夕姫の短かい悲鳴が、隠し砦に響いた。

「舌を、舌を噛みますっ」

平鬼は鼻を鳴らして、陰気に笑った。

「その氣力を買っておこう。まだ死なれては
困る」

夕姫から、平鬼はゆっくりと離れた。鈴香
に渡すまでは、生かしておきたい。

「俺はこれから出て行く。声封じを使わせて
もらおう」

「もういや、声は立てませぬ」

屈辱感を骨の髄まで浸みこませる轡に、夕
姫は耐えられぬ。

だが、夕姫の懇願を無視して平鬼は再び声
封じを取り出す。

残る手段は齒を喰い縛って口をひらかぬし
かない。

平鬼は指を夕姫のこめかみに当てがい、ぐ
っと力をこめた。

「ううっ」

おとがいの外れそうな痛みが走り、意志と
は逆に夕姫の口はひらいてしまうのだった。



ひらいた夕姫の愛らしい口に、木玉を押して革ひもを思いきり強く絞った。

縄目を改めて、ゆるみのない事をたしかめると、

「おとなしく寝ておるがよい。戻る時には喰い物を持って来てやる」

言い捨てざま、平鬼は足音もなく、小屋の外へ姿を消していた。

無人の小屋ではあるが、夕姫はむきだされたままになっている太腿を隠そうと懸命であった。

なんとかして縄を脱けようともがく。皮肉にも平鬼の仕掛けた縄目は、あばれるほど強く喰いこみ、夕姫は疲れ果てて動けなくなってしまった。

口腔に詰めこまれた声封じが敗北を無惨なほどの厳しさで教えていた。

このようなおぞましい世界が待っているようにと想像もし得なかった夕姫であった。

幾度か戦いを交えた驚部竜元との和睦が成立し、まだ会った事のない竜元の妻となるおのれが哀れに思えて、ひとり涙ぐんだ夕姫もこのような恐怖と汚辱にまみれた罠に落ちては、竜元すら恋しく思えるのであった。

夕姫は瞼を閉じて、涙を頬に流した。泣き声も封じられているのであった。

——蝙蝠城。

大手門から繰り出した十数騎が、丘陵の曲りくねった道を駆け降りて行く。

砂塵が慌ただしく、竜元の狼狽を現わしているかのようである。

夕姫が靈光寺から何者かに掠られた報告を受けた竜元は、動揺して手勢の総てを投入して搜索を始めた。

夕姫行方不明が、水加月玄信に伝われば、和睦は水泡に帰して、合戦の始る危険もあるのだ。

竜元の驚愕も、当然であった。

城に戻った平鬼を、竜元は陰悪な表情で待っていた。

護衛に放った手練の忍者が役に立たなかつたのであるから無理もない。

「夕姫の警護に差し向けた忍者の勤めを忘れたのか、平鬼」

「申し訳ござらぬ。我等の不覚でござった。

靈光寺に火の手が見えた時は、すでに遅うござった」

と、平鬼は例に依って無表情にとぼけている。

「平鬼ほどの者が手玉に取られるとはもう。何者じゃ、心当りがあるうな」

「皆目ござらぬ。山乱波、野伏りの類いとに

考えられ申さぬ」

竜元は、焦慮の色を隠す余裕もない。頼みにしている平鬼の声が、雲を掴むように頼りないのである。

竜元は苛立っていた。

「平鬼、城の警備は不要じゃ。配下の総務を連れて探せ。恩賞は望むまじゃ。よいな」

竜元の声は、荒々しい怒気を噴いていた。蝙蝠翼ノ櫓に戻った平鬼は、静まり返っている櫓に、低いくぐもり声を放った。

「天鬼、地鬼、水鬼、火鬼」

呪文のように、平鬼は三度ほどとなえた。

と、蝙蝠翼ノ櫓の屋根に四つの影が浮かび、彼等は音もなく頭領の周囲に集った。

いずれも平鬼と同じように、蒼白い異相を能面のように動かさぬのだ。

黒衣の忍び装束、腰には短かい一刀を帯びている。

「お呼びで」

と、天鬼が訊ねた。

「腐乱佗の里に引き揚げるのだ。俺も後から戻る」

「この城を捨てるので？」

地鬼が四人に囲まれて、うつそりと腕を組んで佇立している平鬼を見詰めた。

「うむ、驚部竜元にも飽いた。この蝙蝠城も

長くはあるまい。水加月玄信の所にでも行くか。皆、散るがいい」

平鬼の言葉が切れたと同時に、四人の配下は櫓の屋根に跳んでいた。

たちまち、彼等の影は平鬼の視界から消え失せていたのである。

断崖の果て

野鳥のさえずる中を、疲風源三郎は、黙々と山路をたどっていた。

傷の回復した身を鍛えるために、谷底の洞窟から、崖を登って、脚力を試めすのだった。

無難作に頭髪を束ねて、背に太力を負うた姿は野伏せりのように見えた。矢創も刀創も行動には差支えぬほどに治っている。

熊笹を踏み分けて、断崖の端に立った。源三郎は、右手を太刀の柄に廻して、さっと抜き放ってみた。

全身のどこにも異常はない。太刀を鞘に戻した時、踏ん張った故か、足元の土が割れて身がすべった。

土塊と共に落ちた源三郎は、板を張った小屋の屋根から、平坦な地面に転っていたのである。

意外な場所に、源三郎は驚いて眼をみはつ

た。

そこは腐乱佗の隠し砦だったのである。

「妙だな、小屋まである」

呟いた源三郎は、油断なく注意しながら、古びたいまにも崩れそうな小屋に近寄った。そして、そこに無惨な光景を見たのである。

汚れ果てた床に、裸身に近い姿で後手に縛られた美女が転っているのだ。

口には、奇怪な轡が噛ましてある。

源三郎は踏みこんだ。

「どうしたのだ。縄を解いてやるぞ」

励ましながら、箆口具のひもをはずした源三郎は、娘の口から、まるい木の玉が出たのに、いささか驚いた。

縄目は固く喰いこんで指では解けぬ奇怪な緊縛法である。やむなく、太刀を抜いて、手首を括っている縄を斬った。

娘は自由になった手で、むきでている下半身を急いで掩った。

白百合のような清らかな気品に満ちた、牙えわたった美女である。

「助けて頂き、礼を申します。私は水加月玄信の妹で百と申す者です」
「夕姫さまでござるか」

源三郎は、偶然が結びつける運命の不思議さを身に泌みて感じた。

水加月玄信への仕官を望みに堺を出たのだった。

驚部竜元のために総てを喪った源三郎の前に、玄信の妹が現われるとは、偶然の悪戯とも言わざるを得ぬ。

「姫が、何故このような場所に捕われておられるのか、竜元の所業か——？」

「私は竜元さまの妻となる身、お城へ向う途中、腐乱佗と申す輩に捕えられました。なぜこのような目に合うのか判りませぬ」

またも源三郎にとって意外な言葉である。

竜元と玄信が和を結んだ事実を知らぬのだから当然でもある。

しかし、この類いまれな美姫を竜元に渡さぬのは怪しい。夕姫を掠った腐乱佗とは、竜元に抱えられている忍者の団だと聞いている。

「拙者は泉州堺の商人、南蛮屋又兵衛の配下にて疾風源三郎と申す者。姫の兄君へお渡しすべき堺鉄砲を運び、驚部領に踏み入った折りに、竜元奴に襲われて鉄砲は奪い去られ配下は全滅。拙者の許婚までも奪われ申した」
「それは本当ですか。竜元さまはそのような事を——」

夕姫は夫となる竜元が、考えていた男と、はるかに異っている事を感じた。

「腐乱佗の忍び者は、どこに失せたのでござるか」

「判りませぬ。とても恐しい男でした」

源三郎は、これが彼等の隠し砦である事を讀んだ。

秘密を知られる事を忍者は恐れる。彼等がこの砦に立ち戻る前に去った方がよい。源三郎は、夕姫の泥にまみれた白い足を凝視した。「抜け道はご存知であろうな。案内して頂こうにも裸足では無理だ。背負うて進ぜる」向けられた広い男の背を夕姫は躊躇した。「遠慮は無用に願いたい。早くせぬと奴等が戻る」

せかされて、夕姫はおずおずと源三郎の肩に手を廻した。甘い果実に似た匂いが、源三郎の鼻腔をくすぐった。

「崖に割れ目があるので。そこから外へ抜けて下さい」

「成程、巧みな隠し砦だ」

赤土の崖の亀裂を通り、断崖の下に出た源三郎は、振り返った。

断崖の背後に隠し砦があるとはとても思えぬのだ。この一事だけでも腐乱佗忍法の異様さが判る。

谷に降りて洞窟に帰った源三郎を、来ていた左弓が迎えた。

負われている美しい娘に、表情を陰しく翳らせた。

「お前さま、その人は誰れなのだえ」

もしや、鈴香ではないかと思ったのだ。

源三郎は左弓の問いに答えず、まず夕姫を地面に下ろした。

改て左弓に顔を向ける。

「左弓、これは水加月玄信殿の妹御で、夕姫と申される方だ。この近くにある腐乱佗の隠し砦に捕われていたのだ」

「お前さまは隠し砦を見つけたのか」

と、左弓はどす黒い恐怖を払げた。

「うむ、どうしたのだ」

「奴等に知られたら大変だよ。腐乱佗の忍び者は死神と同じさ。狙われたら逃げられないう。白蛇一族のもっとも恐しい敵なのだ」

左弓は夕姫の傍に寄って、白絹の寝衣が珍しいのか手を伸して触っている。

「このお姫さまをどうするのだえ」

「鷲部竜元の嫁御だ。丁重に扱って俺は鈴香と交換する」

源三郎の言葉を聞いた左弓の眼が、きらっと光った。

鈴香をおのが手に取り戻したら、源三郎は左弓には一顧も与えまい。山乱波の娘は捨て去られてしまいうだろう。

左弓は、何かを思い詰めた鋭い眼差で、源三郎と夕姫を凝視していたが、ふっと表情をゆるめて言った。

「喰べる物を持って来てやるよ。待っているがいい」

言い捨てるなり、左弓はしなやかな肢体を躍らせていた。

源三郎は、夕姫を洞に敷き詰めた落葉の上に案内した。

竜元へ嫁ぐ筈の夕姫を、なぜ腐乱佗の忍者が襲ったのであろうか。

彼等は竜元に召抱えられているのだ。竜元に対して遺恨を秘めているのかも知れぬ。

源三郎はおのれの意志にかかわらず、不気味な闘争の渦巻に、巻きこまれる予感を覚えた。

左弓が部落へ去って、かなりの時刻がすぎている。

源三郎が洞窟の外へ出ようとした時、

「疾風どの」

と、夕姫が呼んだ。

襟もとを押えた手の白さが、不安な心の動きを現わしていた。

「私をどうする心算です」

「竜元の所へお送り申す。拙者の許婚と引換えになつて頂きたい」



夕姫は眼を伏せた。

長い睫毛が柔らかく震えていた。掌で囲って
おきたい、人形のように可憐な美しさを、
源三郎は黙って見詰めるのであった。

と、源三郎は、葦のそよぐような殺気を感じた。

洞窟を走り出た源三郎は、不覚にも頭上に
意を配らなかつた。

そこから藤蔓で編んだ網が掩いかぶさってきたのである。

身をひるがえる前に、網は源三郎にからみついていた。太刀を抜こうとする腕が動かず、地面に転った源三郎の背から、頼みにする武器がはずれ落ちてしまった。

「くそ、何者だっ」

絶叫した源三郎に、周囲から飛びでた男達が重なり合った。

いずれも白蛇一族の者である。彼等は洞窟に源三郎がいる間に網を張っていたのだ。

「娘もいるぞ、捕まえろ」

わめき声に交錯して、鋭い夕姫の悲鳴が響いた。

源三郎は全身に網を巻きつけられて動く事もできぬ。三人の男が太い縄でぎりぎり縛りあげる。

指図をしているのは犬丸であった。

「何をする、離せ離さぬかっ」

「喧しい。うぬは俺達一族の女を弄んだ。その罰を受けるのだぞ」

縛りあげられて、動けぬ源三郎を蹴って犬

丸が嘲笑った。

惨忍な悦びが尖った顔に浮かんでいる。

「おい、奴を鴉谷へ吊り下げよう」

「そいつは面白れえ。手をかけずに片付くからな」

男達がざわめく所へ、左弓が駆け寄ってわめいた。

「犬丸、私はこのひとを動けぬようにしてくれとは言ったが、鴉谷へぶら下げてくれとは頼まないよ」

じろりつと左弓の顔を一瞥した犬丸が、兇悪そうに頬を歪めた。

「黙れ、俺達は白蛇様の掟を守るのだ」

と、はねつける。

源三郎は左弓の言葉に、女に裏切られたおのれに噴怒していた。

白蛇と呼ばれる山乱波の娘に心を許した不覚の念が、源三郎を苛いなむのだった。

「お前さまは夕姫とやらを竜元に渡して許婚を取り戻す心算じゃ。そうしたら私は捨てられる。夕姫さえ竜元に渡さなんたら、お前さまはどこへも行けぬだろ」

所詮は浅墓な女心であった。

それは源三郎に対する、左弓のひたむきな思慕の情から出た行為なのであった。

「左弓、夕姫をどうするのだ。馬鹿な真似は

やめろ」

「白蛇様に奉げるのじゃ」

左弓に代って答えたのは犬丸であった。

洞窟から夕姫が運び出されてきた。

ふたりの男が、長い丸太をかついでいる。

あろう事か夕姫は、その丸太に両手両足を括りつけられているのだ。山で得た獲物を吊すように、夕姫は丸太を抱く形で縛りつけられている。

袖は肩の辺りに落ちて、白い腕はむきだしとなり、裾を割った太腿が野卑な男達の眼にさらされている。

がっくりと仰向いた美貌が苦痛と屈辱に蒼ざめていた。長い黒髪が地面に垂れ落ちていた。

「おい、俺達はこやつを鴉谷へ運ぼう」

と、犬丸が残っている男達に命じた。

「やめておくれ。このひとは私の物だよ」耐えかねて、左弓が源三郎にしがみつこうとするのを、犬丸が押しのけて言った。

「左弓、邪魔をすると承知しねえぞ」

犬丸の双眸は、きらきらと光って、左弓を見据えていた。

燃える柔肌

夜の帷が山々を隠し終ると、黒い空に、欠

けた月が浮かびあがる。

白蛇一族の小屋が建ち並ぶ谷底に、異様なざわめきが起っていた。

巨大な篝火が炎の柱を吹きあげ、周囲に一族の老若男女が輪を描いていた。

その中の女達は、いずれも首に蛇を巻きつけている。粗末な布子を今宵に限って真白い小袖に換えていた。

蛇は静かに首に巻きついて動かぬのだが、炎の色を映えさせて不気味であった。女達に反して、男達は下帯だけの裸身である。

猿丸と呼ばれる男が、円陣の中央に据えた太鼓を打っている。単調な間を置いて、打たれる太鼓の音が、山肌に反響して夜空に拡がっていく。

太鼓の音に合わせて、一族の女達は呪文のような妖しい祈りの言葉を唱えはじめた。

閉じこめられている小屋の中で、夕姫は生きた心持もなく、陰々たる合唱を聞かされていた。

小屋の中は炉にくべられる薪で、むっとするほどの熱気がこもっている。夕姫は小屋を支える柱に縛りつけられていた。

襟を腕の辺りまで引きはだけられ、白磁の肌に喰いこんだ蔓縄が、桃をふたつ並べたような乳房を、さらに盛りあがらせ、みごとに

起伏をみせていた。

夕姫の前には奇怪な祭壇が設けられ、背をまるめた羅沙婆が、濁った声音の祈りをあげていた。野草や木の実を使った染料で、祭壇は青々しい赤や紫や青で彩られ、古びた異様な木像には、ぬらぬらと鱗を光らせた白蛇が二匹巻きついている。

蛇の好む物でも塗ってあるのか、炎のような舌でなめまわしている。木像は蛇身をかたどった妖しいものである。

羅沙婆は枯木のような手で、なにやら得体の知れぬ粉末をつまむと、祭壇の香炉に投げこんだ。すると、生臭い臭気が拡がり、毒煙のような煙が立ち昇った。

祈りが終わったのか、婆はくるりと向きを変えて、恐怖に息を凍らせている夕姫を凝視した。

落ち窪んだ眼球を光らせて、炎に照らしだされた顔は、夕姫の背筋を慄然とさせた。

婆はするりと夕姫に顔を寄せた。

逃がれようにも、後手に縛められた身は、微塵も動けぬのである。

「白蛇様は、男を知らぬ生娘しか欲しがられぬのじゃ」

羅沙婆は、齒の抜けた口をゆっくりと動かして言った。

「ああ、い、いやっ」

ぬるりと蛇を思わせる手が夕姫のまろやかな肩を掴んだ。

ぬめ肌の感触を調べる心算なのか、婆は黒い指を虫の蠶めくように這わせた。

夕姫は必死に身をすくめた。羞恥の血が夕姫の全身をかつと燃えなが走る。

「やめて、いやっ、お願い」

のけぞった夕姫が、唇をわななかせた。

白く暖かな鞠を、婆は巧みな手捌きで揉んでいくのである。いままで感じた事のないものが、夕姫の脳裡をかき乱す。

「許して、もう、やめてっ」

夕姫が顔を左右に振って哀願する。黒く艶やかな髪が肩に散った。

「お前の肌が、男の手に触れられているか、この婆が認めるのじゃ」

小屋の外では単調に鳴り、飽きもせず呪文の合唱が続いていた。香炉からも真赤な煙が、小屋一杯に血を流したように立ちこめている。

「あ、ああ、う、う——」

眼を閉じて耐えようとする夕姫の唇から、呻きが洩れる。

婆が黒い口をあけて、しわがれた笑い声を響かせた。恥ずかしさで夕姫の全身は火照る

ばかりであった。

「く、くくっ」

と、羅沙婆は咽喉を異様に鳴らして身をかめた。黒い汁を塗ったような唇が、夕姫の胸に近づいた。

齒の抜けた齒ぐきでゆっくりと噛むのだ。鈍い痛みが這いのほり、夕姫は息を弾ませて悶える。

呪文の合唱はとぎれる事なく続き、太鼓の音は次第に急調子に変わりつつあった。

婆は顔をあげて、しなびた唇を、ふくよかな胸から離すと、怪しく眼をぎよろつかせたのだ。恐怖と懊悩と屈辱に、意識を濁らせかけている夕姫の首が、がっくりと傾むいている。婆は骨張った指に、艶やかな髪をからませて、ぐいっと顔を仰向けた。

「今度は心を清めるのじゃ。汚れを落した身で、白蛇様に抱かれるのじゃぞ」

婆はしわがれ声を振り絞って、左弓を呼び寄せた。

小屋の中に入って来た左弓は、白いうすぎぬのような小袖をまとっていた。

裸身がすけて見えて妖艶な美しさに満ちている。うすぎぬの下には何も着けていないのである。

「左弓、巫子として最後の務めじゃ」

巫子は男を知らぬ処女でなければならぬ。

犬丸との婚姻を決めている婆は、左弓を巫子としての最後の儀式に働かせるのであった。

婆は、祭壇から一掴みの粉を、炉の中にはと投じた。とたんに黄色い煙がもくもくと立ち昇った。奇怪な色彩の煙である。

「清めの煙じゃ」

婆に代って、左弓は夕姫の黒髪をわしづかみ、ぐいと顔を炉の上に突きださせた。

「う、ううっ」

咽喉に突き刺る煙、閉じている眼までも、

痛められて、涙がたらたらと頬を伝う。

必死に首を振る夕姫を、左弓は強靱な力で抱き止めて、身じろぎも許さぬのだ。咳こんで悲鳴をあげる夕姫なのである。

「よい、今度は肌を清めるのじゃ」

煙責めを許されて、せいぜいと息をあえがせている夕姫。

突然、羅沙婆は外へ向って叫んだ。

「蟹丸、鷹丸、清めの水を運びや」

やがて、ふたりの男が、大きな桶に水を一杯に張って運んできた。

蒼い玻璃のような美しい水がたたえられている。桶は祭壇の前に据えられ、ふたりの男は退いて腕を組んだまま無表情に佇立している。

急調子に鳴り続けていた太鼓が、びたりとやんだ。

呪文を唱えながら、婆は折れ曲った腰を伸ばして左弓に顔を向けた。

「左弓、生贄を裸にむくがよい」

びくつと、夕姫の肩が震えた。

左弓が、まずおのれの小袖を足もとに脱ぎ落し、それから夕姫の縄を解きはじめた。

縄をゆるめられても、縛り続けられた夕姫の腕は、知覚を失って動かぬ。

それでも、引きはだけられた襟を押さえて

まといっている衣類を守ろうとする。

無言のまま左弓の手がそれをはねのける。

「い、いやです。助けて」

びりつと、白絹が音を発して裂けた。

すかさず婆が、黙念と立っているふたりの男へ、顎をしゃくった。ふたりはそれぞれ、

夕姫の腕を掴み、容赦なく背へ再び捻じあげるのであった。左弓がすかさず縄を手首に巻きつけた。

「ああっ——」

夕姫の唇が、悲鳴を切なく洩した。

すでに身に残っているものは、薄紅色の腰布のみ。

縄目の跡を刻ませている肌を、藤蔓の縄で縛り直した左弓は、縄尻を高く引きあげる。

夕姫の両脇が後方へ突きでる。

伏せているおとがいを起こして、すべやかな咽喉に縄を廻して手首に戻し、ぎりぎりとしめつけた。

ふたりの男は、またもとの位置に立つ。と太鼓がどろどろと鳴りだした。

左弓が縄尻を掴んで、夕姫を立ちあがらせた。恐怖と疲労で夕姫の足がふらつく。

「これを口にはめよ。生贄の轡じゃ」

婆の差しだしたものは、いまわしい獣骨であつた。

磨かれた五寸ほどの骨は、白い陶器に見えた。骨の両端には穴が穿っており、それぞれに紐がつけてある。

「やめて、許して下さりませっ」

顔をそむける夕姫。

その頭髪を握る左弓。ふたりの美女がもみ合うさまは、妖しく美しい光景である。

唇を裂き歯を割った獣骨の轡。

結ばれたひもが頬に深い溝を造り、顔を半分に斬ったようだ。

もはや生きた心持もせぬ夕姫なのであつた。恐怖とおぞましきは飽く事なく執拗に美姫を責め苛いなむ。

夕姫は大きな桶の中に立たされた。蒼い水は膝の辺りまで浸している。



「う、うう」

夕姫がくねる。羞恥がめくらめく思いを掻き立てる。奇怪な山乱波の眼に、隠す所なくさらされている屈辱。夕姫は初めて死を願った。いまとなつては、それも無駄であった。左弓が水の中から腰布を拾った。

「洗い清めるのじゃ」

婆が命じた。

「く、くうっ」

夕姫が震えた。左弓は濡らした腰布で夕姫の肌を洗いだしたのである。凝脂を漲ぎらせた肌は水滴を弾くほどだった。

全身をくまなく洗いこすられるのだ。耐えきれぬ羞恥に、夕姫は咽喉に鳴咽をこもらせるのであった。

妖蛇の舞い

生贄の儀式のために、身を洗われた夕姫は蟹丸と鷹丸のふたりに、運びこまれた磔柱に両手両足を拡げられて縛りつけられた。

奇怪な蔓で編まれた縄は、水を吸って縮み、ぎりぎり喰いこんで起伏を更に際立たせている。

羅沙婆は祭壇に供えられている壺を取り下ろした。

素焼の汚なげな壺である。

中に手を差しこみ、得体の知れぬ異様な、ぬらぬらと光った飴のように粘る液を掌にすくって、夕姫の肌に塗りはじめたのだ。首筋から乳房、腹から太腿を塗りたくられて、夕姫の肌が輝いている。

「う、うっ」

夕姫は、ただ呻くばかりだ。

と、恐るべき光景が現出したのは、その直後であった。

祭壇の木像に巻きついて動かなかった二匹の白蛇が、するすると這い下りて夕姫に近寄っていくのだ。

婆の塗った液は、蛇を呼び集める性質があるのだろう。

蛇は鎌首をもたげて、赤い炎を噴きだしながら吸い寄せられる。

夕姫の瞳孔が大きく瞳かれた。

恐怖が美貌を歪ませた。噛まされている轡の間から悲鳴がほとばしる。

「きえーっ」

二匹の蛇が、ぬるりと巻きついた。

「生贄を運び出すのじゃ」

叫びざま、婆は小屋の外に走り出て、双手をあげた。

「猿丸、太鼓を打ち続けよ。篝火をもっと燃やせ」

逞ましい上半身を汗で光らせた猿丸の筋肉が躍動し、太鼓は急調子に打ちだされた。

篝火に薪木が次々と投げこまれ火勢が、どっと増した。谷底を照らしだし、赤く染まった男女が踊りはじめた。

「生贄の柱を立てるのじゃ」

と、婆が狂声を発して宙に躍った。

蟹丸と鷹丸のふたりに支えられた磔柱が、小屋から運びだされて、篝火の前に立てられた。括りつけられた夕姫には、二匹の白蛇がからみついているのだ。

冷めたい蛇の感触、生臭い臭気。

「うう——」

恐怖の呻きをあげる夕姫。

太鼓の乱打は、更に速度を早めた。

踊りの輪がぐっと縮まる。

輪の中にいる数人の若い女に巻きついていった蛇が、それぞれ地面に落ちると、夕姫を慕って蠢きはじめた。

からみ合って這い寄るさまは、総身を粟立たせるのに充分であった。

夕姫は無意味と悟りながら身を動かさずにはおれなかった。

喰いこんだ蔓縄が軌んだ音を立てた。

夕姫は息を詰らせて、背の模様を光らせながら、近づいて来る蛇群を凝視して意識の濁

るのを祈った。

「く、くくっ」

絶叫がふくれあがって咽喉を塞いだ。

歯が、噛まされている獣骨がちがちと鳴らした。

太鼓の乱打は狂気を煽っている。

婆を中心にして踊りは続けられ、熱っぽい呪文の合唱が谷底にこもって、さながら古代の怪獣の咆哮を思わせるのだ。

蛇群は二匹の白蛇に招かれるように、磔柱を這いのほり、夕姫の足首からふくらはぎをうねって、太腿からふくよかな腹に届いて、それぞれにからみついた。

蛇は白い夕姫を掩い隠すように巻きついて

いる。

そのおぞましさは筆舌に尽くし難いのだ。恐怖と嫌悪感の連続は、耐え続けてきた夕姫を屈伏させた。

意識を喪った夕姫の首が、がっくりと垂れた。

「生贄は気を喪うたぞ。めいめいがお蛇様を抱くのじゃ」

と、羅沙婆はわめいた。

妖しい踊りの輪は更にせばまり、女達が夕姫に近づいて、おのおのが首に巻いていた蛇を手に移し取る。

最後に婆が、二匹の白蛇を、おのが首にあそばせた。

と、踊りの輪を破って、ひとりの男が磔柱に近づくと、垂れた夕姫の面を眺めた。

犬丸である。

宵の内から里に降りて酒を喰らい酔っている。犬丸は、にやりと頬をゆるめた。

「金儲けができるぞ、婆さま」

羅沙婆が、ぐっと顔をつきだした。

「なんじやと、犬丸」

「この娘は、水加月玄信の妹で、夕姫。驚部竜元に興入れする途中で何者かに掠られたのだ。蝙蝠城は大騒ぎとよ。里へ降りてみる、夕姫探しの軍兵がうようよしておるわい。水加月玄信を恐れて、高札こそ立ててはおらぬが、噂では探しだした者には黄金十枚だ」とよ
「ならぬ、この娘がどのような身分の者であろうと、すでに白蛇様へ捧げたのじゃ」

犬丸は酒臭い息を吐いて狡猾に笑った。

「この祭は汚れたのだぞ。白蛇様はこのような生贄を喜びはせぬわい」

「なんじやと、犬丸」

「婆さまは、祭の巫子に左弓を使うたそうじやの。巫子は男を知らぬ生娘でなければなるまい。だがよ、左弓は生娘じゃねえ。疾風源三郎って牢人者に抱かれたのだぞ。夕姫は白

蛇様に捧げても無駄よ。驚部竜元に売る方がよいぞ」

犬丸の言葉を聞いた婆の顔色が変わった。神聖な白蛇一族の儀式は汚された事になる。

「踊りはやめい。祭は終りじゃ」

わめいた婆は狼狽した眼で左弓を探す。だが、踊りの輪の中にも、小屋の中にも左弓の姿はなかった。

「犬丸、左弓がおらぬぞ」

「婆さま、俺に任せろ。その代り夕姫は俺の言う通りにしろよ」

と、言い捨てた犬丸は、暗い谷底を駆けだしていた。

左弓がどこに行ったのか、犬丸には本能的に判っていた。

間違いなく、鴉谷へ吊り下げられている源三郎を、救けに行った筈だ。

犬丸はさすがに山乱波らしく、俊敏に闇を駆けのだった。

鴉谷――。

その名の通り、無数の鴉が棲むついでいる谷である。

荒涼とした岩だらけの谷には、腐肉をついばむ鴉の臭気で近づく者はない。

白蛇一族は死者をこの鴉父へ投じる習慣がある。鳥葬なのだ。

掟にそむいた者を、この鴉谷へ吊り下げて生きながら鴉についばませるのだ。動く間は鴉もつかぬが、次第に動きが鈍ってくる。と、鴉は一勢に襲いかかり、眼をえぐりだし、耳を突き破り、白骨と化すまで喰らうのである。

犬丸の想像通りに、左弓は熊笹を分けて鴉谷への道をたどっていた。

白蛇の儀式の衣裳を捨て、いつもの布子と下袴の姿に戻った左弓は腰にも山刀を帯びていた。

さすがの左弓も、夜の鴉谷は不気味であった。

夜鴉が不吉な鳴き声を響かせ、羽音が重なり合って異様に大きく聞える。

欠けた月の淡い光を浴びて、白々と浮いた鴉谷の岩壁に、黒い塊りが無数に貼りついているのが見えるのだ。

鴉の群れなのであろう。

生きていくうちに源三郎を助けださねばならなかった。

谷底へ向って、枝を拵げた老松に、源三郎は吊り下げられていた。

藤蔓の網をかぶせられたまま、その上からがんじがらめに縛められた身を、すでに半日も吊られて源三郎は朦朧となっていた。

喰いこむ縄に全身の重量が加わり、源三郎は疲労し果てていた。眼の下は、三十間もあり、岩は鋭く牙をむいているのだ。

「お前さまっ」

左弓は源三郎に向って叫んだ。

「いま助けてあげるよ」

老松によじ登ろうとした左弓の背に、冷たい男の聲が飛んだ。

「白蛇一族を裏切る心算だな。左弓、掟を破った者がどうなるか知っておろうな」

振り向いた左弓の顔が憎悪に歪んだ。

「犬丸め——」

左弓は山刀を抜いて腰を落とした。

犬丸が、のっそりと、岩陰から姿を現わした。

「お前は生娘でない癖に巫子を勤めたな。婆さまからお前の始末は頼まれたのだ」

左弓は呼吸を詰めると、思い切って身を躍らせた。

犬丸の前につまさきを着けるや、山刀を横になぎ払った。

犬丸はのけぞって、刃をかわすと、跳び退って態勢をととのえた。左弓は双眸をきらきらと光らせ、右手の山刀を突きだしてかまえた。犬丸はおのれの山刀には手をのばさぬ。

「俺を殺す気か、左弓」

「言うなっ」

わめきさま、踏みこんだ左弓の山力を空に反らせて、犬丸は猿轡を伸して右手を掴みさま。

「阿魔、覚悟しゃがれっ」

と、膝頭で相手の肱を突きあげた。

左弓の山刀が空しく宙を飛んだ。

「ち、ちくしょうっ」

のめりこんだ左弓の背を犬丸が押さえた。

捻りあげた右手と、必死に抵抗する左手を、大きな掌で握ると、背骨を膝でぐりぐりとこじった。

「こ、ころせ——」

顔を地面にこすりつけて左弓がわめいた。短かい下袴の裾から、むきだしの脚が口惜しげにばたつく。岩風呂で犬丸に加えられた屈辱が甦える。

「お前は俺の女房になるのだ。おとなしくなるように仕込んでやる」

「だ、だれが、お前の女房になるものか」

「ふふふ、相変らず鼻柱は強いもう」

せせら笑って犬丸は膝頭に力をこめる。息の詰まる苦痛に、左弓は呻いてもがくのだ。犬丸は腰にぶら下げた縄で縛りにかかる。

「痛っ、痛いっ」

かん高い悲鳴が源三郎の意識をさませ、

争っているふたりを視界に捉えさせた。

「や、やめろ。犬丸、左弓を助けてやれ」

絞りでる声に、犬丸が眼を剝いた。

「俺を殺せばよからう。左、左弓を離せっ」

「やかましい、死に損ない奴。この女は俺達の掟を破ったのだ。仕置をするのじゃわい」

犬丸は手を動かしながらほざく。

引き締めた縄を、左弓のからだに喰いこませる。

「うぬはもうじきに地獄へ行ける。もう少しの辛抱だぜ」

犬丸は眼を足もとに横たわっている左弓に落した。

握っている縄を思いきりたくりこむのだ。

縄は胸のふくらみに埋まり、呼吸を詰らせながら、上半身を起されるのである。

「左弓、立って歩け。お前はこれから俺の恐しさを身で知るのだ」

引きずられて、転がりながら、左弓は悲痛に叫んだ。

「お前さま——」

その声に驚いた鴉の群れが、鳴きわめさながら、いっせいに谷底から舞い立った。

山小屋



鴉谷から尾根を降りると、熊笹の灌木の林があった。

その中に、木樵りが使う小屋が軒を傾むけて建っている。犬丸が用息していた場所である。

「さっさと歩け、夜が明けるぞ」

いつの間に折り取ったのか、犬丸は木の枝を持って、前を歩く左弓を威嚇するのだ。

歩みが鈍ると、犬丸は枝を下袴から覗いている腿に鳴らすのである。ひっぱたかれ、縄

尻を引き廻され、左弓はよろよろと犬丸の意に従う他はない。

「太丸、私を婆さまの所へ連れてお行き。掟は婆さまが決める筈だよ」

「うるさい、お前は俺の勝手に任されているのだ。とっとと行けい」

犬丸は足をあげて、左弓の腰を蹴りとばした。熊笹の中に転がり、露出している肌がちくちくと痛んだ。

木樵小屋の内部には、かび臭い空気が濃ん

でいた。

淡い月の光も射しこまず真暗である。この小屋に連れこまれたら、どのような目に合わされるか、左弓は本能的に悟っていた。

逃げようにも、後手に縛められた縄尻は犬丸に握られている。

山で一生を終える山乱波の眼は、闇を通す位は雑作もない。犬丸は常人ならば何も判らぬ暗黒の中で、縄尻を踏み据えて火打石を鳴らした。

やがて、火が大きくなると、犬丸はゆっくりと小屋の戸を閉めた。

「左弓、この間は邪魔が入ったが、今夜は誰れも来はせぬ。思うさま性根を直してやる」骨張った尖った光った顔が、期待を漲ぎらせているのだ。岩風呂で左弓を責めあげた時の喜びを味合うのである。

「負けるものか」

「ほざくな」

わめきざま犬丸の手が躍った。左弓の身が跳ね飛んで板壁にぶつかった。しびれるような感覚が耳につうんと拡がる。

「俺は嫌がるお前を手ごめにはせぬ。お前が自分から願うまで待ってやる。その代り、荒っぽいのは承知しろよ」

笑いを刷いて犬丸は歯をむいた。

犬丸と呼ばれる荒い舌でべろりと唇をなめる。茶色い頭髮がそそけ立って餓えた野良犬だ。

「だれがお前に頼むものか。畜生」

左弓の紅唇が、必死の悪罵を吐きつけた。

犬丸の両手が伸びて、左弓の布子の襟を割った。白い肌がむきでる。長く垂れている縄尻を、左弓の足首に巻きつけて犬丸はぐいと引いた。

「ああっ」

左弓が横ざまは倒れた。後手に縛りあげられた、支えるものがない身が、どきりと転がるのを犬丸は嗜虐的な視線を粘りつかせる。両足首を括った縄を、引き絞って首に廻わした。海老責めにするのだ。

「く、くうっ」

左弓は眉を寄せて呻く。合せようとする脚は、犬丸の力によって割り拡げられ、あぐらの形に組まされていた。縄が絞られるにつれ左弓のつまさは首に近づく。折り曲げられた上半身は確かに海老を思わせた。顎に履いている草鞋の泥がついた。

「う、う、くうっ」

左弓は歯を噛んで苦痛を耐えた。縄のために首筋が灼けるように痛み、腰骨がごとりと異様な音を立てる感じた。両腿の付根が突っ張って痙攣している。

どんなに責めさいなまれようと、犬丸に哀願はできなかった。

耐えて耐えぬいて、鴉谷に吊されている源三郎を助けたい。

「どうだ、少々はこたえるか」

と、犬丸は熱っぽい声で言った。

まるく曲っている左弓の背に視線を粘らせながら、犬丸は山刀を抜いて布子の襟に当てた。力をこめると、布はするすると斬れてい

く。黒っぽい布子が左右にひらいて、脂肪を光らせた肌が現われる。

「畜生」

左弓のあえぐような罵りの叫びは、犬丸にとっては、快よく聞こえる。

肩がすっかりむきだして、胸を締めつけている縄が、辛うじてずり落ちる布子を助けて乳房を隠していた。

「む、むう、うっ」

押えようとしても、海老責めの苦しさは、左弓の唇から苦痛の呻きを洩らすのだった。

犬丸は奇妙な姿態を苦悶させている傍に座り、火の中に枯れ枝を投げこみながら、にやにやと笑っていた。

もう暫くすると、左弓の唇から許しをこう声が流れる。

その時の勝利感を思うと、ぞくぞくする犬丸であった。

「ふふふ」

と、犬丸は山刀の尖先を伸ばした。曲っている腰に刃が差しこまれた。くるりと犬丸が山刀の柄を廻した。

「ば、ばか。お、おやめ」

左弓は犬丸の意図を知って悲鳴をあげた。鋭利な刃が半転しただけで、下袴の紐が、ぶつりと切れた。

「ふふふ」

犬丸は満足気に鼻を鳴らした。

はじめて、眼のくらむような羞恥が襲ってきた。岩風呂で、裸身を縛られた時よりも、はるかに烈しい感情だった。しかも、その羞恥は恐怖に変わっていくのだ。海老責めは苦しく屈辱的である。だが、苦痛から逃がれるために、自ら哀願して犬丸の腕に身を任せる事はいやであった。

「こ、ころしてやる」

顎を突きだし、顔をあげた左弓は、憎悪をこめて言った。

「その恰好で俺が殺せるかよ。そのうちに俺から離れられなくなる」

「だれが、お前なんかと——」

左弓は山刀が腰を冷たく這うのを感じた。張り切ったふくらみを包んでいる腰布が、すっと切り裂かれるのを、必死に耐えていた。犬丸は双眸をぎらつかせた。視線が左弓の身を山刀と共に動く。

山地を跳び歩く生活に、ふくらみは締まって、果実のように新鮮であった。

「苦しかろうな、左弓。俺はこの山刀でお前を素っ裸にむいてやるわい」

眼前に突きだされる刃を見まいとして左弓は瞼を閉じた。

枯れ木の弾ける音と、左弓の切迫した呼吸の音が交錯して聞える。すでに深更となった山は夜気のみが冴えていた。

「う、うう——」

左弓の呻きが陰惨な響きを撒いている。背骨と折り曲げられた腰が痛み、身を支えようとして余分な力を集中せねばならぬのだ。骨が、ばりばりなるような気がする。あぐらを組んだ形も、羞恥が左弓を苦しめるのだった。

「どうだ、俺に頼むなら縄を解いてやる。抱いて欲しいとな」

「いやだ、た、たのむものか」

「強情な阿魔だ、こうされてもか」

いきなり、犬丸は左弓の肩を押した。

身の支えを失って、ごろりと仰向けに倒れた。惨めなおのが姿が左弓の血を熱く灼く。

犬丸は山刀を捨てると、新しい責め手を考えた。えついたのか、足首と首を結びつけていた縄を解いたのである。

苦しい海老責めから解放されて、左弓の両脚は長々と伸びた。下半身の感覚が判らぬ。

犬丸は左弓の布子をむり取っていく。

縄目にはさまっている布を引きちぎる。

抵抗しようにも、痛めつけられて、意のままにならぬ左弓であった。

「こうして見ると、お前の肌は白い」

犬丸が感嘆するように言った。

布子から出る腕と、膝の上辺りまでの肌は陽に灼けて小麦色を呈しているが、隠されている部分の白さは格別であった。

下半身はしなやかに緊まって、豊満な胸とは対照的であった。

犬丸はまた縄を左弓の足首に巻いた。

ぐっと絞って、後手の縄に結びつけた。左弓の手と足はくびれた胴の所で一括された。

今度は逆海老縛りである。

両手両足は後に廻って、腰を中心にして弓なりに反った。

あます所なく男の眼にさらされねばならぬ。左弓は瞼を閉ざし顔をそむけた。犬丸は双眸に残忍な光をぎらつかせて、枯れ枝を拾いあげた。そして、枝をゆっくりと左弓に向けて降ろしていく。

「ひ、ひいっ」

痙攣が波のように拡がった。

枝で突きまくられた跡には赤い斑点が浮きでた。血が滲んだのだ。次に責める箇所を探し求めて、犬丸は枯れ枝を左弓のすべやかな腹に滑らせる。

「や、やめとくれっ」

脂汗が、ぬらぬらと浮いていた。(次号完結)

前号まで

▼わたし（阿麻哲郎）は航海士上島氏を通じ、美しい女予言者サレアを、その日本公演中に知る。上島氏はゴルドンの古文書をわたしにあずけ出航したが、航海途上で煙のように消え、またゴルドンの古文書の本当の持ち主相馬博士に会う寸前、博士は行方不明となり餓死体が発される。

▼以前上島氏に案内された新宿のバー・エテルナに博士の怪死事件とのつながりをかぎつけ、流しの男に探りを頼んだが、男はかえってホステスのとりことなり九州の山中で変死体となり発見される。こうしてゴルドンの古文書をあずかったために、わたしは事件にまき込まれ、しかも古文書を何者かに持ち去られる。

▼その犯人とおぼしき女性と偶然に出会い尾行したところ

ろ女はアフリカ学術調査隊、西司郎の留守宅に入る。そこで有尾人とナゾの女を目撃し、前二つの殺人は女性による犯行ではないかと考える坂崎警部を伴い、翌朝ふみ込んだが無人家となっている。そのころエテルナの常連小林春吾がまたまたホステスたちに拉致される。

▼事件のカギと見られるクロレラ、相馬博士の胃袋から発見されたKB物質について研究者中村教授は、恐しい反世界へ入るカギではないかと推察を下す。また上島氏夫人美美子のまわりにもナゾめいたものが漂っている。九州の山奥で下半身ゴリラ男に変ぼうした小林春吾が助けだされたが記憶喪失である。そして西司郎の行方不明という新しい情報のさなかに、秘密裏に中村教授が作りだしたKB物質を飲み、阿麻哲郎は反世界へはいる。

ゴルドンの記憶

①9

阿麻哲郎
江淵晃夫・絵



白い顔

心配そうにのぞきこんでいる、なつかしいみんなの顔の中に、箕輪祥子のふくらとした白い顔を発見し、驚きわなないたのも無理はない。わたしの耳もとには、まだ生々しくあのときあげた白ブタの悲鳴が残っていた。

わたしは畏怖するように、面を腕でおおうようにして、箕輪祥子の視線を避けたのであった。それは連想から連想につながる、記憶の底から反射的にさしてきたものだった。

瞬間的に日光の照射をあびて、たじろぐように、わたしはたじろいだ。

彼女は、ちょうど中村教授の肩のあたりから、顔をのぞかしてこわごわ笑いかけていたが、その顔のかげりの微妙な部分に思い出させられるものがあつた。それは、単に、彼女が女性であるということからくるものばかりではなかった。何か黒いかげりのような、記憶にそれはつながった。

「おい、おい、阿麻君。しっかりしろよ」

坂崎警部の部厚い手が、柔らかくわたしの仰臥している肩口をたたいた。

「君、今、何と言ったね」

今度は中村教授だった。ふたりにそう言わ

れてわたしは、ふっと気がゆるんだように、平静さをとりもどした。箕輪祥子を見て畏怖した気持ちさえ、気恥ずかしくなった。

「いえ、もう大丈夫です」

そう言うってから上半身を持ち上げかけた。からだがやけに重かった。深い疲労感が残っていた。

「いや、そのまま、そのまま」

中村教授は、手を伸ばして、わたしをゆるく押さえて、寝かしつけてくれた。

「今、あんたが口走ったことを、もう一度聞かしてくれんか」

中村教授は、再度そういって、熱心さをあらわに面に表わした。

そう言われると、わたしは、自分が口走ったことが異様におかしなことに思えて、何も言えなかった。

「聖血を出される方、とか、言っちゃったね」

ニンマリ笑うように、中村教授は言った。

「それで、だいたいの見当がつくようなんじゃないが、いくらなんでも、そればかりじゃよくわからん。もっと、詳しく話をきかしてくれ。とにかく、実験は成功したんじゃないかな。未知の分質、KB物質の抽出創生が成功したんじゃないかな。どうじゃ。阿麻君。反世

界とはどんなところじゃった」

「ああ、そうでしね」

見当違いな返事をわたしはした。何か遠い悪夢のようであった。

「悪い夢を見たんですね」

折角みんなが気負いこんでいるのに、こんな気のない返事が出た。しかし、これが実感であった。すべてみんな、一場の夢にすぎないのではなかったか。あの口ひげを生やした紳士も、気どった高調子な声を出す白ブタもコーラスを歌う若い女性たちも、そして蝶が舞うのどかな野の風景も、みんな一場の夢にすぎないのではなかったか。

KB物質とは、睡眠薬の一種ではなかろうか、そんなとんでもない印象をさえ、わたしは持つのであった。

「悪い夢だって」

今度は坂崎警部が、がまんがならぬといったように、口をとがらせた。

「ぼくが証明する。君が見たのは、夢ではない。本当に、あるがままの世界なんだ。君はKB物質を飲むと同時に、そのままこの世界から消えてしまった。どこかに、フトかき消えてしまった。そして今度は、また、フトこうして現われたんだ。どこからか、ふいと現われたんだ」

わたしは警部の語気に押された。

「坂崎さん、そんなにおっしゃらなくとも、それはわかってますよ。ぼくは、今、恐しい冒険から、帰ったばかりですからね。その冒険があんまり奇抜なんで、驚いているんです。これが本当のことなんだろうかと。それで悪夢だと言ったまでで——」

そして今度は上半身を持ち上げ、立ち上がった。足元がいくらかふらついたが、それでもしっかりと足を踏みしめ、箕輪祥子が気をきかしてすすめてくれた椅子に腰をおろした。

今気づいたことだったが、わたしは、今まで、実験室の、堅い木の机の上に寝ていたのだった。

サレアの再来

わたしは、椅子にかけて気分が落ち着くとそのまま、見たこと、聞いたこと、逐一話した。口ひげの男のこと、白ブタのこと、そしてゴリラ男を連れた若い女性のグループのこと、特に最後のあの真昼ののどかな草原の中で行なわれた大殺りくの惨劇については、力をこめ、まざまざと残る恐怖をまじえて話した。

だれもが、まさに初めて聞く、未知の国で

の出来事だった。それは、遠い宇宙の他の天体での出来事以上に、興味が持たれた。それでみな、かたずをのんでわたしの話に聞き入った。

わたしは自分で話しながら、それが本当の体験であったのだろうか、いぶかしく思った。恐怖の実感を生々しかったが、やはり一場の夢魔の印象がぬぐえなかった。

しかし、だれもが、わたしの話をそのまま受け入れた。少しも疑おうとはしなかった。話の途中で、口をさしはさむ者もいなかった。

ところで、教授が一番中でも興味を示した部分は、ゴリラ男の供を連れた女性たちの登場の場面でもなく、あの凄惨な殺りくの場面でもなかった。人間の男性にそっくりな、ひげを生やしたかの紳士が、かなたの国では最下等の生物、ブタにも劣る生物であって、そして、万物の霊長として君臨する最高等の生物が、女性であるという一事についてであった。それはいったいどういうことを意味するのか、そしてそのことが、どんな日常の風俗図絵を展開することになるのか、また、そのこととサレアにからまる一連の事件と、それはどんな関係を持つことを意味するのか。そして、女性と男性との、そういう倒錯した関係のあり方こそ、サレアにからまる事件の最

もカナメになる部分であることを、教授が見ぬいていたがためであった。わたしは、何度も何度もそのところを繰り返し質問された。

坂崎警部は、トントがてんのゆかぬティにて、全く畑の違う勝手の悪さから、つい何も聞くこともなく、教授とわたしとのやりとりをだまって見守っていた。

「だってぼくは、何も知らないんです。あの世界の中枢ともいうべきところがどこで、そういう都市ではどんな生活がなされているのか、詳しく知る機会も見られる機会もなかったんです」

「いや、そのことはよろしい。いずれまた、十分に準備をした上で、われわれは出直す。またその時には、その探検隊の一員として、君には再度活躍してもらわな——」
そう言って教授は、わたしの肩をたたいて笑った。

世界的な大魔術師、予言者、として有名なサレアが、再び不可思議な大一座を引きつれて、日本にやってきたのは、その後間もなくであった。

予定としては、まだ先のことであったが、どういふ事情が起きたのか、急ぎよ、予定は繰り上げられて、最初フィリピンのマニラ公



演であったところを、日本公演のほうが先になった。

劇場は新宿のコマ劇場である。第一回目の公演の時と同じだ。だが劇場側では、急な日程の変更のために、プログラムの改変や日程のやりくりや、受入態勢に大わらわだった。

新聞や週刊誌や、テレビが、オリンピックの記事以上に、サレアの来日について書き立てた。「彼女こそ、最大の奇蹟である」と。

公演はしかし、そうした一般観客層へのアップीलと、PRのほかに、何かひしひしと迫りくる一つの緊迫した空気を、その背後に流していた。それは一つの大きな山場であった。

事の発端はサレアの第一回目の来日からであった。新宿の人ごみの中で、上島氏とサレアが歩いているところを発見した、それ以来であった。トカゲの被服をまとい、真赤な羽根かざりを頭にかざして歩いていたサレアの後姿を見てからであった。

その後、ゴルドンの伝説をめぐって、その古文書の消失を初めとして、いろんな人たちが行方不明になり、あるいは殺された。

肝心の上島氏までが、キューバ海上の汽船のデッキ上から、突如消えてしまった。生きているのか、死んでいるのか、どこへどうし

て消えてしまったのか、いっさい不明であった。

そうした奇怪事の連なる一連のウズの中に、サレアがいた。でないとしても、重要なカギをにぎる女性であることにまちがいはなかった。

わたしばかりではなく、今や警察までがあげてそのことを信じ、サレアの周辺に事件のいっさいの決着を求めようとした。

焦点はサレアの再度の来日にあった。それをきっかけに、どんな事態が現出するか、はかり知ることができなかった。

芙美子の目

出勤状態があまりにもよろしくなかったで、ついにわたしは勤務先の出版社をクビになった。幾ばくかの退職金を手にして、かえってサバサバした気になっていた。これもまだ独り身という、気楽なわたしの立場がそう思わせるのであろう。これで心おきなく、どんな冒険にも飛びこめる態勢ができた。

駅の売店で週刊誌を買った。表紙の写真がサレアであったからだ。公演はいよいよ明後日からであった。時の人として彼女の名は喧伝されていた。またそればかりではない。そ

の美しいエキゾチックなマスクは、週刊誌の表紙を飾るだけでは、もったいないほどのきわだった魅惑的な輝きを持っていた。

ずっと奥へ切れこんだ長い瞳にうるんだ光があり、いくらか受け口の唇に、締まりがあった。

その写真を見ているうち、わたしはふいと思いついて上島芙美子を久々に訪問した。それにはいろいろ複雑な気持ちがあった。上島氏とサレアとのつながりばかりではなく、芙美子との間にも秘密があるのではないか、サレアから彼女への贈り物だという、豆ゴリラ男のことが気になった。

訪ねてみると、芙美子は思った以上に元気で、色白のハダの上に、つやつやしい血色さえよみがえらせていた。

居間に通され、すわってみて気がついたことには、そこにあのサレアからの贈り物である豆ゴリラ男が、首に首輪をつけただけの格好で、オリにも入れられずに放し飼いにしていた。

「大分慣れたようですね」

わたしがあいさつがわりにそう言うと、芙美子は、影のない声で明るく笑うように答えた。

「ええ、おかげさまで。今ではすっかりなつ

いて、ずいぶんぐさめられてますの」

ゴリラ男はしなびた老人のような顔をしてキョトンと首をかしげるように、わたしの顔を見つめるのであった。なんだかかわいい気がして、指先を突き出してやると、ゴリラ男はその指先にかじりついて、アメ玉でもしゃぶるようにしゃぶり始めた。

「おい、くすぐったいじゃないか」

わたしは悲鳴をあげるように手をひっこめると、その手を追っかけてゴリラ男はわたしの胸元にとびこんできた。ちょうど小ザルかネコのようなものだった。

芙美子はその様子を見ながら、強く両手を打ち鳴らした。ギクツとしたように、ゴリラ男はシッポをピツと持ち上げ、女主人のほうを振り返った。芙美子がきつい目でにらむとゴリラ男は首をすくませて、さっと、わたしの胸元からとびさって、女主人の方へとんでいった。

よくしつけたものだ。大抵の雑用はキビキビと果たす。見ていると、新聞を持ってきたり、お湯をわかしたり、指のツメまで切ってくれる。人間と少しの変わりもない。アマゾンの有尾人は、コアタ猿との混血だそうだが、いずれにしてもサルよりは人間に近い。

「へたな人間より役に立ちますね」

わたしがいうと、芙美子は茶を一口すすりながら、控え目にうなずいた。

「大助かりですわ。おふろの時なぞ、からだまで洗ってくれるんですの」

「へえ、そうですか」

と感心しながら、ふと、トイレの始末もやるんでは、と考えて、すぐにその連想を打ち払うようにした。われながら浅間しいものだと思った。

しかし、サレアが、この豆ゴリラ男を、上島芙美子に贈ったについては、特別に深い意味がなくてはならなかった。上島氏とサレアとの、かわりについては知っている。そのかわりから、夫を行方不明に、というよりその予言が適中して、行方不明になった夫の妻に対する、若干の責任めいた同情をサレアが持ったとしても不思議はなかった。少しでもなくさめてやろうと、特別に小型の豆ゴリラ男を、ペットとして芙美子に贈ったのは、サレアにできる最上の好意の表われであった。少しも不審の点はなかった。

だが、かりそめにも、反世界の不思議な情景に、いささかでも接してきたばかりのわたしにとっては、これをこのまま見のがし得ないのであった。

ゴリラ男と反世界、ゴリラ男とサレア、そして芙美子、「聖血をお出しになる」という女性——こうした堂々めぐりのつながりの中に、一つのゆるがせにできない大きな秘密がある。

「サレアの公演はいよいよあさってからですね」

唐突な言い方だった。

「わたしのところに招待券が来てますわ。あの人が直接アメリカからよこしてくれたんですの」

芙美子は気にするようすもなく言った。

「贈り物を下さったお礼もありますし、それに上島のことを、もっと詳しくあの人に教えていただきたいので、いい機会ですわ」

「サレアといえば、もう日本に來ているんですね」

「本当ですか」

「本当ですよ。ちゃんと写真入りでこのとおり、書いてありますよ。帝国ホテルにとまってるようですね」

わたしは無雑作に、買ってきた週刊誌を差し出した。ゴリラ男がすばしこく、わたしの手から彼女の手へ、その週刊誌の中継をした。「ぞっとするほど奇麗な方ですね」

手渡された週刊誌を、芙美子は食い入るよ

うに見つめた。

「ちよっと類のない美しさですね、日本人離れというより、人間離れしていますよ」

わたしも異論なく相づちをうった。しかしそれにしても、芙美子は、いっかな週刊誌を手離そうとしない。熱心さにも度が過ぎると思われた。

「その写真に、何か——」

「いえ、あんまりサレアさんが美しいものですから——」

芙美子はやっと目をあげた。何か放心状態の趣があった。横からゴリラ男が、気をきかしたつもりで手を差ししのべ、週刊誌を受けとろうとした。芙美子は発作的に激しくその手を叩き返した。そして叫んだ。

「うるさいじゃないの、お前なんかすっこんでなさい」

ピシッと激しい平手打ちがとんで、ゴリラ男はものの一間もはね上がったであろうか。あまりのことにわたしはあっけにとられてしまった。日ごろつつましかな芙美子に、とどぎもを抜かれた思いだった。

「あら」

芙美子はあわてて立ち上がった。

「どうしてこんな乱暴なことを——」

羞恥ではおを真赤に染めながら、急いでゴ



リラ男をだき起こしに行った。

「ごめんなさいね、いたかったでしょ」

しきりに言いながら、それからわたしのほうへも何度も何度も、

「はしたないとこ見せてしまって、ごめんなさいね」

を繰り返すのであった。

「そんなこと、気になさることありませんよ」

何か変に刺激的なものを感じて、わたしのほうこそ少しあわてぎみであった。

だがそれより、あんなに熱心にサレアの写

真に見入っていた芙美子の様子が尋常でないと思った。その証拠が、今の突発的な状況である。何で彼女は、リラ男にあのような発作的な怒り方を示したのか。

阿麻哲郎を送り出してからしばらく、上島

芙美子はその居間になっている板敷のアームチェアで、考えごとにふけていた。

リラ男は、主人の不きげんそうな様子にこれまた滅入ったようにうなだれ加減で、ただ目ばかりキョトキョトさせていた。それでも所在なさに、もそもそとはっていつて、主人の足もとにうずくまった。そして上目づかに顔色をうかがうのである。そうしているうち、思いきって女主人の、投げ出している

形のよい、しまった足の肌の手を差し伸べ、触れてみた。彼女は何とも言わなかった。そこでようやく、元の普通のペースに立ちもどり、飼いの慣らされたサルがよくやるように、主人の足の毛穴の脂を器用な手付きでつまみとる作業を始めた。つまみとっては口に入れそしてまたつまんだ。小さきみな、テンポの速いその手付きが、疲れた足にとっては心地よい刺激になるので、芙美子はいいつも午睡をするときそうするように、足をリラ男に任せっぱなしでいた。

「だが」と、彼女は考えた。サレアの写真を長く見つめているとき、奇妙にグイグイ引きずりこまれていったあの血の騒ぎのようなものは何であろう。何か、遠いところ、はるかに呼びこまれて、グイグイ引きつけられる、怪しい胸騒ぎがそれだった。

確かにわたしはどうかしている、芙美子は自分で思うのだった。

第一、以前ほど、行方不明の夫のことが気にかからなくなったことが一つ——その寂しさが、リラ男の飼育でなくさめられていることを、彼女はあきらめの気持ちから受け入れていた。朝、彼女は、両股でリラ男の顔をモロにはさみつけた状態にいる自分の様子を、目覚めと共に知らされた。その朝は、腰

から下半身にかけて、にぶいけだるい疲労が残った。思うだけでも、恥ずかしい行為であった。しかし、その習慣はやまなかった。

芙美子は、もうひとりの芙美子が夜中に起き出して、実に残忍な女となって、リラ男を最も破廉恥な方法でいためつけていることを、おぼろげながら感じとった。

自分の本体は何者か！ 芙美子はそれを恐れるのであった。

ジャスミティ

「要するに何かある」

わたしは心に期するところがあった。芙美子とサレアとの間の、なんらかのつながりに確信を持ったのであった。そのつながりと上島氏の蒸発事件とに、一つの暗合めいたものが感じられるのであった。それは大変な矛盾であった。芙美子に対する愛が、わたしの中には、はっきりした形で芽生えていた。愛と疑惑が、二重になってわたしの心を重苦しくした。ともあれ、サレアの来日は、この重苦しく立ちこめた霧を、見事に吹き飛ばすためには、絶好のチャンスであった。霧がはれると何が現われるか、それが半ばわたしを恐怖させた。



さて、電車の中でわたしは、切符をどこに入れたかしらと、ポケットをまさぐっているうち、妙な紙片を引っ張り出した。紙というより、手ざわりからいって何かのなめした獣皮であった。それは全く覚えのないものであった。吊り皮につかまりながら、どうしてこんなものはいっていたのだろうと、いぶかりながらなめたが、どうもよくわからなかった。広げると、半紙一枚位の大きさはあった。白くすべすべしていた。そこに何やら、意味のない模様が描いてあった。よこれやしみのようでもあった。

とにかく不思議であった。そこで途中下車して、駅前近くの喫茶店にはいった。店内は明るく、フルーツパーラー風の作りであるのが都合がよかった。

アイスコーヒーを頼んでおいて、ゆっくりとさっきの獣皮をポケットから取り出した。テーブルの上に広げておいて、さっきのしみのような模様を子細にながめてみた。

明確な線で描いてあるのではなかった。しみといえはしみ、よこれといえはよこれであった。だがその茶っぽい模様が島の形に見えた。トカゲが背を丸めたような格好が、キューバ島に似ていた。と思って見ていくうち、だんだんそれは、まぎれもないキューバ島の

形をはっきり現わしてきた。

意味深いことであつた。キューバは赤色革命で有名なカストロの国である。そればかりではない。それは以前上島氏から聞いた▲ベツツイ号の記録▼という、珍しい記録にまつわる因縁深い国であつた。

一八二四年十二月二十一日午前二時三十分キューバのマタンザスに向け航行中の二本マストの帆船ベツツイ号は突如沈没した。ヒルトン船長以下七人の乗組員は全員遭難した。

それから一四〇年経つての今日、上島氏はサモア島でジャスミティと名乗る不思議な遭難者を救助した。彼は怪魚に吞まれた上、全能の女神が君臨する全く別の世界をのぞいてきたという。

ジャスミティは、一四〇年前の、ベツツイ号に乗り組んでいたとか、記録によると、ジャスミティとは、同船に乗っていた犬の名であつたとか。そんなばかな話が実際にあるのかないのか、とにかくジャスミティは、たまに入院していた病院の窓ガラス越しに、通りかかったサレアの姿を見て驚き急死した。

上島氏の話したジャスミティの一件もそうだが、なお当のご本人が、ベツツイ号と同じキューバ近海で蒸発するとは、偶然すぎる奇怪事だつた。

覚えのない意味深長な獣皮が、いつのまにかポケットにまぎれこんでいることからして不思議だつたが、その不思議な獣皮に、キューバの地図が描いてあるものもお不思議だつた。わたしは目をつぶって考えた。いつ、どうして、この獣皮が自分のポケットにまぎれこんだのであろうか、と、そのいきさつを考え詰めようとした。喫茶店のステレオが、ボロジンを奏していた。東洋風な旋律が潮の満ち引きのように、強まったり弱まったりしてわたしの思考の中にまざり合っていた。

と、思い当たることがあつた。思い当たることはそれだけしかなかった。それは芙美子の家のあの豆ゴリラ男であつた。ゴリラ男がわたしの胸元にとびこんできた。あの短い時間、ゴリラ男は、もし入れようと思えば、獣皮一枚ぐらい、わたしのポケットに押しこむのは造作もないことであつた。

まさか、とは思ふが、どんなに考えても考へつけることは、あの機会をおいてほかにしなかつた。とすれば——わたしはなおも考えた。そして、いよいよその見当にまちがいはないことに確信をもった。

テーブルの上の獣皮を、もう一度仔細に点検し直した。まぎれもなくそこにはキューバの地図が描いてあつた。そして——それ以外

に、何か文字らしいものが書きこんであるではないか。わたしは、今までその文字に気づかなかつた自分のうかつさをはじながら、地図を目もとに近づけ、何とかそれを読みとろうとした。ギリシャの古代文字でもなく、エジプトの象形文字でもないらしかったが、文字であることにまちがいはなさそうだ。

わたしには、とうてい歯が立ちそうになかつた。そこでまた考えた。

前後のいきさつから、再び考え直してみた。ゴリラ男、ゴリラ男、小林春吾も半分ゴリラ男——そうして、フツと、突拍子もない着想に思い至ったとき、われながら、ガク然とした。そんなことがあろうかと思つた。

でも、それは、絶対にそうではないと、否定しきれることでもなかつた。

わたしはその着想に憑かれると、もうじつとしていられなくなつた。一刻も速くそのことを確かめたくなつた。文字を読み解いてもらおう、そしてそこから解答を与えてもらおう、そう思いながら、テーブルの上の獣皮と、伝票を持って立ち上がった。ステレオはボロジンから、ラヴェルに変わっていた。

豆ゴリラ男が、上島氏その人である、という確信を証明づけるために、わたしは中村教授宅を訪れたのであつた。

(つづく)



読

者

コ

1

ナ

1



★このらの投稿はハガキで結構ですからご自由にお書きください。

★今月掲載しました方には、11月号および、S写真をお送りします。誌上匿名は自由ですが、住所、氏名はお書きください。（読者コーナー係）

★「裏窓」八月号、いよいよ優れた出来ばえと存じます。七、八月号を通じて、落合氏の絵物語、特に「セントレディ学院」沖氏、羽仁氏の絵、いずれも佳品で、今後ともこの線の強化が望ましく存じます。また、輸入の写真作品（フェニクス商会）「既刊号紹介」の絵も良く、日本物の写真作品も更に芸術味を加えたことがよろこばれます。ところが、鬼頭氏の絵は期待に反して、極めて貧弱な規模の小さい作品で、全くどうにもなりません（失礼ながら、これは企画の責任？）。思い切り雄大なボリューム、柔くふくやかな線紐によるくびれ、美しい類の作品復活を望むや切！なお、本

年も絵画作品特集号を期待します。（東京・渋谷生）
★二年ほど前に「裏窓」に魅せられ、以来ずっと愛読している者ですが、今月号の「読者コーナー」を読んでいろいろうちに、ふと本誌に対する感想やら意見やらを述べてみたくなり、筆をとった次第です。最近の本誌と、二年前のものをくらべてみると小説など洗練され、なめらかになり、あか抜けした反面、種が尽きたというか、なにか新鮮さが欠けているように思えてなりません。小説がマンネリ化して都会的になり、古い既刊号に見られたような、生き生きしたところや、骨っぽいところがなくなつたようです（私のひとりよ

がりかも知れませんが）。芸術的なSMを追求するのもよくわかりますが、広く新しい読者を得るためにも、少しは初心なところもあってほしいと思うのです。次に、その小説の内容に、大いに効果を与えているさし絵についてですが、二年ばかりたつうちに、数多くの新しい画家が現われ、また、惜しまれる画家が消えていったりました。私はさし絵に、足りない私の想像力の補充を求め、グラビアよりもむしろさし絵を見ることを楽しみにしています。そんなわけで、私はさし絵について一つの理想を持ち、その理想に近い中川彩子、落合竜二氏の絵をたいへん楽しみにしています。私

は汚れを知らぬ純心な乙女が、同性にも見せたことのない恥辱に身をちぢめて震え、胸をしめつけ、肌に食いこむ情け容赦もない縄目に、思わず堅く閉じた唇の間から、声をもらすあの姿がたまらなく好きです。その点で、落合竜二氏のあのカットはそれこそプロマイドにして身につけていたいほどすばらしい。私はその姿をグラビアからは、とても受けることができないのです。さし絵のみにこそ、私の夢は実現するのです。私は今までのさし絵の諸先生のさし絵ばかり集めた「既刊号さし絵名作選」単行本を、三ヵ月に一ぺんくらい、ぜひ発行してほしいと思います。きつと、私のほかに、それを期待している人がいるでしょう。では、貴誌の発展を祈ります。（長野・A生）
★初めてお便りを出します。早いもので「裏窓」を読み始めてからもう三年になります。その間、本誌の値上げ等いろいろなことがありましたが、それ以上に内容が充実しているの、読んでいても歯ごたえがあると思います。ただ、三年間を通じて本誌を見ますと、読みものがだんだん少なくなっていき、グラ

ピアが多くなつていく傾向がある。出来れば以前のように、グラビアを付属的に、読みものを主体としたやりかたで、編集していただけたらと思います。それから、文句ばかりで申しわけないので、本文とさし絵が一致してないのが多いので、その点に注意してほしいです。

(大阪 H・N)

★以前から愛読しております。貴社からの発送が良心的であることを知り、筆をとりました。愛くるしく、哀愁、気品を秘めた小笠原純子嬢のファンです。さて、純文学といわれるものでも最近、縛りの描写が現われるようになりましたが、純文学で取り上げた上は、縛りの本質について、もう少し追求していただきたいと思いました。なぜ、縛りが恥辱的な目で見られてきたか、とか。そうでないと、ただ世相便乗の波にうまく浮かんでいるとしか受け取られないでしょう。今や、縛りは観賞の段階にきていると思います。平和な世代においては、極悪な人間性というものは存在し難くなり戦国時代等国の争乱期に、一つの慣習ともなつて行われたことき無理難問による女体拷問の類

は、大衆から遊離いたします。しかし、本来女性は、悪魔的性質を内に秘めているものほど美しく見え、男性も、その点を女性に要求しております。説が飛躍しますが、そこに形として現わされる縛りが、現在に存する意義となります。文明、社会構成の高度化に伴い、個人は自己疎外の念を強く持つようになり

(東京 C・S生)

分を、見事に課す酷使また更に強い自己緊縛の姿へ、と変化させるようになる。現代における縛りの意義を、以上ごく簡単に述べてみました。皆さんからの反響をお待ちしております。尚高貴な身分の縛りは衣裳費もたいへんでしょうから映画のスチル写真等を多くして下さい。

★八月号における「パノラマ島秘譚」同じことなのにQがいな

(福島・6T生)

旧号に載せたものでも、再び掲載したらどうでしょうか。私もときどき旧号をひっぱり出して見ます、その時に、こんなのがあったかしらと、つくづく眺めることがよくあります。最後に「読者コーナー」掲載分として写真をいただきました。写真どころかうございました。写真どころか私のつたない文章が、本の片隅に載ったというだけで、どれだけ嬉しいかわかりません。「裏窓」がますます発展してゆきま

盗伝」も「海底王国の女囚」もすばらしい読物なのに、Qのいないことが興味を半分にしていきます。私にとって北園先生のQはかけがえのない人になっております。期待の鬼頭先生の絵、Mになつていたのでがっかりです。でも、読者は私一人でないのだから仕方ありません。中央の「陽気な西部娘」から「庭園のヴィナス」までの写真集は好みに合いません。「夏のたそがれ」着衣をつけているのが残念ですが、とても好きなフォトです。写真集も次から次へと変つて目新しくすることは、よいでないと思います。良い写真は

★七月号から愛読者の一人となりました。今までこういう本があるとは知らず、残念に思っています。さて、七月号で気に入ったのは「指名された女」一つだけで、その他は「読者コーナー」などみると、みんなが良い、と言っているものも、最初だからでしょうか、あまり感心しません、やはり読物はある程度の現実感がほしいと思います。「指名された女」は戦時ということで、多少狂った時代―でおかしければ人間の欲望の停止される時代、とても言いましようか、とにかくそういう中で出来事なので、と言うより文

学的にも抜き出ていると思えます。男のにくらしいまでに落ちついた冷たい態度、それに反して女の気持の移り変り、最後のあきらめ。その他、書いてあげれば「既刊号ご紹介」くらいなものなのは残念でした。

(千葉県 S・M生)

★巻頭、秋吉樹氏の「女王さまの一日」は、正に「幻想」の一言に尽きる秀作でした。各先生に毎月こういうものを発表してもらえらるなら、読者としてこの上もなく嬉しいのですが。欲を言くと「豪勢な車」の代わりに「女王様の倦怠」を「対女性」「対男性」の二場面にしてもらっていたなら、一段と夢が湧くと思えるのですが……。九月号は少し淋しい。七、八月と次第に盛り上がってきていたのが、フーッとエア・ポケットに嵌りこんだ感じ。せっかくの力作が揃っているのにこれはいったいどういうことか、と自分の感受性を疑ったものです。北園氏の作品がなかったのもその一因らしい。潮氏の「黒竜党の最後」は前作を読んだ時から心待ちにしていたのだが、期待通りでした。真弓の成長した姿が意外だったので、より以上に興味が湧

き、今後の続篇が楽しみです。殺された、という暗示があるがもし真弓の母の千春が、玄鉄の許でますます美しく女盛りで生きていくとしたなら……その時の真弓との対決は、考えただけでもハラハラしてくる。とにかく読者を惹きつける要素があり大傑作になりそうな気がする。南郷氏のもものは八、九月とも、誌上を飾るにふさわしい大作なのに、なぜか言い知れぬムードが欠けているようです。また、淡路氏の汚辱世界における異常感覚は際立って優れており、読後に奇異を覚えますが、これも前作にくらべると、なんとなく「救い」がない。こういう作品では特にこの点が大事なように思えるのですが……。「クライマックス場面集」はただ品数を揃えている、というくらいの意味しかなく残念です。これらが九月号の淋しさとなっているのでしょうか。そう中で、阿麻氏の「ゴルドンの記憶」が、イブシ銀のような鈍い光沢を放っているのが目立ちました。猛暑のおりからご苦労さまでした。

(京都市・光谷東穂)

編集後記



▼むずかしい世の中になりました。不安な時代になった、ともいえるでしょう。そんなに遠くないところから、硝煙のにおいがただよってくるような予感がします。

▼チャタレー問題を弁論中の正木ひろし氏は、こんなことを言っています。

「国民を喰いものにする政治哲学のあらわれではないか。取締るために、国民の上に馬乗りになりたいための『説教強盗』だということです。はきだめがいいか、わるいか、論ずるだけの興味もヒマもありませんね」

(平凡パンチ誌より)

▼裏窓は本号で、第九巻第十号になります。あと二号を発行すると、この十年間、一冊の欠号もなく、愛読者のお手もとにおとどけたことになります。十年間、けっしてみじかい年月ではありません。

▼十年間、百二十冊(増刊号の二冊をふくめて)の本誌を全冊書棚におさめて愛蔵されている読者が、百人や二百人でないことを、私どもは知っております。単なるエロ雑誌に、十年間の熱烈な固定読者を一人でも保持することができえましょうか。

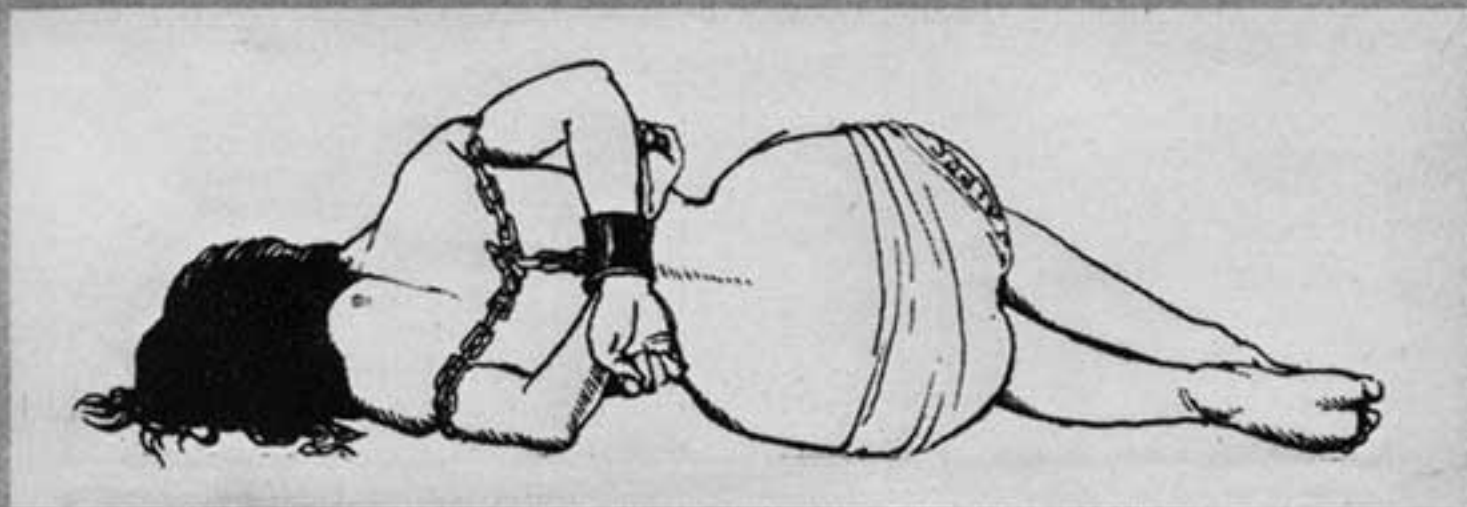
▼常に人間性の真実の一面に立脚した内容、低俗なエロに媚びず、あくまでもSMの真理を追究していく本誌は、人間が人間性を喪失しない限りかならず存在をつづけることでしょう。

(飯田)

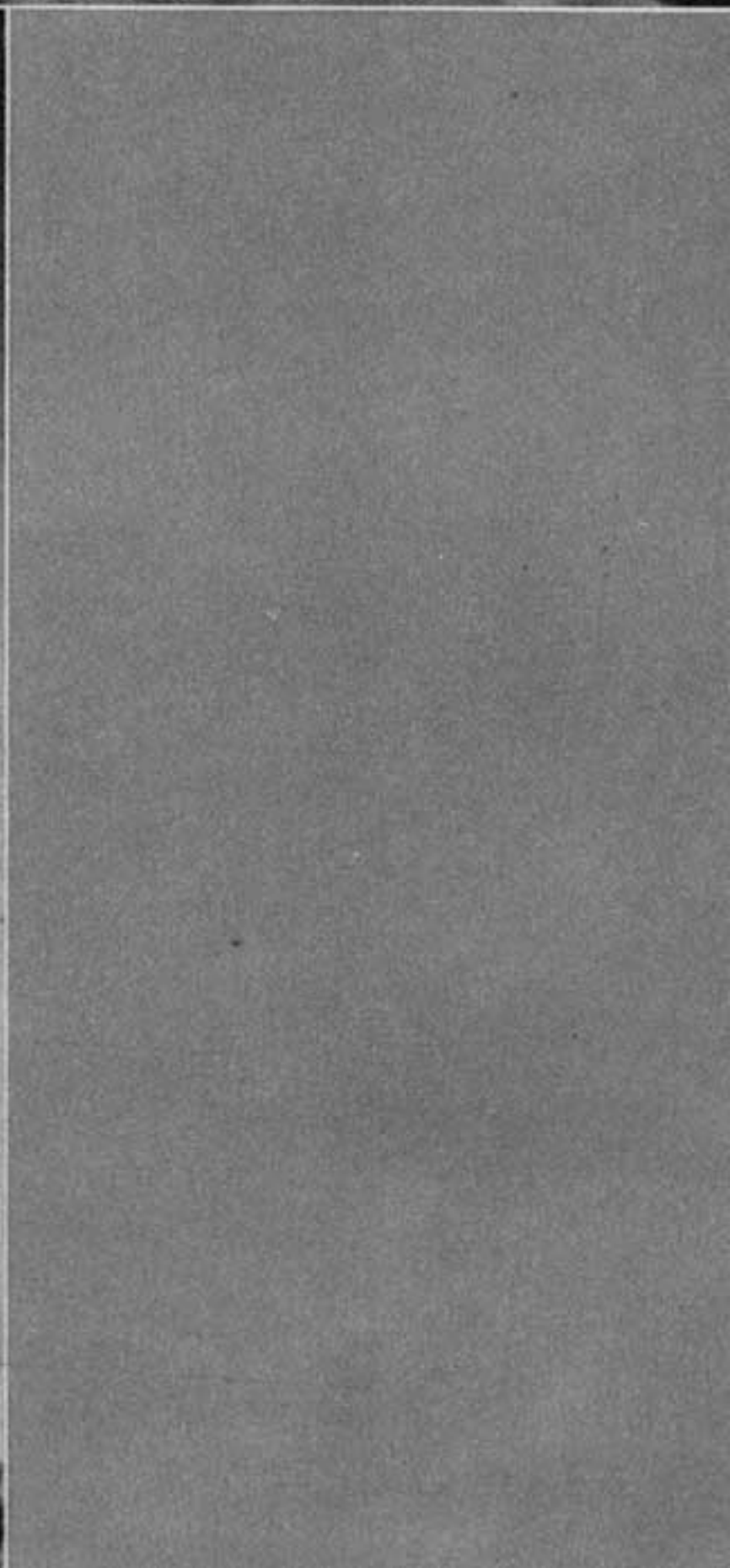


カメラ・吉 田 久
モデル・新 宮 美 沙

縄のたわむれ











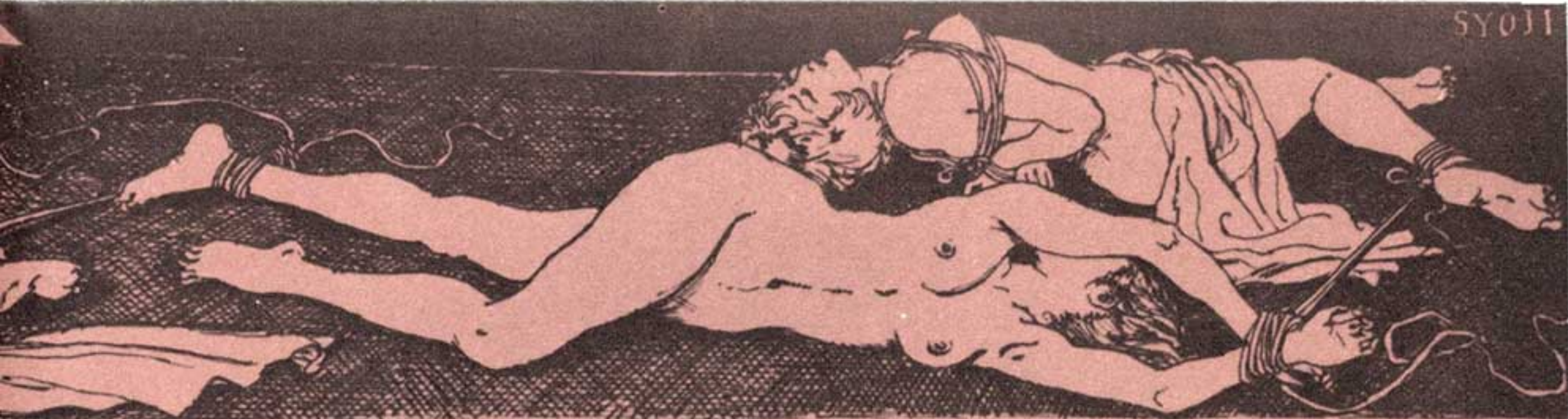




鞭を待つポーズ

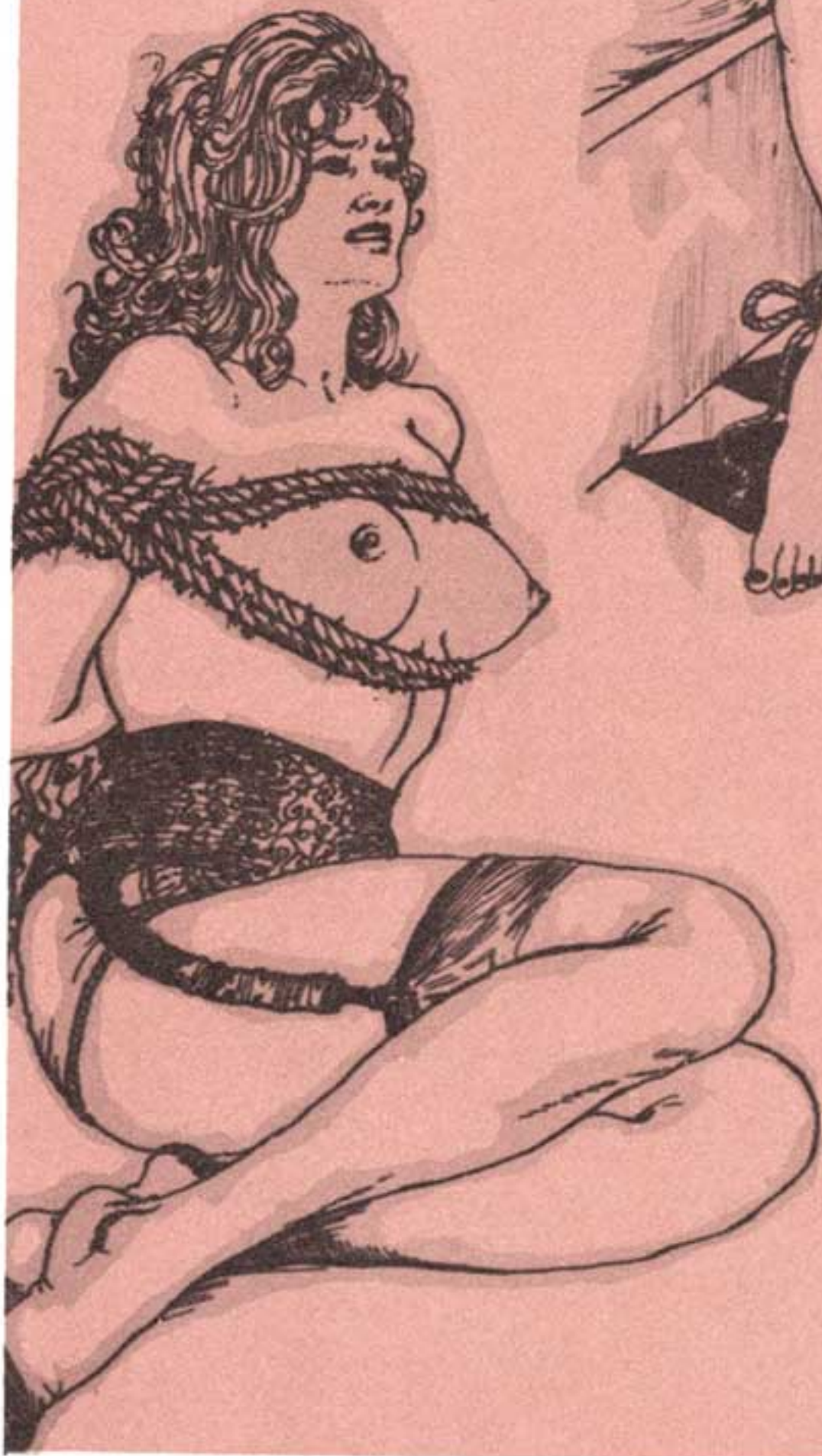
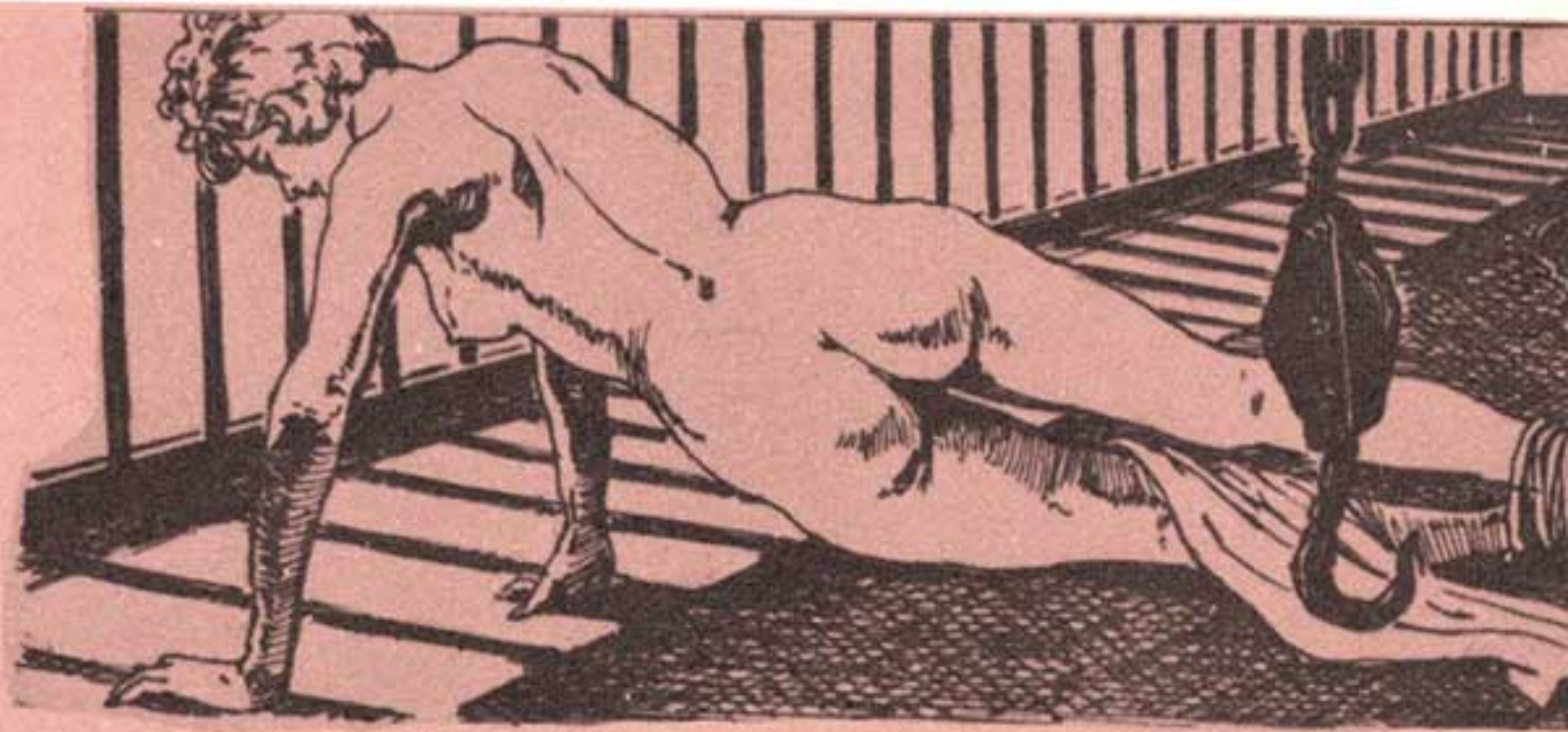
絵・落合竜二





沖涉二・妖美画
傑作展





耽美芸術グラフ第1集

あまとりあ社発行

内 容

★写真集★

滝の女
石の部屋
密室
絶望の風景
金井行雄作品集
さるぐつわ
縄目凝固

★絵画集★

落合竜二凄艶画集
沖涉二特選傑作展
中川彩子・女奴隷の檻
中川彩子・吊り蔵
鬼頭暁時代妖美画集
羽仁京志傑作選

ご 注 意

25歳未満の方には
お売り致しません
お申しこみになら
ないでください

定価・千円

送料とも

(書店では発売いたしません)

ついに出了た！ S M 芸術の真髄
グラビア48ページに選りぬきのS写真責め絵が満載！
新人モデルも登場してご期待にそむかぬ傑作グラフです

編集

藤見 郁

お申しこみは……東京都中野区松が丘2～21久保方 藤見 郁

裏窓・既刊号総目次

★既刊号をお買い洩らしになった愛読者の方々の
為にこの機会にバックナンバーをお揃えになる
ことをおすすめします。

★三冊以上御注文の際は送料は不要です。

★二冊以下の御注文は一冊につき送料12円です。

★御送金は振替か現金書留が最も確実です。

東京都中野区松が丘2丁目21番振替東京55408あまとりあ社宛

39年(九月号)三〇〇円

◎オフセットページ

画集・女王様的一天……………秋吉 恋

特集・アメリカ雑誌に現われた悲運の女達

妖美術傑作展……………沖 渉二

★グラビア・洞窟……………吉田 久

特集・激しい女……………アメリカの公刊誌より

アメリカのメンズマガジンご紹介……………編集部

柵のある道(フォト)……………吉田 久

花氷(はなごおり)……………八巻 令久

月が見ていた……………三鬼 俊

その日死すべし……………かびや・かずひこ

続・海底王国の女囚(山田彬弘絵)……………南郷京助

腹切り残酷史譚・4(鬼頭暁絵)……………夏川浩一郎

絵物語・直次郎出奔……………文・井村 錠

絵物語……………絵・落合 竜二

体当たりマゾヒズム論……………水尾 究

黒竜党の最後(東桂史・絵)……………潮 一樹

山のホテル……………村山 省一

汚辱極楽神の国……………淡路 周五

ゴルドンの記憶……………18(江渕晃夫絵)阿麻哲郎

○読者投稿・クライマックス場面集

海のみえる部屋(豊田みのる)……………加木れい子

勤王党の女間者(古正英生)……………宗方 八郎

奴隷市の娘(鬼頭暁)……………遠井待夫……………その他

39年(八月号)三〇〇円

◎絵物語

ある幸福な……………文・馬場 弘二

女術部屋……………絵・江渕 晃夫

華麗なる行進……………絵・羽仁 京志

悲鳴と音楽……………絵・鬼頭 暁

フォト・夏のたそがれ……………沖 渉二

未封切り映画のなから……………猪島 昌也

男が女になるまで……………編集部・編

★グラビア・夜の踊り……………編集部・編

美貌の檻……………吉田 久

美貌の檻……………吉田 久

コレセットの微笑……………北米・フェニクス

貴婦人の散歩……………編集部・編

月ノ輪群盗伝(小日向一夢・絵)……………潮 一樹

パノラマ島秘譚……………4……………北園透一朗

小品傑作集……………絵・沖 渉二

高嶺の花……………大垣 昌

絵物語……………文・祖父江 新

絵物語……………絵・落合 竜二

海底王国の女囚(山田彬弘・絵)……………南郷 京助

体当たりマゾヒズム論……………26……………水尾 究

奢れる女神への祈り……………6……………森下 高茂

クライマックス場面集……………駒井たまき・他

ゴルドンの記憶……………17(江渕晃夫絵)阿麻哲郎

39年(七月号)三〇〇円

◎絵物語

不幸な娘の……………(文・下須 畜男

ひとりごと……………(絵・秋吉 恋

フォト・黒い妖精……………猪島 昌也

海のあらくれ……………絵・羽仁 京志

地下室二景……………絵・沖 渉二

あるレスビアニズム……………絵・落合 竜二

★グラビア・鎧と女……………吉田 久

フォト作品集……………藤沢 修

SとMのうたげ……………フェニクス商会

フォト・黒い靴下……………北 好夫

アメリカの公刊誌ご紹介……………編集部・編

傲慢と屈従……………フェニクス商会

指名された女(山田彬弘・絵)……………九十九郎

パノラマ島秘譚……………2……………北園透一朗

絵物語……………文・祖父江 新

絵物語……………絵・落合 竜二

セント・レディ学院……………(絵・沖 渉二

小品傑作展……………絵・松尾 悦三

南北戦争画集……………絵・鬼頭 暁

習作小品集……………絵・松尾 悦三

老若抄(東桂史・絵)……………かびや・かずひこ

奢れる女神への祈り……………5……………森本 愛造

ファンタジア・マゾヒスティカ……………八巻 令

クライマックス場面集……………久慈たかね・他

ゴルドンの記憶……………16(江渕晃夫絵)阿麻哲郎

39年(六月号)三〇〇円

◎オフセットページ

絵物語……………文・祖父江 新

密室の砂丘(フォト)……………絵・落合 竜二

ある夜のバーで……………吉田 久

ドイツ民族博物館資料より……………沖 渉二

フォト作品集……………藤沢 修

洋画の中のアブ・シーン集……………スチルより

★グラビア・犬の絵(フォト)……………吉田 久

スクリーン・クライマックス集……………編集部・編

マゾヒスチック・スチル集……………編集部・編

傑作フォト集……………猪島 昌也

アメリカ新着フォト集……………北米・フェニクス

パノラマ島秘譚……………2……………北園透一朗

戦後の妖美な眺め(山田彬弘・絵)……………間野 嶺

○小品傑作展……………絵・沖 渉二

曲切り念者(東桂史・絵)……………かびや・かずひこ

腹切り残酷史譚……………(鬼頭暁・絵)……………夏川浩一郎

濡れ花(落合竜二・絵)……………松山 省一

ゴルドンの記憶……………15……………阿麻 哲郎

○読者投稿・クライマックス場面集

赤い月の夜(秋吉恋・絵)……………赤木 恵介

女すりお蝶(古正英生・絵)……………五所 章

暗黒街の掟(豊田みのる・絵)……………東島おる

腐れ土蔵(小日向一夢・絵)……………義川 源

39年(五月号) 三〇〇円

○オフセット
和装美礼讃……………(文・矢部 定三
絵・岩田 吉夫)

○沈思のひと(フォト)……………吉田 久

○時代妖艶面選……………鬼頭 暁

○姫君受難・三景……………古正 英生

○アメリカの公刊誌・ご紹介

○ジャングルの襲撃○悪魔教の女

○馬上の麗姿○密林の女奴隷

★グラビア・山参道……………吉田 久

★乳房を飾る男(絵物語)……………文・パール・島

★時代妖艶面選……………中島 喜美

★バノラ島秘譚・1……………北園透一朗

裏窓文芸評論……………安東 泉

○読者投稿・特集

狼火の部屋(沖涉二・絵)……………多賀 満

お雪地獄(古正英生・絵)……………丸亀 忠史

本郷大五郎の不満(山田彬弘・絵)……………三津井弓雄

海賊船の女たち(豊田みのる・絵)……………北村仙也

白い鬼(秋吉密・絵)……………三枝喜久治

竜四郎妖姫(東桂史・絵)……………潮 一樹

蛙(なめくじ)……………村山 省一

黄金草の宿(落合竜二・絵)……………豊中 夢夫

ゴルドンの記憶(江淵晃夫・絵)……………阿麻 哲郎

○小品傑作展……………沖涉二・落合竜二

39年(四月号) 二五〇円

○時代絵物語
さみだれの死……………(文・庄内 裕司
絵・小日向一夢)

○妖美面個展……………山田 彬弘

○時代妖艶面選……………鬼頭 暁

○和装の女性美・四態……………都築 峰子

○フォト(玩具・訓練・協演)……………金井 行雄

★グラビア・天守閣……………吉田 久

★スクリーン・クライマックスシーン集①②

★フォト集(モデル・榛名リエ)……………藤沢 修

続・スクリーンに躍る……………藤見 郁

ロマンスと幻想……………藤見 郁

アラビアの城・10(鬼頭暁・絵)……………北園透一朗

翻られた稚児(東桂史・絵)……………かびや・かずひこ

四作家競作同一題名小説

美女と毒薬……………志村清太郎

井村 錠

松山 省一

葬送行進曲(都築峰子・絵)……………八巻 令

背骨の曲った娘たち・2……………岐阜須三夫

地下室の檻(山田彬弘・絵)……………杉野平太郎

白蛙教のいけにえ(古正英生・絵)……………野呂 久

三人のモデル(秋吉密・絵)……………赤木 恵介

お島とお紋(豊田みのる・絵)……………九谷竜太郎

ある異色映画と異色スライド……………藤見 郁

39年(三月号) 二五〇円

幻想絵物語・奇怪な動物園……………(文・志村 基治
絵・秋吉 密)

絵物語……………文・祖父江 新

ある晴れた日の公園で……………絵・落合 竜二

○妖艶女態四景(画集)……………鬼頭 暁

○光と影の哀歌(フォト)……………吉田 久

○和装絢爛(フォト)……………北 好夫

グラビア★榛名リエ・パレード……………藤沢 修

★奢れる女神のポーズ六態……………編集部・編

★アメリカの公刊誌ご紹介……………編集部・編

★吊り鉤(フォト)……………吉田 久

スクリーンに躍るロマンスと幻想……………藤見 郁

海の復讐鬼(東桂史・絵)……………潮 一樹

背骨のまがった娘たち(中川彩子・絵)……………岐阜須三夫

多ア坊のこと(山田彬弘・絵)……………北野 竜一

体当たりM論(江淵晃夫・絵)……………水尾 究

アラビアの城⑨(鬼頭暁・絵)……………北園透一朗

マゾヒズム画廊……………フェニクス商会

手だれの死者(東桂史・絵)……………かびや・かずひこ

きつねづら(小日向一夢・絵)……………井村 錠

奢れる女神への祈り②……………森本 愛造

サド裁判・茶番劇の俳優たち……………安東 泉

ゴルドンの記憶⑫(江淵晃夫・絵)……………阿麻 哲郎

39年(二月号) 二五〇円

○オフセットページ
フォト・ストーリー……………(文・藤見 郁
写真・フェニクス)

竹の家……………落合 竜二

画集・女の館……………落合 竜二

ふたりのお遊戯……………西ドイツ・フェニクス

きもの繚乱……………カメラ・北 好夫

★グラビアページ★

五百羅漢……………カメラ・吉田 久

戦慄のまなざし……………北米・フェニクス

脚立と貴婦人……………北米・フェニクス

奇怪な散歩……………西ドイツ・フェニクス

縄と鎖のコメディ……………北米・フェニクス

四作家競作同一題小説

花と悪銭……………松山 省一

井村 錠

京 剣児

ご隠居のたのしみ(落合竜二・絵)……………八巻 令

犬の楽園(秋吉密・絵)……………下須 畜男

瀬沼めぐみの受難(山田彬弘・絵)……………春川 光彦

アラビアの城・8……………北園透一朗

奢れる神への祈り・1……………森本 愛造

わが愛のうめきとさけび……………新村満美子

私本・男色大鑑・2……………かびや・かずひこ

ゴルドンの記憶(江淵晃夫・絵)……………阿麻 哲郎

39年(一月号) 二五〇円

フォト・ストーリー……………(文・藤見 郁
フェニクス商会)

魔女狩りパターン……………文・祖父江 新

絵物語・女戦士のレポート……………文・落合 竜二

ミノーの貞操帯……………文・井村 錠

○装身具とふたりの美女(フォト)……………絵・中川 彩子

○アメリカSM絵物語……………北米・フェニクス

★グラビア・かわいい妖精①②……………吉田 久

★グラビア・海外SMフォトご紹介……………北米・フェニクス

鬼神丸秘帖(小日向一夢・絵)……………潮 一樹

アラビアの城⑦(鬼頭暁・絵)……………北園透一朗

男色大鑑・若道のほこりたかく(東桂史・絵)……………かびや・かずひこ

おつかれさま(山田彬弘・絵)……………春川 光彦

■女宇宙士訓練室……………絵・鬼頭 暁

空想と狂想のあいだ……………森下 高茂

地図にない村(都築峰子・絵)……………九十九郎

体当たりマゾヒズム論・19……………水尾 究

「馬狂いの女たち」における……………森本 愛造

マゾヒズム描写……………阿麻 哲郎

ゴルドンの記憶(江淵晃夫・絵)……………阿麻 哲郎

38年(十二月号) 二五〇円

フォト・ストーリー……文・吉永百合夫

深夜のひとりごと……カメラ・吉田 久

絵物語・破魔姫受難……文・島本 春雄
絵・山田 彬弘

○フォト・白い炎……吉田 久

○アメリカSM絵物語……フェニクス商会
グラビア・まるい笹口具……フェニクス商会
・カーテンのある風景……吉田 久
・海外SMフォト……フェニクス商会

★特集・マゾヒズム画廊……フェニクス商会
崖の上の墓標(豊田みのる・絵) 佐藤達四郎
ピンアップだけはやめて……ADグラナムール
FとMの行き戻り(落合竜二・絵) 光谷東穂
奇妙な実験(都築峰子・絵)……八巻 令
アラビアの城・6(鬼頭暁・絵) 北園透一郎
私のSM論……重森 東

体当たりマゾヒズム論・15……水尾 究
恋人たちのオリ(山田彬弘・絵) 九十九郎
ほも紳士録(12)……かびや・かずひこ
体当たりマゾヒズム論……エダ・キリコ
灰色の夜(カット・エダキリコ) 水尾 究
現代マゾヒズム文化時評……森下 高茂
ゴルドンの記憶(江淵晃夫・絵) 阿麻 哲郎

38年(十一月号) 二五〇円

○犬吠岬の太陽……文・エダ・キリコ
カメラ・吉田 久

○暗い画廊……吉田 久

○フォト作品集……金井 行雄

○アメリカSM絵物語……フェニクス商会
ヴィナスの誕生……森下 高茂
ねむれぬ夜の追憶(鬼頭暁・絵) 北海道雄
悪党半九郎(小日向一夢・絵)……潮 一樹

★グラビア・時代妖美術集……中島 喜美
★グラビア・海外の公刊誌より

★グラビア・犬吠岬……吉田 久
ビルマの首枷族……春川 光彦
ある女装者の夜々……かびや・かずひこ

■画集・黒い皮の響宴……鬼頭 暁
大都会の夜の底で(江淵晃夫・絵) 九十九郎
青雲崩れるとき(古正英生・絵) 井村 錠
現代マゾヒズム文化時評・(19)……森下 高茂
体当たりマゾヒズム論・(14)……水尾 究

ゴルドンの記憶(江淵晃夫・絵) 阿麻 哲郎
○絵物語・鉾山町の女たち
文・宗方 八郎
絵・都築 峰子

○絵物語・武士道無残……文・島本 春雄
絵・東 桂史

38年(十月号) 二五〇円

○絵物語 龍宮城の反乱……文・祖父江 新
絵・落合 竜二

○時代 妖説朽木女忍伝……文・島本 春雄
絵・鬼頭 暁

○絵物語 異端の城……文・三鬼 俊
絵・中川 彩子

○戦国 本能寺炎上……文・井村 錠
絵・小日向一夢

★グラビア・ミッドナイト……吉田 久
★グラビア・海外の公刊誌より

○雁形城落城図……フェニクス商会
○時代妖美術集……小日向一夢
伊賀の闇の葉(古正英生・絵)……中島 喜美
裏切り(秋吉窓・絵)……佐藤達四郎
ミッドナイト撮影記……エダ・キリコ

蛇樽女切支丹(東桂史・絵)……義川 源
アラビアの城・5 毒ぐもに巻かれる弓子
(鬼頭暁・絵)……北園透一郎

お転婆学園奇襲作戦……郷 保夫
ゴルドンの記憶⑥(江淵晃夫・絵) 阿麻 哲郎
現代マゾヒズム文化時評(18)……森下 高茂
体当たりマゾヒズム論(13)……水尾 究

寄稿作品ご紹介と短評……編集部・編
裏窓叢書名場面集……編集部・編

38年(九月号) 二五〇円

○裏窓草紙「絵本いろはうた」
うた・宮古志満夫
絵・小日向一夢

○絵物語 海賊虹姫伝奇……文・島本 春雄
絵・春日 章

○絵物語 変幻白だぬき……文・井村 錠
古正 英生

○アメリカ絵物語 男爵夫人の拷問博物館
★グラビア・洋画のSMシーン・スチル集
★グラビア・海辺のうた……吉田 久
夜のなげき

★グラビア・海外SM絵物語・ご紹介
小笹姫受難(小日向一夢・絵)……潮 一樹
特製マゾキン(山田彬弘・絵)……嶋岡 晨
魔女アクリリカ(中川彩子・絵) 春川光彦

■鬼頭暁画集「美しきものの檻」
絵物語 必殺のデリンジャー……落合竜二
体当たりマゾヒズム論・14……水尾 究
現代マゾヒズム文化時評・18……森下高茂
穴(あな)……(都築峰子・絵)……石山省一
お化粧される弓子(鬼頭暁・絵) 北園透一郎

★裏窓叢書名場面集(中島喜美ほか絵画集
ゴルドンの記憶⑥(江淵晃夫・絵) 阿麻哲郎

38年(八月号) 二五〇円

○絵物語 東京——神戸十六時間
文・祖父江 新

○絵物語 ぬめ肌女郎……文・矢桐 重八
絵・春日 章

○絵物語 密林の美女……文・黒部 恭治
絵・中川 彩子

○西部 紅のライフル……文・祖父江 新
絵・落合 竜二

★グラビア・砂の上の船……吉田 久
漁師宿にて

★グラビア・海外サド写真特選集
残念なり猿飛佐助(小日向一夢・絵) 井村 錠
妖異水底に沈む(秋吉窓・絵)……信夫 澄夫
お仕置きにぬれる弓子(鬼頭暁・絵)……北園透一郎

お転婆学園秘密作戦(江淵晃夫・絵) 郷 保夫
女の争い(都築峰子・絵)……五所 章
フィギュア・トレーニング……春川 光彦
切支丹散華(東桂史・絵)……北村 仙也

現代マゾヒズム文化時評(17)……森下 高茂
体当たりマゾヒズム論(13)……水尾 究
ゴルドンの記憶⑤(江淵晃夫・絵) 阿麻 哲郎

38年(七月号)二五〇円

○絵物語 無明怨念記……文・矢桐 重八
 絵・春日 章

鞭のニコラス……文・春川 光彦
 絵・中川 彩子

続・アラビアの城……文・北園透一郎
 泣きじゃくる弓子……絵・鬼頭 暁

グラビア・静かな山林の午後……吉田 久
 ・闇に光る……

○絵画集・サデイスチンの微笑……江淵 晃夫
 ・切支丹女牢……喜多 玲子

・南北戦争以前……鬼頭 暁
 ・海外SM絵物語……フェニクス商会

切腹殉教記(小日向一夢・絵)……黒部 恭治
 しのび逢い刺青情話(都築峰子・絵)……

北野 竜一

くたばれッ淑女学院……郷 保夫
 西鶴におけるマゾヒズム……安東 泉

血染め白百合(古正英生・絵)……佐藤達四郎
 体当たりマゾヒズム論(12)……水尾 究

墓場からの命令(山田彬弘・絵)……祖父江 新
 わが愛の渴望(落合竜二・絵)……白木ゆりこ

虐げられた女たち(東桂史・絵)……野方 伸
 ゴルドンの記憶④(江淵晃夫・絵)……阿麻哲郎

38年(六月号)二〇〇円

○鬼頭暁時代妖美画集……鬼頭 暁
 ○中島喜美時代妖美画集……中島 喜美

グラビア・幽囚の部屋……吉田 久
 続・美しき海賊船……フェニクス商会

○絵画集・西部の女……落合竜二
 七つの大罪(中川彩子・絵)……九十九十郎

続・異端の終末……芦田 奈貴
 おどろ記珍化論……左 次郎

「ロリータ」における……
 ニンフェッティズム……安東 泉

「夜と霧」……黒田 史朗
 放浪と自己恋着の画家……かびや・かずひこ

月光の道で……河村 童八
 鬼婦長……丸 亀恵子

夜の妖蝶……立原 道夫
 ボスには乳房がある……五所 章

体当たりマゾヒズム論(11)……水尾 究
 きんぎれ不動(小日向一夢・絵)……庄内 裕治

復讐黒髪秘聞(中島喜美・絵)……黒部 恭治
 忍法「乳影」(鬼頭暁・絵)……島本 春雄

妄執侍(古正英生・絵)……潮 一樹
 霧姫変化(鬼頭暁・絵)……佐藤達四郎

ゴルドンの記憶③(江淵晃夫・絵)……阿麻哲郎

38年(五月号)二〇〇円

絵物語・白蠟闇若衆……文・島本 春雄
 絵・東 桂史

・流刑星の美女たち……文・豊田 一狼
 絵・山田 彬弘

江淵晃夫耽美画集……江淵 晃夫
 グラビア・夢幻のへや……藤沢 修

・美しき海賊船……フェニクス
 ・くさりと美少女……商会・提供

海外SM画傑作選……井村 錠
 茅女物語……潮 一樹

会津の女兵……飯田 豊吉
 その夜……阿麻 哲郎

ゴルドンの記憶(2)……村山 省
 椎名夫人の足……

ほも紳士録……かびや・かずひこ
 現代マゾヒズム文化時評(14)……森下 高茂

体当たりM論(10)……水尾 究
 私の愛した女優……北野 竜一

アラビアの城……北園透一郎
 孤島の復讐鬼……祖父江 新

異端の終末……葦田 奈貴
 背後の脅迫者……豊中 夢夫

ばんざいッお転婆学園……郷 保夫

38年(四月号)二〇〇円

絵物語・冥府海賊伝奇……文・島本 春雄
 絵・秋吉 樹

・マドリリーヌと黄金の靴……文・松平 莊司
 絵・中川 彩子

・白狐のお新いろうさんげ……絵・東 桂史
 小日向一夢妖美画展……小日向一夢

グラビア・黒猫といふ……毛 卓三
 ・黒いタイツ……猪島 昌也

・鏡と女……藤沢 修
 ・パウリーネ夫人のピクニック……フェニクス商会・提供

海外SM画傑作選……
 ゴルドンの記録①……阿麻 哲郎

処刑の囚……三鬼 俊
 無分別な夜……海老沢 七郎

大阪非情地帯……豊中 夢夫
 内外ミュージックホール・スナップ集……藤沢 修

「虹川画伯のアトリエ」演出ウラ話……北野 竜一
 文芸評論「醜いコメディ」について……安東 泉

ほも紳士録④……かびや・かずひこ
 A子の話……南 ゆり

体当たりマゾヒズム論⑨……水尾 究
 舞踏会の贅……春川 光彦

のぞきの大スケ捕物帖……飯田 豊吉

38年(三月号)二〇〇円

絵物語・スリーベツト号……文・豊田 一狼
 不時着す……絵・鬼頭 暁

・銭姫党伝奇……文・島本 春雄
 絵・古正 英生

・白峰の女忍者……文・矢桐 重八
 絵・小日向一夢

グラビア・けんらんたる商品……藤沢 修
 ・黒猫を捕えた①②……毛 卓三

海外SMフォト・画傑作選……泰西出版資料
 醜いコメディ……淡路 周五

和装恋慕……祖父江 新
 ほも紳士録(3)……宮古 志満夫

体当たりマゾヒズム論(8)……かびや・かずひこ
 猫……水尾 究

犬とギプスと搾衣……村山 省
 不死身の女……春川 光彦

「蠍たち」にみる……海老沢 七郎
 あるサデイスチンのタイプ……安東 泉

鬼頭暁時代妖美画展……鬼頭 暁
 うら八捕物帳……左 次郎

虹川画伯のアトリエ……飯田 豊吉
 「裏窓」湯河原へ行く……編集 部